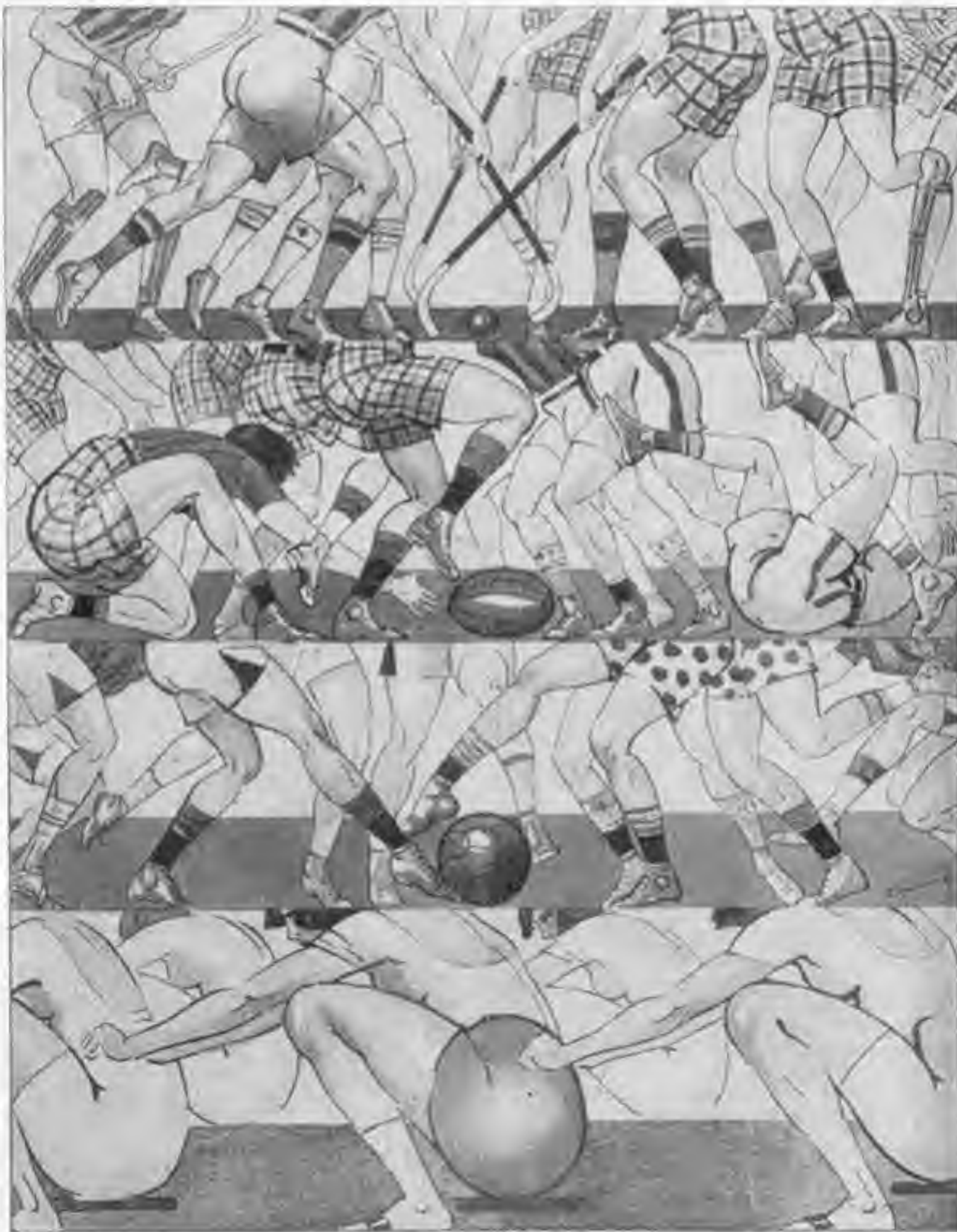


昭和三十四年四月二十日印刷
昭和三十四年五月一日発行
(第十三卷 五月号 通巻第百二十三号)
(毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

1959年 5月号

5月号



創作『王宮の浣腸室』柴崎黎子
告白「自分をハダカにする」松井頼子

奇譚クラス臨時増刊

SADO特集

緊縛美の
集大成!

オニ集



誌面狭しと溢れ出る むせ返るような女体悦虐美!!



麗美巻頭口絵(二十四点)

四馬孝傑作画集

☆密質倉庫

☆悪魔のような女
春美の受難記・四点

☆新品第一号

☆嫉妬の鬼

☆地下室の苦行

☆苦悶

☆吊し責め

☆黒目鏡の女

☆アクロの訓練

☆捕われた商品

☆乳房責め

☆人間フープ

☆檻禁

☆奴隷船

☆妙な吊責

☆雨中の引廻し

☆奈落のリハーサル

☆鼻責めテスト

☆犬の訓練

☆女体轆馬

☆筏ながし

南村俊平戯画

猪大人の御乱行
強制女体浣腸機
(目次裏)

興趣尽きぬ読物内容

私の責画—責めの美人と皮革について

.....四馬 孝

緊縛フोटと緊縛モデル夜話

奇譚クラブの旧号並にKK通信より見た本
誌の緊縛フोटと緊縛モデルについて語る

.....覆面子白頭巾

○黎明期の女体緊縛フोट

○曙光期の緊縛モデルとフोट

△桃色のベールに包まれて

△破つた日記帳 △ゆうべ見た夢

○後手と高手小手による緊縛美の考察

○口絵に於ける緊縛フोटの充実

本誌百号突破記念

懸賞原稿募集

本誌の通刊第百号を突破したのを機会に左記の通り懸賞原稿を募集いたします故、何卒奮って御応募下さるようお願いいたします。尚、募集規定には、従来と違って大いに幅を持たせましたので、御自由な気持で御執筆下さい。誌上の匿名及び無名の投稿も結構です。（この際は誌上で連絡いたします。）

◎賞金

優作 壹万円 若干篇
秀作 五千元 若干篇
佳作 三千元 若干篇

種目 小説、創作、告白、手記、体験、等

枚数 三十枚乃至五十枚程度（四百字詰）

但し多少の増減は差支えありません。

締切 当分の間特別に定めません。先に到着の分より漸次選衡の上、入選作は最近号より掲載いたします。

投稿 「読者原稿」と区別するため、応募原稿の第一頁に「懸賞原稿」と書いて下さい。

発表 入選決定の分は、それぞれ賞金の送付を以って報告します。誌上では入選作の掲載を以って発表にかえます。

用紙 二百字詰又は四百字詰原稿用紙を用い第五種開封便（百瓦につき八円）にて御送付願います。

読者原稿募集

【創作】異色ある題材を提げて立つ野心ある読者の投稿をお待ちします。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限ります。採用篇は本誌五カ月以上贈呈します。

【体験告白手記】読者皆様の偽りなき真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度採用篇には本誌三カ月以上贈呈します。

【映画、雑誌】通信 映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二カ月乃至三カ月分贈呈します。

【私のイメージ】熱烈奔放なイメージをどしどしぶっ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には、本誌二月分贈呈します。

【アイデア】将来本誌にて企画すべき事項につき詳細に。採用の分には本誌四カ月分以上贈呈します。

【レポート】新聞記事（週刊誌を含む）の切り抜き或は見聞等、皆様の特に興味をお持ちの事項につきお知らせ下さい。掲載篇には本誌二月分贈呈します。

【読者通信】編集者、執筆者、投稿者等への通信、前号の批評、希望、感想、思ひ出話、読者相互の呼び掛け、応答或は編集や雑誌のあり方等について忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。つとめて誌上に発表いたします。但し、読者交歓室は都合により当分の間中止いたします。

◎本誌月極購読料◎

一月分 一冊（送料共）二百円
三月分 三冊（送料共）六百円
半年分 六冊（送料共）千二百円
一年分 十二冊（送料共）二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。荷造送料は全部こちらで負担いたします故、誌代のみお送り下さい。半年分御申込の方には景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方には景品としてキャビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

第十三巻第七号
毎月一回一日発行
定価二百円

五月号

昭和三十四年四月二十日印刷
昭和三十四年五月一日発行

編集印刷兼発行人 吉田 稔
大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号
発行所 天星社

電話 天下茶屋 三六〇七番
振替口座 大阪五〇〇四二番

御送金は振替、為替、現金書留、切手代用（八円切手にて一割増）等どんな方法でも結構です。送り先は必ず楷書ではっきりお書き願います。尚、振替用紙御入用の方は八円切手封入の上お申込下さい。お送りいたします。

奇譚クラブ

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan

昭和三十四年四月二十日印刷
昭和三十四年五月一日発行
昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可
(五月号(第十三卷第七号)
毎月一回一日発行)



定価二百円

IBM. 2805

◎第一集を遥かにしのぐ妖美の殿堂、嗜虐の極致!!◎

「S特第二集」について

昨年夏発行しました「サド特集号」は、絵画写真を豊富に收容の上、皆さまの要望に応えました為、発売後日ならずして全部売切れという好評を博しました。其の後、第二集発刊の督促を受けておりましたが、資料蒐集のため半歳を経て、やっと今回発刊の運びとなった次第であります。

收容しました絵画写真は、全部緊縛ものを網羅して、マニア諸氏の御期待に応えたばかりでなく、内容や紙質、印刷等に於ても、第一集を断然凌ぐ威容を誇るに足るものとなりました。必ずや、第一集以上の出足を以て、忽ちのうちに市場から姿を消すことと信じます。四馬孝氏描くところの責面一枚、或は新人モデル嬢の緊縛ポーズ一葉にしてもマニアにとつても、又と得難い貴重なコレクションとなることでしょう。印刷部数は極めて僅少です。売切れにならない中、今すぐ発行所までお申込み下さい。御注文次第厳重包装の上急送申し上げます。
(「サド特集号」第一集)は売切れになりましたので在庫しておりません。

絢爛グラビヤ写真(百九葉)

被縛女体特選集

- 仇姿黄八丈……………絹川文代
- 縄さばき……………浜本喜美
三木敬子
- 挑発の笑み……………絹川文代
- 被 襲……………花坂道子
- 深海 魚……………田中芳代
- 哀れなる賓客……………絹川文代
- 豊 胸……………愛川悦子
- 絹布と絹肌……………田中芳代
- 飾り人形……………大塚啓子
- 台上的賛……………絹川文代
- 若妻の秘美……………花坊道子
- 白い若鮎……………田中芳代
- 麗 囚……………絹川文代
- 三面鏡……………愛川悦子

本誌の独壇場! 潑刺とした新人モデルの艶姿を結集した他誌では絶対に見ることの出来ない縛りフォートの快心作。この二十四頁百九枚のグラビヤ緊縛写真だけでも、十分マニアを堪能させて余りある豪華さです。是非、このS特第二集のフォトをお見逃しなく。

- △吊られた白鳥 △緊縛による一表情
- △荒縄による緊縛感のスポット
- △緊縛女体の一表情、猿ぐつわ五態
- △曇後雨

第一期黄金時代のモデル陣

- △被虐女体の研究 △縛られた女の美しさ
- △二女連縛について △野外の責場撮影にて
- △悦虐に哭く △新しいモデル嬢の活躍
- △女が縛られるまで △責め写真のアルバム
- △悦虐に咽ぶ

○勃興期へ向う緊縛フォー

- △屈伏への過程 △悦虐に悶える △縄抜け
- △初めて縛られて △痛いと思ったとき
- △私の好きな縛られ方 △或る手紙に寄せて

○緊縛フォートに關しての研究

- △緊縛の構成と責めのアイデア
- △野外縛りの記録 △モデル女のまぞひずむ
- △緊縛モデルの素顔
- △緊縛フォートと緊縛モデル夜話後記

限定版 SADO 特集号 第二集

定 価 三百五十円 (送料)

—お申込は—

大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号

天 星 社

振替口座大阪五〇〇四二番



奇譚クラブ

復刊第四十三号
五月 号

目次

巻頭口絵

縛り絵 MERRY GROUND……滝れい子・画
特写真 TOILET ROOM……絹川文代嬢

SIBARI PRELUDE 大塚啓子嬢

映画に於ける緊縛シーン……田辺啓二・提供

東映映画「魔天楼の秘密」

大映映画「冥土の顔役」

東映映画「鉄塔の怪人」

四馬孝傑作集 美貌汚辱……四馬 孝・画

傑作戯画『挾責(はさみぜめ)』……(目次裏)……南村俊平・画

△アイディア▽ コント二題……久留木 栄……18

|| アブ・レボ || 新聞切抜帖……藤木 仙次……24

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品

地獄の誘惑 (乳房に火をつけるな・第二回)

……藤木 仙次……26

「通信」四馬・土路両氏へ……飛妻 新二……35

乗馬ズボンシリーズ落穂集……藤山 秀緒……36

現代マゾヒズム芸術時評……原 忠正……43

創作 総入歯の女……志田克太郎……46

限定版「緊縛フォト・アラベスク」評……近藤 一……54



愛好者の記録 とやま・かつひこ 56

創作 手錠と禪 榎村 奏 58

私のイメージ「沙樹と呼ばれる女」..... 近藤 一 66

カメラ・ルポ「日本調あふな絵」について..... 牧 高志 71

切腹研究夜話(八)——新春雑感——..... 中康 弘通 74

臍談 あれこれ..... 須藤 律夫 78

未来幻想マゾ小説「家畜人ヤプー」..... 沼 正三 82

創作 蛇性のマゾ女..... 波務 鋭郎 94

緊縛映画スナツプ・シリーズへ大映映画紹介V

芍薬の巻「弁天小僧」..... 牧 高志 100

アゲネス・ヴァンダの「妊婦のヌード写真」について..... 羽村 京子 108

新稿 ある夢想家の手帖から..... 沼 正三 112

マゾヒズム百景..... 馬場 好男 119

創作 王宮の浣腸室..... 柴崎 黎子 122

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品

「白い霧」..... 蒼野 礼 136

魔教圈 No 8 (完結篇)..... 土路 草一 146

告白 自分をハダカにする..... 松井 籟子 162

読者通信 171

挟責 (はさみぜめ)

少女の掌と指には奇妙な挟具が装着されている。腕を動かすと、手首の紐が動いて身体をバンドが締めつけるようになっている。



南村俊平・画

MERRY GO ROUND.

廻転木馬に縛りつけられた美少女は、自分の運命を暗示するかのような輪廻の中に身を委ねながら涙するのであった。



滝
れい子・画

TOILET ROOM.

＜本誌写真部特写＞



モデル 絹川文代嬢



【特 写 写 真】

SIBARI PRELUDO.

只二巻きの簡単な紐の扱い方ですが、ここから派生する空想の余地は多分にあります。



モデル 大塚啓子嬢



映画に於ける緊縛シーン

△提供 田辺啓二▽



東映

「魔天楼の秘密」

大映

「冥土の顔役」





少年探偵団
の「鉄塔の怪人」

東映 「鉄塔の怪人」

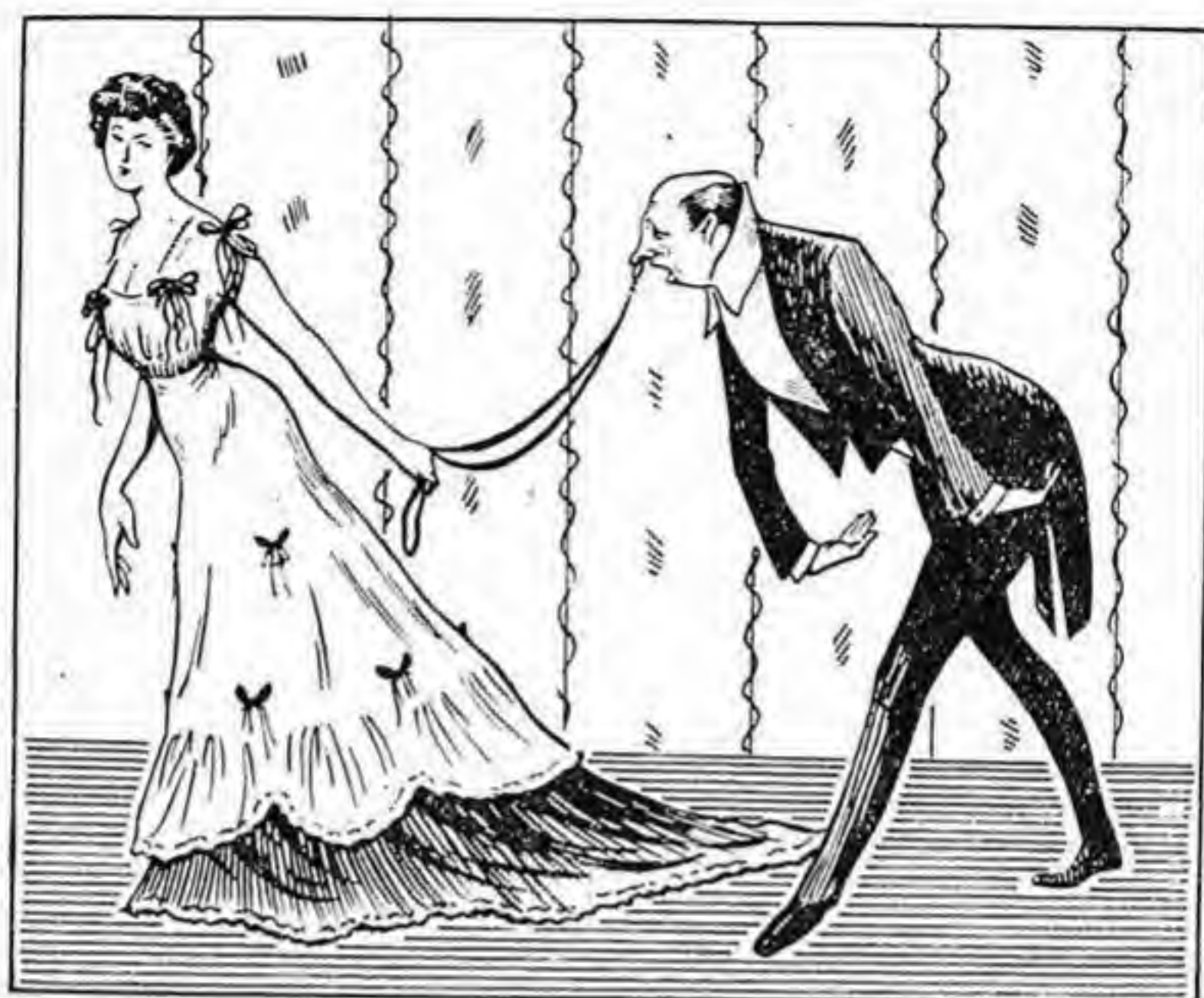


美貌汚辱

四馬 孝・画

美貌のオフィス・ガールの上に伸びた魔手は、彼女をこのように変化させてしまいました。





新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1959年 5 月 号

(第十三卷 第七号 通刊第百二十三号)

アイディア

コ ン ト 二 題

久 留 木 栄

新しい貴のアイディアなど減多に生れるものではない。というのは今までに殆んどが考えつくされているからである。したがって、新しい貴は新しい貴道具を使った貴という言葉に置き換えられる。ところが、この新しい貴道具というのも、仲々生まれにくいものである。例えば、いま流行のフラ・フープも、色々思案を巡らして、フラ・フープを使った責め方、貴の競技会に利用する方法を考えついたとしても、恐らくこの稿が読者諸氏の目にとまる頃には、現在のようなフラ・フープ熱もおさまり、

「あら、つまんないワ、そんな野暮ったい責め方、古いわよ！」

と、マニヤの奥さん達から叱られそうな気がするのである。然し、何を使っても結果は時の流れと共に古くなって行くのは、止むを得ぬことである。そこで、諸氏の失笑を買うのを覚悟して、何か目

新しい材料を使った、責めらしいものを、書いてみたいと思う。「らしい」としたのは、頭の中に描くだけで実際にそんな責め方が出来るものかどうか、私自身が実験してみた訳ではないからである。只、可能と思うだけだ。どなたか、正確な効果をお教え願える人があったらと思っている。責め、そのものを書くとしてもこんな状態だから、とかく無味乾燥になりがちだ。しかたがないので、何とか物語りをくつつけてコント風にまとめてみた。乱筆多謝、いや、迷文多謝としなければいけない。なにしろ自信が持てないのだから……

(一) 硬質塩化ビニールで

作った面の話

これは最近水道管などの製作に使われている、硬質塩化ビニールで仮面を工夫した、マネキン人形作り師の恋物語である。

主人公のマネキン人形師は、三十一才の独身者である。良い腕前の男だったが、不思議と女に縁がない。ないというより、周囲に余り美人が多く居るために、つい知らぬ間に、こんな女は冷たいとか、こんな女は横着だ、という訳で選り好みをしてしまう。美術学校を出て、あるマネキン製作所に勤め、みめ形の良いモデル嬢にとり囲まれていると、ついそんな気になるのである。この人形師の名は「本戸仁堅志」と言った。名の如く堅人であ

る。

ところが、或る日その堅志が職場に行ってみると、さすがの堅人の心をもゆり動かす程の美貌のモデルに出逢ったのである。

鼻が高く、眼が細く、色が白く、まるで浮世絵のように美しい。近年、目立って西洋風の美人が多くなったが、その中で際立って目立つ和風の珍らしく、淑やかそうな美人であった。しかし堅志君は一言、二言、言葉を交してアッと驚いてしまった。顔立ち、容姿とはまるで正反対の木で鼻をくくったようなあいさつ、ケンツクな素振り、剣もほろろにやられたのである。美しい花にトゲはつきものらしいが、初対面早々、余りにも無礼千万な態度である。

——畜生！一度へこましてやるぞ！

堅志君はそう心に決めた。石膏を固め、美しい顔形を再現させながら、ハテサテ一体どうしたら、この高慢な女をへこますことが出来るか、と考える。

——この女を大地に土下座させたら、どんなに痛快だろう。

そんな思ひばかりが、クルクルと頭の中を駆け廻った。

それから二、三日も経って、彼はハタと膝を打った。突然にヒントが得られたのだ。近所の子供が読んでいた雑誌に、大きく浮き出すように書かれていた文字「鉄仮面」

——仮面！面白い！

堅志君はニンマリと笑みを浮かべた。彼女、即ち大井志由加利嬢の石膏像、ヘツ

ドとボディは会社にある。これとそっくりの人形を造って、床に飾り、これにピッタリ合う仮面を、適当なもので作り、人形にかぶせてみせつけたり、もし出来れば彼女自身にかぶせて苦しめてやったらどうだろうか。

——そうだ！こいつはいいアイデアだ。

彼は夢中になって考えこんだ。そしてあれこれと迷った挙句、どうやら一つのプランを纏めあげた。仮面の材料には、とりあえず塩化ビニールの硬質を使うことに決めた。という訳は、このビニールの性質上、温めて石膏像にかぶせるだけで、簡単に仮面が出来得るからである。今一つ、透明ビニールを使えばかぶせた場合顔が透けて見えるし、厚さを加減すれば膚に密着する。従って接触面から空気が入らない。このため、口から声の洩れることもないだろうと思いついたからだ。

堅志君は机に乗りかかるように頬杖をついて窓の外にうつろな瞳を投げながら、この思いつきを具体的に追っていった。

——下あごからひたい迄この面で覆うとすれば、当然、あごの動きも止められて、完全な猿ぐつわになるナ。しかし息が出来ないといけないから、鼻の穴は開けなくっちゃあ、まづいナ。目のところもあけて置いた方が面白

そうだし、唇のところも少しあけて、ビニールテープで貼ったり、とったりするのも良さそうだな。

考えが進むにつれて彼の眼は活き活きと輝きを増して来た。そして勢よく立ち上った。

三日後——堅志君は出来上ったばかりの仮面を、机の上に飾られた由加利の首人形に被せて具合をためしていた。面には紐が六カ所にとりつけてある。彼はニンマリと笑った。

出来たのである、呪いの仮面が——。後はいいよあの高慢チキな美人のお出ましを願うだけである。その透明な面を手には彼は、いささか緊張した。

土曜日の午後、堅志君は会社の廊下で由加利を呼び止めた。

「何か用なの。」

彼女の美しい唇に似合わぬツツケンドウなソプラノが響く。

——畜生！今にみておれ！

腹に一物の堅志君は、さり気なく口を切る。「実は、僕、こんど初めて一人きりであなたのマネキンを作らせてもらったんです。で、その記念にと思ってあなたの首人形を作った家に飾ってあるんです。良かったら贈り物にしたいと思ってるんですが、一寸見て戴けませんか。」

「あら！そうナノ。……どうせアンタの作

品だもの、きつとオカメかオカチメンコにし
か出来てないんでしょ。まあ折角だから見
いってあげるワ。けど条件があるノ。映画と

夕御飯おごってくれなきあ、いやヨ。」
——こん畜生！どこ迄もつけ上りやがる。
彼はカッとしたが、ここが我慢のしどころ



と、怒りを抑えて承知した。

映画と食事に消えた千五百円は彼の復讐心
に油をそそいだ。堅志の部屋に入るなり、グ
ルリと一周り、それでも興味あり気に
部屋中を見廻して、彼女は堅志に言っ
た。

「どれなのサ、あんたの作ったという
オカチメンコは……。」

「これです。」

堅志は机を示した。胸像は白布を被
ってその上にあった。布を除けば例の
仮面をつけた美女の石膏像が現れた。
堅志はゆっくりとその面をはずし手鏡
を持って来て黙って彼女に差出した。

由加利は、その胸像をしげしげと眺
めていたが、軽く溜め息をついた。

「どうです？」

堅志の問いに慌てたように、手鏡に
映した自分の顔と見較べ出した。

「思ったよりは少しマシね。けど私の
鼻は、もうチョット高いわよ。比べて
ごらんない。実物の方がずっと綺麗
だワ。」

「うん、それやあ、確かにそうだね。
でも、仕上げをすりやあ、良くなる
よ。」

「仕上げ？」

「そう、もう少し手を入れるんです。」

「フーン。でも、もう手を入れるところないようだワ。」

「そう思うのが素人なんです。今からこの場で、由加利さんの気に入るまで直してもいいんだが……。」

「できるの？ そんな事。」

「勿論！」

「時間は？」

「すぐに済む貴女が協力してくれたら。」

「じゃあ、折角だからやって御覧なさいよ。一体どうするの？」

「この面ネ、これは像に合せて作ってあるんですがね。これをあなたに被ってもらって、具合の悪いところを指摘してもらったり、僕が面の上から調べて印しをつけて、もう一度像にかおせれば、不備な点が一と目に判る仕組みになってるんです。」

「フーン、うまく考えたものネ。」

「どうです？ 被ってくれますか。」

「……いいワ。」

彼女は面を手にして眺めていたが、そう言つて顔に持っていた。

——しめた。うまくゆきそうだ！

堅志は高鳴る胸をどうしようもなかった。手早く白いうわっぱりのような仕事着をとって袖を通した。

「あなたも汚れると困るネ。トルソーにけるカバーがあるから、それをつけよう。その

上衣はお脱ぎなさい。スカートの被いは敷布で我慢して下さい。石膏の粉がほこりになって飛びやすいから。」

彼女は頷いて敷布を、脇の下から足先まで巻きつけた。

「まるで印度の腰巻きネ。」

由加利は上機嫌だった。

堅志はそんな彼女を椅子に腰かけさせると傍らの石膏像トルソーのカバーをはずした。梯形の布で、上と下にバンドがあり、その間をチャックで締めるようになったもので、締めるのと円筒の袋になる。堅志はこれを帆布で作ってあった。由加利の首に上縁のバンドを留め、ウエストに下縁のバンドで締め、チャックを締めると、彼女の上半体はスッポリと帆布の袋に包みこまれた。

「サテ、いよいよ、面をつけるよ。」

彼女は素直に、コックリした。美容院で理容椅子に坐ったときのように、少し仰向いてその美しい顔を堅志に預けた態である。

堅志は仮面を手にとって、由加利の顔につとめて静かに置いた。顎や、鼻をうまく合せて、頭の後で紐を結ぶ段になると、ぐっと力を入れて締めあげてやった。彼女が一寸、首を振ったが、面はスッポリとその顔に密着していた。

——遂にわがこと成れりだ。フンざまをみる！ この高慢チキめ、今に泣いて謝らして

やるから……。

堅志は、この成功に思わず頬に血の昇るのを覚えた。

「どうだい？ 具合は。」

「……………」

「どこが気に入らん？ この辺か。」

堅志は、固い仮面の鼻の先を指で撥いた。

「……………」

彼女は咽の奥で変な声を出した。予想通りモノが言えないのだ。

「フッフフ……………」

彼は会心の含み笑いを洩らして、予定の行動に移った。細い面相筆をとり出すと、先をほぐして由加利の髪の毛をぐっと掴んだ。

表情まで奪われた美女は髪を引かれて大きく仰向いた。面の鼻の孔から彼女の息が激しく感じられる。その鼻孔に筆の先が突入して行った。ビクッと一瞬、彼女の体がこわばると激しく首を振って椅子から転がり落ちた。

手を出そうと跪いているらしいが、袋に包み込まれた上体ではどうにもならない。彼女は堅志の真意を知って知らずか、ゴロゴロと床を転ろげ廻った。堅志はそんな彼女を起して正坐させた。

「どうだ！ もう僕の計画がわかったらう？ 君のその高慢な態度を今後、直すと約束するかい？ 悪かったと詫びるなら許してやる。その頭を床につけて三度おじぎをしろ。」

彼女は計られた口惜しさに、ブルブル慄えているのがよく判る。プイッと横を向いてしまった。

「いやなら、いつまでもそうして居ろ。」

堅志は言い捨てて外へ出た。外から錠をして、ゆっくりした足取で駅前まで歩いて行つて来た。常でも七、八分は掛かる道のりである。帰って来るまでに三、四十分も掛かった。部屋に入ると、彼女は相当、転ろげ廻った形跡があった。彼は黙って又、彼女を正坐させた。何も言わずに正面に突っ立った。

由加利の upper body が前に折れた。コッソンと仮面が床に小さく音を立てて当った。上体が元に戻った。又前に折れる。コッソン……コッソン。そしてその目が堅志を見上げて、静かに正坐のまま、うなだれたのだった。

(二) 奉公人の復讐

(新案、鉄の蘭枷)

太吉は九州で育った。小学校を出ると上京して商人になろうと思っていた。しかし一思いに東京に出る勇気もなく、隣町の荒物屋に奉公することになった。先輩の田上という男がその店に居たからである。しかし、田上は通いの丁稚で、太吉は住込みである。待遇は割合に良いが、店のお神さんの人使いが荒いので、奉公人が続かないという話だったが、太吉は行くことに決めた。

住込んでみると、成る程、話の通り人使いは荒かった。朝早くから夜遅くまで、店はお嬢さんの部屋、台所、庭から便所の掃除、品物の配達、仕入品の整理、更にマキ割り、洗濯、走り使いと、店のこと、家事のことの差別なく、休む暇もなく追い使われた。しかし太吉はこの重労働に等しい勤めにもめげず、実によく働いた。

この店は、奥さんが事実上の御主人で、養子である主人は看板に等しい存在である。奥さんは千代という優しい名に似ず、大兵で肥満体、気性の激しい大女である。お嬢さんの松子も母親ゆづりの気性で、我が儘一杯の小学生であった。

太吉は奉公が決まる



と同時に奥さんの指揮下に入れられたが、そんな激しい日々の労働も、奥さんの凄まじいまでの精力的な仕事振りをみせつけられ、奉公とはこんなものだと思ひ込み、さして苦しいとは感じなかった。只、やりきれないのは毎夜のように三助とあんまをさせられることである。殊にあんまには参る。チンマリと机に嚙りついて、事務員よろしく、奥さんに伺いをたてながら、その日の帳簿を整理している主人の前で、長々とフトンに臥せり、太吉に肩や腰を揉ませるのである。たださえ強い体臭に加え、安物の香水の匂いが入り混じって奇妙な臭いのカクテルを立ちのぼらせて太吉をへきえきさせた。

然し、どうにかそんな仕事にも慣れてきた頃、太吉にも腹に据えかねる事件が起きた。原因は、太吉が掃除中に一寸した不注意から、奥さんの手鏡を落して割ったことにある。

「鏡を割るとは何事です！女の生命を割ったのも同然じやないの！」

奥さんは烈火の如く怒った。謝まる太吉にいきなり手桶の水をぶっかけ、太い腕で殴りつけ、突きとばし、拳句の果には、小さくなくて只管謝まる無抵抗の太吉を、麻縄で縛り上げて納屋に投げ込んだ。太吉はそこで半日ふるえて居らねばならなかった。外出先から帰った主人が、驚いて縄を解いてくれたから

良かったものの、そうでなければ、一晚中、放って置かれたかも知れない。

尤も、奥さんのヒステリーは、太吉の入店以来、悩まされ続けて来たもので、太吉はそれまでも幾度となく殴られて来た。しかし、この度の折檻は度が過ぎる。太吉は重大な決心をした。けれども、人の好い主人から平謝りに謝られ、慰められると、辞めようという重大決心もつい鈍るのだった。奉公とはこんなものかも知れない。そう思っていじらしくも辛抱する気を持ち直したのである。

だが、その後がいけなかった。

この事件を契機として、奥さんのヒステリーは益々昂じ、何かと言ってはすぐに太吉を縛り上げるようになった。それに小学生のお嬢さんまでが面白がって、理由もないのに母親について、縛られた太吉をいじめるのである。遂には、太吉を縛って虐めることが日課のような行事になってしまった。

又も重大な決意をせざるを得なくなった太吉が、只、辞めるだけでは承知出来ない、と考えるようになったのは当然であろう。

相も変らずよく働き、よく耐えているように見える太吉が、深夜、疲れた身で眠りもやらず、あれこれ復讐の方法を考え、奇妙なものを取り出しては、何事か練習していることには誰も気付かなかった。

太吉の持ち出しているものは、カジ屋の小

僧になっている友達にこしらえて貰ったもので、小さな鉄片を細長くして、C形に彎曲させ、二つを向い合せて真ん中に小さなネジ孔を切り、ビスで連結してある。簡単なその器具を二組手に持って、鏡に映した自分の上下の歯にとりつける練習をしているのである。これは、その鉄片の両端で上下の奥歯を挟みビスを締めれば容易に上下の顎を固定出来る仕掛けである。

この歯枷を考えるまでに太吉は幾度か猿轡の練習を繰り返した。そして猿轡というものが映画や、小説のように巧くは行かないものだと思ひ、考え出したのが、完全なる猿轡、顎固定用歯枷という訳なのだ。

毎夜の練習、自身の実験の結果は太吉を満足させた。そしてその上に唇に広巾のビニールテープを貼り、首まで廻して巻きつけることを思いつき、用意を整えて機会を狙っていたのである。

月日が流れ、チャンスが来た。

主人とお嬢さんが親類筋へ泊りがけで行くことになった。太吉はハッと緊張した。常より早や目に店を閉めさせた奥さんは、湯上りの身を横たえて太吉に揉ませた。太吉は、今にみると思ひながら、特に念を入れて一生懸命に揉んだ。奥さんは上機嫌で、いつになく優しい言葉を掛けたりしながら、うとうとしました。何を今更ら言ってるんだ、この

鬼婆！」 太吉は尚も懸命に揉んだ。それか
あらずか、奥さんはぐっすりと寝込んだ。太
吉の心が躍った。天、吾れに味方せり、の心
境だった。足の裏をくすぐって見たが起きな

い。枕を引張って外させてみた。大丈夫であ
る。太吉は、どきどきする胸を抑えて、用意
の包みを持って来た。麻縄、鉄、カミソリ、
それに例の齒枷にビニールテープが包まれて

▼アブ・レポ▲

新聞切抜帖

藤 木 仙 治

娘の好きなフンドシ

これは、地方紙の「夕刊フクニチ」にの
っていた記事を「週刊新潮」が再録し、そ
れをまた本誌が取りあげるわけであるが、
それだけの値うちのある、まことにケツサ
クなレポである。この記事のなかにでてく
る娘さんは、あるいは、本誌の愛読者か？
とも思われるが、もしそうだったら、なに

とぞ、おゆるしのほどを……。

○

ことしの春、高校を出た娘が家の中では
自分でつくった「モッコふんどし」ひとつ
ではねまわっています。家族たちが、いく
ら「みっともない」と注意しても、「あら
いまはデパートでバタフライも売っている
のよ。それよりましでしょ」と涼しい顔で
ある。その上、六尺ふんどしのしめ方も教
えてくれというので、その訳をきくと、

いる風呂敷包みである。

夢中で作業にとりかかった。慄える手で、
先ず手早く、あのよく殴られた憎むべき両手
を後で縛り合わせ、よく小突かれた両足も揃
えて括った。苦心の作、齒枷をかけ終るか終
らぬうちに、さすがに奥さんも目を覚ました。
驚いて猛烈に暴れ出したが、もう手遅れだ。
太吉は構わず、首を抱え込むようにして予定
通りテープを貼った。奥さんは咽の奥で「ウ
ー、ウー」と、うなるだけだ。「ざまをみる」
太吉は、哀願するような奥さんの瞳を見返し
て、ニヤリと笑ってやった。そして無言のま
ま鉄を持って頭髮を掴んだ。自慢の鬚の根元
をプツリと切った。奥さんが一際強く唸っ
て跳いた。鬚が畳に落ちた。太吉は今度はカ
ミソリを手にして、始めて口を利いた。
「クリクリ坊主にしてやろうか。」

奥さんが又呻いて跳く。眼に涙が一杯溜っ
ていた。太吉は本当にクリクリ坊主にする積
りだったが、この涙を見ると急に哀れになっ
た。

「これで、もう奥さんも懲りただろう。」

そう思って計画を端折って、これも用意の
紙を取り出し、襖にペタリ貼りつけた。

「弱い者虐めの女に天罰下る」
紙にはそう書いてあった。

最終便の東京行の列車の中で、小さなトラ

集団暴行時代”にゴム入りのズロースでは“無防備”だから、フレヤースカートをはいたときは“サラシ”の六尺をし、タイトスカートのときは“モッコふんどし”で防備を固めるのだそう。純潔をたつとぶ気持は、たいへんうれしいが——。ちなみに自作の“モッコふんどし”というのは、シヨートパンツの変り型だというのである。

まさしく、ふんどしマニヤにちがいない。純潔を守るため、なんていうのは、もちろん口実であろう。

この少女の心理の真実を知るのは、同じマニヤか、本誌の読者だけ、ということとはちよっと、愉快ではないか。

“夕刊フクニチ”の記者も、“週刊新潮”の記者も、その興味は、単なるエロチズムにしかないのだから……。

留守番母子縛り脅す

佐倉署は八日午前五時頃、佐倉市鎗木町二四六生れ、住所不定無職飯沼勇司(二二)を強盗傷害容疑で捕えた。

飯沼は七日午後十一時四十分ごろ、同町四三九同町公民館に押入り、留守番の磯かつさん(五四)を脅し、登山用ナイフで顔

に一週間のケガをさせ、さらに長女きぬさん(二〇)を細ヒモで縛って表へ連れだし付近の山林を三時間も歩いた上、「八日午前六時ごろ京成佐倉駅まで金を届ける」と脅して帰宅させた。

同署では緊急手配、同市肴町地内をうろついていた同人を職務質問で捕えた。

(昭和33年9月9日附東京新聞)

親娘を縛った強盗が、娘だけを縛ったまま外へ連れだし、山の中を三時間も歩かせたというのだから変っている。午後十一時四十分ごろというのだから真夜中である。

この記事だけではわからないが、察するところこの男、物盗りよりも娘のほうがあてで、あわよくば誘拐する気だったのかも知れない。

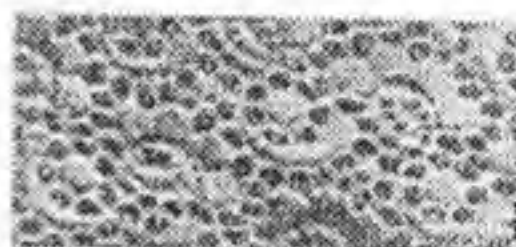
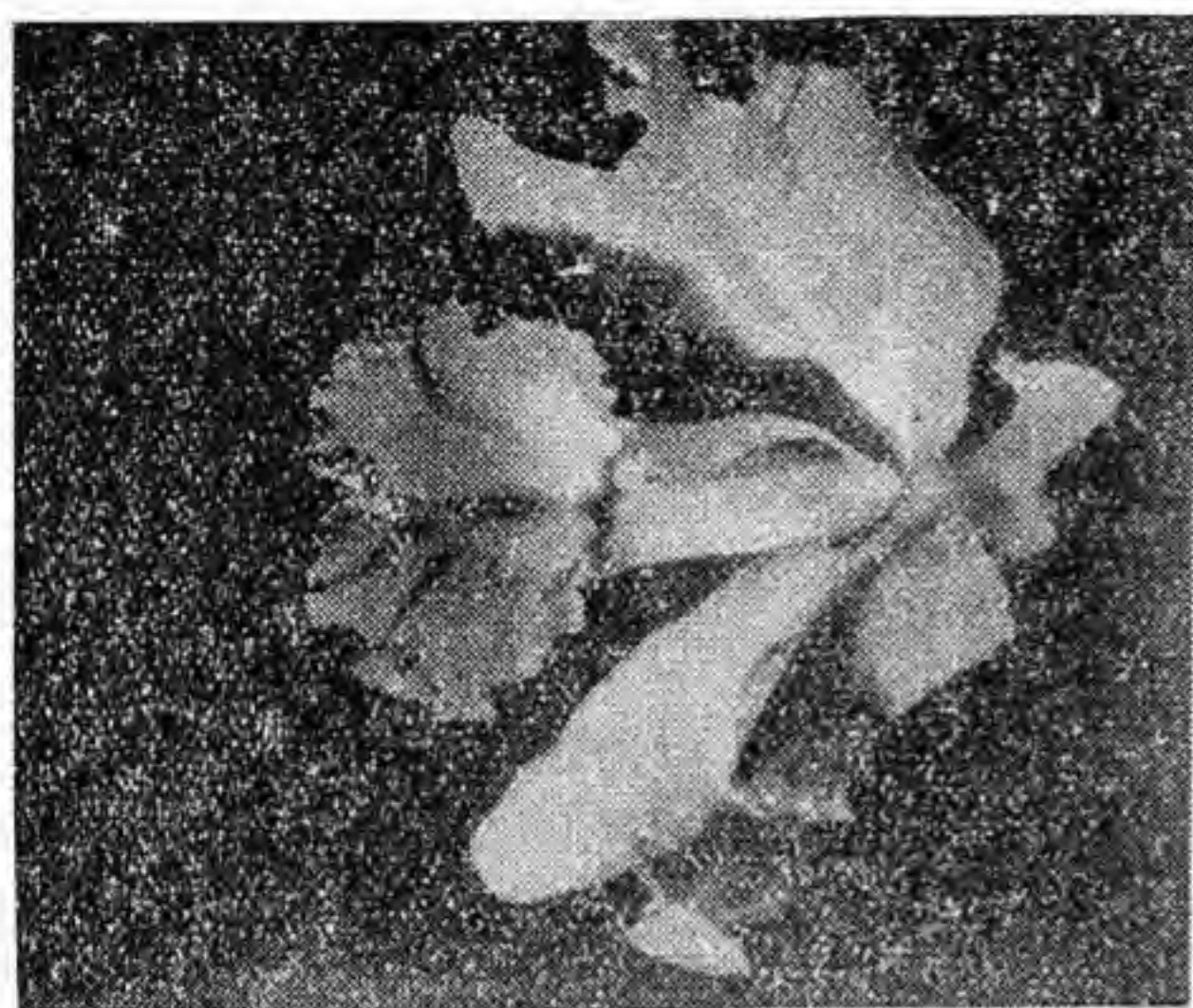
気の毒にも縛られたまま三時間も、真夜中の山林を歩かせられた二〇才の娘さんはさぞ怖しかったことだろうが、いくら縛ってあるとはいえ親のほうを家の中に放りだしたまま、娘と深夜の散歩をしたこの男もずい分のんきな強盗である。のんきだからすぐ捕ってしまったのだろうが、こんな大それたことをしてかして、逃げ了せると本気で思っているのだろうか？

ソクを膝にして、太吉は思い巡らせていた。あの齒枷を、主人やお嬢さんが、うまく外せるかな？ 奥さんの髪はどの位いたったら又留が結えるようになるかな？ あれでもうこれから来る奉公人には酷いことはしないだろう……と。

十数年後、東京、日比谷公園で、太吉はあの荒物屋に世話してくれた田上とはったり逢った。二人は思いもかけぬ再会に、感激の涙さえ浮かべて手を取り合った。昔話しは尽きなかった。苦勞の末、ささやかながら小店の店主になり得た太吉と、あの荒物屋の養子に納まっている田上は、時の流れを忘れて語り合った。

「君の最後の置土産ネ、あれは実に良かった。ナニ怒るところか、婆さん、今でも口癖のよう言ってるよ。自分が悪かった。あんなに酷い扱いをしていたのに太吉さんはよくこらえてくれた。あのお仕置で目がさめた、本当によく思い知らせてくれた、ってネ。今じゃホントにいいお婆ちゃんになってくれたよ。ハッハハ……」

田上の声は明るかった。太吉は心からホッと安堵して、田上に同調して哄笑するのであった。



——本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品——

乳房に火をつけるな・第二回

地獄の誘惑

藤木仙治

地獄からの声

西銀座裏のキャバレー「ダスカ」——。
その地下の、マネージャーの私室である。

——リリリリリ……

電話のベルが、けたたましく鳴った。

「はい……」

マネージャーの鶴松が受話器をとった。この男、暗黒社会に生きる奸智奸才に長じていて、通称ズル松。星島組の大幹部である。

「社長——」。



とズル松は、壁際のソファに、どっしりと腰をおろしている星島大五郎に、電話を示した。

「社長に電話ですよ。」

「誰からだ?。」

「それが、いわねえンです。社長をだせばわかるって……。どうします。切っちゃいまいしょうか?。」

「いや、まア、でてみよう。」

チラッと眉をひそめたが、ヤクザの世界に身を置く大五郎だ。そんな電話には馴れている。河馬のような腰を、ソファからあげた。

「ああ、もしもし、星島だが……。」

腹を一つゆすってから、電話に出た。

と――

なめるように低く、落ち着いた声が、耳の中に伝わってきた。

「――やあ、これは、おなつかしい。お達者ですか?社長……。」

不気味なほどに、静かな声だ。

「きみは誰かね?。」

「――地獄からきた男です。……フフフ。これはどうも、キザな云いかたで失礼。」

からかい口調だ。だが、底に凄みもひそんでいる。

「わしは忙しいんだ。イタズラの電話なら切るぞ。」

「おっと……。ねえ、社長、あたしの声に、聞き覚えはありません

かね?。」

「ない!。」

大五郎、どなるように云ったが、そういえば、どこかで聞いた声だ。

「――フフフ……。あたしはネ、あなたに殺された男ですよ。しかも、可愛い女を奪われたあげくに……。」

「なに?。」

「――芝浦の海岸から、腹を刺されて東京湾の中へザンブリ……。早いもので、あれからもう、三年になりますねえ……。」

大五郎、ギクリと顎を引いた。

「き、きさま!生きていたのか!。」

「――やっと思いだしてくれましたね。そうです、哲夫です。北条哲夫……。」

「……。」

思いもかけぬ男の出現に、大五郎は息を呑んだ。

「――社長。地獄から来た男の復讐は、ちよっとばかり、しつこいですよ。覚悟は、いいでしょうねえ……。」

北条哲夫の声が、四、五秒、電話から離れた。

と――

「パパ!あたし、千絵子よ!パパ、助けにきて!。」

けたたましく大五郎の耳に響いたのは、たしかに、娘の千絵子の声だ。

「おお!千絵子!。」

大五郎は、思わず受話器を握りしめた。

と、娘の声は、すぐにもぎはなされ、

「フフフ……。どうです、社長。あなたの一人娘、千絵子さんは、いま、ここで後手に縛り上げられて、こうして、あたしの腕の中にもがいているんですよ。驚きましたかね?。」

哲夫の得意げな嘲笑。それに交って、千絵子の悲鳴。

「むっ、哲夫！ き、きさま！」

「——三年前、おれの美佐も、あんたのために、こういう惨い目に会わされたんでしたっけね……」

「くそ！ お、おい哲夫。あやまる。かんべんしてくれ。娘にだけは、手をつけないでくれ。金なら、いくらでも出すから、千絵子を無事に返してくれ！」

「——おいでなすった。……いくら出しますかね？」

「百万でも、二百万でも。」

「プッ。笑わせちやいけねえ。娘一人の命だぜ。おれの恨みは、そんなハシタ金で帳消しにはならねえよ。」

「じゃ、いくらだ。いえ！」

「——一千万……。もちろん、キャッシュだぜ。交換場所は、芝浦

の下水処理場横。あそこは、静かでいい暗がりだ。そこへ、いまから三日後の、真夜中十二時。いいか、一千万円の現金と引換えだぞ！」

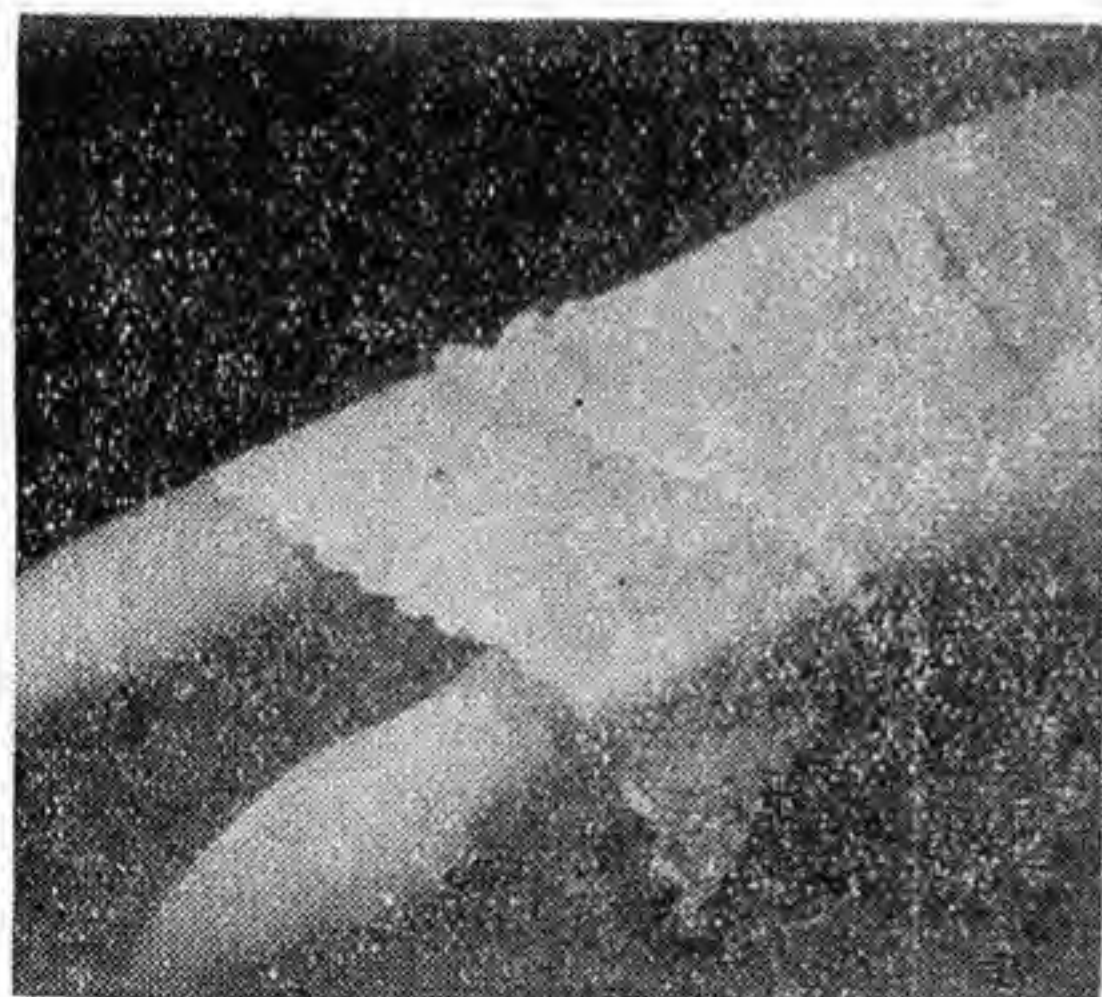
ガチャリ……と電話は切れた。

「お、おい！ それで娘は、今どこにいるんだ。お前は、どこにいるんだ！」

だが、地獄からの声は、もう、つながらなかった。

妹をさがせ！

「——哲夫のやつが、生きていやがったんだ！……」



不審な顔で問いかけるズル松に、大五郎は青ざめていった。

「くそ！ たしかに脇腹をえぐって、海ンなかに叩っこんだが……」

ズル松も顔色を失い、くやしげに唇を噛んだ。

大五郎は、ソファに身をうずくませた。

一千万円……。

いまの星島組に、そんな大金がある筈はない。

哲夫のいた頃の星島組は、全盛で景気がよかった。あれから後、

ヤクザや暴力団に対する世論の声がたかまり、警察が今までになく

きびしい眼を光らせた。おかげで、近頃では、そうボロい儲けもで

きない。

あの頃、七、八店も抱えていたキャバレーや、バー、パチンコ店

なども、次第に追いつめられて手離し、今は、この「ダスカ」と銀

座八丁目にあるバー「深海魚」だけである。

一千万はおろか、百万の現金も

いまの大五郎には、むずかしいの

だ。

といって、娘の危機を見捨てる

ことは出来ない。

「——まずい……」

あまり弱音を吐いたことの無い

大五郎が、思わぬところから足を

すくわれて、渋い顔になった。

それに、あいつは娘だけではな

く、その中に、妻の美佐にまで手

をのばすに違いない。美佐は、も

ともとあいつの女だったんだから

な……。くそ！ 死にぞこないめ！

大五郎の胸に、哲夫に対する怒

りが、ムラムラと湧いてくる。

「――社長、いい考えがあります。」

みかねて、ズル松がいった。

「なんだ？」

「哲夫のくたばりぞこないめ。社長の急所をつかんで、いい気になってやがる。そこで、こっちも、やつの痛いところをつかんで、五分五分の態勢にもっていくんです……。」

ズル松が、妙なことをいいだした。

「なんだと？」

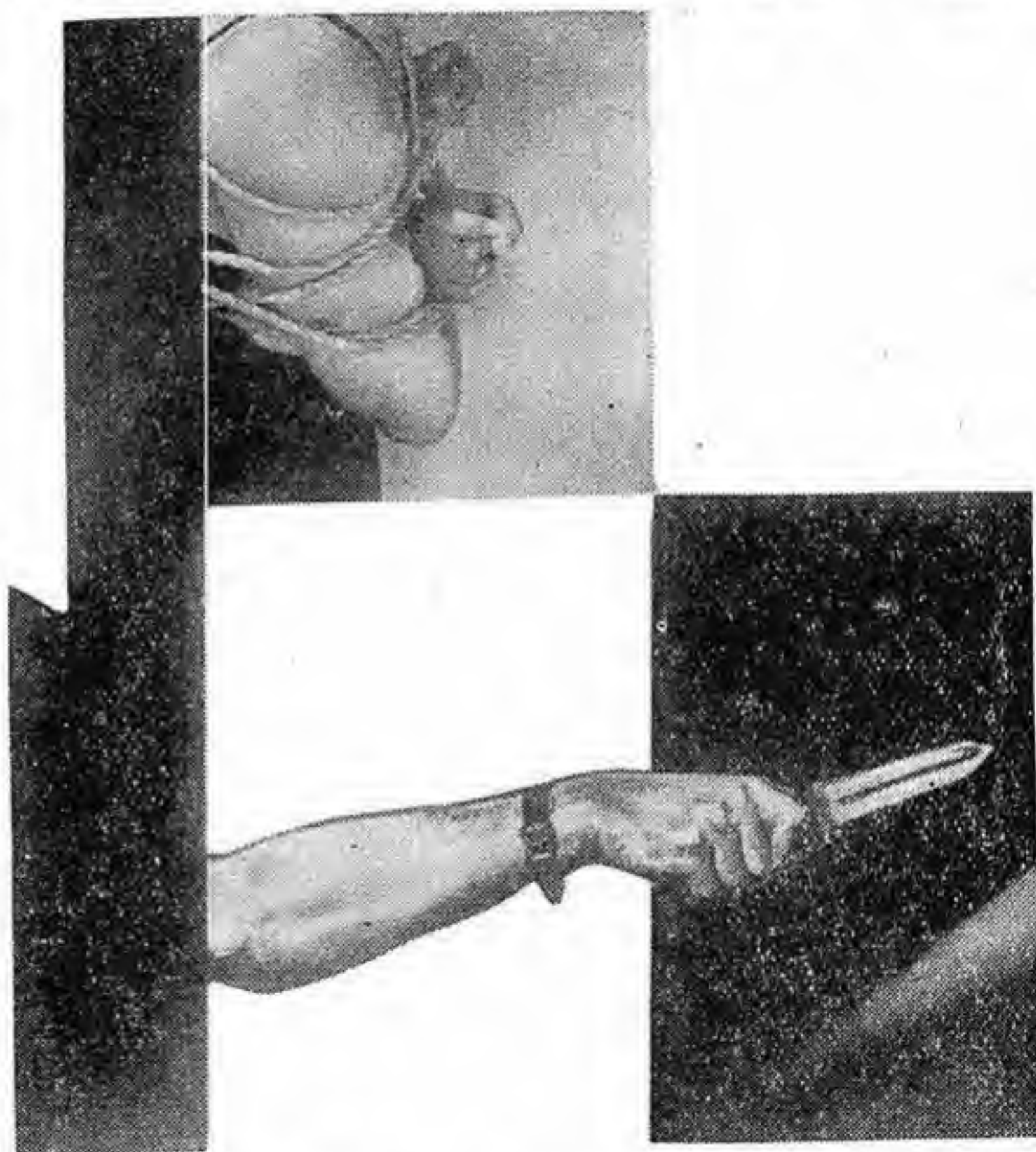
「哲夫には、たしか妹が一人いた筈です。そいつを見つけたして、こっちの手におさえれば……。」

「なるほど……。たしか、まだ二十前の小娘だったな。一度、逢ったことがある。だが今は、どこにいるんだ。すぐ見つけだせるのか？」

「ほかに身寄りのねえ、二人きりの兄妹。その兄が、今まで生きたか死んだか行方不明になっていりや、小娘一人で喰っていかなけりやならねえ。たしか、啓介が口をきいて、上野あたりのジャズ喫茶に世話した筈なんです……。」

「まア、とにかく、啓介を呼んでみる。」

あまり気のりのしない様子で、大五郎はいった。まもなく、その子分が姿を現わした。



背が低いので通称チビ啓、もつとつまってチンケの啓介――この男も、ズル松と共に哲夫を海のなかに突き落した仲間だ。

「――お前、哲夫の妹を知ってるそうだな？」

と、大五郎がきいた。

「哲夫の妹？ ああ、真紀子のことですか。へえ、知ってますが……。真紀子が、なにか？……。」

チビ啓、ペコリと頭を下げて不審げな顔。「実はな、おれ達が、たしかにやったと思った哲夫が、生きていやがったんだ……。」

歌手誘拐

ズル松が、その長い顔をチビ啓の前に、ぐいときだした。

上野御徒町駅裏のジャズ喫茶「ドンヌ」――。

北条真紀子は、そのステージで歌をうたっている。有名歌手の出演する合間の時間つなぎに、この店の専属歌手として歌うのだが、可憐な容貌と、素直な歌いぶり、ファンも少しずつ増えていた。

「――北条真紀子さん、いるかね？……。」

ステージのすぐ裏にある狭い楽屋に、外から入ってきた男が、ぬ

と立った。

星島組のチビ啓だ。

「はい……。」

と、返事して、化粧前から振り返った真紀子は、声をかけた男がチビ啓と知ると、いやな気持ちになった。

三年前、頼りにしていた兄の哲夫が、急に行方不明になって、途方に暮れている真紀子に、親切な言葉をかけたのが、このチビ啓である。

あちこちに口をきいてくれて、結局、この「ドンヌ」に世話をしてくれた。

好きな歌もうたえるし、どうやら食べるだけの収入はあるので、チビ啓に対してその、恩は感じている。だが、ときおり店に姿をみせて、声をかけていくチビ啓の、その背後にわだかまる不気味な黒い影を、真紀子は恐れていた。

「——真紀ちゃん、ちよっと……。」

チビ啓は、真紀子を外へ呼びだした。

「なアに、啓介さん……。」

裏の狭い出入口から外へ出ると、ネオンもささない暗い路地だ。ゴミ箱から溢れた残飯や野菜屑が夜気の中に、すえた匂いを撒き散らしている。

「すまねえが、ちよっと顔を貸してもらいてえんだ。」

真紀子の襟元に、鼻を押しつけるように近づけて、チビ啓が云った。

十時半をまわって、もうラストに近い。

「私、今夜は他に用事があって……。」

真紀子は、不安を感じて答える。

「フン。彼氏でもできたのかよ。」

「そんなんじゃないの。新しい曲のレッスンがあるんです。」

「とにかく、来てもらいてえんだ。」

「どこへ？」

「くればわかるよ。」

チビ啓は、真紀子の手首を、がっしりと掴んだ。肩をひねって振りほどこうとする真紀子を、力まかせにズルズルと引きずる。

「あれっ、なにをするの！」

路次の角の暗がりには、黒塗りの自動車が待っている。運転台にタバコをくわえているのは、ズル松だ。

「兄貴、このスケだ。」

チビ啓は、いやがる真紀子を、頭から車の中へ押しこんだ。

「私を、どうしようというの！」

「騒ぐな！」

チビ啓の腕が、真紀子の身体を羽がいに抱きしめ、右手の拳銃が、その脇腹に、ぐいと突きつけられた。

「……。」

真紀子の顔が、蒼白になった。

車が滑りだす。手馴れた誘拐の段どりである。

「おどろかせてすまねえな。悪く思うなよ。」

チビ啓が、真紀子の右手首をしっかりと握りしめている。

「調子、いいじゃねえか。」

ハンドルを切りながら、ズル松がいった。

白い犠牲

真紀子を乗せた車は、昭和通りを突っ走って、西銀座裏の「ダスカ」の裏口に止まる。細い階段を下り、地下室へ——。

「社長。連れてきました。」

ズル松とチビ啓、得意げな表情である。もがく真紀子の両腕を、左右から抱きかかえている。

「うむ。なるほど、これが哲夫の妹か。兄妹とはいえ、よく似ているな。」

大五郎は眼を細めて、真紀子の頭から足の先までを、まるで品物でも見るように眺めまわした。

「ここは、どこなの！ かえして！ 私は、こんなところへ連れてこられる覚えはないわ！」

真紀子は、体をゆすって悶えた。

「ウフフフ。一千万円に相当する身体だ。たいせつに、おもてなしするよ。」

大五郎は、ついと手をのばすと、真紀子の胸をぐいと突いた。

「あれッ……。」

真紀子の悲鳴。だが、左右の腕は、二人の男に握られている。

「うるせえ。おい、口を縛っておけ。」

大五郎は、チビ啓に命令する。

ズル松が、真紀子の両手首を一握みに握んで後へねじりあげた。

「あ、痛ッ……。」

両手が背中へねじあげられれば、顔は自然に前へぐつとのりだす。

「口をあけな。」

チビ啓の指が、真紀子の鼻をねじるようにしてつまみあげ、むりやりに口をあかせる。白い歯ならび。あえぐ赤い舌。

その中へ、ポケットから出した汚れハンカチを、ギユウギユウ押しこむ。

「むッ、むむう……。」

さらにその上から、ボロのような手拭いで猿ぐつわだ。やわらかそうな白い咽喉が、苦しげにヒクヒクうごく。

「いくら口を縛っても、手がこのままじゃ、すぐほどこいてしまいますぜ。」

「あたりめえだ。手も縛るのよ。」

大五郎は、机のひきだしから細引を出して、ズル松に渡した。
「へい……。」

クルクルと細引をときほぐす。馴れた手つきだ。

真紀子の眼が、恐怖のために大きく見ひらいた。

縛られて身の自由を失ったら、どんなことになるか！……

肩をゆすり、足を踏み鳴らして抵抗する。

だが——男二人の手が、腕を掴んでねじあげている。助けを呼ぶにも声は出ない。密室同然の地下室だ。たとえ声をだせたとしても外部の者にはきこえない。

もがく真紀子を殴りつけ、床の上に突きとばして縄をかけるズル松とチビ啓。ブラウスは破れ、ボタンはひきちぎれて、すつとぶ。

どさり！……

縛りあげられた真紀子の身体が、鈍い音をたてて、ソファの上に投げだされた。

手首は、たかだかと背中に吊られ、胸から腕へと、きびしくかけまわされた縄。縄の間から、大きく盛りあがった乳房が、そこだけ別の生きもののようにはげしく息づいている。

足だけを必死にバタつかせるが、スカートが大きくまくれあがるだけの効果しかないことをさすると、真紀子は眼をつぶって、いつとき全身の力をぬいた。

「いい娘じゃねえか……。色が白くて、眼鼻だちがハッキリしている。胴のしまりぐあいといい、脚の長さといい、上野あたりに置いとくのは、もったいないタマだぜ。哲夫の妹にしちや、上出来だな……。」

大五郎が、その赤い咽喉仏を、ゴクリと鳴らして、つぶやいた。
「へえ。こんなのは、残念ながら、うちの『ダスカ』にもいませんよ。」

ズル松が、調子よく、あいづちをうつ。

三人の男の、好色に光る眼が、ソファにころがされた真紀子の身体を、心地よげに鑑賞する。

ブラウスは破れ、下着から覗く素肌の胸。せわしげに波うち悶える腹のあたり。さらに、乱れたスカートの裾から透きとおるほどに白い脚が、ずり下ったストッキングからのぞいているのを男たちの眼が、ベッタリと舐めまわす。

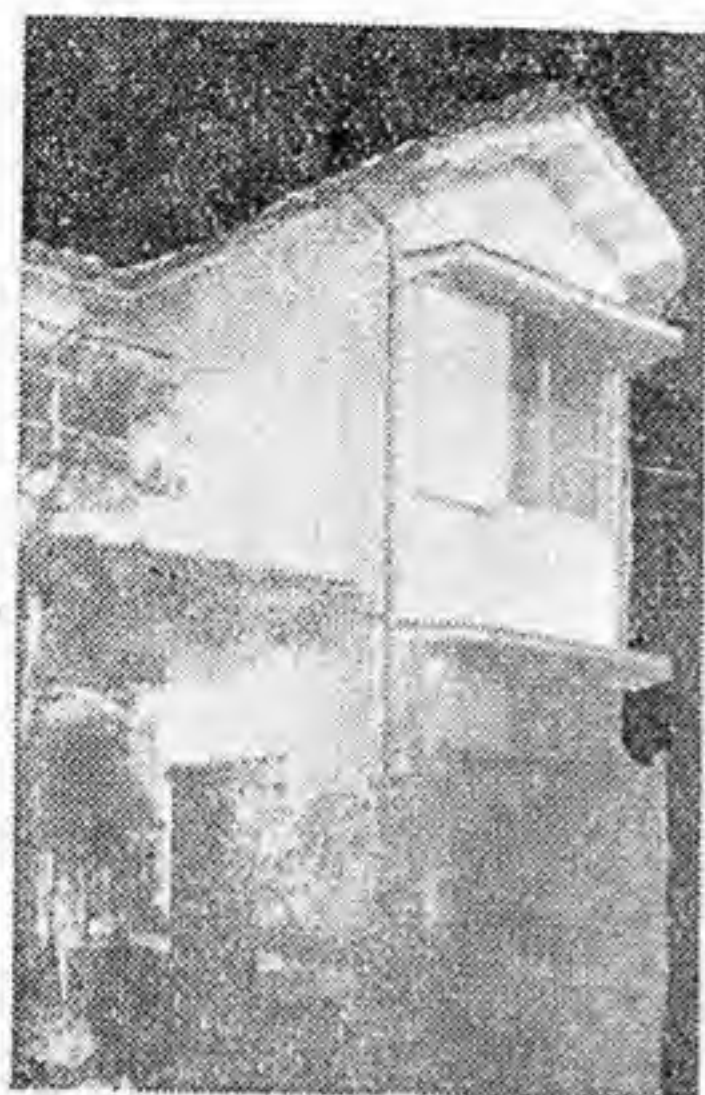
(ああ!……)

真紀子は、実際に触れられたような悪感を感じて、かくすように足をちぢめた。

だが、自由のない四肢では、それもむなしい。猿ぐつわの上の眼だけを、せい一ぱいに光らせて、この恐しいギヤング共を睨みつける。

どうして……どうして、こんな男たちに、縛られなければならないのか。真紀子の疑問に、そのとき、兄の哲夫の顔が、電光のようにひらめいた。

(もしかしたら、兄さんの行方が、わかったんじゃないかしら……) とすると、やっぱり兄さんは生きていたんだ。そして、なにかの理由で兄さんは、こいつらに狙われているんだ。私は、その犠牲なんだ!……



真紀子は、リコウな娘だ。身に苦痛の縄を受けながらも、ついにそこに思いついた。

きわどい誘惑

一方、その哲夫は

大森、馬込の静かな邸町。その一割にある古びた洋館。

この洋館は、いまの哲夫のボスである、王竜元の持ち物である。密輸麻薬の、秘密の取引場所に使っているのだ。

その奥まった灰色の一室で、哲夫は、じつくりと、大五郎の娘、千絵子を、さいなんでいる。

「フフフ。さすがは、星島組のボスだ。お前の身代金に、一千万円だすといったぜ。」

千絵子の前の椅子に、哲夫は足を組んで坐っている。

千絵子は、いぜんとしてパンティ一枚だけの、まぶしいような裸体で、椅子に縛りつけたままだ。

部屋の一隅には、古ぼけたガス・ストーブが、真ッ赤に燃えている。その熱気で、千絵子の額には、うっすらと汗がうかんでいた。

だが、縄目にしめつけられた肌は、もうしびれて感覚がなくなっていた。

(一千万円……。そんな大金が、いまのパパにだせる筈はないわ)

哲夫の言葉をきいて、千絵子は不安になった。

父親の性格は、だいたいわかってる。

脅迫されたからといって、おめおめと哲夫に一千万円を渡し、おとなしく千絵子をひきとっていくような大五郎ではない。

危険な橋を渡るにきまっている。おそらく、また哲夫の命を狙って、血なまぐさい事件が起きるのだろう……。

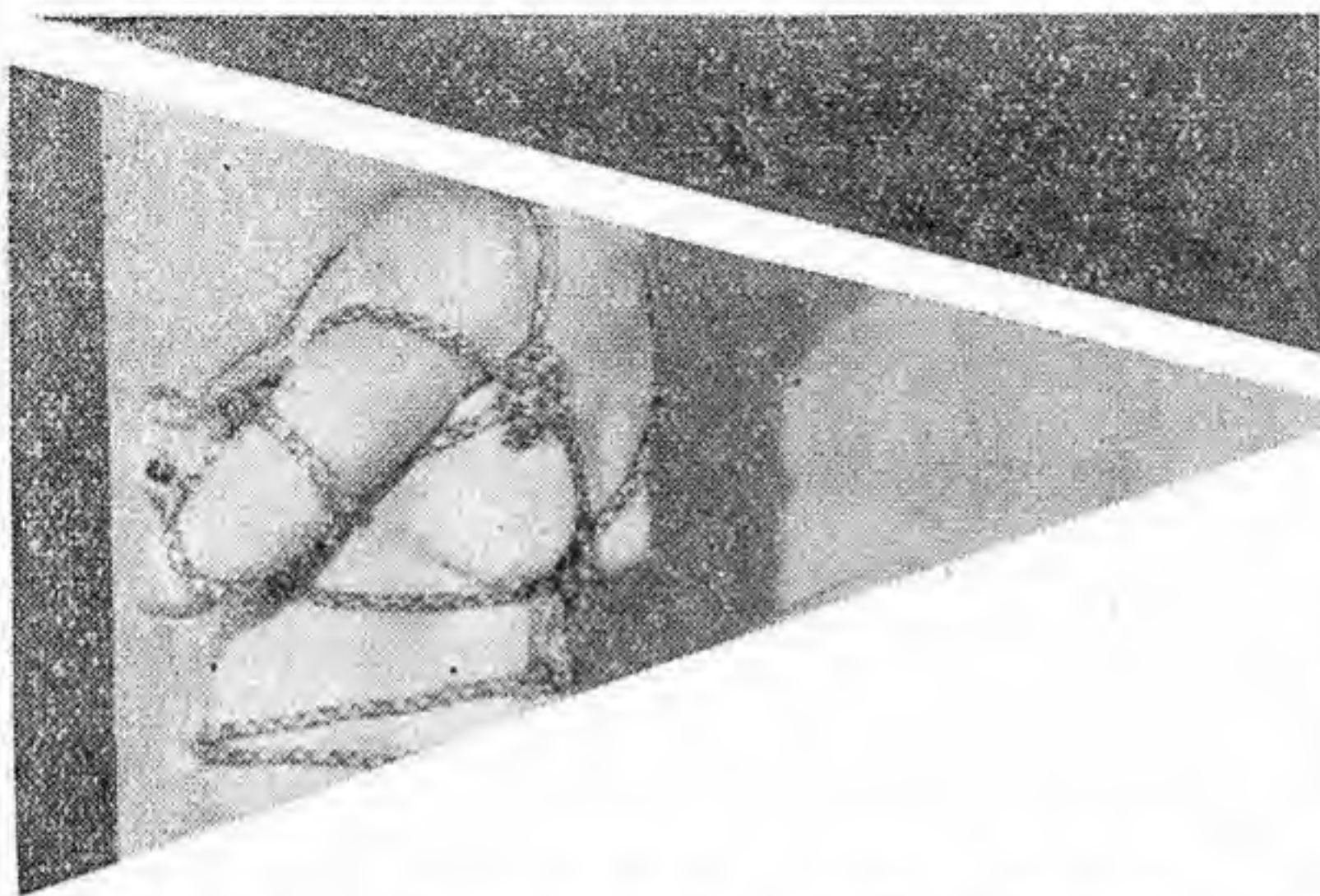
千絵子は、自分の父親が悪ラツな人間であることを知っている。

だが、そのおかげで自分がゼイタクな生活を楽しめるのだから、仕方のないことだと思っている。ヤクザの娘は、貧乏が嫌いだ。働らくことが嫌いだ。

「——哲夫さん、トイレにいきたいの。縄をほいてよ……。」

体をくねらせ、媚態をみせて千絵子は云った。

「またか——。」



哲夫は、軽い舌うちをして立ち上り、千絵子を縛りつけた椅子の後に廻る。

「——ひどいわ。ほら、腕にこんなにも縄の跡がついたわ。」足を縛った縄も解かれて、千絵子はヨロヨロと立ちあがった。

形よくふくらんだ乳房が、生き返ったようにゆらぐ。

「おい、金次。千絵子をトイレに案内してやってくれ。逃がすんじやねえぞ。」

哲夫は、弟分の金次に命令した。

「へい……。」

すっと立った千絵子の姿を、ニヤニヤしながら見つめる金次。

「こんな格好じゃ、

逃げようたって逃げられやしないわ。」

この娘には、多分に露出症的なところがある。自分の体を男たちの目にさらして、得意がっているようなポーズをとる。

たしかに、グラマーとよんでいいほどの身体ではあるが……。

うす暗い廊下を、金次は千絵子を見張って歩く。

「——ねえ、あんた。あたしを助けてくれたら、パパに頼んで、お礼はいくらでもするわ。どう？……。」

千絵子は、金次の手をそっと握り、耳もとにささやいた。

「金だけじゃ、いやだな。」

「それじゃ、あたしの身体もつけてあげようか？」

口もとに妖しい微笑をうかべながら、金次の顔に、熱い息を吹きかける。この美しい体に心をうごかさなかった男は、今までに一人もいなかった筈だ。

「うん…….といてえところだが、哲の兄貴を裏切ると、あとがおっかねえんでね……。」

ちよっと残念そうな口ぶりで、金次はいった。哲夫の腕っぷしはよく知っている。この男は、それが怖い。

「フン。意気地なし。」

廊下の突きあたりが便所だ。

ドアをあけて、千絵子の姿が消えた。

外で待つ金次。あまり気のきいた図ではない。広い古洋館の中は死んだように静まりかえっている。

と——

金次の胸が、ドキン！……と鳴った。頭の中が、なぜか火をつけられたように赤く熱くなった。

そして金次は、その異様なショックによって、哲夫の怖しさを忘れた。

用をすませ、ドアをあけて出てきた千絵子に、金次は、あえぐよ

うにささやいた。

「お、おれ、あんたをうまく助けるよ。逃がしてやるよ。だから、な、なり……。」

千絵子の頬に、勝ち誇ったような微笑が浮かぶ。

二人は、また灰色の部屋に戻ってきた。

「——また縛るぜ。両手を後にまわすんだ。」

縄をかけて、千絵子を苦しめることも復讐のうちのなだ。哲夫は千絵子の肩を撫んで椅子に坐らせる。

「縛るのはゆるして。とても苦しいの。あたし、大丈夫よ、逃げないわ。」

「おれは、少し眠りたいんだ。」

哲夫の語気が、荒くなった。

(ヘタに乱暴されたら、かなわない……)

千絵子は、しかたなく首うなだれて、両手を素直に背後にまわした。

その手首を重ねて、哲夫はキリキリと縄をかける。

腕から胸に、縄はまた非情に、肌を噛む。

「ううっ。お願い、胸には縄をかけないで！」

「うるせえ！」

乳房に喰いいる縄。千絵子は呻いた。

「ひいッ……。」

なんという、ひどい男なんだろう……

(だけど、もう少しの辛抱だわ……)

あの金次という男の心を、うまく掴まえた。あいつを使って必ず、ここから逃げだしてやる……

苦痛を堪えながら、千絵子は思った。

その千絵子の期待どおり、哲夫は千絵子を見張りを金次にまかす

と、自分はこの灰色の部屋を出ていく。

そして、自分の部屋に入ると、ゆっくりとベッドに横になる。

(たたかいは、これからだ……)

まず、千絵子の誘拐は成功した。つぎは、美佐をここへ連れてくることだ。

美佐——いまは大五郎の妻におさまっているが、三年前は哲夫と結婚の約束をした女だ。

(それが、こともあるうに、おれを殺そうとした男の妻になっているとは!……)

哲夫の胸底に、怒りがジリジリと湧いてくるのだ。

美佐をひっさらい、大五郎にまた一泡ふかせるとともに、その美佐を思いきり、ぶちのめしてやらなくては……

哲夫は、その計画を練るうちに、千絵子を監視していた疲れがでて、思わずウトウトとした。眠りながら成功を夢みてか、片頬のあたりに、ニヤリと微笑をうかべる。

だが、その大五郎が、すでに哲夫の妹、真紀子を手中に捕え、深夜の芝浦で、哲夫と不敵な対決をしようと待ちかまえているのを、さすがの彼も、まだ気がつかなかった。

そして、弟分の金次までが、きわどいところで千絵子の誘惑にひっかかり、すでに哲夫を裏切っていることを……。 (未完)

絵画のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフोटを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略画の添布をお願いします。

(編集部)

四馬・土路両氏へ

飛妻 新一

「本誌」二月号における四馬孝氏の「裏切者のリンチ」の「女」の被虐の表情は素晴らしい。唯、あれに首からゴムの縦縛りがあれば一層の迫真力があるのにと実に惜しい気がいたします。時々、読者欄に四馬氏への不満が出ますが、責められている女の表情、就中、その時の鼻、眼のタッチには他の追隨を許さぬものがあります。私は最近の四馬氏の絵の傾向を喜んでいきます。ぜひ続けて下さい。

土路草一氏の「魔教団NO・8」についても例え、非現実的な責めに読者はついていけないのではないか、といった評がありますがこれは取るに足らぬ意見だと思えます。土路氏のサディズムの世界はあつた責めにおいて始めて実現し、美となるのであり、こうした土路氏の「個性」を理解し得ないような評は、言ってみれば土路氏の高さについていくことの出来ぬ者のタワゴ

トに過ぎないと私には思われます。非現実的なことにひっかかることは、よほど程度が低いのです。

私の希望を言えば、路子にもっと「女」の反応をさせてほしい。路子の素晴らしいさを強調し、己れの一切の知性、知能を挙げ、抗しても、女の弱さに苦しい反応を示し、自ら「雌」に過ぎないことをまさに自身自身によって知らしめてやりたい。そうした種々様々な責め（例えばキドロドシュツクの「クリスチヌ」におけるような）の過程が雌としての畜体自覚への馴致過程であるような教導方法が一部に書かれたらと思います。

しかしこれがないからと言って、私は土路氏に何の不満もありません。むしろ私は大きな敬愛を感じています。「タワゴト」など無視されて、ますます土路氏の「世界」を「宇宙」をきずきあげて下さい。サディ

ストの描く世界は実社会においては悪徳です。その悪徳が実際に行われて許されると、誰が考えましょう。いけないとはわかり切ったことです。それにも拘らず否、そうであるが故に私はその夢の世界に他の何物によっても得られぬ激しい憧憬を感じます。私はこの事実を拒否することが出来ません。悪徳であるということよりも、神を否定するということよりも、快楽は激しく強い。外部世界の一切は俺を否定し拒否するが、それにも拘らず俺は存在するのだという、反逆の第一声を放ったのがフランソワ・ド・サドでありました。私は自己をかくあらしめたものに対して抗議することが出来ません。抗議しようとする対象は「オブリエ」であり、更にしようとすることはニヒリズムとなつて私に復讐します。サディストはサディストの歌を！これのみが私の「存在」を証明し「自由」をもたらしてくれ、そして「昇華」させてくれるのだと、私は今考えています。四馬氏よ歌え！土路氏よ歌え！私はそれを聞きたいと思えます。……

追記——敬愛し熱愛していた吾妻新氏よ貴方はどこへいかれたのでしょうか。

乗馬ズボン・シリーズ落穂集

(その三)

藤 山 秀 緒

斜

陽

ある。二人の生長を楽しみに西大路は生きて来たのだった。

光澄は、大学を卒業して関西の或る会社へ入社することが出来たので、東京に残ったのは西大路と雪子の二人だけの暮しである。

雪子はA大学に学ぶかたわら、同大学の馬術部に籍をおいて乗馬に励むようになった。

美しい雪子には、様々の人々が恋を囁いたが、雪子は馬術部の上級生で高野という大会社の社長の息子を愛するようになった。

高野の父は、西大路の昔の学友であったので、西大路の喜びは大きかった。

しかし、高野の父は西大路の喜びに反して

斜陽族との結婚を嫌い、雪子にも冷やかである。しかし、若い二人は、そうした蔭の思惑も知らず、人目を忍んで逢っていた。

高野の父は、一人息子の誠に、斜陽族から妻をめとることを固くいましめ、結婚はさせられないことを宣告していた。それなのに、誠は雪子に逢い続け、その仲は益々親密の度を加えて行ったのだった。

雪子の体に異状のあるのを知った西大路は高野の父を訪ねて結婚してくれるように頼んだが、高野の父は言葉を濁すばかり。やがては誠と雪子の電話や文通さえも禁じて、二人の仲をさこうとさえする。

西大路は終戦で、すべての財産を失った。

戦災、物資欠乏、財産税、インフレ——。すべては生活力に乏しいこの旧華族にとって、宿命のようにさえ思われるのだった。

彼は、めばしい家財を売って生きて来た。

彼には、雪子という娘と、光澄という息子が

西大路は恥を忍んで、再び高野家の玄関に立った。

——しかし高野の父は留守と称して、会わなかった。西大路は旧友の冷たい仕打ちに泣いた。

「……雪子。高野は駄目だ。私のような貧乏華族など相手にもしてくれぬ。あれが私の旧友かと思うと私は無念だ。しかし止むをえないことだ。雪子、高野は諦めて、他にもっともつとよい人を探そう。……」

「お父さま……」

「ゆるしてくれ。父が、か弱いばかりに雪子にまで悲しい思いをさせて……」

「お父様……でも私、諦め切れません。誠さんは、きっとこの事を御存知なのですわ。……お父様。お願い。もう一度いらっしやうて……。私も御一緒に……」

「何をいう。もう二度と、あのような処へ行けるものか。私のような昔気質の者には、旧友のあの仕打ちさえ無念でならぬものを、また恥しい思いをせよというのか。」

「分っております、……わかって居ります。お父様、私は、どうしても誠さんのお口から、本当のお心を知りたいのです。お願い……もう一度だけいらっしやうて！それで会わせて頂ければ、私にもそれだけの覚悟はあります。お父様……お願い！」

「そうだ……雪子。私は、もうこの上、生きて居るのがつらい。私は、もう一度、高野の家へ行き、旧友の軒先で死のう。お前も一人前になったし、光澄も立派にやうて行くだろう。この結婚に私は命をかけるのだ。」

「お父様、済みません。雪子、雪子も、誠に断られて生きているのは嫌です。恥しい。こんな恥しい思いをして生きるのは嫌なんです。お父様、今度拒絶されたら御一緒に死にましよう！」

「雪子……済まぬ。様子によっては、それもやむを得まい。……それまでに、したいことはしておくがよい。」

「はい。お父様、私、今度の馬術大会に障礙を飛ぶことになって居ます。それを済ませて、夕方でも誠さんをお訪ねしたいのです。」

「では、馬術大会を終わったら、すぐ行くことにしよう。私たちの運命も、それできまるだろう……」

二人は寂しく笑って、死の打合わせにかかった。

——馬術大会の当日、雪子はA大学を代表して障礙を飛んだ。これが最後の乗馬かと思えば、雪子の顔は緊張に蒼白んで、ひとしほ美しく冴えていた。

西大路は家財を処分して、雪子の乗馬服や長靴を新調してやった。父として娘へのせめ

てもの思いやりであつたろう。

雪子の乗馬服は黒の最上の生地で、ウエストをしぼった上品な上衣、グレイの厚手の生地で内股のなめし革まで艶やかな乗馬ズボン、黒光りのする乗馬靴、銀の拍車など、水際立った凛々しさである。

彼女は、わざと欠席している誠の心中を、いろいろに想像しながら、最後のレースをスタートして行った。

——試合を終わった雪子は、父、西大路に伴われて、山の手のお屋敷町に高野を訪れた。

西大路は、これも真新しい背広を着、乗馬服姿の雪子と連れだって玄関のベルを押す。

——意外にも、玄関をあけたのは、高野の父、逸平自身だった。

「西大路君。折角だが、この縁談は御断りする。何度もう通り、君のお嬢さんは美しすぎて、とても僕の息子なんかとは約合わんのだよ。だから僕は……」

「高野君、わかっている。わかっている。君は僕の娘を美しすぎるといつてくれた。それで充分だ。君だって人の親だ。自分の息子に、僕のような貧乏華族の娘を貰わせたくはないだろう。しかし僕も人の親だ。妊娠までしているものを、僕の働きがないために諦めさせることは出来ないのだ。済まんが誠君を出してくれたまえ……」

「誠は居ない。今日は留守だ。」
「……そうか。では帰ろう。雪子……すべては終わった。」

「雪子さんも一緒だったのか。」
「え。いまここに居たのに……雪子。」

この時、雪子は、玄関わきの暗がりにすべり出て居た。彼女は、もう覚悟していた。

——黒の乗馬服のボタンが外すされ、下着の前がくつろげられた。乗馬ズボンが押し下げられると、そこには可愛らしい臍がのぞいた。

雪子は乗馬服の胸から短刀を取出して、手早く刀身にハンケチを巻いた。

「雪子！ 雪子！」

あらぬ方を呼ぶ父の声。只ならぬ気配に、高野逸平も不安げな面持ちで玄関に立ちつくしている。

やがて雪子は、立ったまま一気に短刀を我が腹へ突き立てたのである。

「あ、ああつ……」
暗がりの中に雪子が呻いた。

「雪子！ 雪子！」

西大路は、雪子を探りあてて、抱くように玄関へ入れた。前のめりの雪子……。

その隙に雪子は、短刀に両手をかけて、ぐっと右脇まで引廻していたのだ。
「あ、ああつ、うむうつ……」



玄関のたたきに、紅の花が散った。

新調のグレイの乗馬ズボンの太股は、血汐の流れるにまかせ、刀身を巻いたハンカチからも、ぼたぼたと血が滴っている。

「雪子！ やったか……。高野君、僕のたった一人の娘は、誠君のために置いて行く。受取ってくれ。雪子、さようなら。父もすぐ行くぞ。」西大路は、いい捨てて門外へ走り出した。

高野逸平は、呆然と二人を見比べて立っていたが、西大路が去るや、我に返って雪子の傍へかけ寄ります。

雪子は、堪えかねて片膝をつき、齒をくいしばっています。思ひのかぎり掻き切ったのか、一文字の傷は無残に口をあいて、ぬめぬめとした臓腑が覗いています。

「雪子さん！ しっかりしてくれたまえ。おい、誰か早く、誰か居ないか！」

逸平の狼敗をよそに、雪子は気を取り直して、左手に傷口を抑え、右手で短刀を突込んで、左に傷口を抑え、きつと逸平を見つめます。

「お、お父様……いいえ、高野さんのおじさま。雪子は、雪子は、誠さんの為に死んで行きます。死、死んで、誠さんのお倅せを、祈っております。よ、よいお嫁さんを、うう、お迎え、く、く、下さいませね……。お、女

乍らも、り、立派に、う、ううっ……り、立派に……せ、切腹して、お別れ、いたし……ます。あつ、ううむっ……。乗、乗馬ズボン姿の、ゆ、雪子が、ううむ、お、お玄関で……せ、せ、切腹……したと、ああ、ううむ、ま、誠様に、うっ、うっ、誠様に……お伝え……く、く、下下さいませ！ ぞ、ごきげんよう！」

雪子は、何度も暗誦して来たであろう最後の言葉を、喘ぎ喘ぎいい終って、短刀に両手をかけ、

「ウーッ！」

と腹から絞り出すような凄惨な呻きと共にぐっと一抉りして刃を上へ向けて鳩尾へと切り上げるのだった。

「ウ、ウーッ、き、切れない……何の、もつと、もつと……ウーッ、ウムーッ……」

雪子は、逸平の手を振り払って棒のようにたたきへ倒れながら、短刀をきりきりと引戻している。真新しく、美しかった乗馬服も乗馬ズボンも、黒光りのした長靴も、血と泥にまみれて今は見るかげもない。

雪子は、もう一刻も早く死にたかった。

充分に抉った腹、

……雪子は、室内へ運ぶことを固く拒んで玄関のたたきの上に呻きつづけた。

乗馬ズボンの両肢を揉み合わせ、拍車の音

を響かせながら、どさり、どさりとのたうち廻った。

がばがばと傷口が血汐を吹いて雪子は、やがて意識を失って行くのだった。

やてが、うつぶせになった乗馬服姿の雪子は、救急車に乗せられようとした。

たまりかねたように走り出た誠……そして誠の呼ぶ声に、屹と眼を見開いた雪子は、でも嬉しげに何かいおうとしている。いえなかった。雪子は傷口を抑えた。断末魔のけいれん……。ウーッ、ウーッ、と雪子は何度か唸えかねて呻いた。

同じ頃、もう一台の救急車は、一人の初老の紳士を運んでいた。紳士は服毒していた……

飛行服恋慕

章子は女スパイであった。彼女の任務は、敵の後方から、細々とした情報を送ることであつた。

彼女は、何度も落下傘で敵地の後方へ降下し、軍の作戦を助けて来た。

今度の出勤命令にも、彼女は、勇ましい飛行服姿で参加している。ごわごわした厚地の飛行服、革の飛行帽、半長靴など、男装に身を固めた章子の姿は、ただ悩ましかった。

章子は、中支に飛んだ。よく似合う飛行服姿も、彼女にとって、この任務の大きな魅力だったのであろうか。章子は、どんな時でも飛行服に長靴を履いていた。時には飛行帽できりりと身振をしていることさえあったが、戦時でもあり、健気な女性として称えられはしても、彼女の心の秘密には誰一人気がつかなかったようだ。

章子は、そのがばがばした飛行服姿に身を固め、落下傘を装備して、機上の人となって居る。

——やがて目的地の上空へ来た。章子は唇を噛んで空中へ泳ぎ出た。しかし彼女は、敵に発見されていた。何をする間もなかった。敵の伏兵に取り囲まれた彼女は、飛行服のまま、忽ちきびしく縛しめられてしまった。

廃線のコードが彼女の体を、ひしひしと責めつけた。飛行服の上からとはいえ、針金でしばられる苦しさ。

「むうっ……」

思わず飛行帽、チリよけ眼鏡に隠された美貌が苦痛にゆがむ。

ああ、その呻き声は敵兵に女ということを

感づかせてしまった。

女！ 女！

敵兵は、章子の飛行帽をはずした。豊かな黒髪、美しいその眼元。

こうなつては、スパイの取調べは二の次である。章子は、飛行服の上から、ぐいぐいとコードで締めあげられ文字通り、のたうち廻つて苦しむ。

「む、むうっ。ええっ、うううっ！」

敵兵は、この美しい女飛行士が、苦しみ喘ぐのを見て一しきりさざめき立ったが、やがて、今度は、飛行服、下穿きの乗馬ズボン、ワイシャツなども剥ぎ取り、横木に吊した。代る代る敵兵は、彼女をベルトで打った。

ピシリッ

ア—ッ！

ピシリッ

ウ—ッ！

ピシリ、ピシリッ

ええっ、ウウ—ッ！

彼女は慄え慄えた呻きに身悶えしている。

……そして最後には、凌恥が待っていた。

彼女は死んだように倒れている。何時間か経つたのであろう。敵兵のかげはなく、石堀の向うで章子を捜す声がきこえる。

「高倉さん！ 高倉さんは居られませんか。」

高倉章子さん！

この声に、ハッと我に帰った章子。ああ、自分が責め抜かれて気を失ったあと日本軍が攻め込んで来たのか。……助った、という気持より、凌辱された今の自分の惨めさが身にしみた。鞭のあとが這い廻り、髪は乱れていた。

……恥しい。

彼女は、任務が失敗した上に、敵の捕虜になった申訳に、ここで自決しようと決心した。

脱ぎすてられた乗馬ズボンを穿き、泥まみれのワイシャツを着た章子は、飛行服を探した。せめて最期だけは完全武装の女飛行士姿で死にたかったのだ。しかし、飛行服は見当らず、半長靴だけが投げ出されて居た。

章子は、敵方に押収された落下傘や飛行服は諦めて、半長靴を履いた。

遠くに猶も呼びつづける声や、勝利を祝う歓声がきこえる。

じつと唇を噛んだ章子は、任務失敗の申訳に、切腹しようと、刃物を探した。

敵兵が捨てて行ったらしいゴボー剣が二、三本ころがっている。

章子は、その一本を取って白布を巻いた。

「ウッ！」

夕闇を破って、章子の押泳えた呻き。ゴボー剣は男装の章子の左脇腹深く突立て

られている。

「ウ、ウム、ウウム、ウウッ……」

がばッ！と肉を裂く音。切味の鈍いゴボ
ー剣に、渾身の心をこめて章子の女腹切りが
開始される。

「あ、ああ、き、切れぬ、……切れぬ、な、
なんの、なんのこれしきに……ク、ク、ク、
ウーッ！」

章子は、ずぶずぶと刃を引廻して行く。

「ウ、ウーッ！」

泳え泳えた呻きも、次第に激しくなつて、
章子を探す兵士たちが、こちらへやって来る
様子。

「高倉さん！」

「う、うう、高倉章子、こ、こ、ここに……
た、高倉は……うっ、ううむ、こ、ここにッ
！」

「どこに！ どこに！」

「むむっ、こ、ここに、お、お、おります。
も、も、申訳に、ううむ、た、只今、自決……
只今、自決……あ、ああッ！」

呼子が吹かれ、駆け集る将士。

「高倉君！ 早まったな！ 君は立派に戦つ
たのだ。死ぬことはないのだ。」

並木中尉がかけ寄ります。

「あ、ああ、た、高倉は、高倉は……。敵
に……ううっ……。敵に捕えられて……。申

訳け……ごさいません。い、いま……お、

お、女中らも、は、はらわたを、はらわたを
割いて、お、おわび致します！ あ、ああ

なおも右へ引廻そうとする章子。

「高倉君。よくわかった。この戦場では、そ
の深傷は手当てしようにも施す術もない。……
立派に死んで下さい。あなたの死を全員で
お見届けする。そして、あなたの死が無駄に
ならぬよう、全員が決意をあらたにします。」

「あ、ああ、う、うれしい……。い、いざ、
いざッ！」

章子は、尚も引廻そうとする。

「待ち給え。高倉君、何かいい残すことは
？」

「は、はい……。ありません。た、ただ、う
うっ……。ただ立、立派に、死、死んだと……
ううむ、あ、ああ、た、たった一つ、う
うむ、たった一つ……。」

「しっかり！」

「たった一つ……うう、ううっ……ヒ、ヒ、
飛行服、ひ、飛行服に身をかためて……さ、
さいご……さいごを……ひ、飛行服、飛行服
姿で……ウウムッ……。」

並木中尉は、直ちに敵陣の司令室や主な処
を探させ、投げすててあった彼女の飛行服、
飛行帽、落下傘等を取り寄せます。

そして、ここに、悲しくも勇ましい切腹途

中の武装が行われるのです。

「高倉君……。君の飛行服だ！」

「ああッ、う、うれし……。た、高倉……き、
着ますッ！」

「いう通りにしてやれ。二、三人、手伝って
やれ。」

並木中尉の命令で、二、三人の兵士が彼女
を抱き起こします。

べつとりと彼女の胸、腹を血糊が彩り、乗
馬ズボンも、半長靴も血にまみれています。

飛行服のジッパーがひらかれ、彼女の体を
つつむばかりに用意が整いました。

彼女は、半長靴を脱いで、先ず飛行服のズ
ボンの部分へ片足づつ、這うように滑り込み
ます。脂汗にまみれ、血みどろの女体が必死
に飛行服に、いどんでいます。

やがて彼女は血刀から手を放し、わなわな
とふるわせながら飛行服に袖を通します。そ
して、兵士が半長靴を履かせ、飛行帽をかぶ
せます。彼女は気丈にも歯を喰いしばって身
支度が整うまで泳え抜いています。

「あ、ああ、うれし……。か、完全武装……
ひ、飛行服姿で……は、はら切って、ううっ、
武、武人の本望……。か、完全武装……。お、
お、思いのこすことは、思いのこすことはな
い！ 司、司令、た、高倉の最期……。こ、
こ、こうして——。」

章子は、飛行服姿に返り咲き、凛々しい中にも、あどけなさの残る美貌を引きつらせながら、凄惨な「生体解剖」を再開するのでした。

ごわごわとした飛行服に包んだ彼女の体が海老のように屈伸しています。

刃は鈍い音を立てながら、それでも彼女の意志通り右脇に達した。

章子は、きッと目を見開き、

「た、高倉章子……お、おわびのために自決……。そ、その、そのまごころは……あうっ、そのまごころ見せます……」

ごわごわした飛行服から覗いている唐紅の傷口――。

その傷口へ章子の左手が……。

「ウウム」

がくん、と全身が硬直し、ウーッ、と、烈しい苦悶に呻きを押え兼ねます。

大陸の広野に夕闇が迫り、固唾を嚥む将兵の前に、気丈な章子は臓腑を掴み出し、飛行服姿のまま苦しんでいます。

「むうっ、ううっ！ か、介錯を！……介錯を！」

並木中尉は、無言のまま、ゴボー剣を握りしめている彼女の右手を放させ、拳銃を握らせてやります。最期まで自身の手でやり抜か

せたい。武士の情ともいえましよう。

章子は嬉しげにうなずき、ゴボー剣を引抜きます。

「ウウッ！」

章子は、ゴボー剣を抜取るや、拳銃を逆手にとって両手に支え、心臓に擬して轟然一発。

……しかし拳銃は、ショックで踏ね飛び、胸の傷も致命傷とはならぬ様子。

「ウウウッ！」

章子は胸を抑えて倒れます。そして、再び起き直って、拳銃をまさぐる壮烈さ……。

あまりの凄惨さに並木中尉は、やむなく彼女の右手に拳銃を握らせ、自分が持ち添えて胸に擬し

「高倉君。君は武士も及ばぬ立派な切腹を遂げた。陛下も君をおゆるし下さるだろう。さあ、いさぎよい最期を遂げるのだ！」

「ううっ、こ、これで、お、おわびが出来ましたか……。お、おゆるし下さいますか……。う、う、うれしい……。うっ、うっ、うっ、ううっ、なんの、なんのこれしき。……べ、ベルトを、ベルトをしめる！」

ああ、なんという健気さ。溢れる腸を掩うように、飛行服の前を掻き合わせ、ベルトをしめて完全武装の姿になろうと苦しむ章子。

「ウウッ……」

ベルトがウエストをしぼりあげる。ぐ、ぐ、ぐ、！

口をあき、ぜい、ぜいと喘ぐ章子。

章子は、やがて歯をくいしばりながら上体を起し、正坐しようとする。しかし、もうその力はなかった。

前のめりに、がばがばした飛行服が泳ぐ。

「ひ、ひ、東は……。ひがしは！」

並木も、並居る将兵も、章子の忠烈に泣いた。

涙乍らに東方に体を起こさせる並木。

「た、高倉章子……。た、た、只今、絶命……。天、皇、陛、下……。ば、万歳……。」

章子は、ふるえる手に拳銃の引金を引いた。

……硝煙と共に、彼女はのめった。ウーッ、ウーッ、むむむむ……。

断末魔の章子。

祖国の名誉を思い、進んで死についた章子。しかも飛行服に着かえ、苦しみに苦しんで罪のゆるしを乞うた章子。

ああ、その章子は、四肢をけいれんさせていま神のみもとへ急ぐのだ。(終)

現代マゾヒズム芸術時評

原 忠 正

復刊第九十六項

出版物「同志シユミードケ」

堤 鼓 良 訳・白水社刊

第二次大戦の前から戦中に及ぶコミュニスト達の対ナチス抵抗戦を扱った作品で、所謂西欧風長篇小説としての長短所を、それと併せ持っている。地名人名の不愛想な用い方、延々と続く間接的にしか本題に關係のないと思われる会話、そうして、忘れてしまった頃に再び現われる抜き難い力を持った主題と、その着実な発展、それらは、私達がドニゼッティの或る種の作品、特に古典的、伊太利歌劇のマンネリズムと呼ばれる種類の作品に見られる特有のものと同質である。

主人公、友人達、そして構成上の必要から

設定されたに違いない反対者達、主人公の心を如何なる小説に於いてもそうであるように、かたぐ、つなぎとめ、終結へ導いてゆく女主人公の魅惑的な存在、対ナチズムとか第二次大戦とかいうより大きな背景は、むしろ絵ハガキに印刷された背景のように無力である。従って、ここに挙げる部分は、この作品の重要な部分ではない。むしろ協奏曲におけるカデンツァに属する部分であるといつてよからう。ただ同様の場面、同様の描写がザッヘル・マゾツホ教授の古典的な名著である「毛皮を着たヴィナス」|| Venus im Pelz; Dr. Sacher-Masoch IIの中に見られることが面白い符合であることを指摘して置きたいと思う。

「其処にある犬に使う鞭を見せて呉れないか

ネ。

女店員は一握みの色々な鞭を取出して、ウインドウ・ケースの上に並べた。

「どんな鞭が御入用なのですか？ これは如何でしょう。」

「いやもっと頑丈なのが欲しいのだが。頑固な奴に使う様なのが」

「それでは、これは如何でしょう」

女店員はその中から一つの太い鞭を取り出し乍らいった。(以下略)

ここにいう頑固な奴とは、ここで鞭を買う男が無性に腹を立てている同僚の事である。

この場合は男は一人でその店に現われるのだが、「毛皮を着たヴィナス」では女主人のワンダは主人公たるマゾツホの分身を連れてゆく。そして鞭を扱ひ乍ら彼の方をみてニヤリと笑うのである。

同志シユミードケの場合の女店員の態度、言葉などに示される独得の無意識下の心理はまことに興味深い。是非、通読を要請する程の作品ではないが、この部分は一寸面白く思われるので紹介しておく。

復刊第九十七項

米ワナー映画「摩天楼」

主演

ゲイリー・クーパー
レイモンド・マッセイ
パトリシア・ニール

古い映画であるがN・H・Kがテレビ用映

画として特に今回買入れた二十数本の中古映画の中に入っているのを、時宜を得たものと思ひ、ここに紹介しておく次第である。

或る偏屈で理想家の建築設計家(クーパー扮)がいる。彼は独特の主張をもっている。で案外に名声を持っている。一方、大衆煽動を主眼とするバーナー紙という新聞がある。此の社長(レイモンド・マッセイ扮)は叩き上げのワンマンであつて、或る特定の権威を非難する事によって部数を増している。たまた、その槍玉に上つたのがクーパーの新建築である。煽動された大衆の反対は建築主たる大会社の株主総会を動かし、クーパーの仕事は次々とキャンセルされる。彼はバーナー紙の記事によって完全に叩き落された。バーナー紙の批評欄を書いているのは一人の婦人記者(パトリシア・ニール扮)である。彼女は仕事の疲れから解放される為に田舎の別荘に休暇を過すことになった。野外の騎乗を楽しみ乍ら、同じ村にある石切場を訪ねると、そこでクーパーが働いているのを見付ける。彼女は傲慢に振舞うが、一種の惹かれるものを感じて、自宅のマントルピースをこわし、その修理にクーパーを呼びつけるが、クーパーは相手にならず只、修理をして帰ってしまった。再び翌日、修理工を呼ぶと来たのはクーパーでなく新らしい職人であつた。自分を無視されたと腹を立てたパトリシア・ニールは

馬を飛ばして石切場へ行ってみると誰一人働いていない。農夫に訊くと今し方みんな引き揚げて行ったというので、彼女は狂気のように馬に鞭を当てて追付き、物もいわずに手にした乗馬鞭でクーパーを打ち据える。その日クーパーが宿舎に帰ると、新らしい註文の電報が来ている。彼は喜んでその仕事に没頭する。そして落成した新奇なアイディアの高層ビルの開館式で、彼はパトリシアに会う。其処でパトリシアは社長のマフセイを紹介する。パトリシアはその時、社長と結婚している。社長は妻の為の別荘をクーパーに依頼する。その中にこの二人の恋人同志は意気投合してしまう。その男同志と二つの愛情に責められるパトリシアの危機を中断する様にバーナー紙の営業部長が煽動してストライキが始まる。再びクーパーの建築を弾劾しようとする一味の主張である。友情と社務との間に板ばさみになって、社長は自殺してしまう。クーパーの新しい建築は無理矢理に月並な成金趣味に改められてしまう。建築家としてのクーパーの心の傷手は遂に彼をして、其の建物の爆破を決意させ、それを決行させる。パトリシアも亦クーパーに協力する。未完成のビルは夜中に爆破されてしまった。法廷でクーパーは自己の芸術的主張を守ってくれない建築主を責め、陪審員は遂に彼に無罪を決議するという様なもので、可成りの長尺物である。

る。現代アメリカを象徴するマスコミユニケエション、マスプロダクションと米国的芸術、米国的野心家と、米国的なものの示す烈しい矛盾をついた銘記されるべき名作である。本欄で特に指摘するのはパトリシアが別荘に行っている部分である。抽象派好みの石切場のカットは直線の交錯した面白い画面である。その真白い石の断崖の上に初めてパトリシアが姿を現わす時、彼女の純黒のジョーパスと真っ白なブラウス、それと手にして弄ぶ真黒い革鞭とが断崖の下で働く人達の粗雑な服装と対比して印象的である。パトリシア・ニールは可成りの大女であるから、この壮大な風景や逞しい男達の中に在って何等の遜色をも見せない堂々たる容姿である。これは、例えば、「野性の女」に於けるスーザン・ヘイワードが充分に強烈な性格描写に耐えているのにも拘らず、その比較的小さな容姿が禍いして同じく出演しているクーパーや、リチャード・ウイドマークなどと比べて大いに見劣りがしたのとよい対照である。同じことは古い映画であるけれども有名な作品である「ギルダ」に於いてリタ・ヘイワースが、そのヴォリウムに物をいわせていたことや、「無頼の谷」に於ける、又「砂塵」に於けるマルレーネ・ディートリッヒがその小柄さによって非常に損していたことなどにも、はっきりと現われている。そういうわけで、この

作品では、パトリシア・ニールの姿体の占める重要さは非常に大きい。勿論、石切場から馬を疾駆させるカットや、その部分に続く鞭打のカットも十分に魅力のある部分ではあるが、ここでも白と黒との烈しい対比が、そうして、ニールとクーパーという二人の体格の良い主演者のヴォリュームが物をいつている事は見逃せない。

作品としても、米国映画として出色の出来であるばかりでなく戦後の作品の中でも十指を屈するに足る作品群の中に入ることの出来る作品である。斯様な映画を見る度に、又コクトウの「双頭の鷲」などの名作を読む度に筆者は、サド・マゾヒズムをのみ立場としての鑑賞に対しても、矢張り、作品自体の完全さと芸術性、そして練磨された計画に立脚して設定された必然的な事件の適当な配置などが如何に重大であるかを感じるのである。最早、戦後でさえない、といわれて早くも一年本誌も数え切れぬ程多くのサド・マゾヒストの筆に成る作品、それからサド・マゾヒスト向きに書かれた作品を発表して来たが、それらの多くが、作者自身の熱狂的な感情と、真実の心理に基き、誘導して書かれているにもかかわらず、存外その読者に与える反響——私は所謂フアンレターの賞讃や、読者同志の自慰的な批評を指しているのではない。——が、はかばかしくないので、この最も初

歩的な原則、小説作法の不完全さに起因しているのではないかと思うのである。特に題材的に、又末梢的な描写に於いて可成り見るべきものを含んでいるのに、全体として、安物の読物に見られると同様のまとまらない印象をしか与えることの出来ない多くの未成品というべき作品の多くは、より練り上げたシチュエーション、コンポジション等と共に完全な日本語を習得することによって、作品としての生命を与えられそうに思えて残念である。私の評価は余りにも酷であるかもしれないが、旧独乙の多くの同種雑誌が、相当の數に上る作家、画家を、この偏奇な世界に送っている事実を考えると左程に無理だとは思えないのである。私はかつて、沼氏の「家畜人ヤプー」を架空見聞録と呼んだ。それは、あの老大な企図を持ったと思われる作品が、小説的要素に欠けるのみでなく、徒らな——というのは作品上、不必要な——環境の説明、詳細な報告的部分が量に於いても質に於いても絶対的な優位を占めているということにもよるのである。

小説に必須である心理の交錯や、何となく横溢する肉感、そして、読者を引張ってゆく特殊な魅力は、残念乍ら、「ヤプー」には見出し難いのである。本誌の中で白眉と目される「ヤプー」にして然り、まして他の幾分精巧を欠いた作品の中で、作品と考えられるも

のは非常に少い。これらが、現況を脱却して完全な小説としての要件を具えることが出来たとしたら、本誌は現在とは比較にならない程の新しい文学の領域を示すものとして、かつての「宝石誌」と同様の、「新青年」と同様の価値を持って来ると思われる。筆者はたま／＼、偏向性愛の立場からの批判者として前述の古き、良き作品に言及したので年来、抱いて来た熱望を茲に記して、読者及び多くの投稿家に訴える次第である。若し、貴作に就いての妄言と解される向きあれば何卒寛恕されよ。

復刊第九十八項

米ワナー映画「愛の勝利」

主演 ベティ・デイヴィス他

此の映画は一九五二年にベストテンに入り、且アカデミー候補となった作品である。これも亦N・H・Kが今回入手したテレビ用映画の中に入っている。この作品の中には特にマゾヒストを喜ばせる様なカットがあるわけではない。只、女性馬術家を取り扱っているので紹介しておくわけである。女性の乗馬に対する汎マゾヒストの興味については、すでに筆者のみならず多くの人が各種の立場から書いている。特に女性の立場から魅惑的な文章を乗杉貴代子氏が「ダイアナ夫人」と題して体験記を綴っている。これは改めて別項に記す心算ではあるが、若し女性乗馬に關しての興味を特に持つ新しい読者は、沼氏の手帖の旧稿と共に参照せられたいと思う。

創作
総 入 歯 の 女

志 田 克 太 郎

一、ばらばら事件

大洋商事に英文タイピストとして就職したわたしは、此の頃は、楽しいとまでいかなかったも、何不足なく、不安などという感情からはほど遠い毎日を送っているのですが……しかし、本当は恐ろしい思い出がわたしの心と肉体を蝕んでいたのです。

わたしは、その思い出すのも恐ろしい記憶を忘れようとして、タイプライターのキイが心地よくプラテンを打つリズムの中に入り込もうと努力するのですが、それは大きな矛盾として苦しめるだけです。わたしは、どうも

我慢できなくなりました。王様の耳がロバの耳であることを知った床屋が、禁じられれば禁じられるほど、その秘密を口に出さねば生きていけなかったように、わたしも又、わたし一人はつきり心に刻みつけた秘密を申し上げずにいられなくなりました。

わたしは……恥ずかしいけど、これをいわなければ何もかも納得して貰えないと思うので告白するわけだけれど……自分の歯を失っているのです。笑うと白いきれいに揃った歯が見えるのは、総て自分のものではなく、一言で説明すれば総入歯の女……これが、わたしの恥ずかしい秘密でなくて何でしょう。

ずっと以前に、わたしはある恐ろしい計画の犠牲になったのですが、その時の記念がこれなのです。

あれは昭和二十六年でしたか、わたしは東京のある私立女子短期体育大学の一年生で、世田ヶ谷の経堂の自宅から、大学のある神田まで通っていました。

大学に入るとすぐに、加東比美子という美しいお嬢さんと友達になり、大好きなバスケットでは、とても良いライバルになったのです。比美子は、のびのびとよく発達した肢体の持主で、わたしは多少、嫉妬の目で彼女を

見たものでした。

事件の起きたその年の夏は、二人でお互いに約束しあい、夏休中、別々のアルバイトをして暮し、休暇の終る頃、比奈子がわたしの家へ訪ねてくることになっていました。

わたしは、比美子が大学の生活協同組合を通してアルバイトの口を探していたらしいので、わざと個人的なルートで、ある会社社長の令嬢の家庭教師の口をみつけたのです。家庭教師といっても、体の良い遊び友達で、テーブルにかかった中学三年の娘を、退屈させないように相手をする役でした。その娘は中学三年に進学すると共に、病気のために休学していたわけです。

そして比美子と、ぶつくり連絡が絶え、數週間が過ぎました。比美子の家は千葉県の菅野という所にあつたので、何も知らずにいたのですが、その時分、既に比美子の家では警察に捜査願が出ていたに違いありません。

比美子が行方不明になったのです。家の者の話では、アルバイトを探しに学校へ行くと出て出たっきり、消息が判らないのだそうで、わたしも他の友達からそれを知った時、何かの間違ひではないかと思つたほどです。しかし、比美子は何処へ行つたか、まるで音沙汰なく、八月になりました。

その八月のはじめ、比美子は発見されました。しかし、何という恐いことでしょう。

発見されたのは、多摩川の上流に近い畠の中ですが、比美子は生きていませんでした。生きている所か、発見されたのは、首も手も足もない、胴体の部分だけという無惨な姿でした。勿論、最初、それが誰であるか判らなかつたのですが、丁度、捜査願の出ていた比美子のことが警察当局の連絡によって表面に出、比美子の母が死体と胸脇にある黒子で確認したのだそうです。

ばらばら事件だというので、新聞社や警察はむろんのこと緊張し、新聞の社会面に大きく載つたため、未だ覚えていられる方もあるでしょうが、わたしも、新聞記者の來訪をうけ、人の口の端で何やかやと騒がれたものです。

けれど結局、比美子の足取は失踪当時、大學へ出かけた所で、ぶつんと切れ、当局の必死の捜査にも拘らず、死体の残りの部分が発見されないまま、日は流れてしまいました。それで、比美子を殺した犯人は、何か特殊の目的で胴体を、発見された場所まで運んだものの、隠しきれずに置き去つたものと考えられたのでした。

「犯人はかなり巧妙な手口で殺つたんだ。胴体を捨てたのは、ほかの部分、例えば首などは発見されるのを極度に避けたようだが、胴体は危険が少かつたからだろう。首を探せば手掛りになるかもしれない」

ある新聞に、捜査本部の主任警部談がこん

な風に載つたのを覚えています。

それに、わたしは被害者の親友だということで、新聞社などによく行き、その時、聞きかじつた情報では、死体には不思議な特徴があつたそうです。

その一つは、手足を切断した切り口が、まるで外科手術を施したように素人放れしていること。警察医の診断では、脚を切断したのは、生きていられるうちではないかとさえいわれた位だそうです。

比美子の死については、わたし自身、何一つ思い当る節もなく、そうした彼女の無惨な死を廻る多くの謎も解くことはできませんでした。

けれども、新聞に載つた主任警部談は事件の真相を突いていたのです。もし、比美子の首が発見されさえすれば……ああ、それは何と恐い事実が判つたかことか……。まったく残念でなりません。

二、怪奇なアルバイト

さうこうするうちに、わたしは、アルバイトの家庭教師を失職してしまいました。八月十日頃だつたと思います。お相手役の令嬢が発熱し、病勢悪化のためにとうとう入院したからです。

未だ学期が始まるには間があつたので、次のアルバイト口を見つけるために、わたしは

学校へ出かけ、大学の生活協同組合事務所前
の大掲示板で良い口を探すことにしました。

ひどく暑い日で、白布に紺のストライプの
ワンピースを着ていましたが、背中が、じっ
とり汗が浸み出る程でした。

至って軽装なわたしは、白いビニールのハ
ンドバッグ一つを持っただけで、家の者にも
行く先を告げなかったのです。これは後で大
変後悔したことでしたが……。

大学の構内は、ひっそりして、焼けつくよ
うな日射しが一面に照りつけ、わたしは白昼
夢の中を歩く気持で、何時か、アルバイト口
の貼り出されている掲示板の前に立っていま
した。

十二、三の求人がありますが、わたしの気
に入るものではなく、仕方なしに帰ろうとした
時でした。

「もし、もし。あなたはアルバイトの口を探
していたようですね」

振り向くと、四十五、六の開衿シャツを着
た紳士が立っています。インテリ風の品のよ
い中年男でした。

「ええ」

「実は、一寸、アルバイトの学生さんを探し
ていたんですが……。あなたはどんな仕事
をおのぞみですか」

「この間まで、家庭教師をしてましたので、
そういう仕事ならと思ってるんですの」

「ほほう。それは結構だ。息
子の夏休みの勉強をみてもら
いたいんだが、どうです。一
つ、ひきうけて下さるまい
か」

「家庭教師ならよろしいんで
すけど……」

「そりや、有難い。すぐに来
て頂けるでしょうね。いろい
ろの条件や手当のことは、後
で相談しましょう」

紳士は、すっかり喜ぶと、
先に立って歩き始めた。

はつきり返事をしないまま
構外に通じる道の方へ、二人
で歩くと、道端に水色の目立
たないトヨペットが一台止っ
ている。どうやら紳士は自分
で、その車を運転してきたら
しいのです。

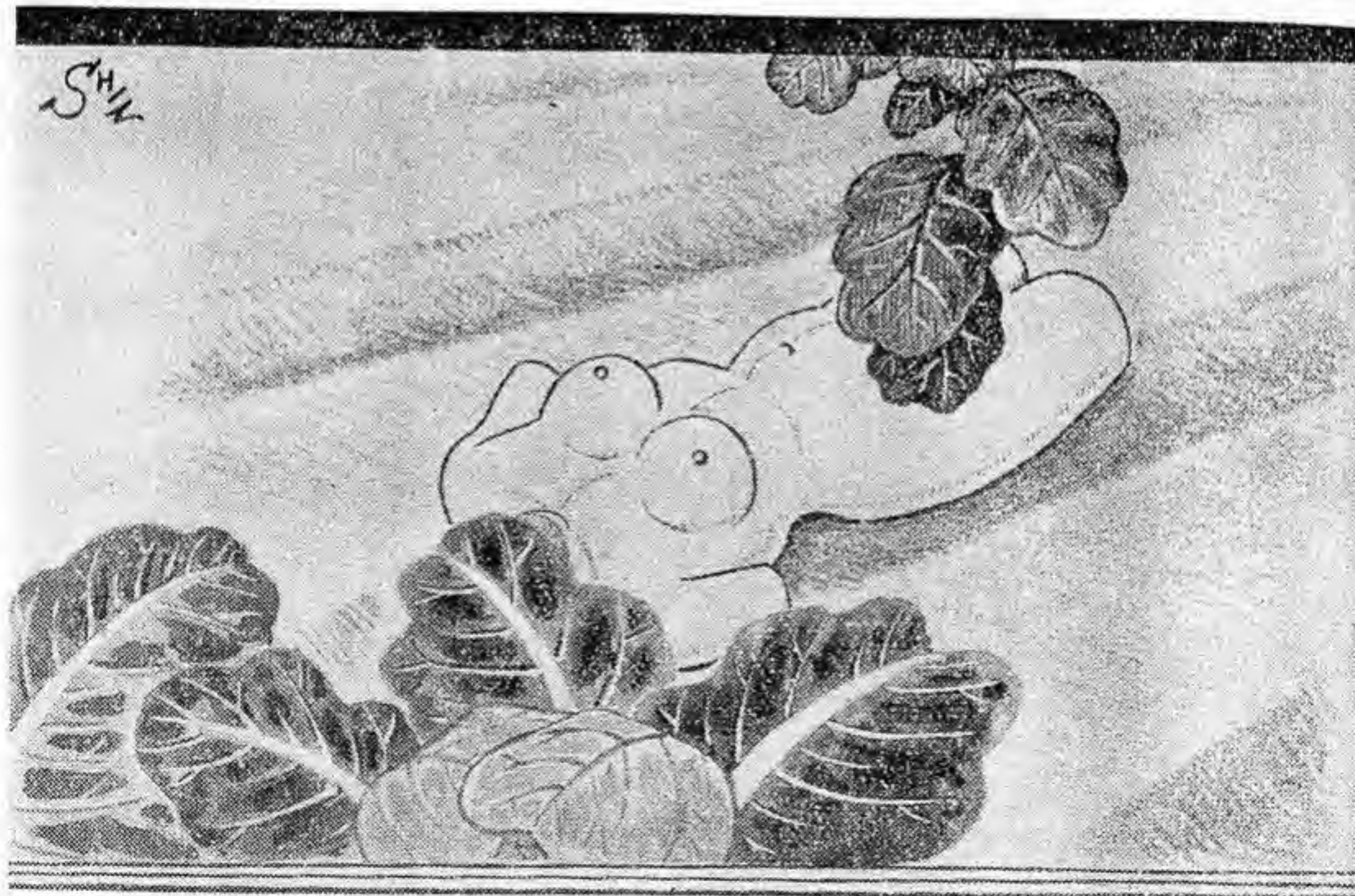
わたしは、何故か不安な気
持に襲われました。

そこで、紳士に向って、

「あの……。失礼ですが、一
寸お待ち下さい」

「どうしました？」

わたしはハンドバッグをか
かえ、そばのトイレットへ駈



け込んだのです。

トイレの内錠を下すと、バッグから口紅を取り出しました。咄嗟の思いつきで、ありあわせの口紅を使い、トイレの内壁にたった今、横目で読み取った車のナンバーと自分の名前を大きく書くことにしたのです。もし、あの紳士が悪人でなければ今日中にも、ここに戻って消せばいいし、仮りに悪い奴なら、まさかの時にこの落書を見た人が、警察に届けてくれるでしょうから。

素知らぬ顔でトイレを出たわたしは、紳士と並んで腰を下しました。

車は神田から中央線に沿って、四谷の方角へフル・スピードで走り、やがて淋しい住宅街の一隅で止まりました。そこは町医者者の玄関先でしたが、紳士はそこで、

「一寸、用を足してきますからね」

と、私にいいおいて自分だけ車を降りたのです。四、五分待つと再び姿を現わし、

「困りましたな。息子は少し遠くの方へ出かけたらしい。でもなに、車ならすぐですよ。あなたには是非、会って貰わなければ困るから」

車は再びスタートし、東京を西へ西へと走り続けました。紳士は無言でした。車が三鷹を過ぎた頃、わたしの不安は次第に大きくなりました。もうこの辺から全然、地理が判りませんから。私は思わず声をかけました。

「あの……」

しかし、紳士は答えません。それが、わたしの不安を一層増大させました。恐らくこの男は、町医者者なのかもしれません。しかし、先程の車を止めた家は何だったのか、見当もつかないのです。

「あの……。息子さんは何処にいらっしゃるんでしょう」

「もうすぐですよ」

先程より、冷い声がかえってきた。

取りつくしもなく、わたしは黙って、車のフロント・グラス越しに真夏の武蔵野に、眺めるともなく、落着かぬ瞳を投げていました。

もう、この頃既に、わたしは自分の前に待ちける運命を何とはなしに予感していたのでした。

でも、わたしには勇気がなかったのです。体中がしびれるように凍んでしまい、なるようになるんだという気持がありました。

車は何時か、小高い丘の道を走り昇っています。その道の尽きる所に洒落た門があり、車はそのまま門を入ると洋風の建物を迂回し、ポーチに止まりました。かなり大きな邸のように見えます。

「ここです」

わたしは返事もせずに車を降りました。変な話でした。医者のような男は、自分の息子

の勉強をみてくれといいながら、一体、息子がこんな立派な邸に住んでいるとでもいうのでしょうか。

玄関を入ると、ビロードを張ったスリッパをはき、三つ四つの部屋を通り抜けました。わたしの案内された部屋は、カーテンでドアが隠された奥まった所です。八畳間位の広さで、ゆったりした長椅子が一つと、二脚の小椅子、それにテーブルなどだけで、家具らしいものは余りありません。

わたしはその長椅子に座るようにいわれ、しばらくの間、独りで部屋に取り残されたのです。

三、老人用玩具

いんと静まりかえった部屋にいて、わたしは何も知らずに……自分を連れて来た男の名も訊かなかったのです……ここまで来てしまったことを後悔していました。その部屋には窓一つありません。

すると、例の男が入ってきました。息子らしい人影はなく、たった一人です。男は近よると、こういいました。

「ゆったりした気持で、長椅子のそこへ腕を置きなさい。足はそこ……」

わたしが何の考えもなく、その通りにした瞬間です。どういう仕掛けがしてあったものか、突然、わたしの両手首、両足首は長椅子

から飛び出した金属製のバネのために自由を奪われてしまいました。

「あッ」

男は、わたしの体が長椅子に磔になったのを見とどけると、部屋の隅のテーブルに歩み寄り、そこに置かれた四角い奇妙な箱に手を延ばしました。

すると今度は、わたしを載せた長椅子の脚部に変化が起り、長椅子は大型ベッドに変わったのです。つまり、わたしはベッドの上で両手、両足を固定されたと同じことになったわけです。

ここに至って、わたしも、この男の目的を知ることが出来ました。アルバイトなぞ大嘘で、前々からこの秘密の仕掛けをもつ長椅子を用意し、犠牲者を待っていたに違いないのです。

もちろん、男の目的は未だ判りません。しかし、若い女の自由を奪った男が、それから何を考えるか、いうまでなかったのです。

わたしは叫び声をあげる勇気を持ちませんでしたし、この広い邸の奥まった部屋では所詮、無駄だったことでしょう。

たった一つの救いの綱は、わたしが、咄嗟にトイレットの壁に書き残した口紅の連絡文だけです。この男が、わたしを誘拐した理由の一つは、確かにその行為を目撃する者もなく、わたしが第三者に連絡できなかったと信

じたからでしょう。

口紅の連絡文で、わたしに救いがくるまで一体、わたしを待つものは何でしょうか。

さて、再び特殊ベッドに近寄ってきた男の表情には、一片の慈悲の影もなく、右手には外科医の使う鋭利なメスを持っていました。

「あッ。何をするの。わたしのアルバイトの世話をするなんて、嘘じゃないの」

「ふッ、ふッ。今更泣いても無駄さ。どうせ生きちや、帰れないんだぜ」

「いや、いや。一体、わたしをどうするつもり？ 殺さないで！」

「そう簡単に殺すものか。それより、もっと楽しくしてやるよ。お前は、この邸の主人に買われた品物なんだ。これから、おれが手を加えて、主人の使い良いようにするのさ」

男は実に妙なことをいうのだった。その言葉が本当なら、わたしはこの邸の主人に買われたことになる。でも、どんな使い方をするのだろう？

「お前は、生きながらこの邸の老主人の玩具にされるんだ」

「えッ」

生きている玩具……年寄のための……何と不思議な言葉でしょう。

しかし、男の手は早くもメスを動かした。わたしを玩具に変える仕事を始めていました。男は外科医らしく、てきぱきとことを運びま

す。たちまち、わたしのワンピースは、下に着たシユミーズと一緒に切りさかれ、四肢が緊縛されたまま、わたしはブラジャーとパンティだけの恥ずかしい恰好にされてしまったのです。

男の手がブラジャーにかかった時、わたしは反射的に身をよじりました。

「それだけは許して、お願い」

その抵抗も、男には何の反応もあたえず、ブラジャーの紐はメスで千切られ、薄桜色の肌と可愛いらしい二つの隆起が、男の視線に露わされてしまったのです。

男は腕くわたしを見降していましたが、メスの先でチク、チクと胸や腕を突つづいたのでした。それはホンの軽く、血さえ出ない程のつつきようでしたが、そのたびにわたしは得もいぬ恐怖を感じて、「ひイ、ひイ」声をあげました。男にはそれが面白いらしく、しばらくはそんな動作を繰り返して、わたしを怖がらせ、腕かせ、悲鳴をあげ続けさせたのでした。

しかし、わたしの膚のところどころから、ポツリポツリと小さな血の出だしたのを見ると、彼は全然、別の仕事を始めました。

わたしの髪の毛は根本から切りとられ、くりくり坊主にされたのです。逃げないためでしょう。未だわたくしは彼がこれからどんなことをするつもりか、本当の所を知らな

ぎました。

しかし、彼の手が情容赦もなく、わたしの自慢の頭髪を切りとっている間に、その皮一

重、内側の脳は忙しく働いていました。恐怖と憤怒と羞恥の激しく交錯する脳裡に、何故か当然のように比美子さんのことが思い浮ん

にゴムマリを半分に割ったようなものをおかぶせ、薬品で皮膚に貼りつけました。こうして完全な盲目女になったわたしに、さまざまの



できたのです。

比美子さんも、この男の犠牲になったのに違いありません。彼女を殺した憎い犯人——わたしの直感がそう判断しました。その直感に間違いがなければ、わたしも比美子さんと同じようにこの男に惨殺されるのでしょうか……。わたしは目茶苦茶に暴れました。けれどもどうにもなりませんでした。

男は「老人の玩具」だといいます。とすれば、支那の広東に昔あった「盲妹」のように、邪欲を満す道具として、さんさんとき使われた上で抹殺されるのでしょうか。しかし、実際には、その盲妹よりも、もっともっと恐ろしい運命が、わたしを待っていたのでした。

四、虎子娘

これは、後で判ったことです。が、医師風の男は、わたしを盲妹以上の存在に変えようとしていたのです。盲妹は眼をつぶされるのですが、男はわたしの両眼の上にゴムマリを半分に割ったようなものをおかぶせ、薬品で皮膚に貼りつけました。こうして完全な盲目女になったわたしに、さまざまの

細工を施したのです。

比美子さんの場合は、自分の好みから、玩具として不必要な手足を外科的に切断しようとして、とうとう失敗し、彼女を殺してしまったのでした。

世間であれほど、その解明に躍起となっていた、ばらばら事件の謎は、わたしだけでは判明したのです。比美子さんは殺されてからばらばらにされたのではなく、生きながら外科手術を施されたわけなのでした。

しかし、何故、そんなに迄して誘拐した女に、死の危険をおかしてまで、厄介な手術や細工をする必要があったのかというと、それはこの邸の主のことを話さなければ説明できません。

彼は、功なり名とげた富豪でした。それだけに金を目当てで近づく女が多かったのです。

世間でよくあることだと聞きますが、彼もまた、そんな女の巧みな口車と媚態によって幾度となく精神的に打撃を受け、少なからぬ経済的損害もこうむったのです。しかし、それだけならまだしも良かったのですが、彼が交通事故で相当の重傷を受けて入院中に、永年苦勞を共した妻までが、莫大な金額を持ち出し、彼を裏切って、若い男と共にいずこかに姿を晦ましたのです。このことは彼をして、

“女は憎いもの” と思ひこませ、復讐を決意させました。そして尚悪いことには、交通事故

故の傷が思いもかけぬ重要な欠陥をその体に加えてしまったのです。元々子供の無い彼は、その孤独の淋しさをまぎらす為、復讐心をもつばら若い乙女に向けて、学校時代からの親友である不良医師——わたしを拐した男——に金の力で己れの邪欲をおちまける対象、つまり“玩具”の製造を依頼したのでした。

つまり、医師が老人用といった意味は、そこにあったわけです。

わたしの体は玩具として適合させるべく細工が続けられました。目が見えなくなった次は耳でした。左右の耳に、何か蠟のようなものが詰めこまれた途端、わたしに残された外界との繋りは、全く触覚だけといっていいでしょう。

わたしは、手触り、肌触りだけで物質を見分けようと白い体を、ひくひく動かす不思議な生物に変化していました。

その中、わたしは自分の四肢が自由になったのを知りました。男が、わたしの両腕を押さえ、みじめな姿のわたしを何処かへ運ぶようすでした。そして再び仰向けに寝かされ、固定されました。が今度のは、更に特別な仕掛けがあるような気がして、皮膚に触れる冷い空気が不気味でした。

仕掛けが動き出すと、次第に寝かされている

台が傾き始め、頭の方が下り、足の方が上り出しました。つまり逆立にされたのです。そして尚も両足首は、ぐんぐん上げられ、わたしは完全に逆吊りの恰好にされました。苦しさで恥ずかしさと、口惜しさで本当に心の底から、一思いに殺して欲しいとさえ思いました。

わたしが死のうと思えば、舌を噛み切るこれが唯一の方法だったのです。それだけが、この地獄の責苦から逃れる最期の手段として残されていたのです。しかし……しかし、それすらも、わたしの決心がほんの少しおくれたばかりに不可能になったとは……。

一瞬、逆吊りの苦しみも忘れる程の激しい痛みが、顎の下にあたったと同時に、わたしは口の感覚を失いました。強烈な麻酔薬を打たれたらしいのです。四、五本の注射器が使われたようにも思いますが、よく判りません。

わたしの口中には、知らぬうちに大きな変化が起きていました。残忍なこの男は特殊の方法で、わたしの歯をすべて抜きとっていたのです。いくら研究を積んだ名医にせよ、全部の歯を一度に抜くのは無理です。だから二、三度にわけられたのかもしれませんが。とにかく、わたしは感覚を奪われ、闇の中に閉じ込められているので、皆目、見当がつかみませんでした。

しかも、歯を抜いた目的は、わたしから自

殺の手段を奪うためばかりではなかったのでした。

齒を奪いとった為でしょうか、男はわたしの腕や脚に幾本もの注射をして、わたしを衰弱から守りました。つまり簡単にいえば男は自分の目的に利用する為、わたしの体に必要な手を加え、必要な保護は手抜きなく施しているのです。

一本残らず齒を取り除かれた口、衰弱から守られたわたしの体が、この悪魔の様な男達に、どんな風に利用されたかということは、いくら勇気を振いたたせても、わたしの口からは告白致しかねます。只、月並な表現ですが、死に勝る屈辱の連続を強いられたとしか申し上げられないのです。

わたしが誘拐されてから、幾日かが経ったと思います。警察はわたしがこんな目に遭っているのにまだ気がつかないのだろうか。あの壁の書置の謎を解いてくれないのだろうか。あろうか。忌わしい玩具として弄ばれ、闇から闇にあの比美子さんと同じ運命を辿らねばならないのだろうか。わたしの脳裏は、焦慮と絶望に狂わんばかりの毎日でした。

五、救いの日の悲劇

激しい体の疲労で、わたしは半ば自分の理性と判断力を失いかけていました。そんな

時、わたしは自分の腕の辺りに、のろのろした指が這い出したのを感じました。確かにその指は、がさがさして今迄の男の手とは違っています。

不思議なもので、目が見えず、音も聞えない世界に閉じこめられると、触覚が異常に発達することが判ります。探偵小説の大家E氏の作品の中に、盲人が触覚上の美人を求める話があったようですが、今のわたしの世界がそれに近い感情をよく理解させてくれるのです。

それは六十以上の老人の指です。冷い指先の震えまでを、わたしの神経は敏感に読みとります。

“これが邸の主人なんだわ。”

わたしの体は震え上がりました。その時は、どういう積りか、何時も固定されている足首の鎖が外されてありました。両手は左右に拡げて、それぞれ手首のところを台に縛りつけていましたが、体を動かすことは出来ませんでした。その手の主は、わたしの横たわっている頭の上に居ることがハッキリ感じられます。わたしは身をよじりました。しかし両手首を固定から脱出することは不可能です。その手が、わたしの顎にかかりました。私は何とも云えぬ恐怖を感じて、夢中で両足をあげて体を二ツに折り曲げました。男の息吹きが頬に感じられた途端、わたしは全然意識せぬ内

に、わたしの両足がまるで別の生物の様に、力一杯頭の上の男を蹴りあげていました。「グエッ！」という様な呻きが、器物が倒れる音と一緒に聞えました。

しばらくはその儘の静寂さでした。ややあって物の動く気配がしました。わたしは不安にじっと身をすくませていましたが、突然、頭にぐんと烈しい衝撃を受けて気を失ってしまいました。

わたしが意識をとりもどした時、不意に周囲が明るくなっているのに、びっくりしました。わたしは柔かい病院のベッドの上に寝ているし、そばには看護婦さんをはじめ、警察の方々の姿もありました。わたしは突然、声をあげて泣き出しました。

救われたのです。わたしが口紅でトイレットに書き残した走り書は、やはり無駄ではなかったのです。その自動車のナンバーから、誘拐者の医師の身許がわれ、主謀者の老人との関係が判ったそうです。

わたしは、いつまでも泣きつづけたことを覚えています。嬉しい気持よりも、もう少し早く救いの手がやってきて、こんなひどい抜歯手術を受けなかったら、とばかり考えて泣いたのです。

事件は警察の方々の好意ある御配慮で、極秘裡に片付けられました。比美子殺害の件と

婦女誘拐と傷害のかどで、二人の男達は逮捕され、わたしは世間の目を逃がれ、家に引きこもったのです。

救われた当時、くりくり坊主だった髪の毛も普通の人と同様に生え、親切なお医者様の手当を受けることができ、疲労しきっていた体も、みるみる回復したのですが……ただ一つ、一度抜かれた歯だけは、もう二度と生えてこないのです。

仕方なしに総入歯をし、現在では、大洋商

事の英文タイピストの勤務に励んでおりますものの、心に受けた傷は、なかなか完全になおりはいたしません。

今年は、もう二十五才ですから、結婚の話もあり、会社のある係長さんからも、それとないプロポーズがありましたけれど、もし、総入歯の秘密が知れたらと思うと、その申し出を軽々しくお受けできないのです。

余りに秘密を守ることの重荷がわたしを苦しめるので、ここに申し上げましたが、会社

の方々や、わたしの身近かな人で、少しでも面識のある方には、いつまでも秘密にして生きるより仕方がないと信じています。

今日も又、何気なくタイプのキイをたたき、電車に乗るのですが、わたしは自分の秘密を知られたくないと思いつづけております。もし、皆さんが電車の人ごみの中で、絶えずハンカチを口に当てる女性を見受けたなら、どうぞ知らぬ顔をして下さい。それは、わたしの悲しいポーズかもしれませんから。

限定版

「緊縛フォト・アラベスク」評

近 藤

一

臨時増刊号「緊縛フォト・アラベスク」確かに落掌致しました。飽きることなく、幾度となく繰返して見つめています。いろいろと心楽しいストーリーが湧いて来るようです。表紙の愛川さんは好適でした。もの想いに

耽る何気ないポーズの柔らかみ、縄目や猿轡の隅々まで細かな心遣いがみられますね。髪の手入れには不満がありますが……。

精選された作品揃いで、それぞれ感動を受けたものばかりですが、私の好みに従って特

に優れていると思われたフォトもありますので各モデル嬢について思いつくまま綴ってみます。

Ⅱ愛川悦子さんⅡ 同じボリウムでも、愛川さんの肢体は厳しい縛しめをしっかりと受けとめるという感じです。云うならば爛熟した女体とでも称すべきでしょうか。私は第一位に「豊醇」を挙げます。すべての縄目が、これだけのくびれを見せている柔らかみは貴重なものですよ。頸、胸、腹に吸いつく様に喰い込む縄目、一捻りした手拭、滑らかな舐の線が、私の求めるものにピッタリです。眼の表情も素敵です。これに劣らない出来栄は、「裏と表」でしょう。胸の隆起の強調から腹部にかけて、スリッパがあるだけに却って情感があります。「鏡」の、何かデカタンスな

安定感、「椅子と絨緞」の嫺々たる感じは全く別物ですし、「脱がされた高手小手」の七葉は「亀甲縛り」とは別人のような驚く程の肥満ぶりでした。

Ⅱ大塚啓子さんⅡ 裏表紙にポリウレームを誇示している大塚さんの躰は、厳しい縛しめを弾き返しそうな、ブリブリした弾力を感じさせてくれます。こういうポリウレームも、ウエストが充分に括れることによつて価値があるので、只の肥満体では余り意味はないと思います。大塚さんのフォトは正面より斜めから撮った場合の方が美しいのはそのせいかとも思うのですが如何でしょうか。「諦観」と、乱れ髪の「観念」が一位を競うと思います。いくら逞しい女体でも、やはり可憐や、優雅な姿態は大切ですから、殊に諦観のようにあどけない表情を見せる大塚さんには、適宜な演出の要があると思います。いずれにしても大まかな顔立ち、ポリウレーム、長い髪はやはり大塚さんの魅力だと思います。

Ⅱ絹川文代さんⅡ 「姐上の美鯉」が第一等であることを否定する人はいないでしょう。本当にフォークで刺し、ナイフで切り取って喰べてしまいたい程です。しかし他の作品はそれ程ではありません。一見してヒップの張りが乏しい感じなのです。「庭園にて」が何かアンバランスに思われますが、これは、上

体や、素晴らしい脚線美に比べて、ヒップの逞しさが僅かに劣るためなのです。それ自体は決して悪くないのに……。『落陽の丘』や「奇妙な休憩」のようにヒップを覆うと、俄然、艶を増す絹川さんが私は大好きです。特に頸筋の強い美しさ、ノーブルな美貌、大きな眸は「危惧」「空耳」「華やかな機会」そして「姐上の美鯉」に余すところなく表現されています。

Ⅱ田代悠子さんⅡ 今回は十八頁に亘って姿を見せてくれたのですが、「軽い驚き」と「松葉チラシ」が特によい作品でした。髪の手入れも良くない上に、余りリファインされていない顔立で、それこそまだ少女という感じが、そのようなあどけなさとか、きかぬ気の表情が良いように思いますが……。和服が似合わないのは、和服の非活動性にマッチしない肢体のせいなのでしょうね。表情集その二の成功は、田代さんに猿轡が不可欠のものであることを再び証明したと思うのです。事実、口、鼻を覆った田代さんの表情は見事です。ですからね。

Ⅱ田中芳代さんⅡ 「謎の微笑」の左頁のフォトは素敵です。流石に美しい縛られ方をしていますね。しかし前面から撮る時は帯か腰紐が必要だったのではありませんか。表紙裏の一葉はいけません。田中さんはかなり頬骨

が高いので、角度によっては口を覆わないといけなと思います。

Ⅱ花坂道子さんⅡ 背面の表情というか、後姿の女らしさは抜群のモデル嬢です。和服、殊に長襦袢姿のピタリした感じも、さこそと思われる体つきにははれられました。純日本風の生き方のイメージにマッチしますから、二号さんとか、芸者とかの責めに使われれば傑作を残すでしょう。私は「腰巻と鏡台」の左頁のものを二位に推します。

Ⅱ村井知可子さんⅡ リアルな責め場で、二葉とも気に入りました。どちらかといえば、「立木縛り」の方が拷問らしい点で優れています。こういう顔の位置では流石に美しい女性ですね。欲をいえば、責め手の男性が、責める態度を明確にしてほしかった。足をもつと開くとか、左手を逆に使うとか、縛りでもかける位の配慮と演技があれば尚よかったと思うのですが……。サディストが醜男でないことというのが私の念願で、その意味からも嬉しい作品でした。

限定版の特別号の企画が、これからもどんどん続けられる様子で楽しみにしています。更に充実した特集の誕生を心待ちにしています。

×

×

×

愛^マ好^ニ家^アの記^ノ録^ト

とやま・かづひこ

(85) 酔どれ外人女

一月十三日の『内外タイムス』——粹人酔筆から。

東京は二十八年ぶりという元旦の大雪。この読物の筆者田辺禎一先生が、その元旦の夜に乗ったタクシーの運転手から聞いたというはなし。

日がトッピー暮れかかった頃、青山付近で一人の紅毛の女が大声で車を呼びとめた。見ると三十才くらいの、すこぶる大きなアメリカ女である。女士官らしいが大分強い酒を呑んだと見えて、かなり酔っている。

この女をヤツと客席に乗せて、ワシントンハイツの方向へ走った。何しろ大雪であり往來にはほとんど人っ子一人通っていない。裏通りの極めて淋しい通りに来るとその女は大きな声で早口にペラペラしゃべっている。何のことか少しも分らないのでそのまま走りつづけていると、ますます早口でワメク。その中にストッパという言葉だけがわかったから車を止めて客席を振りかえって見ると、その女はスカートを腹のところまでまくり上げて、自分の手で指さしながらワメいている。

——思わずドアをあけてやったら、その女

は辛抱し切れない様に、そのドアから外に向って、ジャージャーと滝の雨を降らせた。運転手君もこれは「小用を足したかったのか」と、ヤツと分って安心したが、何しろその女はグデングデンに酔っていて、——結局あと始末をさせられる話。

いかにもありそうな話だが、この場合、相手が日本女性でなく、『体の大きな外人女』というのが、一だんと懂れをそそる。

もしも、かづひこが、その運転手だったら空しく『滝の雨』を外に降らせたりはしなかったであろう。いかにも惜しいものである。

(86) おみ足に接吻を

週刊明星二月八日号四十七頁、大映の勝新太郎と、東宝の白川由美との対談の一節。

勝 白川さんの足は日本一キレイなんですってね。

白川 あら、いやだわ。でも、あなたのおみ足に接吻したい。なんていうファンレターがあつたわ。勝さんのファンでは……とある。

有名なスターとなれば、おみ足どころか、モットモット凄いのが来るそうだが、この御両人の写真をみながら、こんなキャッチフレーズを見ると、ゾクゾクする。

おみ足に接吻……程度では、吾々としては精々プレッソード程度の感じしかそそらない

が、ここから、夢想は大きく大きく育ってゆくのである。

(87) ソフトクリーム

昨年十二月二十八日、親しい仲間四人と、那須岳へスキーに行った。

一行中の紅一点、紀代子さんは、まだ(ヨチヨチ歩き)の初等科生で、戦前からのスキーヤーたるかづひこは、年はとっても、彼女からみれば、頼もしいコーチらしい。

シールをつけて、山スキーと出発。しばらくは、汗をかきかき上りのコースをとったが、キヤッキヤツと騒いでいた彼女が、だんだんと元気を失いはじめた。

どうも様子がおかしい。

コーチたる責任上、かづひこは、意識してパーティの列を離れて遅れ勝ちの彼女のそばに寄っていった。

『どうかしたの?』

やさしく声をかければ、

『何でもないのヨ』

彼女は、小声で言う。

ピンと来る答え方。そこで、何気ない風を装い、

『ぼく、ご不浄するんだけど、紀代子さんはいいの?』

と声をかけた。

『エエ……。私も』

案の定だった。それも大の方だという。

大いにコトちらしく振舞い、

『ぼくが見張っていて上げるから、大丈夫』と、いった。

二十分も経つと、晴れ晴れとベルトをしめしめ出て来た彼女に、

『じゃ、ぼくも——。君、先へ行つてよ』と彼女を先に行かせた。こんなとき、いくら場数を踏んでいるつもりでも、胸が高鳴るのを押さえることは出来ない。

正直のところ、紀代子さんとは、特別のつき合いもなく、親しく口をきいたことも、一回か二回。格別かづひこの好みのタイプでもないのだが、若く美しい女性のものとおれば、見捨てるわけにはゆかない。

『ヤッホー』

何事もなかったように、パーティに追いついたかづびこに、彼女は、ニッコリと感謝の意をこめて、ほほえんでいた。

(88) シナチク

一月十八日朝、東京の中野で殺人事件があった。被害者はキヤバレー勤めの若い女性で写真によれば仲々の美人だ。

ところで新聞は捜査本部の発表として、被害者は食後八時間を過ぎて殺され、解剖の結果、胃の中には何物も認めず、腸の中にシナチクの少量が認められた。

とあった。

腸の中の中華料理のシナチクとあれば、この女性が八時間前にラーメンでも食べたのであろう。

ところで、死者であればこそ、遠慮なく、切りきざんで、食物のカスまで調べも出来ようが、万一、これが何かの必要で、生きた人間の行動を探るために、前に食べた食物を調べるとなると、色々と面倒であろう。

しかし、かづひこには自信がある。

いつかのこのノートにも記したが、かづひこは、あきらかに、焼きイモの皮と、リンゴの種を撰り出した経験をもっている。ましてシナチクなど、めんどろな解剖などに及ばず簡単に探り当てて御覧に入れよう。

これも一つの特技といえるのではないかしら。

代理部便り

○分譲中の左記のものは申込者殆どなきため今後の分譲を中止いたします。「マゾヒズム画廊」(略号ろろ) 新版マゾフォト第一組凌辱篇(略号ま1) 第二組屈伏篇(略号ま2) 女体輝美の緊縛(略号こん1) 女体輝美フォト(略号こん2) ○マゾ関係の絵画写真の資料は相当集まりましたが申込者がありませんので今後の分譲は打ち切ります。

創作 手錠と禪

榎村 奏

青木 審・画

—

貴方は、多分「手錠」という映画をご覧になったと思います。

そして、あんなことは、実際にはありそうもないと、お考えになったのではないでしようか。

そうです。確かにあんな特異な事例が、ザラにある筈はありません。

しかし、この私が、あの映画を地でいくような経験をしたと云ったら、果して貴方はお信じになるでしようか。

まるで、恥をさらすようなものですが、今

夜は思いきって、何もかもお話ししてしまいましよう。

私が、郊外に近い巡査派出所に勤務していた時のことです。

受持管内の煙草屋で、売上金を掻っぱらおうとした若い男を、窃盗の現行犯で捕えて本署へ連行する役を、私がやることになりました。

映画などでは、よく、相手錠というのをやりますが、実際にはあんなことはあまりやりません。

そのときも私は、男の両手に手錠をかけ、

真中の鎖のところへ捕縄を通してその端を持ち、並んで歩いていきました。

本署へいくのには、すぐ近くの社線の駅から電車を利用するのですが、それが失敗の原因になるうとは、つゆだに予想しませんでした。

駅へ着くと、男は便意を訴えました。

私は、「厄介な奴だ」とは思いましたが、生理的欲求では駄目だとも云えません。

仕方なく裏手にある便所へ連れていきましたが、思えばそれが、最大の失敗原因だったのです。

あの映画を観た後だったら、私も用心した

かもしれませんが——イヤ、警察官の第六感というやつも、働くときと、そうでないときとありましてネ。つまり、コンディションですナ。こんなことを云うと弁解がましく聞えますが、それは、確かに私にも油断はあったのです。たかが小泥棒——そう思っていたのがいけなかった。しかし、それも、みんな後で気づいたことです。

「早くしろよ」

私は、そう云って、戸の外側にピタリと身をつけて男の気配を注意しながら立っていました。

男が中から声をかけてもうよいと知らせましたので、私は戸を開けてやりましたが、そのときの私は、男の方にのみ氣をとられていましたから、別の方向から狙うとすれば、隙だらけだったに相違ありません。私は、いきなり、みずおちのところを一撃されて、危うく倒れかけました。そして、不甲斐なくも氣のついたときは、乗用車の中へ押し込まれていたのです。

制帽はとられ、制服の上から、外見からは判らぬように、レインコートを着せられていました。手銃の男は左側に、他の男が右側にびったり寄りそって、右側の男は、拳銃の先を私の牀に押し当てています。運転手も、助手台の男も一味の者であることは明白です。全く、アッというまの出来事でした。その

駅は、無人駅ではありませんが、地理的に利用者が少く、又、時間的にも一種の盲点になっていたのでしょうか。

「しまった！」と思うと、つい心が焦ります。私は、「落着け！」と、自分に云いきかせました。

只、単なる窃盗犯にすぎないと思っていた男が、こうなってくると、もっと重大な事件に関連をもっていることは推測するまでもありません。

私は、緊張の余り身顫いが止まりません。不安よりも、何か氣負った氣持で一杯でした。

自動車は北へ向かって疾り、どうやら郡部へ出るらしい模様です。

通行人も、すれ違う車も、こちらの薄暗い車内に氣を止める者としてありません。

声をたてようにも、脇腹に拳銃を疑せられていてはそれも駄目です。

前方に、巡査駐在所の赤灯が見えたときには、思わず唾を呑み込みましたが、自動車は悠々とその前を通り過ぎ、チラリと見た所内には、警邏にでも出ているのか、明々と電灯が点いているだけで、人の影さえありませんでした。

時間的に、本署ではまだ異状を感じてはいないのです。

私は、手銃の鍵を奴等に渡してはならないと思ひ、色々考えた末、妙案が浮かぶと、

「動くな！」
と、拳銃の男が押し殺した声で威嚇します。

「漢をかむんだ。感冒氣なんぞでね——」

そう云いながら、私は手早く鍵を取り出すと、チリ紙と一緒にして、男に判らぬように鼻へ持っていくきました。そして漢をかむと、紙の中へ鍵を丸め込み、開いている窓からボンと外へほうり投げました。

幸い、誰も気づいた様子はありません。

私はホッとすると共に、外の風景から現在地を確かめると、何喰わぬ顔で又、じっとしていました。

しばらくして自動車は、畠の真中で停車しました。そこには農家が在るらしいのですが、どこからも灯は洩れていず、しかし空家が留守かは判りません。

私は、前後左右から男共に監視されつつ、外へ曳き出されました。

その辺は農家が点々と散在していて、隣家といってもかなり遠く、あちこちに隣っている灯も、かえって心細さを咬るようです。

男共は、家の横に入って、納屋らしい建物の戸を開けると、ライターの火をたよりに、狭い階段を上っていきます。

そこで、どんなことが行われるかは、予想もつきませんが、私も腕には覚えのあるほう

ですから、対手が四人ぐらいなら、いざというときでも、何とか活路は開けるつもりで、むしろ平然としてギチギチ軋む板を踏んどいていったものです。



二

納屋の二階には、電灯の設備はなく、先に上った一人が蠟燭に火を点けました。立ったまま四辺を見回すと、暗い隅のほう

には、箱や何かのガラクタが雑然と置いてあり、床の空いたところには莫塵が三、四枚敷いてあります。中二階というのでしょうか、天井は低く、梁がむきだしになっています。

「おい。鍵を出せ！」

拳銃を持った男が、ピタリと銃口を私の胸につけて、ドスの利いた声を出しました。

「愈々おいでなすったナ」そう思いながら、私はワザと、とほけて、

「鍵？ 鍵って何だ——？」

と云いました。

「とほけンな！ 鍵ってったら、手錠の鍵にきまつてら」

男は、焦立って怒鳴ります。

「ああ、そうか。だが、おあいにくさま。鍵は無いね」

「何イ？」

「聞えないのか？ 鍵は無いって云ってるンだよ」

「この野郎！ ふざけやがって——おい、ポリ公！ 手前、このハジキが目に入らねえのかよ！」

「見えてはいるさ。しかし、いくらおどかしたって無いものは無い」

「ええい、面倒臭え。オイ、みんな、此奴の身体検査をしろ！」

男共は、寄ってたかって私の装具を脱し、ポケットというポケットへ手をつ突っ込み探し

ます。

「アニキ。無いようですぜ」。

頸に赤いネッカチーフを巻いている助手台にいた男が、間拔けた声で云うと、

「おい、靴を脱いでみる」

と拳銃の男が、私を小突きます。

私は薄笑いしながら、どうぞと云わんばかりに、スポツ、スポツと靴を脱ぎました。

自動車^{クルマ}を運転していた革ジャンバーの男がすぐに中を調べますが、敷皮をとって見たところで、出てくる筈ありません。

「畜生——かまうことアねえ。此奴を裸にしてみろ。どっかに持ってやがんに違えねえんだ」

それも覚悟の上です。私は大人しく、制服もズボンも脱がされ、次いで、ワイシャツにアンダーシャツ、ズボン下も靴下も、剥がれるに委せていました。

「オヤア、この野郎。オツなものをやってるじゃないか」

一人が、頓狂な声をあげました。

貴方はご存知だったかもしれませんが、私は、制服のときに限って、晒の六尺禪を締め、習慣があるのです。これを締めると心身共に引き締って、職務に対する心構えも自然とできてくるので、もう永い間、欠かしたことがありません。

しかし、禪一つにされてみて、そのとき

かりは、（まずい——）と思いました。パン

ツなら常識的に云って、物を隠す余地はありません。ところが、六尺禪ではこの場合、疑いを持たれても仕方がないのです。

「オイ、禪が怪しいぞ。そいつも調べてみる」

果して、拳銃の男がそう命じました。

「待て。こうなったら仕方がない。禪も検めるがいいが、脱るのは、自分で脱る」

そう云うと、私は手早く禪を解き、彼等の前に、ボンとほうりました。

「さア、それで気がすんだらう。禪を、こっちへ返してくれ」

私が、落着きはらって禪を締め終るのを眺めていた拳銃の男は、その顔に、ようやく怒気を表してきて、

「やいッ、ポリ！貴様、いってえ、鍵をどこへ隠しやがった？」

「だから、最初から云ってるだらう。鍵は持っていないって——」

「黙れ！ そんな筈はねえ。どっかへ隠したに違えねえんだ。おい、云え！云わねえと、痛い目を見るぞ」

男は、威丈高になって吠えます。

私は、奴等には必ず何かあるとガンをつけていましたから、軽率な行動は避けて、なるべく時間を稼ぐ作戦をとることにしました。

既に、一時間以上を経過していますから、警察でも捜査を開始したに相違ありません。

「ようし。云わねえつもりだな。おう、手前達。此奴を少うし痛めてやんナ」

シャツを着るひまありません。禪一本のまま、忽ち私は突き倒され、三人から殴る蹴るの暴行を受けました。

拳銃の男は、用心深く、絶えず銃口を私に向けています。

いくら無抵抗主義をきめこんでも、ただ殴られるままになっていては、とてもじゃありません。攻勢にこそでませんが、私も適当に抵抗はしました。

拳銃も警棒も取りあげられていますから、私は、勿論、素手です。その上、裸では、いかにも不利で、私は部屋の中を、あちこちと逃げてみますが、こんなことが長く続いたら、疲労するばかりです。と云って、他に方法もありませんから、時間の経つのを待ちながら、殴打に身を晒しているより仕方ありません。

一番いいのは、その場で四人を逮捕してしまふことですが、残念ながら、それが不可能であることは、貴方にもお判りだと思えます。

「やめろ。こんな強情な野郎は、じっくりやってやんなけりや、こたえねえんだ。オイ、誰か、その辺に縄かなんかあるだらう。此奴の腕を縛ってしまえ」

拳銃の男の指図で、革ジャンバーが麻縄をズルズルとひっぱり出して、私の腕を振じ上げます。

縛られるのは、確かにいい気持ちやアありません。まして、その後で、どんな責苦が加えられるかと思うと、私も、さすがに不安な気持ちでした。

「そうだ。いいことがある。オイ、もう一本ロープをとってみろ」

ネッカチーフから縄をうけとった革ジャンパーの男は、ニヤリとして禪の結び目に固く括りつけました。

私は、又しても禪を締めていたことを後悔しなければならぬはめになったのです。

男が、禪に繋いだ縄の端を梁にかけ、もう一人が加勢して、力いっぱい引いたからたまりません。グイグイと禪が喰い込み、遂に、爪先が床とすれすれになった刹那、余りの圧迫感と激痛に「ああっ！」と、私は我にもない声をあげてしまいました。

禪に繋いだ縄だけで吊られているのですから、爪先が床から離れたら、重心を失った躰は大変なことになります。それで、なおさら爪先を伸そうとするので、禪は増々締め、苦痛は加わるばかりでした。

どんなに我慢しようとしても、「あッ、あッ」という呻きが咽喉を突き上げてきます。いくら唇を噛みしめていても、金魚のようにパクパクと喘いでしまうのです。それでも警察官であるという誇りが、見苦しい悲鳴だけはあげさせませんでした。

少し経つと、縄が緩むのか、禪が締って余裕ができるのか、いくらか楽に足がつくようになります。

それを見て、男が又縄を引く。私は爪先立ちして、躰を揺らせながら「あッ、あッ」と苦痛に呻吟します。

そんなことが、五、六回も繰り返えされると、私の全身には脂汗が、ベトトリと浮いてきました。

「どうだ。苦しいか？鍵の在処あちかを云ったら赦してやる。さアどこだ？どこへ隠した？え、？おい！」

そう詰め寄る拳銃の男へ、「無駄だよ！どうされても、無いものは無いんだ。」

と、私は、吐き捨てるように云いました。「うヌ。しぶとい奴め！ようし、もっと痛い目をみせてやるからそう思え」

男は、部屋の隅から、手頃な竹の棒を見つけてくると、一本を革ジャンパーに渡し、自分が先ず最初の一撃を試みました。

「う！」と躰に力を入れ、筋肉を張るようにして、痛みに抗しようしますが、打撃の疼痛は、そのまま持続して、腎全体が痺れるように疼きます。

二人の男は、呼吸を測って、交互に力一杯棒を打ち下します。その度に、不安定な躰は前後左右に揺れ、それだけでも充分、私を苦しめます。

しめます。

棒は容赦なく、腎に背に腹に、ところ嫌わず飛んできます。もう、どんなに泳えようとしても駄目でした。

そうなると、恥も外聞ありません。人間ばなれのした声をあげて、私は、一本の縄を中心、のたうち回りました。

それほどの苦悶の中でも、私は意識のどこかで「痛い」とか「助けてくれ」とかは、絶対に云うまいと考えていたようです。こういう強情さは、いわば警察官根性みたいなもので、我々の通有性かもしれません。

しかし、いくら強情我慢の警察官でも、やはり、生身の人間に違いありませんから、責苦に耐えるにも限度があります。

失神するかもしれない、という予感が、フト心をよぎると、私は思わず、「もう、よせ！鍵の在処は云う」

と口走ってしまいました。勿論、本当のことを云うつもりはありません。それでも云わなければ、奴等は私が失神するまで打撃をやめないと思ったからです。

「フン。やっと云う気になったか。オイ。縄をはずしてやれ。手のほうはそのままにしておくんぞ。そうだ。ついでに足も括っておけ。念の為に」

禪を吊った縄を解かれると、私は今にもその場に坐ってしまいそうでしたが、弱みをみ

せまいとして、辛くも立って
いました。

「さア、どこだ？ 云って
みろ」

「よし。云ってやる。だが驚
くな。鍵は腹の中だ。アッハ
ハハ」

「何？ 腹の中だ？——」

「そうだ。腹の中じゃア、ど
うにもなるまい」

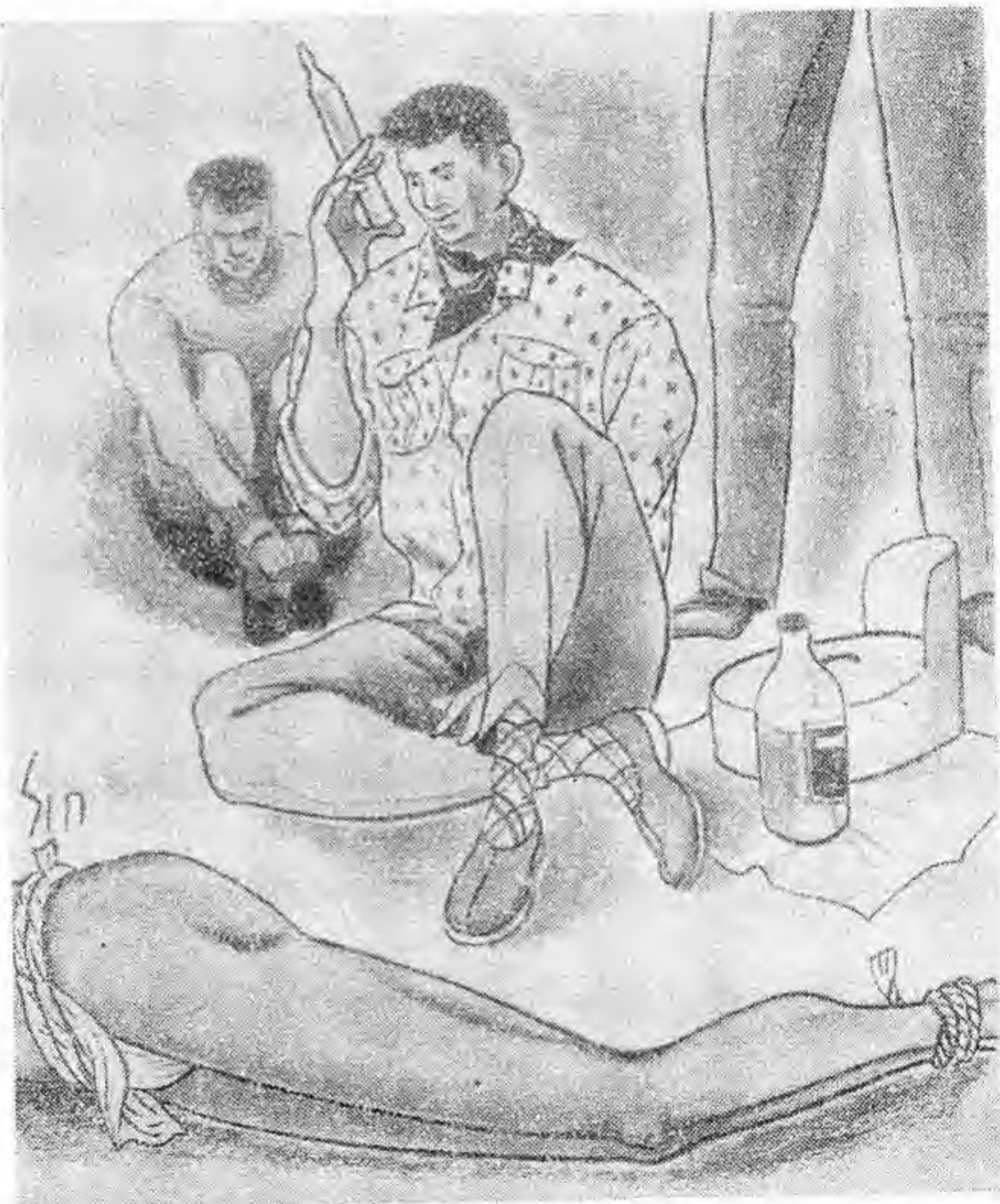
「畜生！ 呑みやがったのか
——？」

「サアね、呑んだにしろ、何
にしろ、とにかく鍵は腹の中
だ。手数をかけて気の毒だっ
たが、仕方がないナ」

「そうか、畜生！ お前さんの
早業には恐れ入ったよ、だが、
こっちも、こうなったからに
やア、後へはひけねえ。何と
してでも鍵は頂戴するから、
そう思えよ」

「ホウ。腹でも割るかー？」

「お巡りを殺すなア面白くねえが、こうして
四人ながら面を見られたんじやア、生かして
もおけねえ。手っ取り早く腹を割いてもいい
が、安心しな。まだ殺さねえよ。他にいい方
法があるんだ」



「……？」

「判らねえか。浣腸だよ」

「浣腸？」

今度は、私の驚く番でした。

しかし、ここに浣腸器の用意があらうとも

た。

三

手錠の男は、さすがに無口になって、隅の
ほうに蹲っています。

思われません。私は多
寡をくくって、ワザと
「ううん。しまった！
そういう方法があった
のか——」

と、狼狽したふりを
しました。

男は、ニヤリとする
と、革ジャンパーを呼
び、何事か耳うちしま
した。革ジャンパーは
はじめは躊躇っている
ふうでしたが、まもな
く階下へ下りていきま
した。

それを見て、私は本
当の狼狽で、いささか
心が動揺しましたが、
いまさらジタバタして
もしようがないと観念
して、ふてくされたよ
うに尻を下ろすと、壁
に背をもたせかけまし

兄貴株らしい拳銃を持った男は、煙草を出して火を点けましたが、落着かない様子で時々、階段のところまでいっては、下を覗いています。

革ジャンバーの帰りが遅いので、それなくてさえ、彼は不気嫌になっているようでした。

私は私で、革ジャンバーが、うまく非常線にかかったのではないかと、それに一縷の望をかけていました。

しかし、それは、すぐに裏切られてしまいました。

息をはずませて戻って来た革ジャンバーの男は、抱えていた包を置くと、

「ああ、驚いた！非常線にひっかかってヨ。

すんでのことでご用になるところサ。ところが、アッハハハ、包の中を見せたら、『失礼しました。どうぞ——』ってなもンさ。お巡りなんて、甘えもンだナ」

そう、得意になって喋りたてます。

自動車のナンバー、いや自動車で逃げたことさえ判っていないのですから、無理もありませんが、それにしても、乗用車で浣腸器や便器を買いに出ること自体が、多少は不審な筈なのに、それを見逃してしまう警官も、何と迂闊なことでしょうか。そう思うと、私は口惜しくて、齒軋りが出そうでした。

「そんなことはどうでもいい。早くするんだ」

そう云われて「へエ」と嬉しそうな声を出すと、ネッカチーフは、ポンド壘から原液のままのグリセリンを浣腸器に吸い上げて、私に近寄ります。

「利目のあるように、三本ぐらい入れてやれ。後を、しっかり押えているんだぞ」

拳銃の男の声が聞えます。

私は、眼を閉じて直腸の異物感に耐えていました。不快というよりも苦痛でした。そして、チリ紙で圧迫されるに及んで、苦痛は更に倍加しました。

私は、あんなに猛烈な欲求というものをしりません。腸壁の激しい蠕動は、搾るような疼痛を伴って、全身を悪寒が走り、冷汗がタラタラと流れます。

「オイ。もう駄目だ！我慢ならん！早く、それを早く！」

そう、叫んでしまいました。

ぐったりとした私の背後で、男共の真剣に捜しているらしい気配がします。いくら捜しても鍵の出るわけはありません。私はひそかに嘲笑を洩らしました。

「出ないか。ヨシ、もう一遍やってみろ」

拳銃の男が促すと、ネッカチーフは、すぐさま浣腸器を取りあげます。

「オイ。まだやるのか——」

思わず私が、恨めしそうな声を出すと、ネッカチーフは、面白くてたまらぬように

「まだまだ、出るまでは、何回でもやってやるぞ」

と云って、私のそばへしやがみ込みます。

この上やられたのではたまらないと思うものの、いまさら嘘だったとも云えないし、とにかく時間を少しでも延すことだと諦めて、怯えるより他に仕様がなかったのです。

拳銃を持った男は私を拉致したばかりに、予想外の暇をとり、かえって身辺が危なくなってきたことに、明らかに後悔と焦躁を感じだしていることが察しられます。

そして、彼の不安は数分後に的中してしまったのです。

それは全く偶然のことで、というのは、その近くの国道で交通事故があり、現場から帰りのパトカーが近道をしようとして通りかかったとき、駐車している乗用車に場所柄、不審を抱いたというわけです。

そこで私は無事、救出され、四人の男共は、全員逮捕されました。

この後も、映画にそっくりで恐縮ですが、奴等は果して、かなり大がかりな麻薬密売の一味でした。首領と目される人物も、数日後には逮捕され、煙草屋の窃盗事件は意外な方向に進展して、幕となりました。

サンザンな目に遭った私は、事件が落着いても何となく憂鬱でした。

「イヤ、君の行動が慎重だったからこそ、こ

んな大物をあげることもできたんだ。全く金一封ものだよ」

んでした。

え？金一封ですか？ハハハ、そんなもの出るもんですか。でも今夜は、久しぶりに気が

たからでしょうが……。サア、明日は又、当直です。大分、時間をすごしました。

いてくれましたが、私は少しも気が晴れませ

せいせいしました。貴方に、こんなお話をし

では、おやすみなさい——。

〔新版〕女体緊縛フォトオンパレード

R組 百花撰 大手札判 (印画紙9×13 輝)

各組一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

R11	股間しぼり正面 (伊吹真佐子)
R12	女学生制服しぼり (須川令子)
R13	尻立後手しぼり (萩千恵子)
R14	開股しぼり (川辺紗登子)
R15	猿ぐつわの魅力 (伊吹真佐子)
R16	トイレでの縛り (須川令子)
R17	立木野外しぼり (村田那美子)
R18	緊縛横臥 (厚狭春江)
R19	足湯梯子ゼメ (伊吹真佐子)
R20	いたぶり (春日ルミと伊吹)
R21	帆立しぼり (萩千恵子)
R22	強烈な梯子ゼメ (伊吹真佐子)
R23	梯子責め (佐賀美智子)
R24	逆さ本吊りゼメ (伊吹真佐子)
R25	後手吊りゼメ (同右)
R26	股間しぼり後手 (中塚文子)
R27	逆エビ責め (伊吹真佐子)
R28	高小手しぼり (加賀利江子)
R29	変型足手しぼり (萩千恵子)
R30	松樹後手しぼり (村田那美子)
R31	くさりゼメ (伊吹真佐子)
R32	薄羅の後手緊縛 (加賀利江子)

R33	股間タテしぼり (中富綾子)
R34	首縄股間しぼり (坂口利子)
R35	手足逆吊り (伊吹真佐子)
R36	和服の後手しぼり (藤田節子)
R37	仰向全裸悦虐責 (川端多奈子)
R38	後手首縄シメ (加賀利江子)
R39	乳房下しぼり (村田那美子)
R40	肉体美への折檻 (伊吹真佐子)
R41	お灸ゼメ (春日、伊吹二嬢)
R42	後手猿ぐつわ (萩千恵子)
R43	松樹縛り晒責 (村田那美子)
R44	コルセット縛り (中塚文子)
R45	股間しぼり (同右)
R46	手と足と緊縛 (萩千恵子)
R47	後手しぼり (加賀利江子)
R48	御開帳 (萩千恵子)
R49	くさりゼメ (川端多奈子)
R50	折檻の魅力 (須川令子)
R51	全裸の股間しぼり (愛川悦子)
R52	逆立の折檻 (大塚啓子)
R53	開股椅子ゼメ正面 (同右)
R54	振袖の緊縛 (花坂道子)
R55	腰元の吊り責 (村井知可子)
R56	ヌードしぼり (愛川悦子)
R57	本縄しぼり (田中芳代)
R58	股間しぼり (同右)
R59	露花狼藉の緊縛 (同右)
R60	樹間のハリツケ (川辺紗登子)
R61	帆立舟のゼメ (益田房子)

R72	逆エビ責め (愛川悦子)
R73	変形全裸股間縛 (同右)
R74	ヌード縛り (花坂道子)
R75	全裸横臥緊縛 (同右)
R76	ビクニツク (村田那美子)
R77	ハイヒール (萩千恵子)
R78	湖畔の宿にて (須川令子)
R79	尻立逆しぼり (同右)
R80	下着の色模様 (同右)
R81	目隠し開股縛り (大塚啓子)
R82	後手高小手 (田中芳代)
R83	乳房しぼり (愛川悦子)
R84	開股ベツド縛り (花坂道子)
R85	全裸床柱縛り (愛川悦子)
R86	亀ノ甲縛り (萩千恵子)
R87	ヌード股間縛り (愛川悦子)
R88	全裸乱れ髪 (大塚啓子)
R89	ガンジガラメ (川辺紗登子)
R90	腎臓責め (愛川悦子)
R91	後手股間しぼり (中塚文子)
R92	腹部丸出し猿轡 (伊吹真佐子)
R93	破れたシユミース (坂口利子)
R94	女学生のしぼり (須川令子)
R95	仰向開股しぼり (萩千恵子)
R96	乳房くさりゼメ (川辺紗登子)
R97	野外バンド責め (村田那美子)
R98	トイレ正面排泄縛 (中塚文子)
R99	開股正面いじめ (伊吹真佐子)
R100	乳房搾りゼメ (佐賀美智子)

◎私のイメージ◎

近藤

一



沙樹 (サキ) と呼ばれる女

「オイ、沙樹ッ。此処へ来い！」
「ハイッ。」

裕（ユタカ）の声に、彼女は何を指しても
応える慣いが身についている。

「沙樹に何をさせて下さいますの？」

「俺はお前を思いっきり苛めたくなった。一
時間以内に仕度を済ませろ。いいナ？」

「ハイッ。——御主人様、沙樹は只今より直
ちに仕度にかかります。どうぞ思う存分苛め
抜いて下さいませ。お願い致します。」

沙樹代の平伏に、裕は鷹揚に頷くだけであ
った。

沙樹代は立上って仕度にかかる。現在の仕
事を手早く片づける。八帖の間の畳を上げ体
操用のマットを敷き詰める。畳の部分は六帖
なので、マットを二枚づつ敷き重ね、二帖分
の板の間はそのまま残す。細引、麻縄、綜縄
縄、綿ロープ、太綱、鎖、等々を、ずらりと
並んだハンガーに掛ける。ゴム、革、金属、
竹等の鞭、手錠、足枷等の拘束具、責め具、
狼轡等々を残らず用意する。自分自身を呻か
せ苦悶させる仕事に、沙樹代はいそいそと立
働らき、裕は冷やかに見つめている。析檻の
場を拵えると、沙樹代は身仕度を整える。

「沙樹は御主人様の奴隷でございます。奴隷
の欲びは御主人様にお仕えする外にございま
せん。御主人様は沙樹をどのようにお取扱
いになりましようとも、それは御主人様の御自

由でございます。御主人様のなさいますことなら、沙樹は心から飲んでお云付に従いとうございます。」

沙樹代は、隸従の言葉を述べると両手、両足を揃え、爪が伸びていないことを検めて貰う。髪を解き垂らし、ヘアピンまで一切を取り去る。ピッチリとゴムの緊い。稍小さ目のピンクのズロース一枚に剥かれる。

サポーターを締め、褐色のパンツを穿いた裕がいきなり沙樹代に躍りかかる。命じられた抵抗をすればしたで、抵抗を許されなければそれなりに、沙樹代の肌は暴虐の嵐に曝されるのである。残酷な美景の展開であった。

数年前に二十一才の女があった。彼女はマゾの孤独に苦しんでいた。彼女は未亡人であった。生前、彼女の夫は夫婦の愛情の表現として麻縄で彼女を縛り、必らず口に布片を詰めて猿ぐつわをし、竹や革やゴムの鞭で乱打していたと云う。鴨居から吊り下げられたり、足蹴にされたり、日が流れ、回を重ねるに従い、最初の苦痛は次第に快楽にかわり、今ではそれなくしては、どうにもならなくなっていると云うのだった。

そのような性向故に、彼女は正常な結婚は諦めている。夫によって、どのような苦痛も体験済み、彼女としては、その際、是非とも猿轡だけは嵌めて欲しい。猿轡を息もできぬ

ように、呻き声すら洩らせぬように。鞭打は好ましく、又緊縛のどのようなポーズでも注文に応じ得ると明言した。

惨憺な拷問を欲し、苦悶を恋う若い女体は、恐らく完全なマゾヒズムに満ち満ちていたであろう。孤独に耐え兼ねて彼女は焦慮の叫びを筆を借りて訴えたものであった。

× × ×

「因縁と申しますか、云うも恥しい変った女でございます。」

私の亡夫がサディストでございました。しかしマゾヒズムの素質は私の幼女の時代からあったものでございまして、厳しい両親からは度々折檻を受けましたが、その殆どが後手に縛られることとございました。私はこの折檻に次第に、ひそかな楽しみを感じるようになったのです。

ですから私は縛られることは大好きでございます。細引や荒縄や鎖やが肉に喰い込むときの何とも云えない快感は何と申したらよいのでございましょう。亡夫は、せいぜい私を縛ることだけに満足していた程度でしたが、却って私の方からもっとと請求した位です。

私はどのような責めにも堪えます。いいえ

そのように扱われたのです。呻めき声も出せぬように猿轡をはませられ、身動きも出来ぬように高手小手に細引で縛り上げられ鞭打たれる。吊される。こうやってお手紙を書いておりましたも身悶えるようでございます。只、私は一つお願いしたいことがございます。それは是非とも猿轡を嵌めて頂きたいということ、それも形式的に口や鼻を手拭でくる等ということでは物足りないのです。徹底的に口の中へ布片をつめて、固く固く締めつけてほしいのです。私は呼吸が楽に出来、声が自由に出るようでは駄目なのでございます。

縛られる縄は荒縄であろうと、犬の鎖であろうと、コードや細引、あらゆるもので縛られたことがございますので、好きなものをお使いになって結構です。

その時、衣類を着せようと、剥ぎとろうと、それは貴方様の御自由です。猿ぐつわ、後手にされて其の上、鞭を振下して下さるのは、貴方様に労働をおかけするようで、もったいないようでございますが、私の歓喜はこれにすぎるものがございます。

とに角、私は奉仕しつつ、自ら楽しみたいのです。貴方様は私をどのようにお取扱になろうと、私は貴方様の奴隷です。ドレイの欲びは、ただ奉仕するためにあるのです。

鞭打ちも革、竹、ベルト、竹刀どれも経験

がごさいます。

私はマゾヒストではありますが、今迄に亡夫以外の方に責めていただく機会を持ったことはありません。勿論、子供ありません。実は再婚しても子供を持ちたいと思っております。

私は一度も東京より以西へ参ったことはありません。お返事お待ちします。

× × × × ×

得難い女であった、屈服を、隷従を望んでいる。緊縛に渴えている。呼吸も呻き声も許されぬ猿轡、吊られ蹴られる拷苦を歓喜の裡に恋慕う、完全なマゾヒズムの特質を備えた、素晴らしい女であった。

裕は、この女が欲しかった。彼とても自分のサディズムを顧慮すれば、生涯の伴侶に一定の範囲を限定づけることは当然である。しかし、彼はこの場合唯、無性にこの女を手に入れた

いと思った。

彼は努力した。

許される限りの総べてを注ぎ込んで、女の

手紙に応え得る様に環境を整理した。そして住所の書いてないその手紙の主を捜し廻った。

沙樹は心から歎んで
お云付に従いとう

ごさいます



小野幸子（オノサチコ）。会社事務員。未婚の女。マゾヒストの女ではない。けれども裕には従順だった。かなりの緊縛にさえ、強情なほど我慢強かった。小柄だが堅肥りで、ピチピチと健康的だった。独特の潔癖性を示した。猿轡を嵌める時、口中に詰め込む布片の多過ぎる時や、布が汚れを浸み込ませている時には、つき上げる吐気に頻りに胸を顫わせた。鞭打ちには、小さく鋭い動物的な叫びを上げて応える女であった。

高野佐久子（コウノサクコ）。女優。劇団と云っても座長以下二十人足らず、行く先々

の興行で必要な人数を臨時に雇い入れるという、所謂ドサ廻りの一座だった。俳優が裏方までを兼ねようというその劇団で、彼女は娘役からヴァンプ役まで引受ける花形だった。

一座に加入したのが十五の年、現在は座長の妾の様な存在。座長の女房は、亭主と佐久子の仲を認め、唯その腹癒せは舞台の上で叩きつける。佐久子の役柄は必らず責められる。

善玉になれば、これでもか／＼というようにアクドイ苛め方をされる。悪玉になれば、許しを乞うて泣き喚きながら、残酷な応報を味わされて、観客の快哉をかう。それでいて、そんな役柄が好きで堪らず、一座から離れられない佐久子なのだ。舞台の上には芝居は無く、リアルな苛責で人気が出、貴重な存在の佐久子だった。余り白粉焼けもせぬ顔も愛らしい瓜実顔で、ほっそりと艶のある餅肌だった。着痩せするのか、裸にすると予想外に肉付きが良く、染みついて取れぬ傷や痣の跡も模様のようなだった。

尋ねる相手と違うことを承知で、裕は佐久子と付合ってみた、流石に鍛え抜かれた肢体は縛り良く柔軟だった。年令の割に似合う和服の着こなしや立居振舞、緊縛に輝くような色気、呻きも洩らせぬ猿轡にうっとりとする眼許、烈しい筈に手応える小気味よい肌の弾み、背や腰の丸味に波うつくねり、胸の喘ぎや、裾の乱れ。裕は、激しく打ち続けた。そ

れだけだった。哀れな女だった。志操が低かった。誠実ではあっても、それは自分なりのものであり、直善美への志向に乏しく、裕の心に安らぎを覚えさせる何ものかを缺いていた。佐久子は結局、余りにも動物的な女に過ぎなかった。

そして三人目が大原沙樹代である。某大学政治学科卒業の女。結婚経験ある女。相手は同じ大学の法律学科卒業の男で、国家試験を取り、出世のために上司の売れ残りの娘を飲んで戴いたのだ、沙樹代は涙も出なかった。不幸な結婚だった。幾らか裏れを見せた彼女は美しい絵画や音楽に心を慰め、やがて自虐に走った。妄想は果しなかった。

傷心の身の被虐の幻想が沈潜したあとで、沙樹代は、全く独自の意思に基いて、裕の求に応じた。沙樹代は飲んで奴隷になった。自分を呼ぶのに「アタシ」「アタクシ」「私」「沙樹代」は一切禁じられた。「沙樹」とのみ呼ばれ、自ら「沙樹」と呼ぶ。生来の伶俐と、人を疑うことを知らぬ清純な魂は、緊縛を、鞭撻を、猿轡を、一つ一つ覚え、身につけて行った。

女奴隷の沙樹は裕を畏怖し、敬愛していた。裕の命令には絶対服従だった。或る場合には、自らを裕の妻と名乗り、裕の妻として、ふさわしい気品ある振舞を必要とした。

沙樹代は洋裁、料理と書道を能くした。琴

とピアノと写真に興味をもち、スポーツはピンポン、テニス、バトミントンが特に上手だった。裕の云付で小型自動車の運転免許証をも取った。健康を保ち、体のコンディションを調え、肢体の均齊を維持するために、一日二回の美容体操を日課とした。文学に接し、音楽を聴き、美術に触れることも命じられた。

柔道二段、剣道三段の裕だった。

沙樹代もあのマゾヒスティンと異なることは分っている。しかし、もはや離れられぬことを識っていた。沙樹代の中にあのマゾヒスティンを創り出し、より佳いものを見出だしていると感じている裕には、他のすべてが不要だった。

髪からも肌からも快い香りが撒き散らされていた。フツフツと湧き出す小さな汗の粒がキラキラと美しい輝きを発し、どうかした拍子に「まあ、いやな方！」と可愛いく拗ねて、羞らいに怨みを籠らせる。正坐は、できるだけ避けさせる生活だった。礼儀や気品保持の必要か微罰以外には正坐はさせなかった。正坐の後には必ずマッサージを励行させた。正坐に馴れない沙樹代は、すぐに脚が痺れる。その苦痛は常に新鮮で、裕にからかわれ小突かれると、「いやアン」と大きく甘えて、膝を崩し、横倒しになってしまう。小食でも、ピチピチと健康な沙樹代だった、口が綺麗な

だけに、食事責めにはもってこいの体だった。茶碗に二杯位の御飯を食べさせ一時間ほど食休みをする。後手、高手小手に首繩をかけて引き絞る。布を口に詰めマフラーで覆う固い猿轡を嚙ませる。脚をきっちり、膝を短い間隔に縛り合わせる。ギリギリと二巻き、胴に腰紐を喰い込ませる。括れて分れた腹部の盛り上りを責め立てる。グイグイ圧迫すれば奴隷は喘ぎ、顫える。押し上げられて膨れた胃からは絶えず苦しみがせり上げる。ググウ、グググウ、と喉の奥で鳴り続け、裕の手の鞭先が胃を抑えると、グブツ、グブツと饒えた匂いが咽へ突き出て来る。泳えようとしても涙線へ作用を止めぬ刺戟だった。余りにも動物的で汚らしく、可愛らしい女だった。

裕を「御主人様」と呼び、誓いの言葉「を心から唱える女である。ザラザラしたズック地に圧しつけられて、笞のしびきを逃れようと這い廻り、蹂躪に悶え、苛責の追及にのたうつ女体なのだ。」

ピッタリと喰い込むようなズロース一枚に剥かれ、口中の布を減らされただけで、沙樹代の肢体は後手、高手小手、首繩から、胴、太腿、膝、足首まで括り合わされている女奴隷だった。命じられるままに、呻いて、首をふり立てている。

あうあ、おうあお、おうううああう。

(沙樹は御主人様の奴隷でございます。どうぞ御存分に苛め抜いて下さいませ)

おうう、おうう……

前髪が乱れ、汗で額に張りついた顔をマフラーで半分覆われると、瞳はキラキラと輝き、表情を増した。喉の筋が、くつきりと張り切って、前後に、左右に揺れる形よい頭が可愛かった。

裕は、苦しみ盡く上品で可愛い奴隷に満悦していた。被虐の女体の主も、全身をしめつ

ける、きびしい縄目を味わいながら、満ち足りた想いに哭き、誓い続けていた。

◆——◆——◆——◆

現在では入手難と思われる左記の二号を参考に致しました。

昭和27年11月号 52～53ページ

昭和27年12月号 31ページ

ヒロインとして偲ばせて頂いた女性の御多幸を、衷心祈念して筆を擱きます。

◆——◆——◆——◆

謹 告

臨時増刊号「責小説特集号」売切れ

御好評を頂いておりました「責小説特集号」は今回在庫品全部売切れとなりました。御愛読、御支援厚くお礼申し上げます。

「サディズム特集号」

残部はありません。

さきにお知らせ致しました通り、「サディズム特集号」は絶讃の裡に、発売後数月を経ずして売切れとなりましたが、尚、今以って御注文、お問合せを頂きます。

す。毎回お知らせ致しておりますように一旦売切れますと、補充は絶対に出来ませんので、悪しからず御諒承下さいませ。様お願い申し上げます。

尚、只今、「悦虐小説と緊縛写真特集号」「限定版、緊縛フォト・アラベスク」

「青い魔院」「サド特集号第二集」を夫々発売中ですが、残部が非常に僅少なのも御座居ますので、未見の向は、御買洩らしのない様に早い目に御申込み下さいませ様に御願ひ申し上げます。



スナップ・シヨット 其の一

カメラ・ルポ

『日本調あぶな絵』について

牧 高 志

ひとことにあぶな絵といつても、身体を包む衣裳がめまぐるしいほど変遷した今日、グラマ―張りの大根脚拝見も結構だが画商ならぬ筆者が関を盗んでレンズを通してキャッチした、筆者なみの日本調あぶな絵の一端を紹介してみたいと思う。ただ残念なことに、あぶな絵とは何んぞやという字句の解釈については、正当な見解を持ち合わせていないことを前提としての、漫談とお考え下されば幸いである。

先ず、少々くたびれた衣裳のチラツクの我慢するならば、大衆によって支持されるストリップ劇場か、安来節や万才など

を上演する安価な舞台が一番好ましいんだがここまで見せても、ヘッチャラだと云う先入感が主体だから、盗見する方がつい馬鹿らしくなって、逆効果的に動きが取れなくなるものだ。参考スナップシヨット(その一)がそれである。

勿論、開幕と同時に、ういういしい島田留に文字通りだらりの帯でおしとやかに登場、伴奏につれて余情たっぷり長い帯を解き、しごきを取って、それで止めて置けばよい処を、あられもなく真赤な湯文字一枚になって緩慢に踊る。それが、たとい観客席に向って正面であろうと、後向きであろうと、紐を解いて開闔する湯文字の内部はも早や何もない、と云う観客側の危険信号を小癪にも擲んで演ずるスターは、いずくんぞ知らん、ミニマムのパンティに全く護られているんだから、観る方で、ひたすらなる昔娘風俗を想像し愉悅



スナツプ・シヨット 其の二

された馬鹿殿様が、誰それの湯文字を脱れと命ずる。心得えましたが、とばかり十数人の腰元連中が坐中、指名の一人の美しい腰元に向かって突貫！ワァーッとはかりに嬌声を挙げて、くだんの腰元を仰向けに倒し、白足袋、白脛もあらわに湯文字を脱すそうとするが仲々とれない。

面倒とばかり一人が立矢の黒帯を解く、別のものが帯揚げやしごきを……、魚屋上りの腰元は、ひら身のようにムンズと両脚を持って開こうとした。空しく暴れるたび毎に、真紅の裾が乱れ散って、多分登場の全腰元連中が逆立ちしても、拝めぬものは拝めぬだろうと思っても、固唾を呑んで見物客が距離感を超越して一齊に首を伸した処を見ると、浮世絵的日本調はまだイカす要素を多分に持っているものと判断してよからう。不幸にして本スナツプを持ち合わないのが残念である。

これなんかは女装好みのマニアには、うってつけの場面であらうけれど、毛ズネを出さぬあたりがけだし名優かも知れない。曾って筆者は、さる処で御殿女中、つまり腰元の「湯文字合戦」なるアンミュージカルコメディを観たことがあった。一献きこし召

華やかなステージから銀幕に眼を転じてみると、各社（但し日本）競って総天然色、大型となった今日、ものものだけに全国はおろか世界中、同じシーンが繰返えされ、一般

大衆の眼に焼付くのだから、影響の甚大さ？を考慮したものか、可なりの制約があるように見受けられる。もっとも、初めからあぶな絵的な要素を組入れて企画されたものは、秒間であろうとそのカットが瞥見出来ることは云うまでもない。最近の上映では新東宝の「女王蜂の怒り」スナツプシヨット（その二）がそうである。

このシーンはコマ切りの、断続的に挿入されていたが、たった一つ、久保菜穂子さんには御迷惑だが、ふくら脛をクローズアップしたものがあった。余りにも瞬間的であった



スナツプ・シヨット 其の三



スナツプ・シヨット 其の四

さす砂浜に、シヨールと羽織を勇敢に脱って投げ、文金高島田のお宮嬢が長い袂をたばね、心持ちきものの裾をかいつまんで、思い切り足を上げてマント姿の貫一を蹴飛ばすんだが、和服は周知の通り

ため、また再度見る機会を失したため、未だにその貴重なカットは撮影未了のままになっている。兎まれ、普み大抵ならぬ苦勞を重ねて、賭博場の女王の立膝を撮ったものとは思うが……。伊藤晴雨老の「江戸の盛り場」によれば、筆屋の娘がこれで商売繁昌したとあるが大映「弁天小僧」の矢的場の女と同様、結構当時の江戸民衆はこの姿態に自己満足もし、批評し合ったことであろうことが充分、窺えると思う。

さて更らに飛躍して、放影の王者テレビに眼を、否カメラを向けてみると、機未だ熟せ

ずの感が極めて多い。

これは、狭いスタジオ内で仮りにそれらしきシーンを演じたにせよ、また舞台中継によってキャッチされたとしても、その多くがビデオテープによる録像だから、当面の編集者によってどうにでもハサミが入れられると見てよさそう。参考シヨット（その三）は、正月公演の東京コマ劇場「金色夜叉」の「カッ」シーンであるが、御覧の通りである。

貫一に嫌らわれ尻餅をついた当の赤極満枝を、仮りにお宮に見立てて、逆に貫一を草履の先で蹴飛ばすコメディを、昔見たことがあ

った。月光の

さす砂浜に、

シヨールと羽

織を勇敢に脱

って投げ、文

金高島田のお

宮嬢が長い袂

をたばね、心

持ちきものの

裾をかいつま

んで、思い切

り足を上げて

マント姿の貫

一を蹴飛ばす

んだが、和服

は周知の通り

左足を前に出したら赤い腰巻はおろか、脚の上部まであらわとなるものだ。今回は、それを予め心得えたかどうかは判らぬが、右足（乗り物に乗るべくステップに右足を掛けるのが、上品となっている）先で、有島一郎扮する貫一君を蹴飛ばしていた——附録カットとして御覧願いたい。

このお宮さんが貫一を中にはさんで、客席の正面に向って足を挙げたらどうなるかは、改まって紹介申上げるまでもないであろう。

さて……最後にふり反ってカメラ日記の第一頁を開らくと、今年の元旦新春松の内の都大路は、取り分けて初詣の神社仏閣は、空前の雪どけとあって、いわゆる今様あぶな絵が随所に見られたのは嬉しかった。

晴着は長襦袢より、長襦袢は裾除けよりも貴重品であると、と云う感覚は、一切の恥辱をかなぐり棄てて開襟に及び、浅い川ならぬ絵巻はけだし壮観であり、名タイトル『下向きの正月』（毎日グラフ一月十八日号参照）となったのである。

立ち止まってカメラを向ける筆者が悪いのか、レンズの真只中に飛び込んで来た窮鳥の女性群（写真その四）が不運であったかは、スナツプシヨット異外史として永久に不明としておきたいのが、筆者のせめてもの願いである。



切腹研究夜話

(八)

——新春雜感——

中 康 弘 通

新東宝系の新春映画「爆笑王座征服」(京阪神など十二月二十八日封切)を御覧になった方は、案外少いかと思う。是は初春の新東宝スター顔見世映画なのだが、点綴される寸劇風の見世場の中で、江畑純子、藤木ノ実、田原知佐子、瀬戸麗子など十五、六名の青春スターが扮する「白虎隊」の群舞がある。剣道着の刺子に袴という凛々しいで、たちの女優さんが、歌謡に伴れて、大刀を或いは杖に或いは振りかざし、剣舞風の踊りを見せる。

ラスト、「十有九人屠腹して僵る」の吟声とともに、偶刺の型を見せる同僚達を背景に、舞台前面へ進み出て膝を支いた幾人かの女優

さんが、大刀を投げ捨て左手に上衣の胸を押し開き、抜き放った脇差の柄を逆手に取ると見る間もおかず、胸乳から腹へかけて晒を巻き締めた細腰の左脇に左手を添え、切先を押し当てるや、グッと右手に力を込め、凄艶かつ悲愴な姿態を見せる。

たまたま其の数日前、拙稿「昭和の女白虎隊」所収の本誌を受取ったばかりのこととて、私は殊に感銘深く観覧したことであった。まことに「白虎隊」が偶像的存在であった感懷を、幾分なりとも持った青少年少女は、戦前には多かったと思う。私の手もとに寄せられた読者の方々のお手紙にも、その憧憬的な

感激を今も忘れない、という旨の告白が少からず見られる。

そして此の映画を観て私が胸を衝かれる思いをしたのは、既に筆にしたような終戦前後に散華した少女たちのことを想起したからでもあるが、また、今まで筆にする機会を得なかった淡い思い出があるからでもある。もう十余年の昔になる。その少女を仮にY子としておく。ふと知り合った彼女との話題は、まざまざと戦い懣れてゆく国の歩みであった。

無力な少年と少女が、無為は判り切っていたにせよ、ただ愛国の至情を語り合うことが共通の世界を保たせ、愛情の婉曲な表現に

なっているような二人であったと、今では理解出来るのである。そして、若し戦争に敗けたら……この起り得ないと信じたい仮設に対して、ある日、彼女は「妾、切腹するワ。」低いけれど強い口調で云い切った。その前後の会話は、もう遠い忘却の彼方に沈んでいる。然し、やや含羞んだような彼女の表情を私は忘れないし、今後も恐らく忘れないであろう。彼女は其ののち日赤に志願し、南方に従軍して遂に還らなかつた、とも聞くが定かではない。

戦死したものか、或いは玉碎した孤島の一員として言葉通り切腹したものか。疾病、戦災、疎開、終戦と、転変の数年を経る内に彼女を見失ったまま、私には何の消息も伝わらない。然し、私が切腹の歴史、文芸などに関心を持った一つの深い原因は、ここにあるかも知れない。その頃は彼女の言葉が奇矯でも何でもなく肯けた時代であったが、世の風潮が一変した今日も、猶、彼女の言葉は私の胸底に深く刻まれているのである。その点、青山芳樹氏の「落日婦士道」（本誌32年7月号所収）は当時、彼女の言葉に私が秘かに感じた光景を、其のまま文章にしてくれたようにも思える。然し、彼女の気持は日本人として有り得たことであつたにしても、やはり現代人としても奇異であるかも知れない。

壬生三郎氏によれば、戦前すでに氏は切腹

観に就いて女性にアンケートを試み、注目すべき成果を挙げられた、ということである。

それは切腹に関心を持つとは限らない女性を対象として行われたものの如くではあるが而も、可成り興味深いデータが採取されている。若し今日、是を試みるとすれば如何であらうか。関心を持つ人と持たない人とは勿論、異なる成果を齎すであらうが、異なることもまた一つの意義があるかと思う。ただ試みずともいえることは、壬生氏のデータよりも低い肯定度が現れるに違いない、ということである。然しまた戦前といっても、やはり大正、昭和ともなれば何かにつけて可成り近代的な考え方が現れて来る。

私が最も尊敬する作家の一人は、近代日本文学史上に類い稀な古典的手法と浪漫的思潮を以て、一代を貫き通した泉鏡花である。彼の作品に就ては嘗て処女作「冠弥左衛門」を紹介したことがあるから（切腹研究夜話・本誌29年8月号）切腹の精神に関する限り、武士道的見地からの肯定派と思惟される読者も少なくないであらう。事実、「鐘声夜半録」にも多分にその趣きが見える。即ち此の作品には、不良外人に捉えられた可憐の少女を救おうとして失敗し、腹一文字に掻切つて果てる壮士を点景に加えて居る。

然し、後年「嬰絡品」あたりになると、やや戯画化されて来ている。そして、最近も上

演されて好評であつた「天守物語」（大正6年9月）に至っては、全く否定的な見解を示している。此の戯曲は彼一流の幽玄怪奇味を帯びた一種の詩劇であるが、一応梗概を紹介しよう。

播州姫路白鷺城の天守には、天守夫人富姫なる年の頃二十七、八の女妖が、数多の侍女に侍かれて棲まっている。夫人が妹の亀姫に、もてなしのため、城主の鷹を呼び寄せる。妖術と知らず主命で姫川図書之助なる美丈夫が天守へ鷹を探しに来て、夫人と顔を合わせる。夫人は彼に好感を抱き、助けて帰すが、図書之助は却つて罪を受け天守に逃れ上り、討手と戦う中、天守の怪の主である木彫の獅子頭の目を傷付けられたため、夫人と共に失明し、自害しようとして、名匠の登場により、明を取戻し、相寄るところで幕となる。その科白の一節を引用してみよう。

図書 私は、仔細あつて、殿様の御不興を受け、お目通を遠ざけられ閉門の処、誰もお天守へ上りますものがないために急にお呼出しでございました。その御上使は、実は私に切腹仰付けの処を、急に御模様へに成つたのでございます。

夫人 では、此の役目が済めば、切腹は許されますか。

図書 其のお約束でございました。

夫人 人の生死は構ひませんが、切腹

はさしたくない。私は武士の切腹は嫌ひだから。

以上が、図書之助と夫人が初めて会った時の科白である。此のあと、二人が失明したあとの科白にも、切腹のことが出る。

図書 覚悟をしました。姫君、私を……。

夫人 私は貴方に未練がある。否、助けたい未練がある。

図書 猶予をすると討手の奴、人間なかまに屠られます。貴女が手に掛けて下さらずば、自分、我が手で。——（一刀を取直す）

夫人 切腹はいけません。ああ、是非もない。それでは私が御介錯、舌を嚙切つてあげませう。其と一所に、胆のたばねを——此の私の胸を一思ひに。

（以上、原文旧かなづかいのまま）

この姫というのは人間ではなく、妖怪であるから、必ずしも武士道的な見解を示さないのかも知れないが、むしろ彼としては、妖怪の口を借ることによって所謂、封建的時代への批判を試みたものと目して差支えないであろう。

もっとも、本稿は鏡花を論ずるのが目的ではないから、私が先年「鏡花世界管見」（「ふたば」昭和29年2月号）と題する小文で追求した彼の近代性と前近代性の錯綜する矛盾

に就ては、ここでは敢て触れない。（但し彼にとって、その矛盾に対しては、靈魂の愛を信ずることによって一応、解釈が与えられていることは「婦系図」「白鷺」「滝の白糸」（小説では「義血俠血」）等、映画、演劇史上に有名な作品に拠つても明らかである。）然るに、まづ鏡花から読いた事は奇妙な感じを読者諸氏に与えるかも知れないが、私が常に文芸作品を史実や社会時評と並行して取り上げるのは、小説家というものが、常に時代の風潮を敏感に感じ取り、巧みに表現するものだからである。

そして此の近代人的な切腹観は、現代では最も常識的、且つ普遍的であるかも知れない。例えば、「開花の契機」（本誌28年4月号）を記した信太蓉子さんの如く、願望に耐えかねて、夜中ひそかに刃引きの切出しを以て屠腹を横する女性でさえ、女の身で実際に切腹することは不可能と論じている。

こういう考え方を裏付ける書簡を最近、受取ったので、ここに紹介してみよう。筆者は歴史に興味を持つ二十三才の女性だという。私が本誌33年12月号に転載しておいた、「切腹した基地の女」に対する読後感である。

切腹は勇ましく壮烈で、日本古来の武士道の精神にも合っているの、自殺の手立ては切腹と、昔から相場が決つていたのではないかと思います、今の様に

睡眠薬が手軽に買えていたなら、昔の人達が切腹をどこ迄おし進める事が出来たか、疑問に思います。

それに昔は、切腹と云つても介錯人が居て、さほど苦しまない内に首を落しますので、傍で思うような肉体的の苦痛より、精神的な苦しみの方が大きかったのではないかと思います。

右の外に、感想を更に深く述べているのだが、彼女の批判は甚だ簡明で歯切れよい。至極で尤もな意見である。

ところで何故、日本人は切腹するのか？

是は今までも随分と論議され、一応種々の解釈が出ているけれども、何の説を取つても発生論としては甚だ脆弱である。何故なら、総べての解釈が外国人にでも当てはまり得るからである。そして、発生論を抜きにして、論議の対象を終戦当時にと取るとしても、たとえ同じ刃物に頼るにしても、より迅速に苦痛も少く死を撰ぶ方法があるにもかかわらず、切腹した人が少くないということは、誠に不可解な現象と云わねばならない。

前掲の女性の考え方を根本から覆えすものとして、私が以前引用した一例を挙げてみよう。（拙稿切腹研究夜話四29年5月号所収）

ヒロインを仮りにS子とする。S子は大陸で従軍看護婦として勤務していたが、体温計を破損した嫌で婦長の厳しい叱責を受け、二

十一才を一期として自決した。彼女は、まず薬品を服用したのち、被服庫で看護服を脱ぎ患者用の白衣を羽織り、蒲団に端座して所持の西洋剃刀で腹一文字に掻切った。普閑中を発見され傷は浅かったが、薬品が致死量であったため、手当の甲斐もなく絶命したという。

職業がら、彼女は薬品の致死量を知悉していたに違いない。また腹部の創傷が致命的でないことも承知していたに違いない。勿論、切腹する際の苦痛の程度も理解出来ていたであろう。薬品のみでも充分に自決の目的を遂げ得ると知りながら、致命的ではない傷を自ら腹部に与えている。ということは、甚だ奇妙な行動と云わねばならない。要はただ一つ、切腹によって最期を飾り、せめてもの心やりにしたかった、という解釈しか成立しないのではあるまいか。

それでも彼女は切腹した！ 是がS子への私の嘆声である。そして同時に「彼女」を「日本人」と置きかえてもよいと思う。また同時に「Y子」とも置きかえてみたいのである。

コスモス短歌会の新鋭青河寛次氏は云う。

歌と云うのは切腹の文学だときいていきます。自己の感慨を包みかくさず表現にこめずにはいられないという意味でなのです。従って、人間のうつくしき、よわ

さ、やさしさ、激しさ、かなしさ……等々をあらわに訴える場合が甚だ多く、いわばここるところの交流をおのづから生ずる勢にあるものと云えましよう。

(白鳥33年12月号)

私が此の研究に手を著けるころから短歌を勉強しているのも、決して偶然ではないのかも知れない。そして、Y子への追憶を詠じた左の数首を以て、今回の結語としたい。

みいくさの果てなく進みゆくときに
罪に似てさびしひと恋ふ想ひ
のほり来し晩夏の月は舗道ゆく汝が

頬に映えて血の如き紅

みいくさに命果てむと誓ひ立て疑は
ざりき少女汝すら

戦ひの激しき極み出で征きて白衣の
汝や遂に還らず

見失ひしもの多きまま刻すぎむ惨ま

しきまでに過去は美し

象なさず過ぎゆきし想ひ愛しめり清

くはかなく一と生つつかむ

(あとがき)

本稿を書き了えたところへ、本誌三月号が届いた。藤山秀緒氏が先月号で約束した原稿を載せているので、早速拝見したわけだが、何うも私には、というより、私ばかりでなく、同じテーマを研究している二、三の知人と意見を交換した上での話として、藤山氏が、御

自身のお言葉どおり「女性」である、ということに疑問が残る。尤も、氏の描写の惨烈な迄の粘っこさが、女性なるが故のものか何うかは、おのづから見解により議論の分れるところであろう。また、藤山氏に限らず従来本誌に此のテーマに関連して投稿した女流の中で、信太蓉子氏以外は、必ずしも女性とは確認しがたいと私には思われる。然し何れにしても考えられることは、可成り高度の慾求不満が一つの精神葛藤となるがために、ああいう描写を氏が生み出すのではないか、ということである。

氏自身が、小説ではない、と云って居られるように、事実、氏の文章は小説としての必然性には乏しい。然し、あの文章を書かずには居られぬ氏自身の必然性には、何とも、いたましい感じがする。あれは小説ではないにしても、もはや、遊びの域を超えて、一種なまなましい内面描写を暗示しているからである。叙上の考え方が、氏を理解しているか否かの判断は氏にお任せするが、氏はよく京都を訪れるという。事実とすれば、いつか市内の何処かで偶然お会いしているかも知れない。

世の中は不思議なものだ。

氏が、ああいう文章を書き初めた、また書かずには居れなかった、動機とか必然性とかを直接お質ねしたいものだが、是は不可能であろう。ただ御健在を祈るばかりである。

臍^{せい}談 あれこれ

須藤 律夫



本年の初頭、熱海温泉の某所に於て、うら若き女性予言者藤田小女姫は一風変わった予言を発表した。それは余り人の知らない「お臍美容法」であり、「お臍健康法」の事なのだ。が、今年はこれが一大流行のブームを捲き起すと言う。以来旬日余果せる哉、その予言は

早くも頭角を現わし始め、最近では二、三の新聞にも取り上げられ、又週刊雑誌等にも話題を投げたりしたので、茲に抄録して御紹介しよう。曾って誌友門田奈予さんがその——自己愛に就いての文中でも指摘した通り、私が夙に臍窩に對して強い愛着を抱き、常人以上の審美感に提われている事は否めないが、然し何時も私はそれを單なる崇拜癖のみに止めず、何物かを綱み度いと念じて来た。そんな訳で数年前から前記健康法など体験済みだが、相当の効果のあった事は今も猶確信している。(昭和三十一年五月号所載「お臍の研究」) その医療的価値に就いて(参照)只私の場合独自の鍛鍊法を併用したのでこれから

の記事とは一寸違ふのだが、然し健康法開始以来食欲も増し、熟睡出来るようになったし、痩せていた腹壁も適当に脂肪が沈着して臍窩が愈々深くなり、体重は現在迄に約十五疋(四貫匁)も増えている。何れにせよお臍がマスコミの波に乗って陽の目を浴び、紳士、淑女諸君の健康の泉となる事は、筆者望外の欣びである。

ヘソの整形

イギリスのサンロード市の市立病院整形外科では、ナール・ベル・プラスチック法と言う新しい整形手術を完成した。ナール・ベル・プラスチック法と言うのは「おへその整形手術」の事で、ヘソなんてものは胎生生活の名残りだに考えていると大間違いで、肉体美を誇る現代では、おへその形もおろそかに出来なくなつて来た。これは「臍の穴の大きい人は精力的である」と言つた俗説とは関係がなく、専ら美容上からで、それぞれの人に合つたようなスタイルの臍にすると云つたのがナール・ベル・プラスチック法。「若い女性のお臍は、縦に切れ長の方が美しい」と云つたように、出臍なんぞは、誠に簡単に整形される事になった。お臍の位置は文化の尺度によって決まるそうで、文化民族になればなる程お臍の位置は高くなつていふと言う。それは「その民

族を見るなら、臍を見よ』と言う言葉がフランスにある位で、お臍の形で頭の内容もよく判る——と言った話もある。(週刊実話)

臍が弱い (へそさまだま)

母の胎内から出てしまえば後はもう何の用を無い様に思われているのが臍の存在です。と言って、若し臍の無い人がいたとしたら、どんなにか不気味な事でしょう。(中略) 美人になるには、先づ臍の手入れを——と言う事を誰だか偉い人が言っていて居りましたが、それによると、純良のオリーブ油を二滴ほど臍にたらして、中をよく手入れすればよいのだそうです。この事を五回程続ければ見違える程美人になると言う事で、臍のゴマとオリーブ油とが臍を通じて体内に吸収され、それが皮膚の輝きを増す——と言う事です。男性の臍にはそれ程形の違いはないようですが、女性のそれには色々変化があり、味わいも深いようです。これは腹の脂肪の厚みが違うからでしょう。扱、臍はどちらかと言うと、大きく凹んだものの持主は情にもろいようで、出臍で貧相なものは薄倅だと言われている。(中略) たいていの女性は臍をさわられると擦ったがるようですが、感覚がお臍に集中しているのでしょうか。或るストリッパーは臍が弱く——と言うのは、臍をさわられる

と全身の力が抜けて仕舞うようで、それを知った或る男が、先づ臍を攻めてモノにしたと言う事です。だから彼女は、自分を守る時、先づ臍を押えて叫ぶそうです。いやッ、私のお臍が弱いのだ。(週刊大衆)

臍の緒再認識

臍が上向いているのは善人で立身出世、下向きは泣き臍と言って凶悪非運、大きな臍の持ち主は、精力も強いなど臍の相に関する俗説は多いが、肝心要の臍の緒は、臍の緒切ったその時以来無価値とみなされて来たが——岡山市の酒井義雄医博によると、この臍の緒つまり臍帯がホルモン失調なら何んでもござれの治療薬だそう。臍帯も、生後間もない赤ちやんの新しいのを集め、完全消毒の後冷蔵して生体刺激素を作り、小さくきざんで注射器に入れ、皮下に注射するとあら不思議、微妙にホルモンを刺激して男の青春衰退回避、女の不感症、気管支喘息に神経痛、寝小使から若返りまで効果がある。又高血圧の六十八才の老人が嫁さがしを始めた例もあると言う。更に臍は絶えずゴミを掃除して置き、オリーブ油を塗って夜寝ると、翌日は目のさめるような美人になると言うから、臍は人体でも不思議なもの。全く臍にオリーブ油を塗る丈で、精力増強、美人になると言うのだから、どなたかお試めしになっては如何？(週刊実話)

気の毒な「おへそ」

臍相で健康や性格判断

村田光司氏は『三菱岩崎副社長秘書』の地位よりも『呼吸』の研究に興味を持ち『人生はバランスとタイミング』と言うモットーをかがけている人である。(中略) 口は美味しものを味って毎日面白く暮して、人間からも大切に優遇されているのに引きかえて、臍は実に気の毒千万である。我々の臍はいつも下着や着物の下にかくされて、入浴その他特別の場合の外は外界の情景も見ることが出来ないで、きゆうくつな所で一生涯下積み、日蔭者で暮さなければならぬ。医者でも『臍科』と言うのは聞いた事がない。(中略) 英語で臍の事を『ネーブル』と言うが、アメリカでは臍の事をスラング(俗語)で『ベリーボタン』(ボンボンについているボタン)と言っているなど流石アメリカ式らしい名をつけたものだ。ところが東洋の漢字の方は実に合理的で、臍と言う字は月(にくづき)に齊(せい)と言う字を組合せてある。齊はひとしいで、つまり臍は人間の一番中心にあって左右上下どこから計って見ても等しい、等分の所にあると言う意味が表わされている。(中略) そ

のような人の臍を『へそてん』と言って臍が天井を向いている。これをサーチライト型の臍と言う。中には臍が正面前方をにらんでいて体の中心点から十センチ下の方についているものもあるが、これはヘッドライト型と名づけて、臍としては未完成品である。(中略)

又臍によってその人の健康から性格、人物まで間違いなく判断出来るそうである。そのうちに入学検査や会社の採用試験に、臍の写真が必要になったり、銀行が融資をする時や会社が新たに取引を開始する時に、相手方を温泉に招待して一緒に風呂に入り、そつと臍を見て人物鑑定をやるようになるかも知れない。要するに下腹がひさごのように丸く固くふくらんで、上腹部、鳩尾の下に線が一、二本入って臍が鳩尾の下に近づき、臍の周囲は高くもり上って引きしまり、穴が深く底の見えないのがへそ天と言って特級品である。(村田光司著『へそてん』鶴書房刊)

“おへそに塗る美人薬”

オリーブ油でハダの若返り

おへそに一塗りすれば、女は忽ち美人に、男は忽ち精力旺盛になる靈驗あらたかな妙薬——と言うとおへそが茶を沸す冗談と思われるだろうが、これが大変真面目な話で、美容界の第一人者山野愛子さんが発売元になって

近く発売される運びになっていると言うものであり、又このへそ薬の原形とも言ふ可きものに就ては、山野女史以外にも、偉い先生方で熱心な支持をしている人も少なくないという。このへそ薬のそもそもの元祖は、芸術院会員の彫刻家朝倉文夫氏で、発見はもう二十年前の話だと言う。(中略)朝倉氏によれば『人間が胎内にある時、全栄養を吸収する大任を果すのは臍だから、臍に塗れば一番吸収率が良いだろうと思ってやった』との事だが、臍にオリーブ油を塗られたモデル嬢達は、翌日は見違えるようにツヤツヤしたハダでモデル台の上に立って朝倉氏を驚かせた。これが二十年前の話。以来朝倉氏はこの秘法を知人に宣伝して回ったが余り信用されず、二十年経った最近、俄かに再認識される事になったものである。

へそ神社建立運動

第一にとびついたのは元東京駅長で今は椿山荘の支配人をやっている加藤源蔵氏。同氏は椿山荘の女中達に全部オリーブ油を渡して臍に塗らせた。すると、効能はテキメンに現われて、中年の女中達のハダは若返ったが、はたち前後の女中達は、二、三日すると顔面にニキビが吹き出す始末。あわてて、以後は若い女中達にはオリーブ油を支給しないよう

にしたと言う。山野愛子さんもこの話を伝えきいて、早速自分も実験し、若い女の子達にもやらせてみたところ、矢張りニキビが出たのに驚いた。『医学的な説明は私には出来ませんが、その効能だけはこの目で確かめたのですから保証出来ます。戦前、有閑マダムの間で若返り法として下腹部にオリーブ油を塗る事がはやった事がありますが、これも今から思えば、下部腹に塗れば自然お臍にも入るので効き目があったのだらうと思いますね』と山野さんは言っている。又このへそ薬の後押しをしているのに徳川夢声氏を会長とする『ゆうもあくらぶ』がある。同くらぶは以前から全国に『へそ神社』を建立しようという愉快な運動を起したり、へそには緑のあったほうだが、このへそ薬に就ては、単なる縁起かつぎの座興ではないと言う。くらぶ事業部長山倉十餘三氏は『十二月二十日に熱海へ忘年会で行ったが、寝る前にへそ薬をつけたところ、翌朝の目覚めに当って平均年令四十八才のくらぶの面々がいずれも青春のよみがえりを自覚して驚いた位だ』と効き目のほどを語っている。オリーブ油に昔から高貴薬として有名な雲南ジャコウや竜涎香「クロロフィル」などをあわせたもので、尤もその薬効が医学的にどの程度証明出来るかどうかは疑問で、新春早々売出される製品も法的には薬品

としてではなく、化粧品としての扱いをうけている。(後略) (週刊読売一月一日号)

「おへそ美人法」

西銀座のバー「L」の女給さんS子に「君この頃キレイになったね」と言ったら、「そう、あんたにも、それわかる」と世にもうれしそうな顔をした。こっちは勿論お世辞のつもりだが、ピンときたので「そりやあわかるさ」とかまをかけると、彼女、実は毎夜「美人法」を励行しているんだと打ち明けてくれた。なんでもベビーオイルを寝る前にお臍に一滴そっとたらすのだと言う。「そんな馬鹿な、それこそお臍が茶を沸すよ」そしたら彼女が真顔で説明する事は、——人間の体の中で皮膚が一番薄いのがお臍。ここから吸収されたオイルが就寝中に体内にまわり新陳代謝を促すんだと尤もらしい話。さてほめられて悪い気のする人間はまずいない。すっかり彼女と意気投合した揚句最近「おへそ美人法」が銀座の女給さん達の間で流行していると言う知識を、彼女のお臍を拝み乍らうかがったとは、男性にとってもお臍の効用はバカにならない。——さる粋人の打ち明け話でした。

(国民タイムス、珍聞館)

おへそ処世術

『アダムとイブ』の生活科学

まず『ヘソテン』のフアン堀田俊明氏(五六) 〓東京都世田谷区松原三ノ九六八〓の体験談と言うのはこうだ。話は古くなるが三年前、当時安田火災の常任監査役だった堀田氏が徳島支店に出張、支店長、女中達と鳴門見物をした時船が転覆して氏は海底に吞まれた事があった。(以上筆者要約) 『よく助かりましたね』鳴門の渦に巻き込まれて、生きて帰るなんて奇跡に近いと、地元の人達は感嘆した。事実、同乗五人のうち、生き残ったのは堀田氏と女中だけだった。『これを奇跡と言うならば、やはり「ヘソテン」を志したおかげでしょうか』九死に一生を得た堀田氏の弁である。一体『ヘソテン』とはなんだろうか。

呼吸コントロール

堤唱者の日本へそてん連盟会長村田光司氏(六三) 〓東京都目黒区上目黒五ノ二三九六〓によると『お臍が上を向く事です』お釈迦さまは『天上天下唯我独尊』と、片手で天を、片手で地を指さし乍ら生れた。人間の本当の身長はこの姿勢、つまり片手を高く上に伸ばして直立した時の指先から、足の底部までである。その姿勢で恰度真中がおへそ本来のあり場所だ。(中略) その最も模範的な例として村田氏があげるのは、奈良薬師寺の月

光菩薩像だ。豊かにせり上った下腹、深くきざまれたお臍は、たしかに上向きだ。その上に一筋、横に長いくびれ。お臍が上向きの場合は、必ずこのくびれがある。村田氏はこれを『ムラタ・ライン』と名付けている。然しそれに近い「臍相」は、一般人のお腹にも見うける事が出来るそう。つまり、それぞれの分野で秀でた人は、いずれも豊かなお腹、天を向いたお臍、その上にくびれた横線を持っていると言う。『しかも、イキをつかめば、だれでもその「臍相」になれる』(中略) 『上体を垂直に、姿勢を正しく保つ。お臍に精神を集中して、静かに空気を吸い、しばらくイキを止めてから、再び静かに、細く長く息を出す』(中略) 『そうすれば、お臍は天を向き、健康、長寿、美容、出世など、およそ人生に求めて得られぬものはない』云々(筆者註、村田氏が創設した『へそてん連盟』は加盟団体が百余り、又氏が貴重な体験をもち込んだと言う処女作『へそてん』は発売早々順調な売れ行きだと言う)——以上週刊東京二月七日号から抄録。実際には写真入りで七頁に渉り詳述されているのだが、何れも筆者数年前からの発表と重複するので省略した。果してこの昭和三十四年、おへそブームが巻き起るであろうか。私ののはのかな楽しみである。

—完—

未来幻想マゾ小説

家畜人ヤプー

沼 正 三

第二十七章 遊仙窟で

一 プ キ ー

初めて読む方に 今から二千年後の宇宙帝国イース。女性が男性を圧倒し、貴族平民の別ある白人達の下に奴隷階級の黒人が仕え、更にその下にヤプーと称ばれる黄肌の家畜人が白人の生活を快適にする為使役愛玩消費されている。科学の力は人権を失った肉体に現代人の想像も及ばぬ変形を加え、畜人大畜人馬や、矮人を作り出し、更に肉便器その他の生体家具各種を誕生させた——劣等人を家畜化し家具化し切った白人達の女権的貴族政治の世界、その精密図を描くのが、この小説の第一の狙いである。

イースの大貴族ジャンセン家の嗣女ポーリーン、その妹ドリス、その兄セシル、彼の義弟ウィリアムは、本国星カルーから地球別荘に来ている。円盤で時間遊歩に出たポーリーンの墜落

遊仙窟の客間で肉椅子に倚る四貴人は和御魂に包まれていた——
 畜童達はソーマの杯を捧げながら空中を飛んで来る。貴婦人に給仕する翼のある童児、ロココ名画でお馴染のヴィナスとキューピッドの構図の数々に似ていなくもない。
 「時間が許せば、水晶湖の氷宮殿でブケート（末尾※）の、おもてなしもしたかったんですけど」暖かい緑の液体を啜りながら、和御魂の主アンナ・テラスがいった。「今伺えば今日中にシシリへお帰りの御予定とか。もうこの島は東へ発進しましたから一時間

事故から現代の独乙美女クララは婚約者瀬部麟一郎と共に、二千年後の地球面にやって来た。然し、彼女がジャンセン家の客人としてもてなされ、安逸の生活を享樂し得るに反して、麟一郎はヤプーとして扱われ、畜化処置を施される。——この家畜化の過程を細かく辿るのがこの小説の第二の狙いである。

麟一郎はクララと無理心中を試みて失敗し、家畜適性検査を受けた上、今はイースの人になり切つてウイリアムを愛する様になつたクララに所有飼育される土着ヤプーとして登録され、洗礼されて彼女を神として拝むことになる。

さて、クララはポーリオン、ウイリアムと共に空中列車龍巻号に乗つて、中央アジアに碇泊中の飛行島「高天原」に天照大神なるアンナ・テラスを訪れた。麟一郎は列車客室内の馴致椅子内に吊られている。

半もすれば富士山、御予定の方は大丈夫。でも、その間に、という
と雪獺場御案内がやつとですの。プキーなんかも本当は倉庫で皆様
直々にお好みのをお選び戴くべきでしょうけど、時間が惜しいか
ら、失礼して、こちらからあてがいの三台で我慢して頂戴。レイノ
オ、お目にお掛け……」

遠慮してか一人だけ腰を下さずにいた秘書に命じた。

「はい、殿下」

壁が開いて床が動いて来る。床の上には三台の——三匹のヤプーで、それぞれ色の違う二本のスキーの上に両手両足をついて四這っている。金属の首輪、風変りな旭日模様の額紋、背中にはポツポツと一面のほくろ——ではない、小さな火傷の跡らしい。(長椅子に吊られたままこの光景を念視している麟一郎なら、お灸の跡と表現しただろう。)

——先刻山から降りて来たアンナさんの足の下にいたのはこれだ

わ！——これがプキーなのね。……

クララは心に肯いた。

「三台とも、この頃スベロー星からの便で入庫したばかりのノラール物よ」とアンナが言った。「妾もまだ試していないの。大卒卒業成績は皆良かったらしいんですけど」

「嬢コトウイツクは初めてです。一番初心者向きのを……」とポーリオン。

「そうお。じゃ、これが良いわ、貴女には」とアンナは、桃色のスキーをつけ、金色の首輪をした奴をクララに指示した。「これは首席卒業の金賞畜よ」「ありがとう。……」とクララが微笑んだ。スキーなら素人ばなれた技術の持主であるクララだが、プキーなんて始めて。まして大学だの、首席だの、何のことかちっとも分らない。

——そうだ。諸問器に訊いて見よう。プキーとは？

器械を取り出しながら、自分の足許に來た奇怪な生物を眺めやる彼女である。

ポーリオンとウイリアムの方は慣れたもので、「熊(狩)科卒業？」とか「鍵点反射の指数値は？」とか、専門的な質問をレイノオに浴せ、更に、プキーを仰向きに引繰り返して、両手両足諸共スキーを左右に開かせ、腹部一面に焼き込まれた文字と数字を検分している。

「成程、成績は飛びきりですね」

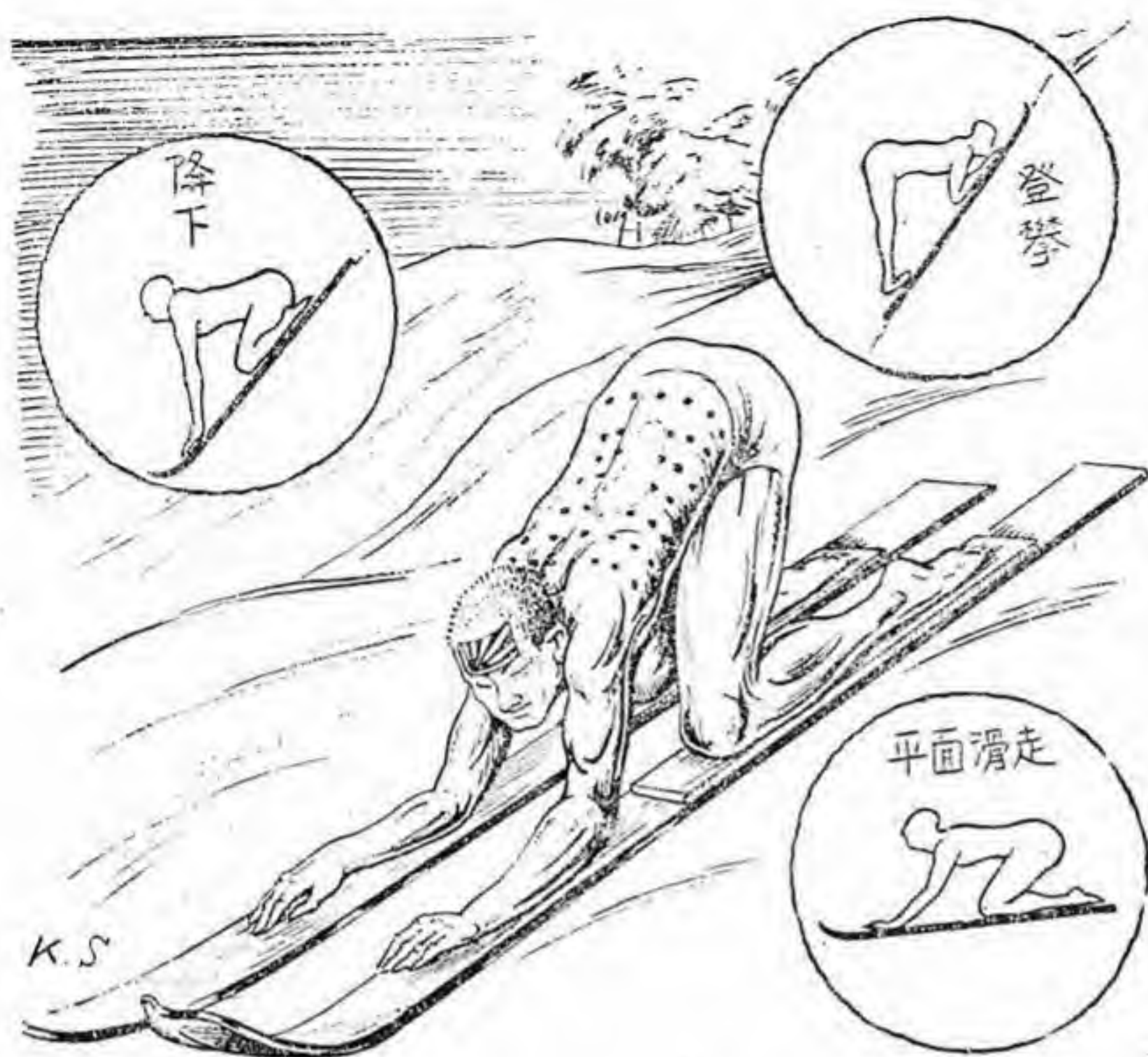
ウイリアムは感心した様に言う。

「良い獣畜ね。気に入りましたわ」

そう言つたポーリオンの口調は、クララが新しいスキーを友達から借りようとして、材質や目方を調べた上で「良い品物ね」と賞める時に使うであろう様な調子で、彼女にとっては眼前のヤプーが生命を持っているということが全然、念頭にない様だった。学校の成

績が問題になり得るほどの知性の持主を、かくまで徹底して器物視できるものなのか。

「幸い、皆さん、お気に召した様ね」アンナは美しい光り肌を一層輝かせつつ微笑んで、「レイオ、先に上昇機リフトの旗門ゲートへ行って準備しておくれ。こちらは、もう少しお話ししているからね」



「畏りました」
「さあ、もお一杯いかが？皆さん」

クララが諮問器から学んだ大要をここに紹介しておこう。

彼女の足許に居るのは雪上畜スノウ・ヤブーという畜人系動物の一種である——但し自種繁殖せず、生ヤブーの仔畜から後天的に育成されるので、生ヤブーの変種とも言える——が、人間（白人）からは、道具としてのスキーと同視され、自動スキーとかプキープキー（Pki. yab-shu）の畧。又Pookieとも綴る）とか呼ばれているものである。

プキーの生産地はスベロー星で、大陸の七割は万年雪の山嶽地帯である。他星産の生ヤブーで皮膚処理とポンプ虫寄生の済んだ生後十月位のをスキーに装着して、この星の山嶽部分に放し飼にする。一匹だけでなく数百数千匹を同時に放つのである。

装着は次の様になされる。スキーには後半部を前後に滑り動く嵌め付けの滑台スライダがあつて、先ず足趾あしほがこれに生体糊で接着される。膝をつかせると脛すねが滑台に載る。その姿勢で両手を前につかせ、掌をスキーに接着固定する。両掌を支点にして、下半身は滑台により前後運動できるし、その範囲内で背と尻の上下運動もできるが、足趾と掌が接着されているから、根本の四這姿勢は変えられない。そして、スキーは超テフロン系の合成樹脂製であるが（すべて仔ヤブーの首輪がそうである様に）生長物質素粒を包含し、年齢に応じて大型になるので、着け代える必要がない。つまりこの時以後生ヤブーは、スキーを体の一部とする新種の動物雪上畜として生れ代るのである。

放し飼いといっても、畜乳ヤブー・ミルク（三四年二月号五一頁既述の畜養液即ちイース世界の一切の汚物を処理した下水で、黄濁してゐるから黄液ともいう）ポンプ虫の吸餌場所（CP七章二節）は定まっている。山中至る処に白大理石像があり、雪の女神と呼ばれるが、それ

が一集團の中心になる。(貴族の場合には石像も本人に像つて彫られ、その所有の雪中畜が全部そこに集められるのだ。)そしてその一団はこの女神像の放出する畜乳を吸うのである。像の姿勢は一見、椅子座像のようで後に畜餌管が開孔している。

仔畜は、丁度人間の赤坊が母親の胸に這い寄る様に、この女神像の足の下に這って、彼女の与える畜乳で育つ。そして、当座の間は像の傍で滑りを試みる位だが、這い這いの達者な頃だから、やがて山向きに這い進むことを会得する。滑台上の両脚を前後に運動させる、スキー底面の鱗状節に波状運動を生じる仕掛になつており、蛇の腹が鱗を使うのと同じ様に雪を掻いて前進でき、従つて登攀動作が可能なのだ。鱗動はまた谷向きの滑走に際してスキーヤーの杖による推進の代りもする。

初めはヨチヨチの仔畜達も次第に旨くなり、速力を増す。運動神経は二脚直立歩行の代りに四脚スキー動作に順応して発達する。やがて、スキーを身体の一部として運動は自由自在化し、五年も経つと、滑降中片方のスキーだけに強力な鱗動を急に起させて、スケール・クリスチヤニアという急角度の廻転をすることまでできる様になる。女神像からの餌を除けば、全くの野生動物同様になつて、兎や鹿や雷鳥と雪上で遊ぶ。これが放し飼いの幼児期だ。

満六才から雪上畜訓練所(学校)に入る。それぞれの女神集團から教場に通うのだ。訓練者(教師とよばれる)は雪上畜黒奴(三章三節の犬飼黒奴などと同列のもの)で、雪上畜にとつては、黒い半神である。訓練は初級・中級・上級に分れ、各三年間の課程がある。教科は、宗教と学習と術科に三分される。宗教は勿論白神信仰だが、雪上畜に対しては、雪女神崇拝の教養が成立している。「お前達は毎日、雪の女神の乳を吸って生きている。あの様な白い肌の女神が石でなく本当に生きていらっしやるのだ。そして、やがてお前達を履物にお召しになる。神々は雪の上で遊ぶ時の履物にす

る為に、お前達プキー族を作り育てられたのだ。お前達は、それぞれ自分の属する女神への信仰を強めよ。名誉ある地位への誇りを持って。神の履物としての天職(お召し)を立派に成し遂げる為の学業に励め。」こういった説教が彼の精神を形成してゆく。

学科は、仔畜らが物心つかぬ中から修得しているスキー動作の力学的分析から、気象、雪質、樹種、更に昔一緒に遊んだ兎や熊や、かもしかなどの雪中動物の習性に至るまでも学習する。後年、白人にプキーとして奉仕する時、雪崩の危険を知ったり。かもしかの足跡を辿ったりできるのは、皆この学科のお蔭なのだ。試験の成績は腹部に焼筆で烙かれる。

毎日、一番鍛えられるのは術科である。プキー本来の運動形態についての技術の鍛錬は言うまでもない。滑降の瞬間時速百キロと言え、スキーヤーでは選手でないと出せない高速だが、プキーでは中学生程度である。廻転も益々巧みになる。然し術科訓練の眼目は、別に被踏乗技術の修得にある。これは鍵点反射馴致と呼ばれる。背中の上の一点ないし二点への熱針刺戟(熱いお灸に似ている。鍵点灸点(つぼ)と一致しているのは偶合ではあるまい。)と一定のスキー動作(前進とか右転廻とか)との条件反射を仕込まれるのだ。初級(小学校)で八箇所、中級(中学校)で十六箇所、上級(高等学校)では更に三十二箇所を鍵点として与えられ、その組合せであらゆる複雑な動作が可能になる。上級迄は義務課程だが、高校卒業時の試験のノルディック(複合・耐久・長距離・ジャンプの四種)の総合得点と学科成績とから優秀畜のみが選ばれて、スベロー星最高峰ノラールにある最高級訓練所、俗称「雪上畜大学」で訓練されるのだ。ここは、競走部、狩猟部の両学部があり、前者はスラローム科、ジャンプ科等、後者は兎(狩)科、熊(狩)科等、とそれぞれ専攻学科に分れ、専門技術を教えている。雪質学などでは二十世紀の学者よりずっと深い知識が教授される

キー・ライディングなのだ。

(※付記 序に同じ様な生きた履物としてのプレート (Plate, Yapp-skateの器) のことを略述する。スキーに対してプキーのある如く、スケートに対して氷上畜のプレートがある。氷上畜の生産もスベロー星だが、この方は山でなく氷結した湖面の放牧場を、四這の四肢の先を氷面につけて——ちよつと水すましに似た姿勢で——滑り廻る矮人族である。訓練所では、二匹一対になることを教え、又背中の一五〇キロまでの荷重(段々重くする)を加えて滑る練習をさせる。荷は靴の形で重心と荷重が変化するが、慣れさせる。次に今迄、四肢の先の電気支柱でローラスケート見たいな四点支持をしていたのを、必要に応じ、両手を合わせた前極と両足を合わせた後極の二点支持にし、両極間に電気支柱を作つてアイススケートの金具と同じ効果を持たせたり、更に四肢の先の支柱を全部併合して一点支持にして錐揉回転に便利にしたり色々な技術を訓練する。卒業前には正式に二匹一緒にロボットの靴底につけて実地演習をする。この氷上畜を各自のスケート靴の底に装着したのがプレートである。金属スケートの代りに万能の矮人を取り付けたスケート靴とも言えは良からうか。スメラ山腹の水晶湖で、女主人や客人がいつでもプレート遊びのできる様、四六時中、靴を背負ったまま湖畔の氷宮殿で待機して暮すプレートの群がいるのだが、クララは今日はその方には案内されない。(因みに一五〇キロは殆んど四〇貫に当る。一匹にそこまで耐荷重訓練は不要と思われるかも知れないが、これは男女の氷上舞踊で男が女を抱いて一脚で滑り廻ることがあるからである。)

二 アンナ・テラスの慈畜主義

ポーリーンの足許に四這の手足を縮めて腹に寄せた姿勢で蹲っていた紫色のスキーを穿いたプキーが、急に身憚いをした。

「早く乗って欲しいのね」ポーリーンは、ソーマの杯を空にして畜童に渡すと、煙草の一本を噛えながら言った。「武者振いしているわ」

別の畜童が上から近寄り、空中に逆立ちする様な姿勢で、この女客の噛えた煙草に点火した。両手の指を擦り合せた丈で火が出た様だが、どう言う仕掛だろうか？

「無理もないですね」ソーマ中毒の美青年ウィリアムは三杯目を傾けながら、「十八年間、待ちに待ったのだから」

「コトウィック嬢には初回踏乗でもあるわけね」アンナが、クララに話し掛けた。「まあ、せいぜい御愛用——可愛がってやって下さいな、慈愛深くね (Be in charity.)」

「慈畜主義者らしい表現ですね」ウィリアムが少々面白そうに言った。

「昔の口癖が出たわ」顔には少しも衰え見せぬ老貴婦人は、ふと年齢を感じさせる様な陰翳を見せて苦笑したが「でもそう言われると昔が懐しいわ。貴方は妾の本を読んで下さったから御存じなのね。貴方位の年齢の方からその言葉を聞くとは思わなかった……」

クララは、漸くその美味さが解る様になって来たアイス人の愛好飲料ソーマの二杯目の最後の滴を吸いながら、足許の桃色スキーの雪上畜を眺めた。

物心つかぬ頃から今日までを、人間に踏まれ乗られる技術の修得を最高唯一の生活目標として訓練されて来たこの動物。肉附の良い黄色の肌には焼き込まれた三二個の鍵点も、雪上畜品評での最優等の名誉を誇る金色の首輪も、高いIQを持つ脳髓に貯えられているであろう深遠な雪質学も……彼の積年の苦勞努力のすべては、クララ達にとっては單なるリクリエーションの一駒に過ぎぬ雪上畜踏乗というスポーツの用具となる為に捧げられたのだ——知性動物として、その生の目的に懷疑することは無いのだろうか？

——プキーよ。お前は妾に踏乗して欲しいのか？ それで満足だ
 というのか？ よし、妾はお前を可愛がってあげようね。

クララは、身を屈め手を伸して、プキーの黒い頭を撫でてやっ
 た。憐憫の情に誘われたのであるが、その黒い頭髪に隣一郎への連
 想が働かなかったとは言えまい。

「クララ！」 低い力籠った声でウィリアムがたしなめた。

「愛玩畜でもないのに、手で撫でたりしたら、おかしいですよ！」
 クララは慌てて手を引いた。

「ほら、ドレイパー、慈畜主義という言葉がもう通用しなくなっ
 てるのが今の中でも分るでしょう？ コトウィック嬢は妾が慈愛と
 いったのを誤解なさったのよ。若い人には無理もないけど。……」
 アンナは今度はクララに向って「可愛がってやってと妾がいったの
 は憐憫とは違うの。プキーは廢物（はくぶつ）でしょう？ 廢物は穿いてやるの
 が何より可愛がってることになるのよ」

「どうも無駄なことをしまして……」
 赤面して素直に詫びたが、何か暗に落ちない。プキーを唯穿くこ
 とが何で可愛がってることになるのだ？

「妾ね」ポーリーンが煙を吐きながら口を開いた。「貴女の慈畜主義
 の御活動でヤプーの作業能率が上って妾達がお蔭を蒙ったんだとい
 うことは、母から聞いてよく理解しているつもりです。ただ、今の
 嬢クララの感違（さか）いを見ましても感ずることですけど」クララを疵つ
 て呉れるつもりらしく、唯この老貴婦人の気分を害したくないと見
 えて気を使ったのか、暫く絶句してから、「慈畜（じしゆ）という言葉に引掛
 るんですよ。苦痛を快楽と感ずる様にヤプーを仕込むわけね。それ
 が慈愛（じあい）と言えるかしら？ 人間で言えば、マゾ仕立（※）の遊戯（げい）
 ね。戯れに演じる偽りの好意はあっても、本当の慈悲や愛情には遠
 いのではないかしら……」

（※註。マゾ仕立とは、イース貴婦人の好む愛情狩獵の遊戯で、平

民の男性を自分の崇愛者（フツアン）にし完全にマゾヒストに仕立て上げる腕
 前を競うのである。同じ男をどちらがものにするかで勝負する時
 もあり、別々の男を日数を限ってどの程度までマゾ化できるか馴
 致度を比べる時もある。暴力を用いることや、狙った男にそれと
 予告することは禁制なので、専ら手練手管による。イースは白人
 の樂園といわれるが、平民はいつこの狩獵の獲物にされるかも知
 れないわけだ。実例は後章で述べる。（なお手帖一〇一項米国兵
 の日本女性狩獵参照）。

「然し、動物だから……」とウィリアムが口を入れた。足許の茶色
 スキーを穿いた奴の頭を上靴の底で撫でている。

「そう、家畜だから勿論どう仕込んでも良い。それが悪いとは言わ
 ないけど、仕込みはヤプーの為じゃなく、妾達人間の為でしょう。
 それを慈畜心の表現といえるかしら？ 慈愛（じあい）は相手のことを思うの
 でなければ……」

「相手のことを思ってるのよ」自信に満ちた口調でアンナが発言し
 た。顔が一段と輝く様に見える、緑の瞳が光った。「白神信仰教育の
 趣旨は、結果的には妾達人間の為でもあるけど、先ず第一にはヤプ
 ー達の為なのよ。少くとも妾が主神崇拜の新福音を説いたのはその
 気持からだったの。……妾達人間の生活はヤプーを必要とする。彼
 らの意向にかかわりなしに、作業は宿命的ね。大抵の人はヤプーの
 気持なんか考えて見もしないし、考えて見てもどうなりもしない。
 課されたものを処理するのがヤプーの宿命なんだから、と割り切る
 のが普通よ。ただ慈畜心の深い者にはそれでは満足できないの。手
 前味噌の様だけど、徳禽獸に及ぶで、ヤプーの心理が気に懸
 る。あたり前に考えれば、欲しがらる筈がないわ。それを戴かなけれ
 ばならないヤプーを可哀想と思わない？」

クララは、そっと諸問器（しよもんぎ）を取り出したところだったが、話し掛け
 られ、俄かに自分も和御魂（にぎみたま）の持主になった様な気で、

「ええ、思いますわ」

「側隠の心は仁の端、というでしょう。その可哀想が慈畜主義の第一歩なのよ。何とかして救ってやりたい。毎日、御馳走を美味しく食べさせてやりたい。生活に楽しみを見い出させ、宿命的な作業を嫌々でなく、喜んでする様にさせたい……この喜ばせたい気持は慈愛じゃなくて？」

と今度は再びポーリーに話し掛ける。

「それはまあそうでしょね」と不承不承。

「主神崇拜の信仰教育がそれを解決したのよ。このヤプーは、今、妾のものを、有難い、勿体ない、頂戴します、と感謝しながら戴いているわ。妾が彼の神様だからよ。信仰がなければ苦痛だった作業が信仰を持ったことによって快楽になったのよ。……」話しながら、又元の椅子に戻る。

「本当は不味いものを信仰で錯覚させるのは、やはり使用者側の狡猾じゃないかしら？」

とポーリーに喰い下ったが、

「いいえ、味覚には本当も嘘もないわ。信仰を持たねば不味いでしょうけど、信仰を持てば信心に比例して美味しく味わえるのよ。だから信仰を持たせるの。この椅子だって」と皆の身体を支えているヤプー達の方に目を走らせて、「肉体的には重いに違いないわ。然し精神的には神体支持の誇りに満され生甲斐を感じている。脳波を調べると腰掛けられている時に幸福感の曲線が一番高くなるわ。……そう分ってくれば、こちらの慈畜心も安らげるわけよ。ね？ 慈畜主義の運動は、信仰の力でヤプーを救ったのよ。彼らがその為、奉仕を楽しむ様になって作業能率が上ったのは単なる副産物よ」

「奉仕するのを嫌がるヤプーがあり得るなんてちよっと考えられないわ、妾」とポーリー。

「今では白神信仰が完全に全ヤプーの宗教になってしまってるから、無信心ヤプーの悲惨さが貴女方若い人には分らないのね。三十年前、妾と妹がタカマハールの畜舎管理で争った頃は……」

「暗室方式論争ですね」ウイリアムが、彼女の回想録の愛読者であることを示した。

「そう、あれ以前は、使役即ち虐待だったわ。それが今ではどう？

使役しないことが虐待よ。使役即ち慈愛よ。貴女は先刻、マゾ仕立と比較なさったけど」妾も、マゾ仕立なら随分経験がありますよと言いたげな笑い顔をポーリーに見せて、言い続ける。「ノーマルな男を鞭や縄に慣らしてゆく時の気持、あれは確かに慈悲や愛情とは逆のものだわ。でも一度仕込んでしまえば、後は鞭と縄で可愛がってやれるでしょう？ この二つだけが愛情の表現になるでしょう？ ヤプーもそれと同じよ。妾達は彼らの神様として彼らを使役することによって慈畜心を示してやるしかないのよ」

驚くべき教説ではあった。

「もっともあなたの方の心掛としてヤプー使役の度に慈愛を意識せよ、とは言いません。先刻は、つい昔の口癖が出たけど。昔は必要だった……今見たいに白神信仰が普及しては、もう要りません。慈畜主義という思想は過去のものになったのよ。あなた方は生れた時から礼拝を受けて育て白神としての自意識も充分ある。ヤプーの奉仕を当然のこととして享受してる。使役即慈愛という効果も知らずに使役してる。無心な動作の一方でそれぞれのヤプーに恩恵を与えている。慈畜主義という言葉の意味も知らないで……それで結構よ。ヤプー達は皆満足してるんですから。妾の運動は充分目的を達したわけなの。新しい世代に、慈畜を説く必要を認めないの。そこまで、主神崇拜の新福音が歓迎されるとは、実のところ唱導した妾自身にさえ意外な程の成功なんですけどね。……唯もし昔の妾の様にヤプーの気持を思いやる人がいたら、その人には言っておき

たいの。ヤプーの幸福は信仰から出て来るんだから、できるだけ信心深くさせておけば、あとは使えば使うだけ可愛がつていることになるんだってことね。良いこと、慈善の第一歩は自分を崇拝させることなのよ……」

アンナ・テラスは、いつかクララに向って語っている。成程クララには有益だが、他の二人には必要のない説教だ。探険に統治に、人生経験の豊富なこの慈善主義者は、獨眼にクララ・コトウィックの正体を見破り、それとなしにイース貴族たるの心得を教えてくれたのかも知れなかった。

——この女性^{ひめ}は、妾がリンのことを気に懸けているのを知っているのだろうか？

クララが心密かに薄気味悪い思いさえした時、アンナは、急に口調を変えて

「これが妾の慈善主義。普及には成功したけれどたった一人の妹を失うという大きな代償を払ったわ。もう昔のこと……」

「光華明彩^{ひかりあかり}」と讀えられた晴れやかな顔を心なしか曇らせながら、窓の外を見遣ったが、目を据えると

「さあ、上昇機^{リフト}の旗門^{ゲイト}に來ました。昔話は登りながらするお約束でしたっけ……」

と立ち上った。

成程、窓の外の景色が変っている。そうすると、この遊仙窟の間と思つた客室は、部屋ぐるみ移動することのできる仕掛けで、会話の間ずっと動いていたのだ。壁が開いた。レイノオが立っている。後方の窓には雪のスロープを背景にして旭日模様の紋章旗を立てた門が見えた。

三 古事記解義 (一) 天の岩戸

前節の会話を理解して戴く為に、クララが諸問器^{レファランサー}から得た知識を

要約して紹介しよう。麟一郎同様に日本神話の知識ある読者諸君には要約で充分であろう。

オヒルマン候爵家（公爵になつたのはアンナの代だ）の姉妹、アンナとスジンは二月違い（受胎一月で郭公手術をするから、こういうことがあり得る）の同胞で双生児^{ふたご}の様に育て育ち仲も良かったが、性格は全然違つていた。どちらもイース女性らしく、雄々しい氣質だったが、姉の沈着剛毅^{しんせくこうぎ}に対し、妹は勇猛果敢。姉は少女時代から「光明令嬢^{ミツ・ルミ嬢}」と呼ばれた美女の中の美女であつたのに対し、妹は、もとより美貌ではあつたが姉に及ばず、候爵嗣女^{マウシヨウメ}でもなく——この辺の事情はジャンセン家のドリスにも言えることかも知れない——姉への劣等感を武術を修行して次々に獲た選手権杯の数で補償していた。黒奴やヤプーに対しても、姉は寛仁で慈悲深く、妹は峻厳で苛酷であつた。

アンナが若くして候爵家を嗣いで間もなく女王陛下下の諸遊星巡視に随行し、一年程オヒルマン候爵領タカマハール（これは本国星カールの地名である。飛行島タカラマハンはこの本国領地を偲んで命名されたもの）を離れたことがある。三十四五年前のことだ。姉の不在中、妹スザンが名代として家を治めた。アンナとスザンとの考え方の相違がこの時に、はっきり現われて來た。その一つが畜舎（※）管理の暗室方式の採用である。姉が使役時間以外にはヤプーの生態に無関心で、畜舎内部における生活には相當な自由を許しているのがかねがね氣に入らなかつたスザンは、畜舎内統制強化の極致として、舎内を暗室にし、飼育係黒奴^{ヤプー・ニグロ}には赤外線眼鏡^{インフラレッド・グラス}を掛けさせ、かくしてヤプー自身の行動の自由を制限しつつ被監視意識を持たしめることに成功したのである。

（※註、畜舎とはここでは生畜舎ではなく、例えばブキー倉庫、畜人大舎や厩等、個畜（個体性あるヤプー）集團の飼育収容設備一般をも意味する。——個体性のない生体家具の類にはこの

問題のないことは勿論である。
 タカマハール在オヒルマン家所属の八百萬匹のヤプー（読者諸君
 やおよろず かみゆみ
 に今更「八百萬の神々」について説く要はあるまい）にとっては、



の……」というのがそれである。
 やがて、アンナの帰来と共に、暗室方式についての姉妹の激しい
 論争が始まった。

これは大恐慌であった。今迄明るかった檻の中が真暗になったのだ。明るい昼の世界を意味する故に彼らは就役を歓迎した。役務が終っても帰りがたらず、少しでも長く勤務しようとした。どんな辛い労役も暗黒の恐怖よりは喜ばれたからだ。ヤプー達を役務に積極的ならしめたことをスザンは自分の方式の成功として得意がったがヤプーは安息を失って疲労困憊していった。そんな時彼らの心を支えたのは「心に祈禱を」(Amen in heart) (※)という合言葉だった。「われわれの女神への密かなる祈りによって安心を求めよう」という意味である。アンナはその様に慕われていたのだ。

(※註。白人の祈禱のアーメンを祈禱そのものの名詞とし、ブロークンな英語にしたのだが、これは、スローガンなので、白人からの命令句になぞらえて、英語にしたのだ(ヤプーの外国語尊重癖。(後に主神信仰が確立され、祈禱文が制定された時これはヤーメンと改められたが、古代家畜語にはアーメンの形で入り、祈禱の意から伝じて神や天国を意味する様になった。「天

後の慈善主義者アンナ・テラスも、初めは單なる感傷家に過ぎなかつた様である。然し「そんなことではヤプーに舐められて能率は上らない」とスザンに言われると、彼女の方も「いや自由を与えた方が能率は上る」と反駁せざるを得なかつた。譬えて言えば、内務班が楽しくては兵が教練を嫌うという論理から、兵を練兵場に親しませる為には内務班の躰が厳格なほど良いと信じている旧陸軍の將校と、労働能率を向上させるには労働者の生活環境を改善するのがよいとし、休養の時間を与えることは、ヨリ多き搾取への捷徑であると考えている資本家との論争に似て来た。同じ目的に正反對の手段が主張されたのだ。その結着を双方が自分流に飼育したヤプーの作業成績を競わせて決しよう、ということになったのも自然の成行である。試合は半年後、各自一檻宛実験的に飼育を担当することになり、畜舎全体はそれまで現状のまま即ち暗黒に据え置かれることになった。

さて、アンナの回想録から原文を引こう。

『幼い時から妾はヤプーに対して慈悲深いと言われた。然し、実を言えばそれは妾の氣質の問題でなく體質の問題だったのだ。というのは、妾はヤプーが嫌々仕事をしていると、その奉仕を享受できない、生理的に不快を感じるのである。だから、彼らに仕事を楽しませたいということは、そういう贅沢な体の生理的要求で、その為には妾はヤプーを可愛がったのだ。その結果をしてヤプー達が妾に感謝し、妾を守り神として拝んでいることにも妾は気付いていたが、その為別にどうということもなかった。ある種のヤプーが人間を神として崇拜しているという事実自体は數百年來知られていたことで、知性動物における多神教の自然発生の予測としてこれを学んだこともある妾には、拝まれたとて別に珍らしいこととは思えなかつたからである。』

さて、論争の勝敗をヤプーの作業競争で決定することになった

時、妾の関心は、ヤプーの役務の性質にあった。妹は、役務自体が辛勞である以上、ヤプーへの慈愛は役務の軽減以外にはあり得ないと主張したのだ。然し、役務の苦痛を却って快楽と感ずる様な、精神状態に彼らを置くことができれば、その主張は成り立たない筈である。だが、そんなことができるか？ 超精神明朗剤を使えば可能だが連続服用は効果が遞減して長期の用を成さぬ。薬剤なしでできぬか？ ——ここで妾は、自分がヤプー達からよく拝まれたことと、宗教は阿片だといった古人の言葉とを想起した。總て信仰は救済である。神前の勤行は信者に愉樂と安恩を与える。ここに薬剤を使わずにヤプーの役務を快楽化する契機があるのでないか。そしてまた妾の幼時からの體質的要求も、これによって満足されるのではないか。こうして妾は慈善主義の根本思想に到達したのであった。

この当時の畜人宗教は汎白神信仰で人間一般に優越者の神格を認めるという段階に止まり、間々妾の様に個人で礼拝を受ける者があるといふ程度だった。妾の構想は主神崇拜をプラスした白神信仰（今日では単にalbinismといへばこれを指す）、即ち多神教への一神教的色彩の付与にあった。

妾は、妾の檻のヤプーに徹底的な宗教教育を施し始めた。妹に反對し「畜舎内の時間は自由に」と主張した手前、強制はしなかつたが、彼らの関心を妾個人に集中させる様誘導して行つた。初めは、妾の体を中心とする形而下的話題に限って情報交換させた。妾の身長、体重、嗜好品などが共通の知識になった後は、毎日の服裝、献立、生理状態などが熱狂的に論ぜられた。「今日は六百八十歩お歩きになった」「三回あくびなされた」「おみ足黴の汗は昨日よりしておからかつた」といったことが一大関心事になった。段々に形而上的話題即ち一般的な神学上の討論の数を増させた。「信仰を持たずに死んだ仲間は死後はどうなるのか？」「主神から他の白神に譲渡

された場合の信仰対象の切替は、どういう風にやるのが良いか？」等々。一方では後に畜人宗教の儀式として広く行われる様になった儀礼の数々や祈禱文を定め、定時に祈禱させた。信仰試験をして洗礼をしてやった。……やがて自分でも驚くほどの効果が見えて来た。彼らは一層嬉々として作業に従事する様になり、使役されることを寵愛のしるしと考え、酷使されるほど有難がるに至った。奉仕がそのまま愉悅に化した。昔の様に特に可愛がるということなしに彼らに快樂を与えてやれる様になったのである。ヤプーを楽しませてやりたいという妾の念願は達成された。しかも、なさはヤプーのためならず、彼らを少しも甘やかしてないから能率は上った。今や檻のヤプーに劣らぬ作業をさせられる筈だ。いや、一日の大部分を占める使役時間をこうして愉快に過し、檻に戻っても仲間と神を論じて熄まぬ妾のヤプーと、使役時間の疲労を畜舎に帰っても回復できぬスザンのヤプーとでは、勝負はもう見えたも同然である。そう妾は自信を持った。

やがて、全畜舎の鍵を賭けた試合の日が来た。ヤス河原に妹と妾は向い合った。

………
五匹の雄畜と三匹の雌畜（記紀所伝の両神のうけひによつて生じた五男神、三女神の名称についても畜語解があるが、今は割愛する）とを競わせたこの試合の詳細は又の機会に譲るが、結果はアンの圧倒的勝利に終わった。

スザンは敗北を認め、意気銷沈して、古代地球探険への航時旅行に旅立った。畜舎の鍵を取り戻して、まだ暗室設備のままの畜舎に取りあえず見廻りに来たアンナの頭上の光傘は、舎内の暗黒に際として輝いた。さらでも光明に富むこのオヒルマン家の当主の体が、後光を伴って照りわたると見え、この日まで「心に祈禱を」と耐えて来たヤプー達を、跪ずいたまま、思わず歓呼させたのである。

る。

以後、アンナ・オヒルマン侯爵は、自信を以て慈畜主義を宣伝し、畜人宗教の新福音を説いて普及させた。作業能率向上の実証はイース貴族をして各自の家庭内ヤプーに対し続々新福音による信仰儀式の数々を採用させた（キリスト教におけるカトリック教会建設にも比せられる）。彼女が後に考古学的探険家となり、原始ヤプー族の古代史に大きな足跡を残して、アンナ・テラス（地球のアンナ）の異名を得るに至ったのは、探険中行方不明となった妹スザンの遺志を継いだのではあるが、他面、畜人宗教の根源に干渉して、後代のヤプーの精神形成に深刻な影響を与えようとの目的があったのである。それは彼女自身が天照大神として彼らの最高神に納まったことによつて見事に達成せられた。のみならず、彼女は、自分の従畜ニギーをヤプー族の首長として「爾就きて治めよ」と降臨させ、その子孫をヤプー族の精神的中心とすることにも成功したのであった。

ニギーに同行した一群のオヒルマン家ヤプーは、自分達の身上に起った異変を歴史として語り伝えた。畜舎を襲った暗闇、「心に祈禱を」の合言葉、アンナの輝く帰来……口承の間に、合言葉は「アメンインハト」と訛り「アメノイハト」と変り、遂には「天の岩戸」と解せられ、「日の神天照大神の岩戸隠れと再現」の神話を生んだのだった。

七年前地球都督を最後に致仕し、陛下から特に許された飛行島に隠棲して、回想録の執筆に余生を送るアンナ・テラスである。生涯かけた事業は成功した。彼女の名声は天下にあまねしと言える。だが、一生を独身で過したこの女傑はたった一人の妹を失って得た虚名虚爵に満足してはいない様だ。

創作

蛇性のマゾ女

波銅鋭郎

一

私はまだ真垣冬美という女ほど奇妙な女を知らない。彼女は蛇性のマゾヒストとでもいうべき変った女であった。

私が彼女を知ったのは、いまから二年ばかり前の冬のある日のこと——。私が勤め先のビルを出て凍てついた舗道の上を歩いていると、突然私の直ぐ眼の前をスーッと横切って通った女がある。

彼女は細っそりした身体をくねくねくねらせながら、タクシーでも呼ぶつもりなのだろう。折から背信号に変わって一度にどっと流れている車のむれの方に向い片手を挙げて突ッ

立った。と、そのとき、ひらひらと白い紙片のようなものが肩のあたりから舞い落ち、木枯しに吹かれて私の脚元まで飛んできた。

私はその紙片を拾いあげて驚いた。何とそれは額面百五十万円の小切手ではないか。一月二十三日——当日の日付で江崎金属工業株式会社代表取締役の印が押してある。三友銀行本町支店といえは直ぐその交叉点の角にある銀行である。私は慌てて彼女の傍に走り寄りその小切手を差し出した。

「もしもし、この小切手、貴女がお落しになったものではありませんか？」

その時の彼女の喜びようを私は未だに忘れない。

彼女は白い陶器のように滑かな頬をほーッとあかく染め、丁寧に繰り返し礼を述べた。「もしおよろしかったら、ご一緒にお乗りになりません？ 今日とはとても冷えますし……」

彼女は私にタクシーを誘った。

その日の極度の寒気には厳しい美しさがあった。そして、彼女の美しさはその寒気的美と見事に融合していた。

プラタナスの並木は氷結したような空間にしめあげられ、ひねこび、いじけて見えた。

まばらに歩く人々の鋭い寒気に生気を失ったような顔、顔。その中で、彼女の顔のみ生氣に輝いている。

私は蛇のように冷かな彼女の瞳の奥に吹き

荒む木枯しを見た。若し彼女の体に触れたなら、そのまま凍りついてしまうのではないかと思われた。彼女は「北極に棲息する女蛇」という感じだ。果てしない氷原の上をまっ白な彼女が歩いて行く——。私は彼女の姿から、冷い執念のエロティシズムを感じた。

この最初の出会いに於ける彼女の印象は、二人の交際が深まるにつれ、間違いではないことがわかった。私は暫々彼女の執念深さに悩まされたものである。

その彼女は今年の二月のある寒夜、自ら毒を呑んで死んでしまった。

私は彼女の自殺した話を聞いて、さもありなんことと思ひ、雨戸を削る木枯しに向って静かに彼女の冥福を祈った。何故か私には厳冬を選んで死んでいった彼女が、彼女自らの宿命によって死を選んだ女のように思えてならない。

彼女は自殺すべき女だったのである。厳冬のあの冷い忘却の中に——。彼女は寒気に包まれて喜んで死んだことだろう。

けれども彼女の執念は死後もなお私から離れない。いまでも彼女は私の心の中で、その柔軟な体を弓のようにのぞけて、地獄の打撃を強いるのである。私は喜んでおまえを管打とう。おまえの柔肌の管痕を更に赤く大きく拡げてやろう。だが、私には最早苦痛におどき狂うおまえの姿を見ることが出来ないの

だ。

私の中の冬美よ。この私の顔は日夜おまえの身体に振う管打ちのためなのだ——。私は彼女の面影を心の中に描きながら、不思議な彼女の性格について考えてみる。

彼女は確かに蛇性のマゾヒストであった。ある日のこと、二人の間にこんなことが起った。

私が会社をひけて家に帰ってみると彼女が私の部屋で待っていた。

「随分おそいのね」

そういつて冬美は私の背後にまわり、背広の上衣を取ってくれた。

「うん、この頃、決算で忙がしいものだからね。冬美さんはいつ来たの？よく鍵もないのにこの部屋に入れたね」

私がさういうと、

「わたし窓から入ったのよ。このアパート、がたがただから直ぐ窓ガラスはずれるのよ」

ぬけぬけとさういうのだった。

私はきらきら光る彼女の瞳をみつめながら、蛇のように私の部屋の中にすべり込む彼女の姿を想像して、奇妙な恐怖にかられていた。

すると彼女は、すらりと伸びた柔軟な肢体をくねくねとくねらせながら、私に打撃を求めてくるのだった。

「ね、早く責めて！」

あえぐように彼女は囁く。私は彼女の肌に

蛇のそれを感じた。彼女の情熱はいつもこの皮膚の下で荒れていて、おもてには出ないものである。彼女の体内をかけめぐめるものは、熱風ではなくして木枯しではなかったらうか。

私は早急な彼女の要求に応ずべく早速準備にとりかかった。押入れから皮の管と皮の紐を取り出すと、彼女を後手に縛りあげ、ところきらず打撃しだした。私のうちおろす管の下、苦痛にのたうつ彼女の姿の美しかったこと——。

私は疲れるほど管打ち、彼女は幾度か氣を失った。彼女は遠去かる意識を追いはらいながら、蛇のように床の上を這いずり廻った。そして、ときには上半身をベッドの下に突っ込むこともあった。

半身は隠れ、残る半身のみが白光の中にのたうつ奇妙な姿に私の心は妖しくふるえ、思わずその奇妙な生物に管を振り下すのであった。

私は冬美の生立ちをよくは知らない。私が知った冬美は、年老いた母親と二人で、煤煙にすすけた場末の町の、狭い路地の奥に住んでいた。

冬美の母親というのは、むかし相当な暮らしをしてきた人らしく、もの腰の上品な、しとやかな老婦人であった。

私は冬美が決行した奇怪な復讐談を知っている。彼女の執念深さと、その烈しい気性をよく知っている私は、そういうこともあっただろうと思い、そのときのありさまをあれこれと想像してみるのである。

冬美よ。いま、おまえの嫌がるその話をここに書くとして、私を救してくれ。

そのかわり、私は私の生きていく限り、おまえの身体を責め苛んでやろう。私は老いぼれても、私の中のおまえは老いぼれはしないのだ。私のしわばんだ腕はいつまでも激刺としたおまえの身体を打撃することだろう。

私が冬美を知ったとき、彼女は既に三十才になっていた。彼女はそれまでに結婚したことはなかったが、そのとき既に純潔ではなかった。彼女は二十九のとき、復讐のために最大の宝を悪魔に捧げたのである。その頃彼女はその後場の

町にある江崎金属工場の事務員をしていた。彼女はそこで烈しい恋をしたのである。相手は会計をやっている菅という男であった。

彼女は蛇性の執念深さで、菅を追い廻したが、彼は冬美の同僚であるまだ若い池上夏江という女と恋仲になってしまった。夏江は、

麗

冬美とはまるきり性格の反対の女で、丸顔の愛くるしい顔をした明朗なサラリー・ガールであった。

冬美は黒板塀のまつわるあの呪われた日まで、二人が恋仲であることを全然知らなかった。それほど、菅と夏江の二人は冬美に対して警戒をし、彼女のまえではそういう気振りをすらもみせなかったのである。

ところがある日、冬美は二人が連れだって仲睦しう歩いているところを見つけてしまった。その日、

冬美は朝から故しらぬ焦燥感にとらわれて焦々していた。なんだかこう、風船玉のように、虚空にぱんとはじけ飛んでしまいたいような、そんなやりきれない気持ちであった。いつもは既に馴れてさほど気にかからぬ機械の音までが、一日中が



んがん頭に響いてきた。

そんな冬美がやっと一日の勤めを終え、工場の事務所を出て、すぐその横につづいていく黒板塀の前にさしかかったとき、前方に夏江と菅の二人が、仲よく肩を並べ寄り添い、睦まじげに話しあいながら歩いているのを見つけた。二人は古くからの仲のいい恋人同志のようである。

「まあ、夏江さんと菅さんの二人だわ、夏江さんは私に嘘をついたのね」

冬美は吐き出すようにそういつて、二人のあとを追って行った。彼女は二人が何を話しているのか聞きたかったのである。

冬美は、確かに二人の口から彼女の名がもれたように思った。そのあとは嘲笑するような高笑いであった。その笑声は、わんわんと彼女の耳で鳴っていた。

冬美は二人に対する憎しみで、心の黒づみゆくのを覚えた。

「よくも二人で私を騙したわね。今に、どうするかみておいで！」

冬美はそう絶叫した。するとそれに応えるかのように傍らの黒板塀がげたげたと笑いだした。それは逆上した冬美の異常神経の仕業であった。

「何を笑うの！」

彼女は黒板塀に向ってまっ黒な憎悪の言葉をたたきつけた。すると、その黒板塀の上に

一つの幻映が浮び上った。始めはチラチラしていた白い斑点が漸く固まると、一人の裸女となった。

それは、まさしく下着一枚の夏江ではないか。

彼女は羞恥心にかたくなって横たわっている。

「夏江さん、何をそんなに羞しがってるの！私をマンマとだましていたくせに」

冬美が夏江に向ってそういつと、闇の中から一人の醜怪な乞食男が現われて、彼女の着ているナイロンのシユミーズを手荒く、むしり取り出した。

「嫌ッ！ そんなことしちやあ嫌！」

冬美は恰も自分がされているかのような倒錯の羞恥心にかられて、思わずそう叫んだ。ふっと塀の上の幻影は消えてしまった。

冬美はほッと溜息をつき、その先の光景を想像してみた。

「夏江さんはあの乞食男に、玩具にされてしまえばよかったのに」

彼女はそう呟いた。

まだ未婚である冬美は、人間の裏面については何も知らなかったが、莫然と、夏江が苛められ、泣き叫ぶ姿を一度みたいと思った。

「あの憎らしい夏江さんの苛められるところをいつか見てやろう。菅さんにもそれをみせるのだ」

そう冬美は決心し、

「私は悪魔よ！」

と、呟いてみた。すると黒板塀が、

「おまえは悪魔だ！」

と、言葉を返した。

「そうよ、私は悪魔よ！ 私は自分の苛められるところもみたい」

冬美は自分に向ってそう叫んだ。黒板塀にある無数の節穴が洋服を透して、羞恥におのく自分の裸身を、じろじろねめまわしているような、奇妙な気持ちに襲われた。

「ああ嫌だ！ 男ってみんな狼みたいな人ばかり」

冬美はそう叫びながら、狭い小径をかけたでいた。菅と夏江の二人はとくに黒板塀の角をまがって、冬美の視界からは消えていた。

そのときの複雑な冬美の心理を、私には理解することができない。それは彼女のマゾヒズムの最初の徴候であつたのだ。

二

冬美の勤めているその工場に、尾上猛という若い工員がいた。彼は六尺近い不自然な程広い肩幅をもつ、皮膚のまっ黒な男であった。

そんな彼から冬美はあの黒板塀を連想していた。みるみる黒板塀は彼女を包み、それは

いつしか尾上の逞ましい身体に変わっていた。彼女は彼のどんより鈍く光った瞳でみつめられると、奇妙な胸騒ぎを覚えた。彼のまっ黒なささくれた膚は、機械油に汚れて、まるで濡雑巾のように見えた。その上、彼は余り風呂へも入らないらしく、いつも、垢じみたシャツの上から、ポリポリと爪を立てて、その鱗のような肌を掻いているのであった。

冬美にはそんな彼が嘔吐を催す程いやなものであったが、またその反面、彼の野性の情熱で、死ぬ程責められてみたいという気持があるのも否めなかった。

蛇性の冬美よ。おまえの中には一匹の蛇がいたのだ。その蛇の頭はいつも被虐の想念で満ち溢れていた。おまえの理性が、おまえ自身を制御できないのは、その蛇のためなのだ。

冬美の異常性格は、その頃から現われだしていた。

彼女は鏡の前に立つと、

「ああ、私はこの身体を死ぬほど誰かに責め苛まれてみたい。野獣ども！ さあ私の身体をあげるから、思いっきりぶって、引き裂いて！」

そういいながら蛇のようにくねくねと身をよじらせて、鏡に映る自分の肢体を飽きもせずに見入るのだった。

ある日、工場の終る頃、冬美は尾上を呼びとめてこういった。

「尾上さん、今日は残業でしよ。仕事が終わったらちよつと事務所まで来てくれないこと。私尾上さんに少し聞きたいことがあるの」

尾上はあいかわらず片手をポケットに突っ込手み、片でボタンのとれたシャツの間から

胸をぼりぼり掻きながら黙ってうなずいた。

その日、彼は仕事が終わると、早速、事務所に飛んで行った。美しい彼女の傍に一刻も早く行きたかったのである。

冬美は尾上の姿を見ると、

「尾上さん、あちらでお話し致しましょう。」

これから貴方の家族調査をするのよ——」冬美は彼を工場の隅にある物品置場に連れ



て行った——。そこは出納係の彼女だけが鍵を持っていたのだ。

そんなことなら、わざわざこんなところへ呼ばなくともいいのに。そう思いながら、彼が部屋に入ると、冬美は石油箱の上にどんと身体を投げ出して、蛇のように冷かな瞳で凝って彼をみつめるのだった。

ほの暗い、深い、湖水のような瞳である。その奥底には、何物をも吸いつけるような何かがある。

彼には、こういうことをする冬美が理解できない。けれども、彼の本能は、このガランとした物置場の雰囲気は理性を押えて兇暴なものへとかりたてて行った。彼はもう前後のみさかいかもなく、ウオッ！と、獣のような唸りをあげると、やにわにおどりかかっていた。

「あッ！ まだ駄目よ！」

冬美は彼の顔を両手で支え乍らそういう。

「尾上さん、私のいうことを承知してからよ、それからよ」

尾上はおあずけをくったかたちである。

「明日ねえ、ここへ池上さんを連れてくるから、あの人を思いきり苛めるのよ。いいこと、わかって？」

冬美がそういうと、彼は承諾のしるしにくりとうなずいてみせる。

「きつとよ。」

冬美はそう念を押すと、両腕をだらりと下にたらしめた。

冬美はその日、復讐と自虐のために、二十九才の今日まで守りつづけた花を、自から散らしてしまったのである。

翌日、冬美は夏江を物品置場に誘った。

「夏江さん、今日ねえ、貴女に是非内密でお話したいことがあるの。仕事が終わったら倉庫で待っているから、ちよっと来てよ。ね、お願い」

冬美さんのお話っていったい何かしら。夏江は不気味な冬美の瞳を思い浮べながら、そう思った。

その日はばかに蒸し暑いやな日である。鉛色の雲が低く低くたれさがっている。いまにもばらばらと大粒の雨が降ってきそうな気配である。工場全体は暗かった。

「まあ暗いのねえ、電気つけましようか」

冬美がスイッチをひねると、螢光燈の蒼白い光はすばやく部屋の隅々を占領した。猫のまなこの青光りの部分のように、その光の中には直後の惨劇が暗示されていた。

その部屋全体は蛇の青い魂である。

「お話しっていったいなあに、冬美さん」

夏江は早く帰りたいので焦立ちながら冬美にそう聞いてみた。

「実はねえ夏江さん、私貴女に是非お頼みしたいことがあるの。少し遅くなるけどお話し

聞いてね」

そのときドアが開いて尾上がぬっと姿を現わした。彼の黒っぽい姿は、蒼白い光の中に舞い込んできた黒いつむじ風のようなのである。

「まあ、あんたは一体何の用事なの？ 黙ってこんな処になど入って来ちやあ駄目よ」

尾上に向って夏江が、そうなじっている間に、冬美は倉庫を飛び出し、外から鍵をかけてしまった。

そして、一散にあの黒板塀のところに駆け行く——。冬美の思ったとおり、菅は黒板塀の前で夏江の来るのを待っていた。

「菅さん大変！ ちよっと来てよ」

冬美はわざととり乱した風を装いながら、倉庫の窓のところに連れて行った。

「菅さん中を覗いてごらん、大変だよ」

冬美の顔は惨忍な喜びに輝いている。蛇性の執念が勝利をしめたのだ。

「ああッ助けて！」

と、いう悲痛な叫び声が「む、む！」と呻きに変わり、続いてビシッ、ビシッという鞭打ちの音が部屋の中から聞えてきた。その叫びは駆け行く菅の魂いっばいに爆発したであらう。

勿論、尾上は嚴重な懲戒を受けた。冬美にも当然、累は及んだ。然し夏江と菅の受けた心の傷は、冬美の受けたその幾倍かの、甚大なものであったに違いない。

最新映画 スナヅプリリーズ

苅葉の巻

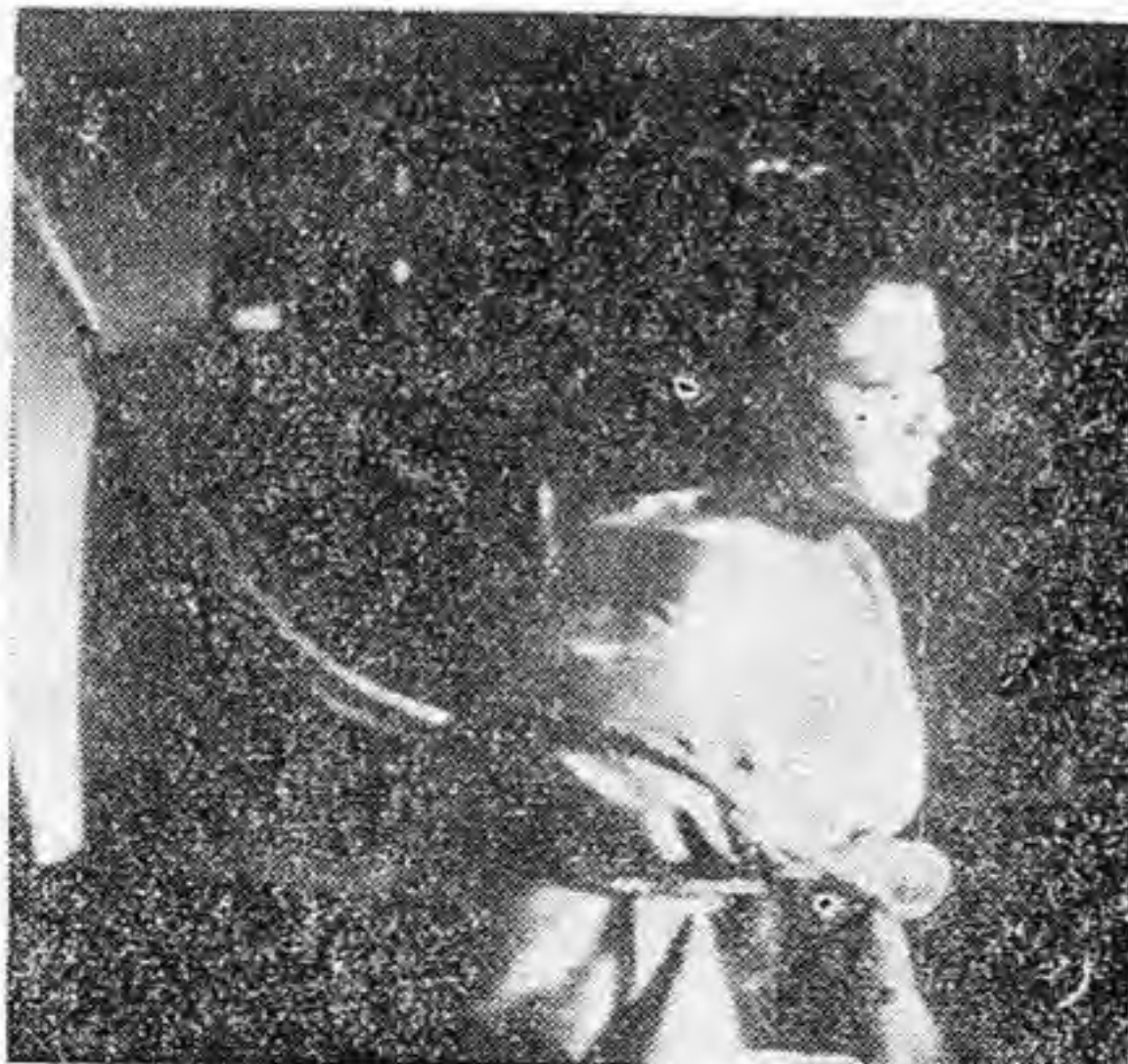


大映作品紹介

弁天小僧

横成一牧 高志

牧 今日にはネ一つ皆さん折角美しいきもので、いらしたんだし、日当りもいい離れのこのお部屋で、のびのびとお話して貰いたい…と思ってお呼びしたんですが、本当の女性の姿ってものを、こうやってお互いに話し合うのも楽しいんじゃないですか？ ピンクの訪問着に蝶結びの須賀美千子さん。紫地の一越に大柄扇模様を浮出しお太鼓も高々とそれに真紅の帯あげの美しい——美しい筈、花柳界育ちの蔦家のおケイちゃんこと、柳啓子さんと、おなじみレギュラーの佐藤妙子さん。それに男性は私唯一人という漫談会ですから、よろしくお願いしておきます。……さて、何からお話しましょうか。この間、大映の『弁天小僧』という映画が封切られましたネ。あれは皆さん、もう御覧になったでしょうけど、天然色で、とても美しいお芝居で



佐藤 先生、今日は映画を中心にお話したらよろしいんですの？

牧 いや、どうでもいいんですよ。何か寄り処がなければと思って挙げたままで、いきなり女性観、男性観って名乗り出ても困るでしょ。男の私からいわせて貰うと、三人の女



——お半（青山京子）、お鈴（近藤美恵子）と今一人の何んとかいう矢場の女の三人、皆さん方は雷蔵さんという訳ですね。これらの人のことを中心に何処に話題が飛火しようが一向にかまいませんから、一つ恥ずかしさとか遠慮などというものを抜きにしてお喋りして下さい。ここだけの座興なんですから……。

須賀　じゃ、そのつもりで……。あの、今

仰言った三人の女の方のうち、二人でしたつけれ、縛られて痛めつけられましたのは。

牧　おッ……お早々と出ましたね、手取り早くいうとそうなんです。が……それがどうしました？

須賀　ホホホ……その外にもあったんですけど、とても印象的でしたわ。あとの矢的場の女って何か知ら？

佐藤　足の先で矢を射つあのシーンのことでしょう。特殊な江戸の盛り場風景を描写した……。

柳　嫌だわ、あんなことってあるから知ら。前をはだけちやったりして……。

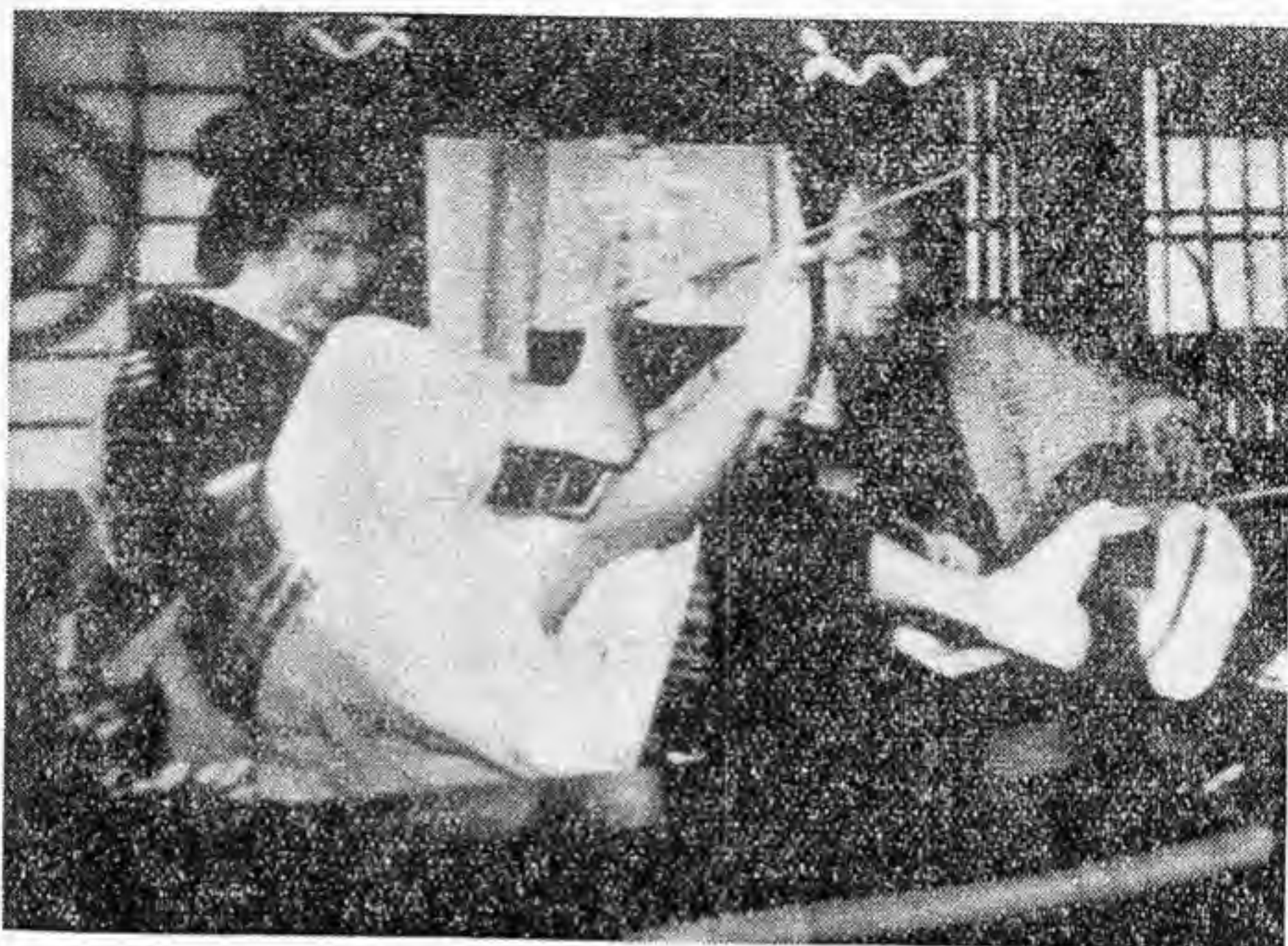
牧　これなんか全く嬉しいですね。伊藤大輔という戦前から有名な監督らしい大胆な演出で、意外な見ものでしたけど、蹴出しが白っぽい処は気に喰わなかった。あれは盛り場の女らしく当然赤でしょうな。

佐藤　裾の乱れというデリケートな味合は、仲々映画では拝見出来ませんわネ。普段洋装ばかりで、時代劇では古い女になれっというのがそもそも無理なんでしょうけど……。皆さん、チャンと下着から揃えていらっしやる？



須賀　だって赤ちゃんの時からパンティで育ったんですもの。裾除けは、おきものの時には、つきものですから締めますけど……。

柳　この間、シユミーズの上から、いきな



り長襦袢着て怒られちゃった。
牧 それじゃ、啓子君は長輪際、矢場の女にはなれなっこのいナ。縛られる女には、なれてもネ……。処で話はまたきものに戻るんです

ネ。第一、心のあせりが少しも出ていない。悪くいうと女は地蔵を縛ったのと全く同じなんですよ。
佐藤 多少マゾ的になっても女の

が、皆さん——といっても若い女としての場合なんです、よく芝居や映画で町人の娘やお姫さま達が何んとかのはずみで後手に縛られたりしますネ。折檻という、ひどく心理的になるけど、そんな姿を鑑てどういう風に感じます？ さしずめ須賀さんが鶴亀城の姫御前で、啓子さんが黒襟の八丈を着た町娘だとすると……。

須賀 さあ……。とても悲観しちゃうネ。本当に縛られるんでしょう？ おつかなくて、とたんに眼を廻わしそう……。

牧 男の方からいうと、娘さんを縛った瞬間に観念した女に愛着を感じるものらしい。その証拠に「弁天小僧」の最初の方で青山京子のお半が縄尻を環に結わかれて坐っているシーン、あの顔の表情は正しく安心して縛られた感じなんだ

人が縛られる時はいい意味での懸命の抵抗が望ましいんじゃないでしょうか？

柳 うちのお姫さんで毎晩のように特別おひいきのお客様に縛られるひとがいるのよ。この間といっても旧お正月の頃か知ら、長襦袢に伊達巻一本でひどく後手に縛られてお部屋へ転っていたわ。あたし、どうしたらいいか知らと思ったら足がすくんじやって、そのまま逃げちゃった。

牧 その姐さんはその客人と至極仲がいい





んじやない？ お互いに好きなんだからやるんですよ。ひどく縛れば縛る程、お酒がうまいてネ……。

柳 でも雷蔵さんみたいに女のひとの首に紐なんか掛けてしめ挙げたりしないわ。ただ姐さんの二の腕が喰いちぎれるように縛り上げるだけのよう……それで姐さんったら、泣きもしないのよ。

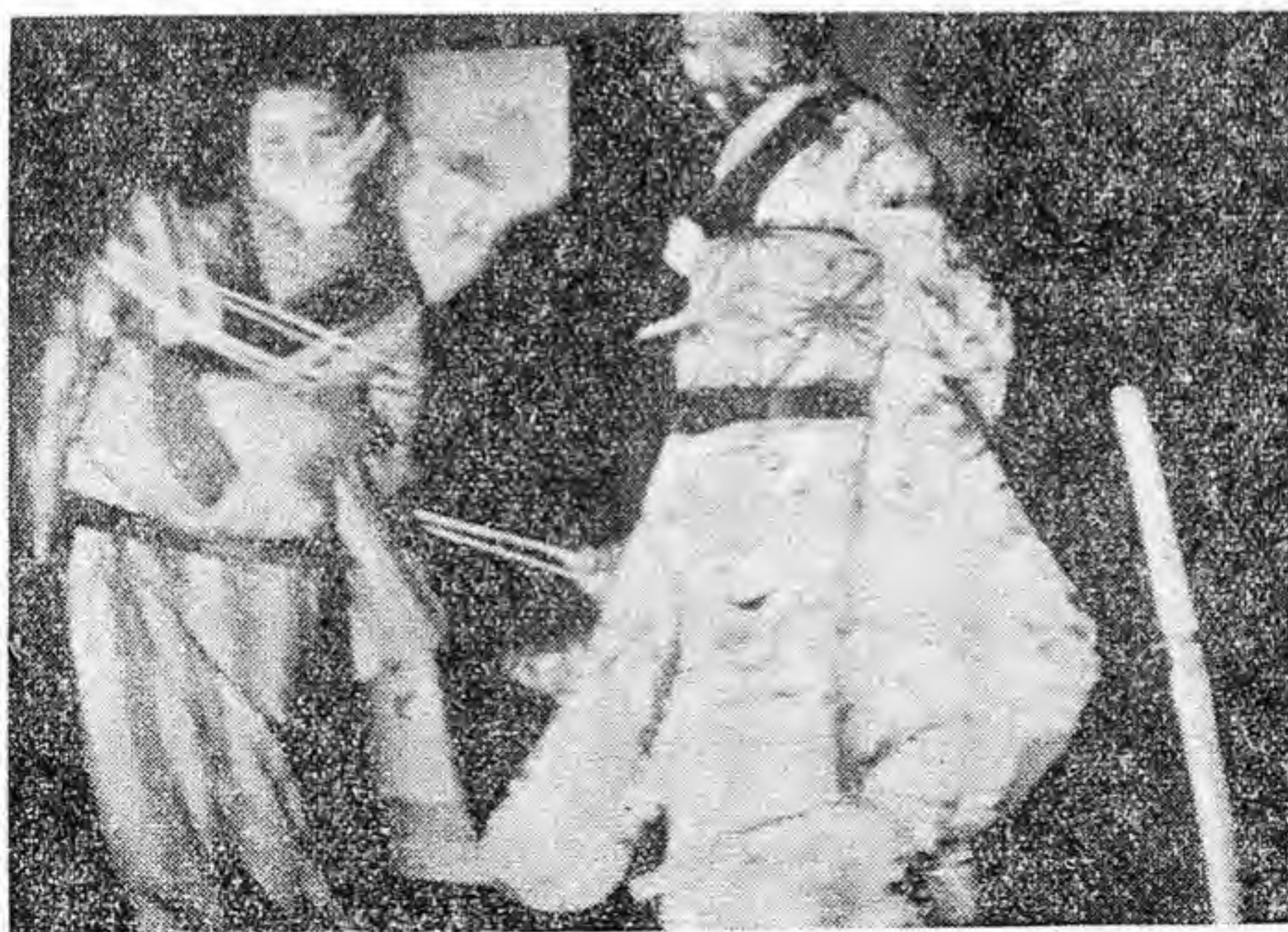
牧 「弁天小僧」にはないけど、この間、何

げなく家のテレビを見ていたら宝塚のレビューの正月東京公演の『花の饗宴』でお姫さまが後手に縛られて苦しむ処が写った。早速ストナップして置きましたネ。女弁天小僧が振袖のまま縛られたら、そうなるでしょうが……。

須賀 昔のお武士さんって嫌やあーね。すぐ何んとかいうと女のひとを縛ったりして。

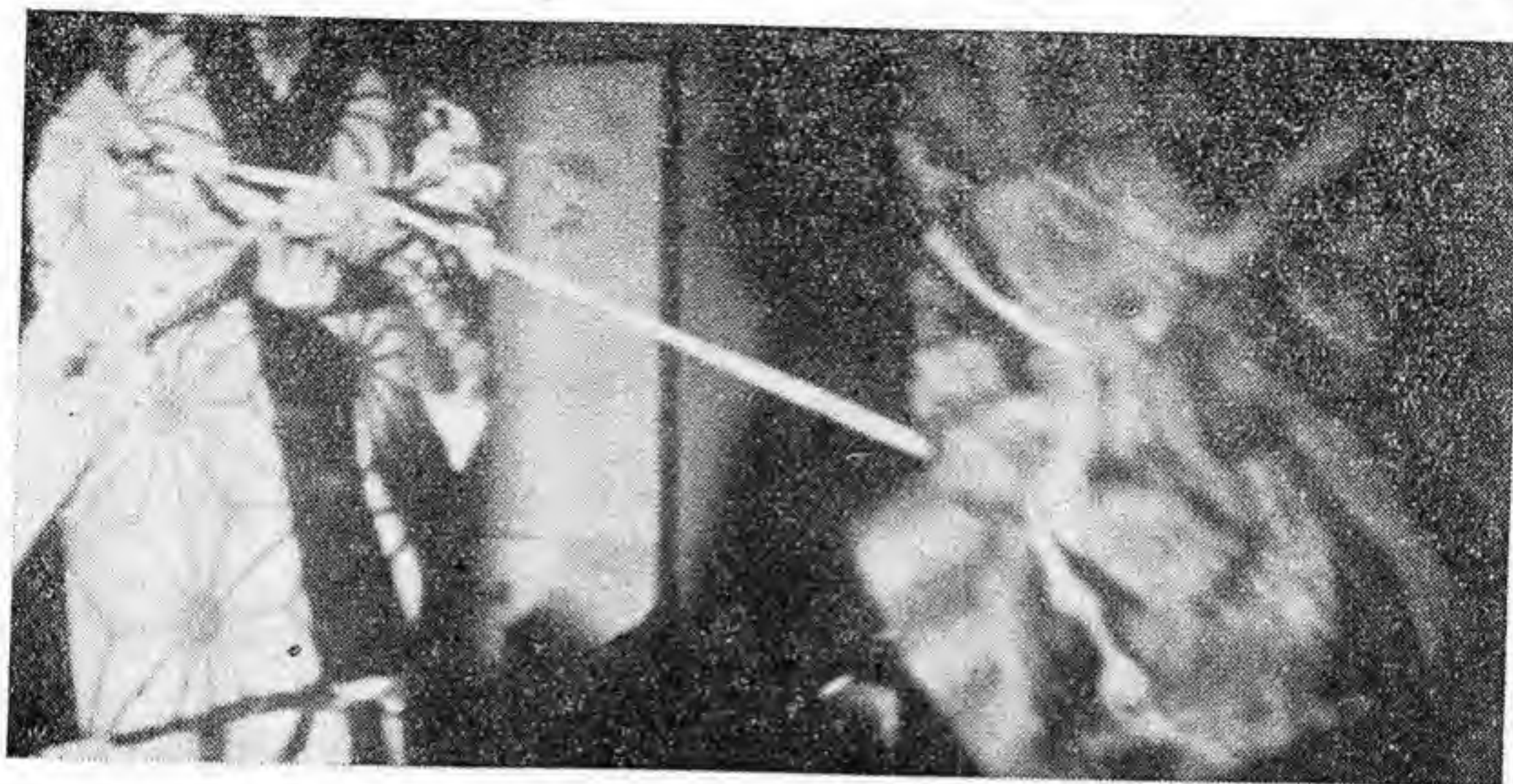
牧 つまり、からかっているうちは、まあ、いいとして、観念させようとするから猿轡をかませて押入れなんかを押込めちゃうんですね。

これを御覧下さい。ストップが下手だからよく撮れていませんけど弁天小僧のラストシーンに、お半とお鈴が捕えられ、後手にされて猿轡。おどかしの抜身の前で恐怖のいっている処はまるで絵のようですね。勿論、物にしようという根たんなんでしょう。押入れの中じやなくて部屋の間隅、しかも次のシーンを撮って初めて判ったんですが、二人とも連縛されるんですよ。男のいやらしい眼を見て二人とも立ち上る。あらぬ方向へ逃げようとするが男の手で連れ



戻されてまた反転！

形ばかり後手に縛ってあると思ったのが、お半お鈴ともに手首の処を本縛りに縛ってあってリアルな感じは高く買われてもいいんじ



やないか——と思うでしょう。レンズは正直だから本当に縛った女の後姿を見せないと哀れさは出ませんネ。

柳 猿轡って普通、何を使いますの？

牧 このスナップだとお半は白い手拭いのようだし、お鈴の方は帯あげで間に合せたようにも見える。やっぱり時代劇だと型通り豆しほりっていう処かな……。

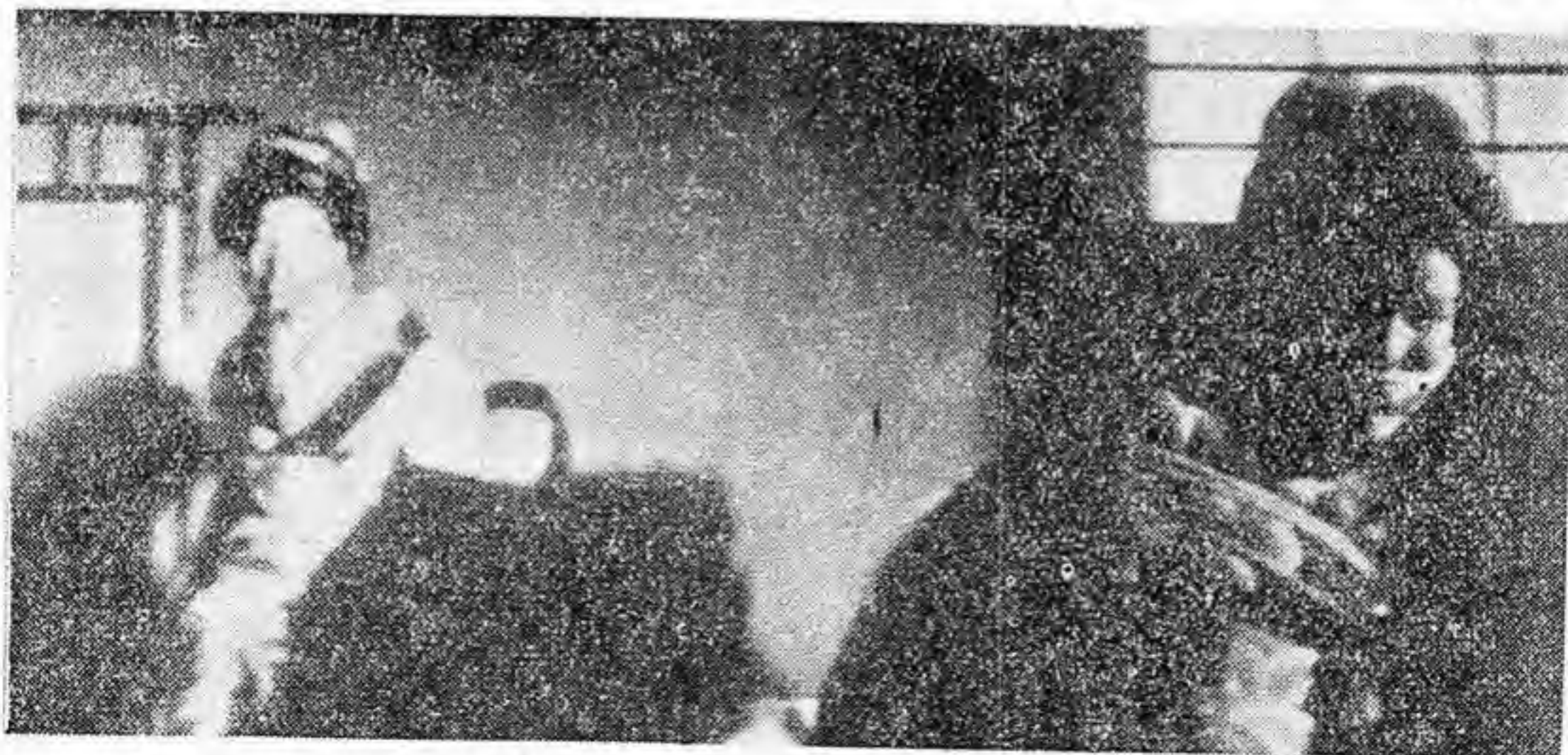
佐藤 箱根山中で娘を襲う処は雲助の汗拭きに定まってるようすわネ。

須賀 女のひとを縛って猿轡を嵌めると、ひどくみじめだわ。啓子さん、最前あなたがいったお姐さんというひと、今に猿轡を嵌められて、いじめられるわよ。段々にそうなるんですって、ホホホ……。

牧 まあ、それは兎も角として、離れ離れになった二人のうち、お半が障子の前で立っただまま帯を纏まれ、後へ引き戻されるカットは迫力がありますね。何んというか、縛られても女の愉悅が窺われるっていう処でしょう。

佐藤 『映画情報』によると、このお半になった青山京子っていうひとは、大映初出演でクラシック第一日目に縛られたと書いてありました。

牧 もうすっかり覚悟して入社した形だな。……話は飛びますが総じて女の人、皆さんもその一人に入るんだが、一度後手に縛ら





れて自由を失ってうと、なまめかしさが溢れて身体の線が色っぽくなるんです。だから怖いとか何んとかいうことを抜きにして、これはと思う男性に縛られるのが——毎晩縛ら

れちや困りますけど、いい意味での向上だと思えますね。

須賀 愛情の告白？ ホホホ……変なこと

柳 そうか知ら？ だったら、皆さんの代りに縛って頂こうか知ら。でも……怖いわ。だって……妙なことになるんですもの。

牧 なりはしませんよ、大丈夫。

その証拠にお鈴が物干し物まで逃げて来た時、誤まって縛られた右腕を出して慌ててまたひっ込め、後手に直す処があるじゃありませんか。演技か演出のミスといえはいえるかも知れんが、やっぱりあの場は縛られていたんだナ。

須賀 そりや、先生。お芝居なんですもの。監督さんに怒られちゃうわ。勝手に解いたりしちゃ。ねえ……

牧 だから、そうならないようにしっかり縛られていなくっちゃっていう意味ですよ。



年目ね。あれ、とっても重いよ。赤い長襦袢一つだったなら逃げられるけど、裾を曳いたらもう駄目ね。

牧 動く美術品といったら長い裾の間から真紅の長襦袢か、蹴出しがチラチラ見えるのが縛られた女に好適ですネ。弁天小僧にはそれがなかった。もっともあつたらおかしいが、このお鈴だけは振袖で裾を曳かせたかったですネ。

佐藤 昔の腰元さんなんか別の姿になりま

すわねえ。いわば御殿の制服みたいものですから地味で、ひどく控え目で……。

須賀 きものの特価品なんでしょう。あたし達見たいに……。

牧 飛んでもない。裏をつけて一万円以上だったら、美千子さんだってそのまま両手を後に廻して御覧なさい。そして心持ち、ひざを崩すと……ホラ、その通り緋縮緬の下着がこぼれるでしょ。佐藤さん、そこに麻紐があるでしょ。それで須賀さんを、嘘でないように縛ってみて下さい。

笑わないで……笑ったりしちゃ、今様娘のお鈴さんから苦痛が出ますよ。で、——この手拭いで鼻の下を猿轡して御覧なさい。ホラ



ホラ笑い顔が泣きべそかいたようにになって来た……そうして、

黒髪をうなだれると愛情の告白を身体でうったえてるようになるんです。この姿が動かぬ美術品でしょうね。いや、どうも御苦労さんでした……どうですか？ お気持ちは……、万更でも、ないでしょう。

須賀 おう怖わかった……ドキッとしちゃって、これじゃスター廃業ねえ。

牧 飛んでもない余興が入って失礼しました。まあ、ざっと



こんなもんです。これから先演技というかな、実演が出来るとスターになれるんです。それともう一つは女のひとが縛られて行く過程です。この時の表情が男の胸を騒わがせる——それが六ヶ敷しいから時代劇でも現代劇でも略して、いきなり縛った女を出すということになるんです。

佐藤 縛る途中が映画なら映倫、お芝居ですと検閲で問題になるんで御座いますしやう？ 柳 恋しい人に自分の手が後手に結わえられて行く処がいいんですって……ホホホ、これは或る姐のお話。

牧 ……でしょ。只じや縛らせませんよ。今晚もあのひとに縛られるって姐さん待って



るんじゃないかい？ そんなもんですよ。ただ、正面がまずいなら横顔でもふるいつきたいような美人でなくちやいけませんね。

須賀 アラ……失礼ネ、おあいにくさま。

牧 いやア、こりや冗談だが女は誰でも縛っていいとは限らない。ずっと前ですが新東宝の「緋ぢりめん女大名」って映画を見た時、ラストシーンあたりで、盗賊が店舗に押入って縛った娘を連れ出すシーンが残念ながら美女でなかった。スナップを引伸すと鼻があぐらをかいてたというのは困りますね……

柳 せいぜい厚化粧でもしてカラーで撮っ

て頂くのねえ。

佐藤 そうじゃなくって八、九人前のお顔で、魅力的な衣裳を着て後手に縛られると、先生のお点が百点満点になりますわよ。

須藤 じゃ……あたし帯解いても一度、縛って頂くわ。ホホホ……

牧 マア、マア……そう皆さん、女弁天になっちや眼がくらんじやう。要するに、縛られるんだったら若いうちについていう意味なんですよ。皺が寄ったお半やお鈴だったら

天下の美男子雷蔵さんも、ああ重労働までして、屋根の上を飛び歩きませんよ。

御用提灯とマッチして、見得を切る処に縛られた美女在りということになるんでしょうね。

一応大映としては美女を揃えて縛ったんだから九十点という処かな。

柳 先生、本当の折檻というのは、やっぱり女のひとを縛ってからやるんでしょう？

牧 弁天小僧にはありませんよ。雷蔵君が青山京子のお半を苦しめたのは遊戯なんです。だからあとで型破りの時代劇で接吻したじやあり



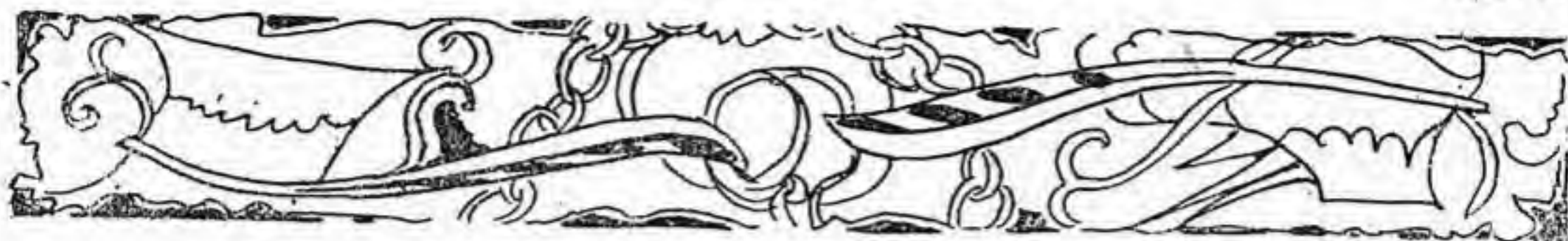
ませんか。まあ今日は女のひとを縛る、縛らぬという処で止めときましよう……でない、この次の楽しみがなくなるから。如何ですか？ 皆さん。

(緊縛映画スナップシリーズ第8回作品)

—— 完 ——

予 告

六月誌上のスナップシリーズは、松竹作品「女肌地獄」を掲載予定しております。どうぞ御期待願います。



アグネス・ヴァルダの

『妊婦のヌード写真』

について

羽 村 京 子

最近、平凡社から出た「世界写真年鑑」（一九五九年版）のグラビヤー一六ページに、本職の写真家の手になる妊婦のヌード写真が掲載されています。いよいよ本物の妊婦のヌードが現われたわけです。

「ほんもの」というのは、この作品が妊婦のヌードそのものを、しかも、その大きな腹とその全身を、直接に鑑賞の対象にしているからです。

作者はフランスの新進女流写真家、アグネス・ヴァルダという人で、さすがに本職の写真家の仕事だけあって、見事な作品だといえましょう。この作品を紹介することが、わたしのこの

拙い文章の目的です。

昨年八月号と十月号、また今年の二月号に、わたしはつまらない文章を書きましたが、それらの中で、妊婦のヌード写真をとることを提案しました。それについてはその後、何人かの方のご賛成をえましたが、今度また三月号では、影浦栄様の「女性のお腹に関して」という手記の中で妊婦のことを、あつかっていらっしやいますね。臨月の妊婦が、まん丸くふくれ上った大きなお腹を出して寝ているところを描いた挿画（一〇六ページ）もよかったです。わたしも経験があります。が、お腹を診察してもらう妊婦の細念した気持が、よく描かれ



ています。

影様のお話では、浅草のストリップ・ショウのステージで、お腹の大きな女が踊っていたということですが、一体、何カ月ぐらいのお腹をしていたのでしょうか。もし実際に御覧になった方がありましたら、教えて頂きたいと思います。「明らかに妊娠している女」というのですから、わたしの考えでは、おそらく妊娠五カ月ぐらいではないかと思えます。裸ですと、もっと早く目につくのもかもしれませんが、妊婦のお腹が目立つようになるのは、五カ月ぐらいからですから。六・七カ月になると、もううんと大きくなってしまって、とても舞台でなんか踊れないと思えます。多分、大ぜいの踊り子の中にまじって、お腹の大きい女が踊っていたというだけのことと、孕んだ女のストリップを見せる目的ではなかったのでしょうか、もうそんなにお腹が大きくなってしまったからは、舞台に立つことはないでしょう。もっとも観客が気づいてひやかしたというのですから、妊娠したお腹に対する観客の好奇心も幾分、計算に入られていたぐらいのことはあるかもしれません。しかしとにかく、わたしのいう妊婦のストリップというのは妊娠末期の本当の妊婦を舞台で見せるのではなくては、つまらないと思います。でも実際に、そんなからだで、ストリップの舞台に立とうという女の人があるでしょうか。

もう十年も前になるでしょうか、防犯展覧会というのが一時はやったことがありました。その頃まだ少女だったわたしも、胸をドキドキさせながら、こっそり一・二度見に行ったことがあります。その中に、司法解剖というのがあって、若い女のまっ白い死体が、腹を上にして解剖台の上にのせられている写真がありました。

よく見ると、盛り上って、妊娠六・七カ月ぐらいでしょう

か、彼女が妊娠していることは明らかでした。

わたしはさらに、彼女が妊娠しているかどうかをたしかめようと思って、写真をよく見ましたが、解剖学の知識がない上に、はらわたがまっ黒くゴジャゴジャと写っているだけでどれが何だかよく分らず、とうとうあきらめてしまいました。

もう何年も前の、はっきりともおぼえていないことを、急にまた思い出したのは、わたしがヴアルダの妊娠のヌードを見た時の感じがそれと同じだったからです。画面にうつっているのが女性のヌードであるということはすぐ分りました。しかし、どうも異様なかたちなのです。どこが異様なのかということはすぐには、ピンときませんでした。よく見ると、お腹が異様なのです。さすがのわたしも、この女性のからだを異様にしているその原因が、妊娠してぶっくりと大きくふくらんだ彼女の腹部にあることに気づくまでには、いくらかの時間を要しました。そして、あっと思わず息をのんでしまいました。

「この女の人、お腹が大きいね。」

しばらくして、やっと出た声が、うわずってかすれているのが自分でもよく分るくらいでした。それでも、まだ半信半疑だったわたしは、急いで巻末の解説をめぐりました。木村伊兵衛の署名入りで、文章の中に、はっきり「この妊婦」という言葉が出ています。彼女が妊婦であることは、もはや疑う余地がありません。わたしはもう一度、写真をよく眺めてみました。

妊婦のヌード写真を提唱した、わたしらしくないとおっしゃるでしょうか。でも、妊婦のヌードを正面切って堂々と写した作品が、世界の写真の傑作の一つとして、このような書物に堂々とのっているのを見ては、さすがのわたしも驚いてしまいました。しかも、それが本屋の店頭で、だれでもの目に触れる処にあるのです。



とにかく、ぼつてりと不気味にふくらんだ彼女の大きな腹は、まがう方もない妊娠末期特有の症状を、はつきりと示しているのです。

写真は、床の上に尻をつけて坐った妊婦の全身を、ヌードでとっています。彼女は、からだを右の方(向って左の方)に向け、左脚をこちらの正面に立てていますが、半分以上、左腕で隠された顔は真直ぐに、こっちを向いています。立てた脚の向って左側に、孕んで大きくなった彼女の腹が、強烈なライトを浴びて白く浮き出ています。まるで何か大きな獲物を呑みこんだ蛇のように、みぞおちのあたりからぶっくりとふくらんだ彼女の白い腹は、奇妙に蛙を連想させます。光線は向って左側からあてられているので、ちょうど真正面から光をうけた腹部を、妊婦の左の方から写した恰好になっています。お臍が、ずっと下の方についているように見えるので、ますます蛙腹という感じがしますが、これはモデルが腎を、ぐっと後に引いてポーズしているためです。孕んだ腹の重みで腹が下の方にたっているように見えますが、そうではありません。立てた脚の向って右側に黒いマッサになっている暗いかげの部分をよく見ると、妊娠の巨大な腹部の大きな部分と彼女の腎部とが、この黒いかげの中に沈んでいることに気づくでしょう。このマッサは写真的に必要なものでしょう。でも、光がわずかに臍のあたりまでしか当たっておらず、腹から腰にかけての巨大なポリウムが闇の中に沈んでいることは、ちよつと残念です。

この腹の大きさだけからいっても、彼女はとも見ても妊娠八カ月以上の妊婦です。九カ月、或いは臨月なのかもしれません。とにかく妊娠の末期にあることは、くっきりとあらわれている妊娠線が、その証拠です。妊婦特有の、張りつめて鈍い艶を持った下腹の皮膚の質感が十分に描写されていないのは少し

物足りませんが、腹部についていうかぎり、皮膚の感じは、かなり克明に描写されています。

白と黒の、コントラストの強い、激しい画調であるために、見落されやすいのですが、異常に発育した腹は決してたるんではいけません。腰をぐっと引いてお腹を、ずっと画面の下の方におとしているので、腹の線が、うんと長く伸びて半分は黒いかげにかくれているのです。ですから彼女の大きな腹は、十分にまえの方につき出ているのです。このポーズが彼女のお腹をいちばん大きく見せるポーズであることが、よく計算されています。もちろんそのお腹は床から何センチか離れていますけれども、それがいわば彼女の重心になっています。暗い部分をも想像してあわせて見ると、ぶっくりとふくらんだ彼女のグロテスクな腹部全体がすばらしいポリウム感をもって迫ってきます。つまりこの写真は、あくまでも彼女の大きな腹そのものがねらいなのだと感じられます。

彼女の腹が蛙のお腹のように見え、それが不気味な安定感をもっているのも、この写真の狙いが、妊婦の腹を描き出すことにあることの結果なのでしょう。ただ、下腹の線が、かげの部分に入っていて十分に妊娠したお腹の大きさを感じさせないのが、欠点といえはいるでしょう。

作者アグネス・ヴァルダは、巻末の略歴によると一九二八年生れですから、約三十歳でしょう。妊婦のヌードをとったこのような作品が、うら若い(?)女性の手になるものであるというところに、わたしは非常な喜びを感じます。それと同時に、この写真のモデルになったフランスの若い妊婦のことを色々と考えてみました。作者の勇氣にも感心しますが、この妊娠したモデルの協力がなければ、この作品は生れなかったでしょう。作者はたしかに、妊婦のヌードを芸術的なきびしさで描いていま



す。しかしこの妊婦は、みにくいともグロテスクともいえる彼女の大きな腹を、恥らいもしないでカメラの前に見せたときに、彼女のその大きなお腹が世界の男性たちのいわば面白半分の見せ物になることもありうるということを、はたして気づいていたのでしょうか。わたしは彼女に一種のマゾヒスティックな共感と、同時に、その生々しい現実を世界の人たちの目に、さらすことができる彼女の幸運に対して、一種の羨望をさえ感じないではいられません。妊娠末期の徴候がありありと出ている大きなお腹を隠すどころか、さあ、よく見て十分鑑賞して下さいといわんばかりに見える彼女の無恥は、わたしをゾクゾクさせてしまいます。

女性の生々しい姿を写したこのような作品をつくることは、やはり女性でなくては出来なかったことかもしれません。日本でも常盤とよ子という女流写真家が娼婦をとった写真集である「危険な毒花」を出して、いろいろ問題になったことがありましたわね。妊婦のヌードだって同じことでしよう。常盤さんは、たしか二十八歳ですからわたしより一つ年上です。ヴァルダも常盤さんもわたしも、同じ世代に属するところをみると、やはり何か共通のものがあるのかもしれないですね。

それより巻末の略歴のところに載っているヴァルダのポートレートを見ていて、わたしは、ふっとあることを思いついたのです。本当にありそうもないことですが、このオードリ・ヘッパバーンばりのM型の顔は、彼女の作品のモデルと、どこか似てやしないかという気がしたのです。モデルになった妊婦の顔は、わずかに見える唇のはしと片一方の目だけから想像するしかないのですが、もし、このモデルと作者が同一人物だったとしたら、どうでしょう。まさか、とは思いますが、ヴァルダ自身が、その臨月の妊娠したからだを、セルフ・タイマーでと

ったのだとしたら……。ありそうもないことです。しかし、ありうることではないでしょうか。自分の孕んだからだを、さも何くわぬ顔をして世の中に発表する……。ちよっと素晴らしい思いつきではないでしょうか。

フランスの女、フランスの妊婦というわたしは画家のモジリアーニのことを思い出します。あの妖しい官能的な絵を描いたモジリアーニ自身は、たしかイタリア人だったと思います。が、わたしのいうのは彼の妻です。彼の妻は彼が死んだとき、彼の子どもを宿していて、臨月に近い大きなお腹をしていましたが、彼の死を悲しむあまり、アパートの屋上から下の舗道に向けて身を投げたのです。孕んだ腹が舗道に激しく打ちつけられ、腹が一たまりもなく裂けて、目もあてられない惨い死に方をしたということです。

それは、きつともものすごい光景だったにちがいありません。断末魔のあえぎとともに、血の海の中でのたうっていたことでしょう。かりにそういうすがたを往来で群衆のまえにさらしている自分のことを想像してみたらどうでしょう。すごいマゾヒスティックな感じですね。

つまらない空想に、つぎからつぎへとふけていては切りがありません。わかりません。わたしはもう一度、ヴァルダの写真にもどりたいと思います。

わたしはひそかに、ヴァルダのこの作品に刺戟されて、日本の写真家たちが、妊婦のヌードをとった作品をカメラ雑誌などに沢山、発表するようになればいいと思います。ほんとうにそうになったら、どんなにすばらしいことでしょう。わたしは一日も早くそういう日が来るのを待っています。

そこで読者の皆さんにおねがいですが、ヴァルダの他の作品で妊婦のヌードをとったものがあつたら、ぜひ教えていただけないでしょうか。

新稿

ある夢想家の手帖から



イデオロギイとエロチシズム
理念と行為とは性の分野に
おいては等質である

— キント —

沼 正 三

第六章 生きた玩具としての人間馬

更に一連のフランス艶笑本、例えば「^{カリビデス}腎美しき女達」「捲れたスカート」また「あるロシア踊子の回想」などに言及しよう。これらは近年十年ないし二十年間ドイツにおいて甚だ歡迎された。イギリスその他の國々でもそうであった。

— モル「性科学大系」

前章の侯爵令嬢の幼少期における召使観、即ち「人形の代りに遊ぶ様にと与えられたこの男の子を好き勝手に扱ったとて、何で悪い道理があるう？」と考えるくだりは、階級的な懸隔にマゾヒズムを感じ得るひとには刺戟的であろう。

これだと思ひ出すのは「あのロシア踊子の回想」(Mémoires d'une Danseuse russe) である。作者はE・D (Dumoulin の匿名)。こ

の小説は鞭撻愛好者の古典たりうるものと言われ、凄惨な鞭撻場面
に満ちるが、獵奇的な好色の書に属する。戦後辻好夫氏の訳書(『
ロシア宮廷の踊子』)が出たが、無難な箇所ばかりの味気ない抄訳
に過ぎず、原著の俤は更になかった。

この第一部第一章が「生きた小形共よ！」と題されているのであ
る(附記第一)。女主人公マリスカは一八四二年ウクライナ地方の
領主の邸に、奥方の小間使だった女奴隷の腹に生れ、少女時代をこ
こで送る。公子と公女が各一人宛にいるが、マリスカは八才の時、公
女の十才の誕生日に、花で埋められた籠に入れられ、鞭を捧げ持た
されて、公女の許へ送られる。母君からの誕生祝の「生きた人形」
なのだ。公女の靴の先に接吻し、鞭を捧げ渡す。こうして、以後六
年間、もっと年長の二十人の生人形と並んで、生きた玩具として
の奴隷(厳密には体僕^{セルク})生活が続けられるのである。

この間の見聞を録した第一部は、全篇の三分の一にあたるが、一番面白い。然し、例えば、十二才になって初めてマリスカが、貴婦人や、老顧問官から種々、仕込まれた経験を語る。「寝台の備品」の章にしても奴隷達に預けられての朝の入浴から始まり、生きた化粧道具（例えば、ヤブー二四章二節の生きた姿見はここから借用したもの）を鞭しながらの奥方の気難かしい身仕度を描く「奥様の御化粧」の章にしても、貴婦人達の後始末する役目の奴隷達の心理を述べる「イワンとレーナ」の章にしても——奥方が馭者イワンの眼前にターチヤを鞭たせる詳細を記録した「奥様の日記」と題する附録に至っては尚更だが——検閲事情から考えて、訳出は到底不可能である。そこで比較的健康で明るい部分として、人間馬騎乗に関する記述を紹介して見よう。

奴隷達に囲まれて育つ公子、公女には前章の小説でのテレーズ（本章冒頭）は、改めて頭の中で考える迄もない自明のことである。テレーズはコロンベルを馬にするのに、人目を避けねばならなかったが、公子、公女達にとっては、奴隷の馬に乗るのは公然の遊びだ。幼児期には木馬代りだろうし、少年期には愉快なスポーツの一種になる。冬は屋内の大広間で、夏は戸外で、奴隷達は馬として奉仕せねばならぬ。（それも両脚型の人間馬である）近所の公子公女にも——子供が自分の玩具を貸す様に——使わせることがある。模擬競馬の有様を引用すると——

『夏になるとよく御近所から坊ちやま嬢ちやま方がお遊びにいらっしやいます。その時分なら青々としている芝生の上で人間馬による平場競走、障害競走が催されます。この時には見物人が馬の速力と跳躍力を増進させるのに鞭を使うのです。……坊ちやま方、嬢ちやま方が競馬騎手風に跨ります。馬達は色とりどりの靴をはき、髪の毛が風になびいてサラブレッドのたてがみの様です。どの馬もがっしりした体格でピチピチしています。初めてこんな競馬を見物し

ました時、わたしは心ひそかに思ったことでした。こんな酷い騎手に馬として奉仕することができるとは恵まれた体にはなりたくないものだ。』

平場競走の場面は略して——

『障害競走は変わった趣向です。一つのハードル——これが六つ設けられています——の両側に、細いが強靱な乗馬鞭（クラバウジ）を握った見張役が二人、それも男の子と女の子という組合せで立つのです。ハードルの高さは一尺ですが、騎手を背にした馬にとっては越え易くはありません。然し年少の暴君達御一同の趣味には、それでこそ正しいのです。人間馬がすぐ越さなければ、乗馬鞭が後押しをします。この一撃はメスの様に痙攣する筋肉を引き裂くのです。

一匹がハードルを越えそなうって騎手と共に転びました。すばやくあぶみから足を抜いて起き上った騎手は、馬のたてがみを両手で掴んで上へと引っ張りました。馬は悲鳴をあげて嘶きました（ここでは省略した平場競走の条にも、悲鳴を馬の嘶きに擬した文章がある）が、それが一層声高くなったのは、ハードルを見張っていた女見張役の乗馬鞭が空を切って五、六回鳴り響いた時でした。一撃一撃が厚いお尻の肉に深くめり込むのでした。外にもこうした気まぐれな調教を受けたのが三匹いましたが、皆これでもう一度立ち上りました。涙が顔を濡らし、嘔吐（えず）と呻吟（うめき）は哀切を極めておりました。……

騎手と見張役とを何度も交替している中、馬はすっかり乗り潰されてしまいました。まともなお尻をしたのは一匹もありません。みんな脹れあがって真赤なみみず脹れ……メスで切った様に血を流しているのもありました。……』

右の引用部にあぶみとあるから説明しておくが、人間馬になった奴隷達は両側にあぶみを垂らした帯革を装着されるのである。鞍を置かぬ様だが、マリスカが一度人間馬としての適格を試みられたこ

とがあつて、そこでは『彼女はわたしを裸にせよと命じ、鞍を置きあぶみを踏んで、あつと思つてに跨っていました。ハイシ、マリスカ、ハイシ、進め!』とあり、マリスカがまだ幼な過ぎて馬は無理と分ると、『お嬢様はわたしから鞍を外して、代りに十五才位の肥った奴隷で年の割にはとても発育の良い奴に装着させました。腰はがっしりと力強く、栄養の良い駿馬の様な太腿を持っています。今迄一度も人間馬として使用されたことはなかったのに、御嬢様をお乗せして広間を馳せ廻った有様といったら、まるで生れてからこのかた、外のことは何もしなかった見たいでした……』とあるから、鞍は用いられたのである。ただし、この人間馬は両脚型だから、この鞍は肩で支持される特殊な形式のもの（恐らくあぶみを吊る帯革とも連絡している）だろう。

これが四這型でないという点について、大切なことを述べておきたい。一体「愛の馬」は女天下の象徴である。つまり四這型は男が姿勢を低くし獣畜の形態を模するという点に重きを置いた人間馬である。讓治、ネンダ王、アリストテレス……皆、本来相手の女と階級を同じくするちゃんとした人間である。だから、女に征服感を与える為には、四這にならなければならなかったのだ。乗手である女からすれば、四這型の馬では遅いけれども、征服感を味う為にスピードを犠牲にしているわけである。つまり、四這型は、精神的隷属（この概念についてはいずれ別論するが）表現の為の馬である。

そこで、もし、改めて征服の必要を感じないとしたらどうだろう？ 乗手としては、少しでも移動のスピード感を要求するに違いない。ロシア貴族の公子、公女達にとって、奴隷達は自分らの快楽の為の手段に過ぎない。四這にしくたつて二本足のままでも彼らを獣畜視するに躊躇しない。ここに両脚型人間馬が誕生するわけである。いわば、この型は階級的隷属の所産である（附記第二）。ここには精神的隷属から生ずるマゾ感はなくなくなっているが、階級的

隷属を楽しめるマゾヒストにとっては、そんなことは問題でないのだ。

たとえお尻を血だらけにされても良い。こんな我儘なお嬢様（附記第三）の側に仕えて、玩具にされ、「馬におなり」と乗り廻されて見たい気がするではないか。私達だとしてそうなれば「まるで生れてからこのかた、外のことは何もしなかった見たい」に見事に馬の役目を勤めるのだが……

附記第一 邦訳があるから参考の為、原書の見出し全部をあげておこう。第一部 領主邸の奴隷だつた少年時代 1 生きた人形達 2 寝台の備品 3 奥様の御化粧 4 鞭の狂宴 5 イワンとレナ 6 少暴君 7 処刑台 第二部 モスコフ・ファツシヨン・アトリエでの修業時代 1 アトリエで 2 愛の前戯 3 教化院で 4 妾の番が来た 5 肉体パノラマ 第三部 王立バレエ学校で 1 舞踊教習所 2 訓練中に 3 寝室で 4 妾の登場 5 舞台変転 6 今や権力を握った 附録 ある領主夫人の日記から（イワン）

附記第二 前章の小説でのシリーズとコロンベルの関係は精神的隷属の様に思えるかも知れないが、むしろ階級的隷属的色彩の方が強い。それが両脚型人間馬に表現されているといえる。要するに改めて男を屈服させることを考えずに、乗手として男を利用し得る場合には四這型より両脚型が選ばれるのが自然なのである。旧第一一二項で紹介した、黒人女王姉妹の乗り廻す肩車（の人間馬）も、同所で言及したロシアの代理公史の使用したコサツク人の召使の肩車も皆その好例である。前章題辞の「吸血魔女」の文章も、既に精神的隷属下にある青年を妖婦が自分の奴隷として扱った場合として理解すべきで、馬にすることが征服の行動になつていないのである。この辺の差異は、この種の小説を読まれる場合、充分注意されたい。

附記第三 公女が馭者イワンの裸体を目にしても心を動かされ

ぬことを敘して、『彼女にとっては奴隷は性別を具えぬものであった』(第五章)とある。旧第七八項に引いたロシア貴族令嬢の「男ではない、奴隷ですわ」という一句を想起させられる。奴隷をほしきままに馬にして乗り廻し鞭つこの気儘で冷酷な公女も、モスコの社交界で、同階級の男性に対しては——トルストイやツルゲーネフの小説に見る様な——しとやかな美少女だったに違いないのである。

第七章 人間馬による競馬

奴隷物語の形式を取ったものも多い。ローマ時代あるいは米国南部の奴隷生活に基き、残酷な女主人の欲望をばばに描いている。奴隷は土下座して彼女の足に接吻し色々なことをやらされるのだ。私は就中ゴッテの小説類をあげておく。

——モル一性科学大系——

前章で、四這型より両脚型の方が乗手の快感に奉仕する度合が大きいことを述べた。これは、馬の形態より馬の機能こそが乗手から要求されていると表現することもできよう。

然し、両脚型にも難点がある。重心が上に行き過ぎて転倒し易くなるのだ。前章の様に乗手が子供の時には好適の乗用畜だが、成熟した女体では、仲々だ。成人の女騎手を肩車にして疾走することは、相当の体格と訓練とを前提せねば(附記第一)、危険を伴うであろう。馬の機能たるスピードへの要求が、馬の形態から来る安全性を忘れてしまった観がある。

そこで両脚型のスピードを落さずに、しかも四這型の安全性を取り入れようという試みが起る。二人組み合せた芝居の馬、三人組み合せた騎馬戦の馬の様に、複数を組み合わせるのも一法だが、単独でも両手で何かを支えさせれば良い。移動性を維持する為には車輪が必要だ。こうして、四這型と両脚型の総合形態として補助車型が誕

生する。形態的にも馬に似て来るが、乗手の快感と安全を増進する為には本物の馬の機能を追求した結果そうなるので、その意味では、四這型——両脚型——補助車型という人間馬の発展系列の極致である。つまり、両脚型がそうである以上に、それは乗手の為の人間馬であり、精神的隷属より階級的隷属の場合に適する形態である。

この型の馬なら、成人女性を支えて安全に疾走することが出来る(附記第二)。前章で、模擬競馬の場面を紹介したから、もう一つ、補助車型人間馬による競馬の場面(附記第三)のある小説を引こう。奴隷物作家ゴッテの長篇「鞭と女達」(Die Geislerinnen)である(邦訳はない)。マジヤール系のハンガリー貴族(皮膚が白くないため黒人との混血児として扱われる為の設定である)の青年が女に欺かれて奴隷に売られ、女主人から女主人へと転々する植民地小説であるが、七人の女性がそれぞれ前後二様の役割で登場するという変った、複雑な筋書である。

小説は大革命前のパリで、ハンガリー外交官の息子で八才になるミクロスが、同年の遊び友達アンドレと牡鹿遊び(一人が他の背に跨って指を出し「牡鹿よ牡鹿よ角は何本」とあてさせる遊戯)をしている状景から始まる。十六才になるアンドレの姉エレヌがやって来て、馬になつてゐるミクロスの口へ、「そうら、お前の(※附記第四)大好物よ」と言いながら、いきなり鉛(ウツクシシメタル)棒を突っ込んで喜ばせ、ふざけてアンドレの代りに乗手になつて彼の背に跨り、彼を潰してしまう……このエピソードが後章に深刻に照応するのである。

二十年後まで話を飛ばせて、運命はミクロスをフロリダの農場の奴隷にしている(この農場主の夫人が彼の昔弄んで捨てた小間使だったのだがこの経緯は省略しよう)。キューバからの客、旦那ジースは、迎えに出た轎奴車を曳くハッサンの健脚ぶりが気に入り、譲り受けて連れ帰る。これが実はミクロスなのである。彼は農場(甘

焦烟（しょうえん）にやられず、意外にも裸にされた上、両手首を三輪車に錠結され、鞍を置かれ、轡（うしろ）を嚙（か）まされて馬にされる。そして十一、二才の美少年が彼を乗り廻した後、彼は、馬具は外されても三輪車への繫錠はそのままで、厩（うま）に曳かれ、馬丁の世話を受ける。——美少年は旦那の息子、その玩具代りにされるのか？

一週間程すると、事情が呑み込めて来た。このキューバ島サンチヤゴ附近では、年祭の余興に、農場主夫人や令嬢が騎手になり、黒人奴隷を人間馬にしての競馬が催される。ジアスの夫人ヘレナは目下弟を訪問旅行中だが、昨年の出場では惜しくも二位。そこでジアスは愛妻の為に健脚の奴隷を手に入れてやったわけなのだ。普通なら随時奴隷小屋から召し出して訓練するのだが、母の留守中、代って調教することを引き受けたアントニオ少年の発案で、競馬出場の日までずっと馬同様の生活を続けさせ、馬らしい気持にしようというのである。ミクロスは少年騎手を乗せて朝晩馬場を走り廻る。時々少年の姿や声が誰かに似ている様な気がするのだが、鞭と拍車が想起の余裕を与えない。苦しい猛訓練が三カ月続く。厩の寝薬の中での起居、全く馬並みの生活だ。

然し、楽しみもある。農場の労働から解放されるばかりでない。騎乗のあとでは、農場で勝手に口にすれば嚴罰を免れない甘蕉（カンキョウ）が貰えるのだ（これは茎を噛んで汁を吸うものらしい。主人が一方の端を握ったまま他の端を馬に啣（くは）えさせる様に書いてある）。『その甘さが、それを与えてくれる飼主の心情の優しさが、彼を魅して、乗られることを望ませた。そのいずれも、唯の奴隷である彼にではなく、乗用畜（ウツケイ）（馬）である彼に向けられており、そのことが彼に多少苦い思いをさせたが、畢竟この両状態は彼にとってどれほどの違いだったろう？』こうして次第にミクロスは、甘蕉によって飼育者の温情を解する馬の様な心境になってゆく（この辺は乗杉女史がニンジンの効用を説かれた三三年五月号の文を思い出させる）。

祭が間近に迫ったある日、少年を背に馬場を廻っている所へ一人の婦人が駆け寄って来て、「母さん！」と馬上から叫ぶ子を「可愛い子！」と抱擁する。ミクロスは真の女騎手ヘレナの帰来を知る。二人の対話に「アンドレ叔父さん」という言葉があり、ハツとしたが、直ちに、母親に自分の調教ぶりを誇示しようとする少年騎手の鞭に想念を捨てて、走り出さねばならない。汗を流しながら厩に帰って来ると、婦人は甘蕉の茎で靴に附いた泥（ドロ）（厩の前であるから馬糞かも知れぬが、別に「糞」という語があるので、泥と訳しておく）を払いながら待っている。馬丁に指図して轡を外させると、『農場主夫人は、棒（ぼう）（甘蕉の茎を指す。語呂合せの為の用語）を握り直して、「そうら、お前の（※※附記第四）大好物よ」と言いながら、汚れた方の端を彼の口中へ無難作に突っ込んだ。それを聞いた瞬間、彼は、今迄少年の声音から魔ろに感じていた一切のことを想起し、事態を理解した。彼の前に立っている婦人、その厳しい視線が家畜の体を検査し慣れた熟練さで彼の体——それを彼女は自分の乗物と見ていた——を撫で廻している。この女飼主こそ、幼友達アンドレの姉に違いなかった。二十年前、同じ様に彼に飴（アメ）棒（ぼう）（甘蕉の棒とかけた意味）を与えてくれた懐しいエレヌ（エレヌ）（スペイン風ではヘレナとなる）に違いなかった！ミクロスは運命の嗜虐趣味ある諧謔を味った。』

エレヌは亡命して西印度に渡り、スペイン人ジアスと結婚していたのである。彼女には勿論ハッサンがミクロスとは思ってもよらない。だが、昔、弟と入れ代って彼の背に跨った様に、今は息子と入れ代りに乗るのである。

『あぶみを踏んで、新しい女主人は身軽く鞍に跨った。三十（台の）女の豊満な一三五ポンド（一六貫三百匁位）の体重が、彼の背をしなわせた。』打ち明けようかと迷っていたミクロスの気持は、新しい女騎手の体重に抑圧され、激しい鞭撻に叩き出されてしまう。数日

間の猛訓練。遂に出場となる。大接戦の末の最後のコース——「先頭馬と半馬身の差になった。鞭が激しく下って彼の尻を裂き、彼を死物狂いの追い込みに駆り立てた。三カ月間彼は常に馬上の人の体重を負担と感じて来たのに、今あぶみを踏ん張って立つ重い体重の持主を彼は忘れていた。先頭を走りたいという競走馬のみの知る強い情熱が彼を捉えていた。……」

ゴールに入った途端、力尽きてヘレナを乗せたまま潰れ（これも二十年前のエピソードと照応する）、錠結されてる手首を骨折するが、見事に一着になる。優勝の名誉と懸賞金とを獲た女騎手のはしやぎ様は、彼に、負傷の苦痛を忘れさせるほどにも、競走馬たるの喜びを味わせる……。その夜、ヘレナは弟に優勝を知らせる手紙を書き、互に亡命の身にある不運を嘆く筆の走りに、ミクロスという名の彼の友達を可愛がってやったりした楽しかった少女時代のことまで想い出している。その時刻に、当のミクロスは高熱を發して臥床している。アントニオ少年は模範馬ハッサンを慰めに行き、甘蔗の茎を彼の口に含ませてやる。「若い主人の姿に彼は旧友を幻覚し、この植物から甘い思い出の数々を吸い出していた。……」

ミクロスはその後数奇な運命に玩ばれ、サーカスの人間熊として、熊の皮を着て、猛獣使サラ——実はサルタンの娘サザラードで、後日後宮で死刑になろうとする彼を救って宦官にする——に調教されたりするに至るのだが（旧第九二項附記第二参照）、本章での紹介はこの程度に止めよう。

前章の人間馬競馬が、ロシア帝政社会の実態から、貴族の家庭内で起り得たことと思われるのに反して、本章のそれは、公開の競馬といい、女騎手の騎乗といい、マゾ向きに話が過ぎ過ぎていて架空感が強い。然し、後に述べる様に、輓奴車などは実際に存在したのであるから、フランス革命当時の西印度植民地の風俗を今の常識で輕率に論断することは却って危険であらう（もっとも既の中で三カ

月の飼育云々は、やはりマゾ読者の為のサービスと見るのが穩当と思う）。

それが実際の風俗だったかどうかはともあれ、この徹底した人間馬飼育は素晴らしい。乗手の為の人間馬、即ち本物の馬に乗るのと同じ快感と安全を乗手に与えるという理想に可及的に接近した人間馬としての補助車型の意義が、その型の馬を並べての競馬という場面に見事に表現されているといえるのである（附記第五）。

附記第一 前章附記第二（旧第一一二項）既述の様に制度化の実例さえある以上、両脚型のもつこの困難さが訓練によって克服し得ることは疑ない。殊に白人の体格と膂力を私達日本人の貧弱なそれで律することはできない（花嫁を衆々と抱きかかえられる日本人男性は余りないが、白人男性には珍らしくないので分るう）。ヘーゲマン描く「アルゼンチンの女騎手」の図（三〇年三月号森本氏提供の「残酷な女性達面集」参照）は必ずしも空想でのみ可能な姿態ではないのである。ただ補助車型の方がより安全ということとは言えるだろう。

附記第二 補助車型人間馬について、馬場喬次氏は「女性乗馬考」（三一年四月号）で疑念を表明された（「ダイアナ夫人の男馬のアイデアは良いのですが、私がその様にやるとどうも背中が丸くなってしまい、私にはできませんでした」）。私自身小児用三輪車を使って実験してみたが、成程長時間は耐えられなかった。女体の荷重に対し、脚より先に、腕と胸（脊骨）が参ってしまう。然し右の附記で両脚型について言ったことはここでも妥当するわけ、訓練次第では充分、可能な筈である。クラフトリエビングの古典的な馬化狂の症例では、椅子を両手に支えた姿勢（補助車と同じ）で、六〇キロないし八〇キロの女に乗馬服装をして跨らせ、馬と同様に責めさせ、自ら馬を摸する動作をし、これを三十分ないし四十五分継続する。その後十五分の休憩を入れれば、こ

の女体騎乗を三、四回繰り返せる、とある。訓練次第でここ迄到達できるのだ。この男は夜も馬になって美女に乘られる夢を見ると述べている。

追記 (三四年二月号一二九頁の馬場好男の文を見て) 女性を馬乗りへ誘導することは私も数回経験があるが——私はたしかに犬党であるが、人間馬にも充分の情熱をもっていることはこの手帖新稿の諸章で氏にも分って戴けたと思う——右の馬化症患者の体験談もこれに触れている。曰く「女が何気なく私の背に尻を乗せる機会を作り出すのです。その時の気分を快適にしてみれば、その次の機会には、女が進んで「ねえ、ちょっと乗らせてよ」(Kommi, lass mich ein bisschen reiten!) と言う様になります」と。西欧では椅子生活という点からかかる状況が作り出し易い点もあるが、やはり女性の気質の活発性の問題である。これからはわが国でも段々誘導し易くなるだろう。

附記第三 人と車の結合体だから、車の方を重視すれば、自転車に擬せられ、競馬でなく競輪ということになる。フックスの採集したマゾ画は(三〇年三月号口絵参照)典型的な補助車型人間馬による競馬を描いているが、「生きた自転車」と題されている。男の顔から見ると、フランス人のマゾヒストの手に成るものかと思う。

附記第四 ※の箇所も、※※の箇所も、原文は *dein Vater*——子供奴隷家畜に対するドイツ語二人称は同じ *du* である。日本語としては他家の子供には「あなた」の方が穏当だが、それでは、後のエレヌの発言が全く同一だった為にミグロスの記憶が復活する関係がはっきりしないので、どちらも「お前」と訳した。なお、日本語の二人称の問題と(右の *du* にあたる)フランス語の *tu* については三三年四月号手帖(番外)で詳論してある。

附記第五 人間馬競馬の理想形態が補助車型にあるという点か

ら見ると、この種の競馬を扱った作品(速報三五、雑報一三一等)の多くが四道型を採用しているのは物足りない。競馬出場は人間馬の人権を無視して始めて成立するのであるから、一対一の精神的隷属の象徴としての意味の強い四道型は、本来競馬には親しまない筈である。この点、補助車型人間馬への騎乗をたしなまれる乗杉女史の犯罪予防、競馬の構想(重罪人を集め美女の馬にしてレースさせ、優勝すれば騎手には賞金、馬には減刑を与えるという)がゴム車輪、手枷つきの人間馬を考えておられるのは、さすがだと思う。

新作『血紅使用切腹フォト』分譲

モデル 絹川文代嬢 (大中判印画紙焼付)

第一集 六枚一組 八百円

略号(によ1)

第二集 六枚一組 八百円

略号(によ2)

輝美切腹

大手札判(9×13 輝)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

二枚一組 二五〇円

略号(こせ)

切腹のプレイ

大手札判(9×13 輝)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(れい)

女性自刃三態

大手札判(9×13 輝)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(じじん)

豊麗切腹三態

大手札判(9×13 輝)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(ほう)



マゾヒズム百景

馬場好男

第十八景 尻に敷く

旦那を尻に敷くとか、彼奴は奥さんのお尻に敷かれているよ等と公然と喋れるマゾ向きの言葉がこれ。女のお尻に敷かれる亭主の言葉通りの図を想像すると全く面白い、私が学生時代といっても中等学校に入っただけの頃英語の教師が（勿論戦前の事だ、昭和十二年だったと思う）何かの話から

「君達も今に大人になって奥さんを持ってみる、大ていの者が奥さんのお尻に敷かれるんだ、女のお尻は大きいだろ、それが頭の上にとっかとのしかかってきてみる、男はもうど

うにもならんよ」

といったことがある。みんなはゲラゲラ笑って聞いていたが私は此の時、我が意を得た気がして早く大人になり女のお尻に、本当に敷かれてみたいと思ったものだ。そしてきつと此の先生は女の人を大事にする人なのだと子供心に考えていた。大休私は早熟という言葉とは全然正反對だったから其の後成長するに及んで、此のお尻に敷く言葉の本質を知った様だが、女のお尻は男の上に乗るものとか、女とは男の上に尻で敷くもの、男は女のお尻に敷かれるもの等という事が人間界の定義にでもなったら全く素晴らしいものだと思う。

会社で同僚が喋っていた。

A「今朝見たんだがね、スクーターの後に若い娘なんだが横坐りに乗ってるんだ、然も相当、スピードで走っているのに此の女が両手をあげて髪を束ねているんだよ、幾ら何でも片手位は握まっていけないと危いよ、俺はハラハラしてしまっただが全くお転婆というか何ていうのか、あれが跨って乗ってるならまだ落ちるという心配も余りないけれどね、今の女の子は凄いいよ」

B「ナニ、女のお尻は重いから坐りがいいんだよ、ぐっと乗ったら落ちないのさ」

C「敷いてしまったら、もう落ちないのが女

の尻か」

私も早速此の中に入って雑談を交したが、女の尻に敷かれるという言葉は男も女もカンタンに口から出ているものだと思う、そして男は尻に敷かれない、女は尻に敷いてやるという言葉も、冗談にしてもよく使われているものである、もう六、七年も前の事だが一寸した知人に大吉というのがいた。知人といっても私がよく知っていたのでなく父が長い間いろいろ面倒をみてやった男で、その頃でもう四十才位だった、職人肌の男で若い頃は散々道楽をしたらしく、なかなかまともな生活に入らず何時も貧乏をしていたが、新宿に屋台を出すのに父がいろいろお金を出してやり又、彼が心底から惚れたという女との結婚まで世話して、まともな道に入り出したのである、彼は其の後、断然稼ぎ出して夫婦仲のいい事も評判だった。或る夜、私が一寸した父の使いで彼の汚いアパートを訪ねた時の事である。

私はドアをトントンと叩いていつもの様に「今晚ワア」とパツとあけて、カーテンの脇から首を出して部屋を覗いたのである。

「あら若旦那」

私は彼のおかみさんの顔とバツタリ眼を合わせたが驚いたのは、着物の裾もはだけて此の女房が、仰向けにひっくり返っている大吉

の胸の上あたりに馬のりに組敷いていたのだ、二人は小さな食卓で一杯やっていたものらしく、ごたごたと爛びんや肴がおかれてあり、二人は大分、いい機嫌になって私が此の有様を覗いてもそのままの姿なのだ。尤も今更、動けなかったのかどうかは判らないが、「いやア、若旦那、見て下さいよ、あつしは此の頃、こてんこてんですよ、気の強い女房に惚れたばかりに此の因果で毎晩こうして尻に敷かれずめですぜ」

「もがいても駄目だよ、じっとしておいで今夜という今夜は本当に白状させてやるからね。ねえ若旦那、聞いて下さいよ。此の頃こいつの様子がどうもおかしいと思ったら」

と喋り出したが、惚れた、惚れられた、別の女に手を出した、どうのこうのという話で此のおかみさん、色白で艶っぽい方だが、酒が廻った故か、尚綺麗にみえて、大吉の両手を抑えて馬乗りになっている姿は、私の方が惚れ惚れする位であった。「今、こうして折かんでいるのですが、人が来れば許すと思ったら大間違いだからね。私は正しいから誰が見てたって平気だよ。さあ、どうだ、白状おし、そして若旦那にもよく謝るのだよ」と二人共酔っぱらっての静かな格闘である。

私は変な処に気をつかって、その座をしらせさせない様に（本心はとっくりと女の馬の

り姿と、女に馬のりされている男の気持を味わいたいと思って）わざと自分も勝手に酒をのみ乍ら、

「大吉さんがよくないよ、姐さん、もっとも」とこらしめておく必要があるね」

等とわざとあほったりした。そうする事が大吉も又、嬉しがっている事を私は素早く読みとっていたからでもあるが、心底、女に惚れぬいた男は、たしかにその女に対しては弱いものであると思った。

女の尻に敷かれる男が当り前となりマゾヒストという言葉がなくなつて——尤もそうになると、少くとも我々の興味は半減以下になるかもしれない。望むものが得難い処に不思議な欲望があるのだろう。

第十九景 職場にみるマゾ

新聞の映画欄の或る写真に「水着は着ないでも好演」と題して水着の女王として有名な女優エスター・ウィリアムスが現在ローマでシヨールパンツ、黒のブラウスというシックないでたちでカメラに向っているその場面というわけで、撮影前、エスター、ウィリアムスが両手を腰にあてて立ちはだかり、片足をスタッフの一人の男のひざに乗せてクリームをすり込んでもらっている……いやすり込ませている写真が出ていた。

そのスタッフは、まさにエスター・ウイリアムスの素晴らしい素足に、接吻しないばかりに身をこめて、両手で支えているといった具合である。羨しい役得ともいえる職場の男性だ。ましてレディ・ファーストのあちらだから、こんな事は日常茶飯時の事だろうし、こんな中で仕事をやってみたいと、此の写真を見ながら考えたものである。脚のついでだが靴屋も何となくマゾ的である。街頭の靴磨きが、女性のスカートの中に頭を埋めんばかりにして靴を磨いている図もそうだが、靴の注文で寸法をとっている処や、足に合う靴を次ぎ次ぎと穿かせてもらっている女性の姿なども、なかなか胸ときめかす風景である。靴屋は靴屋で椅子に腰かけた女性の前にうずくまって、そっと脚に手をかけて靴を穿かせられる。まさによき商売である。前にも或る靴屋でチラッと見たのだが、幾つもの靴を脱がしたり、穿かせたりしていた靴屋の男店員が「一寸、お待ち下さいませ。こんなのは如何でしょう」

と、その若い女性の脚を、いとも無難作に、そして至極く丁寧に、自分のひざの上に乗せて傍らの靴に手を伸ばしたが、女性の前にひざまずいた此の店員の動作には、みじんも公衆の前でとる動作に嫌味な処がみられないのだ。此の時、私はつくづく此の店員が羨しい

と思ったものである。

それから百貨店の婦人服売場等もそうである。殆んど女店員が多いがそれでも首に巻尺をかけた男の店員が時折り現われて、いんぎんな態度で女性の背後に、ひざまずいて寸法をとっている。スカートの長さではかる時など、まさにそのものズバリ。女性相手の商売に私も何か転身しようかと、つくづく思いめぐらす事がある。

態度でマゾ的なのが銀行屋だ。誰かれの区別はつけられない商売だが、それでも我々の目からみていて、公衆の面前で憶面もなく若い女性に「いらっしやいませ」と丁寧に頭を下げ、やさしい言葉使いで応待出来るのも此の職場ならではである。

私の友人に某銀行に勤めているのが居るがこれが又、客に接する態度がそのまま私生活に現われて、言葉使い、身のこなしは寸分のスキもないが、どうも付合ひ辛くて困るものである。彼の妹が又、大変なお茶っぴいで、「うちの兄さんは私のドレイよ。朝なんか靴も磨かせてやるの。ううん、始めはそんな事させるつもりはなかったのだけど、私のやり方は乱暴で見居れないって自分でやり出したのよ。洋服だって、ちゃんとハンガーにかけて仕舞ってくれるわ。此の間なんかケンカしてお兄さんはもっと男らしくなんなさい」

て兄貴の胸の上に馬のりになって頬つぺたをぶってしまったのよ、それでも兄貴、怒らないのよ、私をぜんぜん子供と思ってるのかしら、でも私、兄貴が一番好きよ」という事だった。

最後に、これは職場には違いないが一寸ピントが外れるが、終戦直後、婦人警官が誕生した頃の事である、某官庁の運動会があつて見に行ったが、その仮装行列の中で、若い女性が婦人警官に紛し、同僚らしい男の両手を、後手に細紐で昔の様な縛り方でいましめ、縄尻をとって引きたてる処をやっていたが妙に私の心を捉えて、私は他のものは見ずにこればかり凝視したものだ。縛られている男性は演出効果を狙ってか、うつむき勝ちで罪人といった恰好、女性の方は大きく胸を張って威張っている、という言葉通りの表情。今以て此のシーンが脳裡から消えないのである。

【伝言板】

モデル嬢着用済の下着類が大分溜まりましたのでお譲りいたします。御希望の方は返信料同封の上、希望品目明記して御照会下さい。在庫の分につきお返事いたします。

(本誌写真部)

創作

王宮の浣腸室

第一回

柴崎黎子

國王キヤメル五世が狩の行幸^{みゆき}を遊ばされるというのでモール地方は大変な騒ぎでした。何しろキヤメル五世は絶対の人氣があったからです。王のお通りになる幹道は、馬車が揺れる事のないようにすっかり改修され、傾いた貧家は取り除かれ、御狩場の緑豊かな牧野も手入れされました。人々は自分達の野良をほうっておいても連日の勞務奉仕を買って出るという熱狂ぶりでした。

御宿舎に当てられるモール伯爵邸も本館をすっかり改装しました。その為に投じられた経費はおそらく莫大なものであったでしょう。に、老伯爵は少しも厭う風もなく、御用室の調度に迄出来る限りのぜいを尽しました。それというのも、伯爵がこの上ない、國王の信奉者であったからです。

伯爵は一つの計画を持っていました。それは姪である私を王のもとに遣わしたいという考えでした。王家には数多くの女官がお仕えしておりましたけれど、寵を得た女人の一門は一層の榮耀を約束されるという事でした。といつても、もう老いた伯爵が今更榮達を望む筋合いでもなく、そこはただ私の身の為を思つてのお考えなのでした。

伯爵夫人もお年を召して、お頭もすっかり銀髪になっておいででしたが、みなし子の私

を大層かわいがって下さっていました。伯爵家にはお世継ぎのケードバッドの他、お子様がなかったせいでしうか、私を実の娘のよう大切に下さるのです。

「レイや、おまえももう十五です。いつまで子供でいる訳にもいかないのだから、よい縁先をと思っていたのですけどね、おまえには行く先々までの後だてがないのだし、できる



事なら王様の御庇護を受けたら、それが一番いいと思うのですよ。おまえはそのように美しいのだし、今度は願ってもないよい機会だと思えます。そのつもりでそそうのないように気をつけるのですよ」

夫人のこの言葉が、そのまま伯爵のお考えであったのです。私としても、そのお話は決して気の進まないものではありませんでした。王は、それこそ人々の崇敬の的であったのですし、私も幼い頃から夢のような憧憬を抱いていたのですから。それに男女の間の事など何も知らない私でしたから、王にかわいがって頂けるなんて、ただ空想の中のでき事にすぎませんでした。王にお目にかかれるだけで、そのお声を聞く事ができるだけで、日頃親しい森番や農夫のおじいさん達を羨ましがらせる事ができる。それだけでどんなにすばらしいだろうと考えていたのです。人のよいおじいさん達は、私の話に目を丸くして聞きほれるでしょう。そして根掘り葉掘り、王の一挙一動をも知ろうとして私に質問してくるでしょう。なぜかって、彼らが王の話をする時には、いつだって目を輝かし、夢中になるのですから。そしていつものようにこう結ぶにちがいありません。

「あゝ、わしらはいい王様を持ってしあわせだ」
伯爵夫人は、一カ月もの間、私を楽ししい戸

外に出して下さらず、立ち居ふるまいやお作法を教えこむのに夢中でした。おじぎの仕方、目の使い方、手の上げおろしに至るまで、一人前の貴婦人として恥ずかしくないように、細かく注意するのです。だから、王にお逢いできる事は楽しみであっても、相当な苦痛でもありました。それ迄、毎日のように遊びに行っていた小川の畔りや、羊の牧場に散歩する事も日に焼けるから、という理由で禁じられてしまいました。ブランコにのったり、ケードバッドとマリ投げをする事も、女らしくないから、という訳で止められてしまいました。明るい陽光と、広い草原の世界がどんなに魅力的であったかが、よくわかりました。でもそれが自由の世界、なつかしいおじいさん達との別れであろうとは思ってもみなかったのです。

ある日、伯爵は白馬にまたがって街道を去って行きました。いよいよ御到着の王をお出迎えにいらっしやったのです。私は伯爵夫人のお手で、特別あつらえのドレスを着せて頂きました。うすく化粧をし、髪飾りをつけ、耳輪や腕輪をはめた時は、鏡をのぞきこんで、我ながらその美しさに嘆息をついてしまいました。鏡に写っていたのは、今まで知っていたレイではありませんでした。目は生き生きと輝いているし、頬は、ふくよかに丸みを帯びて、唇はかわいらしくとじられていました。

そして胸もとを深く切りこんだドレスに真珠のネックレスがよく似合って、レイは、もう昨日までの子供ではありませんでした。

夕刻、多勢の足音や馬のいななきが聞えて来て、二階のベランダに、そっと出てみると、五十人以上の家来を従えて王がお着きになったのでした。兵士達のもつ戈が夕日にきらきら光って、まばゆい程でした。王は四頭立ての馬車にお乗りになられているらしく、その横には馬を引いた伯爵が、うやうやしく侍っておりしました。馬車は庭園を玄関口まで来ると静かに止められ、兵士達の手で馬車から家の中にまで緋のジュウタンが敷かれました。私はそれ以上ベランダにいる勇気がなく、部屋の中にかくれてしまいました。胸がどきどきして、容易に静まりそうにもありません。

とうとう私が王に拝謁できたのは、晩さんの時でした。私は伯爵夫人につれられて、おそろおそろ食堂に入ってゆき、王の数歩手前に跪きました。

「姪のレイ・モールにございます。陛下」

既に椅子にお坐りになっている王の隣席で伯爵が申しました。

「おう」

王は私の方に軽く会釈をなさって、手をお出しになりました。

「さあ、席に着かれるがよい」

やさしい言葉でした。私は伯爵夫人の下

座にかけて、王の顔を仰ぎ見ました。王も私の方をじっととらんになっていました。視線が合って、思わず私は赤くなりました。王を直視してはなりませんよ、と伯爵夫人の言われた一つの戒めを破ってしまったのです。でも王は私を咎めだてなさる風もありませんでした。王の印象は、こわいという感じが致しました。お鼻の下と頤に立派なお鬚を貯えいらっしやって、鋭い目をお持ちでした。

食卓には侍徒や武官が六、七人も着いていました。まもなく食事が始められ、王は伯爵とあすの狩場の事などをお話なさっているようでした。

食事は今まで見た事もない程すばらしいものでした。でも私は胸がいっぱいで、ほんのわずか喉を通すのも苦しい位でした。王の目がたえず私の上に注がれているような気がして、フォークを持つ手も、ぶるぶると震えました。それは単に私の気のせいだったかも知れませんが、あとで伯爵夫人が言った言葉によれば、たしかにそうだったのかも知れません。

「陛下はレイがお気に召した御様子でした」それを聞いた時は、感激の余り紅潮致しました。王のお気に召すなんて、何んという光栄だったでしょう。伯爵夫人も大変喜んでい

る風でした。

私の運命はその翌日、決められました。御

狩場で、伯爵が私の参内の御内諾を得て下さったのです。その事は夕方、伯爵自身の口から興奮した言葉で告げられました。

しかしその為に、三日目には、私に最初のいまわしい試練が訪れて来ました。王が御狩に出かけられた後、伯爵夫人と共に王の侍医が私の部屋に参りまして、私の健康状況その他を診断するというのでした。私は思わず顔が青ざめて行くのがわかりました。私はそれまで病気をした事もなかったし、お医者様に会うのも始めてだったのです。恥ずかしいな、どというものではなく、私は恐ろしかったのです。

「レイ、この方はスザード様です。国中で一番偉いお医者様なのです。あなたの健康を保証なさりにいらしたのですよ」

「陛下の御命令で」

と彼は、おだやかに言いました。

「こわがる事はありませんぞ。ちよっとの間、私が義務を果たしさえすればおしまいなのですからな」

でも私はこわかった。彼はもう五十才か、それ以上の年配でしたけど、人を威圧するようなきびしいまなざしをしておりました。髪も黒々としていて、強そうな頑丈な身体をしていました。

「では夫人、どうぞ」

彼にいわれて伯爵夫人は窓をしめてカーテンを閉じ、ゆっくりと扉をしめて出て行きました。部屋には私と侍医と二人だけが取り残されました。

「まあお掛けなさい」

と彼は寝台を指しました。私は、もうそれに従う外はありませんでした。

「てきばきとすませてしまいう事にしましょうな。私のおたずねする事に簡単にお答え下さればよろしい」

私はうなずきました。

「病気や怪我をした事はありませんか？」

病気どころか、かすり傷一つ作った事のない私でした。

「目や耳も完全ですな。お食事はいつも美味しく頂けますな。咳が出るような事もありませんな」

私は、それらの間に一々うなずきました。

「それから、これは、私は医者ですから恥ずかしがらずにお答え願いますぞ。きわめて重要なおたずねですから。生理は順調にありますか」

私は、さすがに我慢ができずに顔をおおってしまいました。そんな、いくらお医者様だって相手は男性なのです。しかも薄暗くなつた部屋でたった二人きりで向いあつていて、どうして平気でいられるでしょう。

「何をためらつておいでかな。私の質問にイ

エスカノウかをお答えになればよろしいのじや」

彼は冷静でした。私はうつむいたまま、うなずかない訳には行きませんでした。

「よろしい。もう一つお答え願いますぞ。便通は、ちゃんとありますな」

ああ、このような質問を面と向って浴びせられようとは、それまでどうして予測できなかったでしょう。恥しい、不躰なこんな言葉を。でもやはり、うなずかずにはすまされませんでした。

「うむ、よろしいようじや。では、そのドレスをとって、少しの間、寝台に横になつて下さらんか」

私は、もう泣き出さんばかりでした。私は下着姿になつて寝台にもぐりこみ、毛布をしつかりかけました。

彼は私のかたわらに立って、毛布をめぐつて上半身を診察しました。下着の上からとはいえ、男の人に胸をさわられたのは生まれて始めてでした。私の心臓ははね上がっていました。私の胸は、もう半ば大人になりかかつていたのです。それをたしかめるかのように彼の手は意地悪く動くのでした。それが済むと、お腹の方まで診察致しました。

「さ、すみません。あなたは至極健康です。この私が保証申し上げます。陛下にもその旨お伝え致しますぞ。陛下は何より健康をお欲び

じや。あなたにも追ってよいお沙汰がありますぞ」

私はポロポロと涙をこぼしました。生まれて以来、こんなに悲しい、苦しい目に会ったことはありませんでした。彼は会釈をして出てゆきました。その後、もうしばらく泣いて私はドレスを着けました。カーテンを引くと今の事が嘘であつたかのように明るく、のびのびした日光が流れこんで来ました。

ドアをノックして、部屋に入つて来た者がありました。気配で、同い年のケードバッドだという事がわかりました。でも私はふりかえりませんでした。彼は私の横に来て、顔をのぞきこみました。

「おや、どうしたの。変に悲しそうな顔をして。ああ、泣いていたんだね。おかしいな。君は今、国中で一番しあわせな女の子だというのに」

「そうじゃないのよ、ケードバッド。私はただ悲しい事を考えていたの」

私は何とか泣き顔の説明をとりつくろわなければなりません。あのようなでき事を、他の誰かに悟られる位なら死んだ方がましだと思いました。

「変だなあ。レイらしくもない。君はいつもニコニコしてなきやよくないよ。僕は君を祝福してやろうと思つて来たんだぜ」

「そんなに嬉しくはないのよ。私、都へ行く

日までに、もう少し考へる事にしたの」

「え、どうして？もう明日は出発だというのに」

「まあ」

と私はびっくりしました。まさか明日、王と一緒に旅立つのだとは、夢にも思つていなかったからです。

「本当なの、ケードバッド。伯父さまも伯母さまも御承知なの？私が今日限りでいなくなるなんて」

「母さまは悲しんでいたさ。僕だって寂しいんだよ。だけど、王様の御命令なんだ。君は召使いのジュリーと二人でお供していくことになるんだ」

私は又、涙があふれ出して来ました。さっきのとは違う、もっと複雑な涙でした。

「ケードバッド、もう



会えなくなるのね」

たしかに、私の悲しみの中には、仲良しだったこの従兄と別れなければならない寂しさが多分にひそんでいました。もう今日限りと思うと、無心に過ぎ去った楽しい日々が一度に甦って来るような気がしました。

「そんな事はないさ。時々は帰ってこれるだろうし、そのうち僕も都へ行くんだ。勉強しに」

ケードバッドも涙ぐんでいました。私達はどちらからともなく抱きあって、お別れのキスをしました。一度や二度では物足らず、幾度も幾度も、額や頬や唇に、唇をつけあいしました。伯爵夫人が、私の持ち物の整理にやって来る迄。

二

前の日に受けた一切の苦痛や悲しみはきれいに消え去ってしまいました。王に従って生まれて始めて旅ゆくシナライの国の美しい森や丘陵、川や湖。視野の及ぶ限り、どこまでも豊かな色彩の大自然がつづきました。所々に町や村があり、王の一団が通りかかると沿道の人々が群り出て、親しげに手を振り歓呼の声をあげました。兵士達もそういう時は誇らしげに胸をそらし、王旗を高々と掲げて進んで行きました。兵士達のあとに私とジュリーの乗った馬車がつづき、人々は好奇の目で

のぞきこもうとしました。私の小さな胸はそれらの感激で一杯になってしまい、昨日迄の事を思い出す、すきもなかったのです。

旅は、まる一日続けられました。そして夕方石畳を敷いた都の大路に入り、いかめしい衛兵達の守っている城門をくぐって遂に、あのがれの王宮に入ったのでした。大きな館の前で馬車をおりると、宮内卿が、いんぎんに私を迎え、きらびやかな廊下を通って一室に案内してくれました。それは、伯爵邸の一番豪華なサロンよりも、一層洗練されたすばらしい部屋でした。原色模様で彩られた柔かい敷き物、マホガニーの大鏡台、垂れ布つきの寝台など、目を見はるばかりのぜいたくな調度でした。召使い用の小部屋もつき、更衣所も設けられていました。

「これが、あなたのお部屋です。慣れた召使いがついていますから、おわかりにならぬ点は、その者にお尋ねになるよう」

宮内卿は、そう言い終ると、扉をしめて出て行こうとしました。私は、それを呼びとめ「私について来たジュリーを呼んで下さいませんか」

と頼みました。ジュリーは、私がかこへ案内される間、馬車の中に残っておりました。

「いいえ、なりませぬ」

と彼は答えました。

「あなたの召使いは、ここに慣れた女をさし

あげます。それ以外の者は立ち入る事ができません。荷物は新しい召使いが運んで来るでしょう」

私は少し、あわててしまいました。

「まあ、ジュリーはどうなるのですか」

「明朝、帰ってもらう事になります」

そして彼は出て行ってしまいました。私は急に心細くなって、口の中でジュリー、ジュリーと叫びました。とうとう一人ぼっちになってしまふと思うと、涙が溢れてしまいました。

間もなくやって来た新しい召使いは、ジュリーよりも十才以上も若い小娘でした。私とはほとんど同じ位の年で、小柄で愛くるしい顔をしていました。私は少し、ほっとしました。この子なら、いいお友達になれそうだという気がしたからです。

「ようこそ、御主人様。私、マギと申す者でございます」

彼女は私の手をとって接吻すると、親しげに笑いかけました。

「御主人様の事は、今朝お聞きして、すっかり存じております。マギは、よい御主人様を持つてしあわせだと思います」

マギは化粧台から、うすぎぬのハンカチーフをとり出して私の涙を拭ってくれました。それが彼女の、私に対する最初の奉仕でした。それから彼女は私を伴って部屋中を歩きまわ

り、こまごまと説明してくれました。カーテンで仕切られたマギ用の小部屋と並んで、やはりカーテンだけでかくされた浴室があり、更衣所の中には幾枚かのドレスまでが用意されてありました。当時は、まだこの都にしか配線されていなかった電気が、ソファの横にも鏡台の上にもついていて、スイッチ一つで自由に点滅できる装置になっていました。窓を開けると、きちんと手入れの行き届いた造園があり、美しい花々が乱れ咲いていました。居心地のよい部屋でした。

私を案内しながら、マギは齒切れのよい口調で冗談を混えたり、笑ったり致しました。私も思わず、つりこまれて笑ってしまう程、彼女は快活でした。それに、まだこんなに若いマギが、すっかり宮廷生活に慣れ切っているようなので、私は安心すると同時に、彼女の生い立ちや経歴に興味を感じました。

「お前は今まで、どこで何をしていたの？」
私はソファに腰を下ろして、そう問いかけました。すると彼女は私の前で床に、ひざまずこうと致しますので、

「いいのよ、私に遠慮する事なくってよ。横におかけなさい」

と申しました。が、マギは強く首を振り「そのような事は許されません」

と、はっきり答えました。私は彼女と、お友達になりたいと思っていたのですが、そ

れは叶わぬ事がわかりました。私は、それ以上すすめない事にしました。

「私がお話申し上げる事なんて何もございませんわ、御主人様」

とマギは答えました。しかし彼女の顔には、さっきの陽気さに代って、深い悲しみの色が表われて居りました。そこで私は一層知りたいたいと思ひまして、

「いいから話してごらんなさい」

といいました。マギはそれを、命令だと解釈したようでした。彼女は頭を下げ、こう申しました。

「はい、御主人様。私は北部の生まれで、ケビン子爵のお邸に仕えておりました。ここへ参りましたのは五年も前で、それはルビアお嬢様が王様にお仕えする事になったからでございます。私はここで、ずっとルビア様におつき致しておりました」

「まあ、それで、そのルビアさんは、どうなさったの？」

「はい。」

とその時、マギの顔は益々曇りました。

「ルビア様は、おやさしい美しい方でございました。私は心からお慕い申し上げておりました。ですが、半年ばかり前、お亡くなりになつてしまわれたのです」

「まあ、御病氣だったの？」

「いいえ、御主人様。あなた様のようにお健

やかでいらっしやいました。おかawaiiそうにルビア様は自殺なさったのです」

「まあ、どうして？」

と私は、びっくりしてしまいました。自殺なんて今までに聞いた事もない、恐ろしい言葉だったのです。美しく健康な若い女の人が、国中の人が羨む王宮に来て、なぜ死ななければならなかったのでしょうか。

「それは」

と云いかけて、マギは涙をこぼしました。「ルビア様が王様のきついお叱りを受け、その上、王様に憎まれておしまいになったからでした」

「なぜ王様にお叱りを受けたの？」

「はい、ルビア様が、王様の御命令に従わなかったからでございます」

「まあ、ルビアさんはどうして王様の御命令をきかなかったのでしょうか。そんな事すればお叱りを受けるに決まっていますのに」

「いいえ、ルビア様も始めのうちは、王様のおいっつけ通りに従っていらっしやったのです。でも、だんだん王様は御無理な御命令をお出しになって、ルビア様は堪えられなくなつておしまいになったのです」

「王様は、どんな御無理をおっしゃるの。まさかできない事をせよなんておっしゃりはしないでしょうに」

私は不思議でした。王様の御命令とは何な

のか、ルビアさんがなぜそれに従えなかったのか、いくら考えてもわかりませんでした。私のその時の気持からすれば、王様はそんなに物わがりの悪い方ではなかったし、私だって王様の御意思に、どこまでも従うつもりでおりました。それが君主としもべの道だと思っていました。

それをマジに聞いたとしても、マジは何も答えませんでした。答えたくても答えられない種類のものだった。そこで私は、いささか不安になり、又どんな事であっても、王様には抗うまいという気持になりました。

その時になって、私はこの部屋に重大な欠陥がある事に気付きました。

お恥しい話ですが、既にかんがりの欲求でした。しかしその為の場所がなかったのです。いくら召使いでも、他人に訴える事はためらわれて、しばらくは前の主人の回想に涙を流しているマジを眺めておりました。でも限界がありました。私は、

「あのね、マジ、どこへ行ったらいいのかしら」

と謎をかけてみました。

「あ、申し訳ございません」

マジは私の言う意味をすぐに悟って、はじめられたように立ち上がりました。そして私のたずねる場所は教えずに、浴室へ行って何やら木箱に入った物をかかえて来ました。

「これがお道具です。私がお世話致します」
そう言いながら、マジはふたをとり、中から奇妙な形をした容器を取り出しました。それは酒壺に似て、それより口が変に大きな、浅い壺でした。まわりにはオリエント風の祈禱師の絵が彫りこまれていて、魔よけの呪文を唱えている図かと思われました。マジはそれを床の上に置いて一歩退りました。

私は彼女が何か勘違いしているのではないかと思いました。

「これ、何に使うの？」

「御主人様の御用具です。後は私が片づけますから」

私はそれが便器だと知って、思わず叫びました。

「おおいやだ。そんな意地悪しないで連れて行って！」

「でも他に方法はございませんもの」

「まあ！」

私は驚きで紅潮してしまいました。こんな壺の中に――、そして他人が片づけるなんて――。マジはそうした私を、同情した目で見つめていました。

宮廷生活なんてこんなものか、と私は始めて不自由を感じました。

でも仕方ありません。私はその容器を使用する他はないと悟りました。

「マジ、むこう向いてて」

でも耳を押さえて、とは言えませんでした。私の諦めは、びっくりする程大きな音を立てて、なかなか終りませんでした。

マジが再び箱に入れ、ふたをして外へ持ち出して行った時、私の耳は灼けつくようでした。私はそんな不便には到底、堪えられそうもないと思いました。召使いと同等でよいから、ちゃんとした場所が欲しい、と思いました。マジはどこで用を足すのだろう、まさか私と同じように部屋の中でするのではないだろうか？ と考えながら、彼女の部屋にたしかめに入ってみました。マジの部屋は、小さいながらもきちんと整えられて、ベッドや衣類棚や化粧台が揃っていました。私は隅から隅まで視線を走らせました。でも木箱のような物は見当りませんでした。私はマジが来たら、彼女が何と言おうとその場所を教えて貰おうと心に決めました。

そう考えながら、ふとベッドの下に眼をやると、金属製の調理具のような物が見えました。私はかがみこんでそれを引き出し、ふたをとってみました。中はきれいに掃除してありましたけど、それが彼女の用具である事は間違いないと思いました。私は、とうとう絶望に陥らざるを得ませんでした。

その時、不意にマジがカーテンを上げて入って来ました。そして私が彼女の器具を引き出して泣きべそをかいているのを見ると、

「まあ御主人様」

と叫んで、大慌てで、それを押しこみ、真赤になりました。私は大変な事をしてしまったと感じて、しどろもどろに弁解致しました。マギは私の弁解を聞いて、急に私を抱く恰好をしました。私も思わずマギの肩を抱き、

「ごめんなさいね、マギ」

と呟きました。マギは私の耳もとですすり上げていました。私は急にマギになつかしきを感じて、更にこうつけ加えました。

「マギ、私を嫌いにはならないわね。私といつまでも仲良しでいてくれるわね」

「はい、御主人様。私、御主人様が大好きです」

三

翌朝、私はジューリはもう故郷へ向かって帰って行っただろうか、と考えながら入浴していました。私はあの美しい山野のモール地方へ帰って行くジューリが羨ましいと思っていました。愈々一夜が明けて、王宮のお勤めに入らなければならぬ私には、不安とおそれがこもごもに襲って来

るのでした。きのうのマギの恐ろしい話が、一層私を不安にさせました。王様は、私に何を命じになるのかしら、どんなにこわい方なのかしら――。

入浴中もマギが傍らについていました。もう別に恥しいとは思いませんでした。何もかも、私の事はマギに任せてしまわなければならないのだという事が、はっきりわかって来たからです。

でも浴室の隅にある木箱の方へだけは、目をやる事ができませんでした。あの中には、なぜかまだマギが捨てに行かないおぞましい

物が入っていたからです。それだけは思い出しても背すじが寒くなる気が致しました。

――さすがに慣れないので、私は長い時間をかけなければならなかった。それを、ふたをする時、マギは見えてしまった。

その時の羞恥だけは、どう拭っても忘れられないものでした。

やがて私はガウン一枚をまとい、化粧台に着きました。マギは驚く程の美容術師でありました。彼女に身を任せていると、みるみる間に鏡に映る私の顔は美しくなっていきました。

それがすむ頃、誰かがノックして返事も待たずに入ってきました。

それは、あの宮廷医のスザードでした。私は伯爵邸での記憶を甦らせ、思わず身体を固くしました。

「御主人様、お医者様でございます」

とマギが耳もとで囁きました。

「知っているわ」

と答えて、私は彼が何の為に陳入して来たのかを見きわめようと、彼を凝視しました。

彼は小さな医療箱をかかえていました。それを見ると、又私を診察に来たのに違いありませんでした。

「おはようございます。ここの御感想はいかがですか、レイ様」

彼は、わざとらしい追従笑いを浮かべて、



そう言いました。

「いやです、私、病気になるかじやありません。もう沢山ですわ」

と私は叫びました。

「おや、どうもあなたには嫌われますな」

彼は、なおも笑みを浮かべて

「でも私は、侍医としてあなたの御健康を保証する義務がありますのでなこうしてお役目を果たしにお邪魔した訳で」

「私に、どうせよとおっしゃるのですか」

「ほんのしばらく、あのベッドへあがって頂かなければなりません」

「御主人様。これもお勤めのうちでございます」とマギも申しました。

私はもう従うより仕方がないと思いました。そこで、せめて下着を着ける間待って欲しいと哀願しました。しかしスザードは、そのままだなければ困る、と言いました。きょうはもう、徹底的にやられる、という予感がしました。でも諦める以外はありませんでした。



私はマギがたれぎぬを上げるのを待って、ベッドの上に仰臥しました。その間にスザードは浴室へ入って行きました。私は、彼が木箱の中身を見るつもりだなと直感しました。私はスザードを憎みました。

やがて私の横に立ったスザードが私に加え

た仕打ちは、おおよそ次のようなものでした。

まずガウンを解き、聴診器を当て、胸ばかりか腹部まで打診や触診をし、次に口腔や瞳孔を調べ、乳房の張り工合まで確かめました。それだけでも地獄の苦しみでしたのに、次にはマギを遠ざけ、私をうつ伏せにさせ、聴診器で同じように診察しました。

「結構です。あなたの健康は申し分ない。神さまから与えられたままの身体じや」

私はその言葉で、やっとすんだのかと思いました。がそれは早計でした。彼はこうつけました。

「だが、あなたは、もうちよっと美しくならねばなりません、いいですか、しばらくの間目をつぶって辛抱なさらねばなりませんぞ。痛みも苦しみもありませんが、精神的に堪えて頂く必要がある。私としても本意ではないが、王様に仕える者の義務ですから」

彼は、何度「義務」という言葉を使ったら気が済むのかしら、と私は考えていました。もうどんな「義務」でも果たして下さい、と心の中で叫びました。彼のなすがままに身を任せて、一時も早くこのいまわしい時間から逃れたいと思いました。

それにしても、彼はこの上、一体私をどうしようとするのだろうか、と思っているうちに体をかかえ上げられました。

「いや！ 何をなさるのです」

私は反射的に彼の手を転がりぬけました。

「御辛抱ですぞ、御辛抱！」

と彼は、やや強い口調で申しました。

「醜いメラニン色素を落すのです。さあ、こ
うなさい」

私は堪えられずに鳴泣の声を上げました。

いくら覚悟をしたとはいえ、それは余りひど
い仕打ちでした。私は羞恥よりも恐ろしさで
悶絶しそうでした。

「これでよろしい。もう二、三回こうすれば、
生まれかわったようになるのじやが、もう充
分美しさをとり戻しましたぞ」

その後、彼が何を言ったのか憶えておりま
せん。お腹の中まで灼けつくような感じがし
て、私はその異常な体験に気を失わないのが
精一杯でした。

いつスザードが退去したのか、ふと我に返
った時、私はマギにやさしく抱かれていまし
た。マギは懸命に私を慰めようとしてました。

私は茫然として、マギのなすままに臥してお
りました。

「ルビア様も、それはそれはお厭いになった
ものでした。でも、そう度々の事ではありま
せんし、ルビア様もしまいにはお諦めになっ
たようでした。御主人様も、お元気を出して、
お食事でもなさいませ」

「いらないわ。それより、もっとこうしてい
て」

食事どころか、そんな時にどうして顔が上
げられるでしょう。私はマギのやさしい思い
やりの中で、少しでも安らぎたいと思ってい
ました。

「王様にお仕えするのに、どうしてこんな事
が必要なの？ 教えて」

私はベッドに顔を埋めたまま、そう問いま
した。実際、健康である私が、何の為にこん
な事をされるのか、その意味が全然からなか
ったからです。

「今におわかりになりますよ、御主人様。王
様は、こんな事が好きなのです」

「こんな事って？」

と私は尚もたずねました。こんな事って、
スザードにこんな恥しい診察を受けさせる事
かしら――。

「王様は、多趣味でいらっしやいます。御主
人様のように、お近くにお仕えする方を、い
ろんなやり方でおかわいがりになるようでこ
ざいます」

マギはそう答えました。でもその意味は少
しもわかりませんでした。それと、私に加え
られた羞しめと、どういう関係があるのか。
でもそれ以上くわしい事は、マギから聞く事
はできませんでした。マギは、今におわかり
になります、とくり返すばかりでしたから。

「私のような女の人、他にも多勢いて？」
せめて私は、スザードの加療を受けるのが

私一人でないという事を確めて、少しでも安
心したいと思いました。

「はい、二十人位いらっしやいます。皆、御
身分の高いお方ばかり」

とマギは答えました。それで、スザードが廻
って歩くのは私一人でないわかりました。

「毎朝来る訳じやないわね？。あのお医者」
「はい、三日か四日おき位でございます。で
も決まっている訳ではありません。つづけて
来る事もありますし、何日も姿を見せない事
もございます」

「王様の御命令なの？」

「たぶんそうでございます」

「でも不意にお部屋に入ったりして、ずい分
失礼じやありませんか」

「はい、その点だけは王様のお許しがあつた
らしうございます。皆さんがそう思ってい
らっしやいますが、王様がお認めになつてい
る以上、仕方ございません」

「あのお医者、大嫌いよ」

「でもあの方は御親切ですよ」

「おまえ達はいいいわね。あんな目に会わなく
すむんだもの」

「いいえ、御主人様。私達は、もっとひどい
目にあう事がございますわ」

マギは、そう言って口をつぐみました。

私はマギに案内されて、王様にお目通りをし、御挨拶をしました。その時、既にもう私の胸の中は、きのう迄のように楽しく輝かしいものではありませんでした。ルビアさんが残した謎と、朝のスザードのふるまいで、私はすっかりおそれをなしていたからです。

王様は鋭いお眼を書物からお上げになり、それでもやさしい視線を投げかけて下さりながら、こう仰せになりました。

「レイを申したな？。よろしい。これから女官長と共に、妃と王子のもとへ行ってきたさ。それから広間で昼餐を致すから、その仕度をするのじゃ」

王様は手を叩いて女官長をお呼びになり、私をお妃様と王子様の所へ伺候させるようにとお命じになりました。

しかし、ああ、隣室から出て参りました女官長は、何ておそろしげな顔をした方であつた事でしょう。まだ若々しさが残っている顔に、きつい冷やかな眼、とがった鼻、意地悪そうな口もと。私は一目見ただけで、不吉な予感が致しました。

女官長は私を従え、長い廊下に出ますと、「よいか、宮中においては、どんなささいな無作法も許されませぬぞ。わからない事は、すべて私にきくのです。それから勝手なふるまいも許しませぬ。階下のお許しもなく歩きまわったり、外出する事なれませぬ。そな

たが動いてよいのは、中のお庭と、そなたの部屋だけです。よろしいか」

とまるで叱るような口調で申しました。私はちぢみ上がってしまい、はい、と答えるのが精いっぱいでした。

お妃様は、三人の侍女にかしずかれて、安楽椅子でお憩いになっていました。私が丁寧に御挨拶しますと、御自分もお立ちになり、美しいすき通るような左手をお出しになりました。私はそのお手におそろおそろ口づけ致しました。

「名は何というの？」

おやさしいお声でした。傍に立っている女官長とは正反対の感じでした。

「王のお許しがあつたら、わたしの所へも遊びに来ておくれ」

そのお言葉は、どこか寂しそうでした。私は、お妃様はそんなに御幸福ではないのじやないかと思ひました。すると急に親愛の情がわいて来まして、

「はい、うれしうございます。どうぞお仕えさせて下さいませ」

と申し上げてしまいました。

そのお部屋を辞去致しましてから、私は女官長にひどく叱られました。余計な事を申し上げるのではないと言うのです。私は本当におそろしくなっていました。

王子様は女官長と同じ位こわい方でした。

私の御挨拶など聞きもせず、

「うむ、可愛い顔をした奴だな」

といいながら近寄ってきて、私のお尻をポソと蹴りつけました。

「まあ、何をなさいます」

思わず叫んでしまった私は、王子様が意味ありげな笑いを浮べて離れてゆくのを、茫然と眺めておりました。

そこを退出して、私は又、女官長にふるえ上がる程叱られてしまいました。私はくやし涙をポロポロこぼしました。

王子様はケードパッドと同じ位の年頃なのに、この二人には何という氣質の相違があるのでしょうか。ケードパッドのやさしさ、なつかしさが急に甦って来て、私は後悔の涙を流しました。でももう仕方がないのです。私は与えられた運に従うより他はない。

部屋に戻った私は、マギの手伝いでドレスを替えました。そして王様の御いつけ通り広間へ参りました。

広間は、驚くばかり変化に富んだ、明るい豪華なものでした。全体が三段の高さにわかれ、一番高い段には玉座をはじめ、たくさん椅子やテーブルがあり、中の段はやわらかい絨毯が敷きつめられて、芸人などが使う諸道具がありました。そして一番下の段はお庭に面して総ガラス張りになっており、そこに大きな水槽がきれいな水をたたえているので

した。

もう二十人もの女性が装いをこらして集まっていた。皆、若くて美しい方達ばかりでした。私も控え目に挨拶をして、その仲間に加わりました。でも他所の若い女性の集まりとは随分、雰囲気違っていました。皆怯えたように黙りこくっていて、新来者の私に物を言いかける人もおりません。私は、それには驚いてしまいました。私は、うるさい女官長が皆にしゃべる事を禁じてしまったのではないかと思いました。

でも、その沈黙の意味はじきにわかりました。と申しますのは、やがてもう一人の女の人が泣きながら入って来まして、それを見ると皆がいつせいに彼女を抱きかかえて、何やら口々にしゃべり始めたからです。皆が何を言っているのかは聞きとれませんでした。その人が何か重大な経験をして来て、皆が慰めたり同情したりしているのだ、という事はすぐにわかりました。私は又タルビアさんの事を思い出し、胸を不安にふるわせずには居られませんでした。

やがて王様と宮内郷が入つていらっしやいました。皆はいったん、しんとして王様を迎え、やがて上段に用意された大食卓につきました。いつのまにか王様のお近くの席に、先程の女官長と医師のスザードがかけつけておりますのには、少しばかりびっくり致しました。

この二人はよくよくの王様のお気に入りか、さもなければ、随分と高い地位が与えられているのに違いありませんでした。

私は一番末席に着き、少しでもスザードの目からかくれようと致しました。でもその必要はなかったようでした。というのは、スザードはやがて食欲を満たすのに専念して、私達の方へは顔も上げなかったからです。

食事が終りに近づくと、テーブルは急に賑やかになりました。皆が勝手におしゃべりを始めたからです。私の近くにいた女性達は、矢つぎ早に私に質問を投げかけました。——名は？。——生まれは？。——年は？。

私は次第に彼女達につりこまれて陽気になり、いろいろ話してやりました。皆いいお友達になれそうな人達でした。殊に私の横にいたかわいらしい女の人は、年も同じで最近来たばかりという事でした。そこでどちらからともなく手を握りあって、仲良しになりました。うねと誓い合いました。名前はポーラというのでした。

所がひよっとしたはずみに、ポーラがヒクツと喉を鳴らしてゲップをしてしまいました。ポーラは狼狽して真青になってしまいました。それは少し離れた女性達が気づかずにおしゃべりを続けていた程、かすかな音だったのです。それなのに、ああ、あの意地悪な女官長は何て耳ざといのでしょうか。すぐさま

立ち上って王様に何か言上しますと、つかつかとやって来て、恐ろしさにふるえているポーラを引き立ててしまったのです。

皆は、いつせいに黙ってしまいました。ポーラはかわいそうに、もう涙を一杯浮かべて、女官長につれられて出てゆきました。

又さっきと同じように、皆は深刻になってしまいました。その中を、王様とスザードが立ち上って、ポーラの消えた扉の方へ歩いて行きました。王様が、自らポーラの御懲罰にいらっしやったのだという事は、その気配から私にもわかりました。

「ああかわいそうに、又鞭打ちよ」と誰かが囁きました。

「いいえ、きつと流腸室だわ」と又、誰かがつぶやきました。

私は、それを聞いて心の底から、びっくりしました。鞭打ち、流腸室——ああ今まで聞いた事もないひどい言葉。それはまるで、急に私の前に悪魔が現われて、驚かせる為にささやいた言葉のような気が致しました。

でも私は、やがてそれが、この現実である事を知らされる時が来たのです。それこそ、この王宮の唯一の秘密であり、又その日常であるという事を。ルビアさんの謎とは、この事なのでした。私は、もう生きた心地もなく、毎日を暮らさねばならない事になったのです。

(この頃終)

ニューモデル未発表新作緊縛フォト集

ヌード初縛り

大名刺 三枚一組 二〇〇円
 ニュー・モデル 平野笑子
 略号 (みい)

ヌード初縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円
 ニュー・モデル 田原美佐子
 略号 (みろ)

全裸股間縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円
 ニュー・モデル 岩井知子
 略号 (みは)

全裸後手くらべ

大名刺 三枚一組 二〇〇円
 ニュー・モデル 平野笑子
 略号 (みに)

観念の座

大名刺 三枚一組 二〇〇円
 ニュー・モデル 平野笑子
 略号 (みほ)

全裸股間縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円
 ニュー・モデル 絹川文代
 略号 (みへ)

開股縛くらべ

大名刺 五枚一組 三〇〇円
 ニュー・モデル 絹川文代
 略号 (みと)

椅子開股縛

大名刺 三枚一組 二〇〇円
 ニュー・モデル 絹川文代
 略号 (みち)

実写フォト 磔 (ハリツケ)

三 態 略号 (はり)
 モデル 大塚啓子 大中判印画紙焼付 三枚一組 四〇〇円

女体緊縛フォトE組

9×13印画紙焼付

ES1 ヌード緊縛集

モデル 佐賀美智子嬢
 三枚一組 二五〇円

ES2 全裸悦虐集

モデル 須川 令子嬢
 四枚一組 三〇〇円

ES3 腎 羞

モデル 佐賀美智子嬢
 三枚一組 二五〇円

ES4 酒宴の弄者

モデル 佐賀美智子嬢
 二枚一組 二〇〇円

ES5 脱がされる娘

モデル 須川 令子嬢
 五枚一組 三五〇円

ES6 あわや寸前

モデル 佐賀美智子嬢
 二枚一組 二〇〇円

ES7 剥れたズロース

モデル 佐賀美智子嬢
 五枚一組 三五〇円

ES8 乙女のすべて

モデル 花坂 道子嬢
 七枚一組 四五〇円

ES9 女学生の縛り

モデル 須川 令子嬢
 二枚一組 二〇〇円

ES10 緊縛のベッドシーン

モデル 佐賀美智子嬢
 六枚一組 四〇〇円

新人モデル嬢新作緊縛姿態集

大手札型 (9×13センチ) 印画紙焼付

愛川悦子嬢の巻

☆ベッド変型縛り (略号 しん1)
 四枚一組 三〇〇円

☆全裸強烈縛り (略号 しん2)
 四枚一組 三〇〇円

大塚啓子嬢の巻

☆股間縛り (略号 しん3)

☆全裸縛り

(略号 しん4)
 五枚一組 三五〇円

田中芳代嬢の巻

☆セーラー服縛り (略号 しん5)
 五枚一組 三五〇円

☆股間しばり

(略号 しん6)
 四枚一組 三〇〇円

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品

白
い
霧蒼
野
礼

「山田太郎」と楷書体で刷られた一枚の名刺を、私は金拾万円と引換えた。鮮人の崔は、まだその名刺を幾枚か持っていた。かりに十枚あったとしても百万円に換わるものだ。すると十人以上の奴隷が買手を待っているわけか。奴隷の中にはN歌劇団のスタアだった女もいると云う。「粒よりの女ばかりです」と流暢な日本語で崔は力説した。それで私はその大金をだした。「嘘だったら命はないと思え」と私は云った。「結構だ」崔は微笑んだ。その微笑を見て、私はこの買物に初めて妖しい期待を覚えた。我々は棧橋前のバーを出てタクシーを拾った。K街二十一番地F教会、名刺にある住所を崔は運転手に告げた。この教会はたしかカトリック教会のようにも見える妙な形の建物である。私は前に通りすがりに見たことがある。夜霧が深くて車は徐行した。ネオンがうるんで見えた。私は葉巻に

火を点けた。

教会の裏門の前で、崔は口に指を入れて器用に合図の笛を鳴らした。尖塔の色硝子窓の灯が消え、やがて扉の開く音が夜霧の海のかなから響き、靴音が敷石道を踏んで来た。黒づくめの衣裳を纏った女だった。女だとわかったのは顔の白さのためだった。啞のように黙って我々を導いた。内部に入ると、その女は背中を見せたまま廊下へ消えた、かわりに崔が先に立って私を地下室に導いた。葉巻を捨ててもらえないかと云った。煙が籠もるからだと云う。そのとき一群の女が私の視野にはいった。煌々たるシャンデリアの下に彼女たちは緋めいていた。「どうです」崔は指差して笑った。たしかに美女揃いだった。

私が奴隷をえらんだのは、しかし其処ではなかった。隣室のソフ

アに座って、一人一人女を呼んだのだ。どの女も皆、均斉のとれたすばらしい肢体の所有者だった。私に眺められながら泣きだした女があった。悲しい境遇に堪えかねたようだった。年頃二十二、三の愛らしく整った容貌だった。「この女にする」と私は崔に云った。「早く支度をして来な」崔が女に命じた。

すらりとした和服姿で女が出て来ると、私は崔の鼻先に件の名刺を突きだした。

「これは一体何に使うのだ？」

これから行く場所で必要なのです。万事この女が心得ていますから。と崔は答えた。

アクセントがあまりに滑らかなので、私はふとこの男は日本人ではないのかと思った。犯罪者が鮮人に化けるのはよくある術だ。崔は裏門まで私と女を送つて来た。女は彼に丁寧に頭をさげた。夜霧はいっそう白く立軍めていた。華奢な腕がそつと私の腕に捉んで「御案内します」とひくい声で云った。

何処へ行く？　とも私は訊かなかった。女が行く通りにしたがった。女の髪から芳香が匂った。女の名前が知りたかったが、訊いてもおそらく答えないだろう。名前は明かさない規則になっているのだろう。年齢を訊くと「二十二です」これは素直に小さい声で答えた。子供を産んだことはないな、と云うとうなづいた。初めて見たときの直感から私にはわかっていた。「あすこです」やがて、夜霧に濡れたホテルの灯を指して女が云った。

雲台閣という高級ホテルだった。女は先に立って玄関の大きな回転ドアを押した。赤絨氈が敷き詰められたフロントロビーでは、陽気な音楽が奏り、外人客たちが声高に雑談していたが、次々にこちらを振り返って見た。それが女に集まる賞嘆の視線だと知った瞬間、私もまた豪華な屋内で見る、女の眩しいほどの美しさに打たれ

た。紺無地のお召姿が実に艶やかに映えた。

フロントボーイに名刺を渡すよう女が云った。「あの名刺を……」私はうかつにも自分の名刺を出そうとしていたのだ。女の白い手が私の手をとどめてそう云った。「山田太郎」の名刺を私は出した。無表情にボーイは受取って垂れた髪を指で掻きあげ「どうぞ」と促した。私はまた地下室に導かれた。

同じ地下室だが、あのカトリック教会のように殺風景ではなかった。立派な客室だった。バス、トイレがつき、そして完全な防音装置が施されていた。そしてまた、他の客室と異っていることは、室の中央に太い円柱が立ち、大きな木馬が置かれてあることだった。さらにまた壁に掛っている革鞭も。鉄鎖も。太いロープも。この室が特殊な室であることを物語っていた。

「ここに来たのは初めてか？」

と、私は女に問うた。女は青い顔になって幽かに頸を振った。前に一度外人に買われて来たと言ふ。

「ひどく責められたか？」

「……はい」

うつむいて落した肩が顫えているようだった。よし、俺もその男に負けまい、私の体内には荒々しく血が沸いた。ためらう女の帯を乱暴に剥ぎとり、肩をあらわにさして鞭をあてた。浮世絵を見るような、しどけないなまめかしさで女は悲鳴を挙げた。雪のように白い肌に赤い条線がさつと滲んだ。

女は哭いた。床に四つに這いに這わしたとき屈恥の極に達したようだった。すすり上げ涙を落した。「奴隷であることを忘れたかっ」私は円く張りだした尻を叩いた。女は身をよじって声を放った。それでも姿勢は崩さなかった。両手でしっかり床を支えていた。犬のように。しかし美しい惱ましい犬だった。「行け」と私は

命じた。そして背中中に足をかけた。

女が気を喪ったのはもう暁方頃ではなかったかと思う。円柱に前向きに縛りつけて責めているとき、ふいにがっくりと頸を落した。苦痛のため波打っていた腹部が張りを失った。蠟のように白くなった顔を二三度両手で張った。よだれを垂らしただけで、死んだように反応がなかった。私は色を失った。死んだと思ったのである。脈を見る落着きを失っていた。『医者だ！ 救かるかも知れぬ』私は気狂いのように電話でボーイに「医者を医者を！」と喚めいた。

どうしたことが一分も経ずに医者が来た。黒づくめの服装をした医者だった。あの教会で見た黒衣の女だ。無言で女の脈を診、それからゆっくり注射器を出した。「騒ぐことは要りませんね」アンプルを切りながら私に云った。しやがれた声だった。

「私がいつも控えていますから。この女ばかりでなく五人来ています。みんな一度や二度は氣絶しますから、私が控えているのです」鮮かな手際で女の白い腕に針を刺した。針を抜くと、ガーゼでそのあとを拭いた。女の顔に生色が戻った。薄く瞳をひらいたときの女の表情は、ハッとするとほほ美しいものだった。

「だらしないですよ。これくらいのことです」黒服の女は叱った。そして静かな足どりで室を去った。

「すみません…」女は私に詫びた。

「どうぞつづけてください」私は再び豊かにたるみなく張った肌に縫針を突立てる作業をはじめた。「うっ…うっ…」紅唇から呻きが流れた。

「痛いわ…うっ…痛いわ…」

朝になって私は女を慰わせた。朝食を室に運ばせて二人で摂った。肉片を口移しに女に与えた。女は少食で珈琲を多く飲んだ。昨

が涙でうるんでいた。「どうしたのだ？」すると「夫があるので。病気の…」云いも終らずにわっと泣き伏した。珈琲碗が床に落ちた。私は着物の上から尻を叩いた。

「甘えるな」

木馬に跨って着物をまくっている。荒い語気で私は命じた。女は泣きながらその通りにした。着物の裾をからげあげて木馬の背に伏せた。いっそう高く鳴咽した。眺めながら私はテーブルで食事をつづけた。料理は皆美味だった。

鞭を持って木馬の背ろに立つと、女は身体をひきしめた。夫ならばこの美事な柔肌をいとはしむことだろうが、私は鞭痕で赤く彩りたいのだ。羞恥で耳を紅くし、怯えのために、女は泣声を歇めていた。

「自分で叩いてみる。手で打つのだ」

「…は…い…」

白い纖手が自らびしやびしやと臀を叩いた。私は哄笑した。「もっと打て、もっと打て」



女は燃えるような赧い顔になって、両手で交互にわれとわが臀部を責めた。透けるように白い肌理は、それだけでも赤く手型を滲ませた。まだまだと、私は囁いた。ぴしやぴしやぴしや……女は打ちつづけた。私は太い革鞭を振った。けたたましい悲鳴を挙げて女は木馬の頸にしがみついた。狂気のように私は打ちつづけた。

女は臀を血まみれにして木馬の背から降りようとしなかった。

「起てない……」と云って烈しく背中を波打たせた。ハアハアと大きな荒い息をしていた。お召の裾に血の飛沫がかかっていた。細い白い脚にも紅点が散っていた。

「お臀が……お臀が……」

「どうした？」

あとからあとから噴きだす額の汗を袖で押し拭い、私もまた呼吸を弾ませた。

「や……焼けているよう……」

この一面無惨に傷ついた臀に、ウイスキーを注いだら……と私はその思いつきに胸が躍った。室の洋酒棚にはウイスキーの多様な瓶が暗く光っていた。黒服の女が室をノックしたのは、その一本の角瓶のコルクを私が歯で抜いたときだった。「お約束の時間が参りました」と彼女は私に告げた。正午であった。翌日の正午迄女一人を奴隷化する。それが崔と結んだ契約だったのだ。それが終了したことをこの女は私に告げたのだ。最後の仕上げをしたい、だから待ってくれと私は云った。十万という額は決して安い金額ではないはずだとも云い添えた。いい、と彼女は目顔で答えた。私がウイスキー瓶を持って木馬の背ろに行くと女医は鞆から注射器を出した。私の意図を素早く察し、それによって哀れな奴隷が再び気絶すると見たのだろう。それに備えて彼女はアンブルを折った。無表情な冷たい横顔だった。



私の手の物を見て、馬上の女は気が狂ったようにわめいた。「それだけは許して——まだ鞭の方が……お願い……む……鞭をください……」

飛鳥のように女医が駆け寄って、女の背中を抑えつけた。

「最後です辛抱なさい」

それから突然笑った。

「貴女は誰からでもお臀を一番ひどく責められますね。可愛いからですよ」

そうだ、と私は胸の中でその言葉に同意した。白桃のように愛らしいからだ。角瓶の口を私は逆かにした。琥珀色の強裂な液体はどぼとぼと鳴って降り注いだ。一声吼えるように絶叫して、女は意識を喪った。泪の珠が一つその顔を滑った。

※

※

※

その夜、私はまた一号棧橋前のバーに行った。名前を云うと「マドロス」と云うバーである。それで知れるように船員相手の店である。それも余りまじめな船員は来ない。混血娘が裸のシヨウを演ったりする。が、気がおけない点では一等だった。止り木に掛けて私はジンを飲んだ。

「眼が赤いわ。昨夜はこれ？」

マダムが鼻に指を当てた。花札をしたの？という意味である。

「そうだ。お花の稽古だ」

欠伸を噛み殺しながら、私は合槌を打った。流石に疲れていた。

腕の節々が痛むのは鞭を振ったためだろう。

「サービスするわね」

外国煙草を一箱私のポケットに入れた。所謂「大麻」という麻薬煙草である。

「扱ってるのか」

「ええ」

要る人がいたら紹介してくれと云う。幾らでわけると訊こうとしたとき、ふいに肩を叩かれた。振向くと崔が笑っていた。

「どうでしたか？」と云う。

「面白かった」おかげで愉しめた、と私は答えた。

「あの女はどうした？　今夜もあの教会に来ているのか？」

「とんでもない」崔はおどけて肩をすくめた。

「四日間は休ませます。牀がもてませんよ、貴方」

「夫があるとか、病気の夫があるとか云っていたが……」ひとりごと

のように私は云った。

「そんなことを云いましたか。ヤキを入れてやろう。私的なことは云ってはならないのです。あの女はどうも弱くていけない」

お前たちのボスは誰だ？と私は笑って訊いた。無論崔が云うはずはない。私の微笑は己れの愚問を知っての笑いだ。

「フフ」崔は一寸笑ったきりだった。なにも無理に知る必要はなかった。彼には彼の悪の世界があるし、私にもまた人には云えない秘密の一つや二つはあるのだ。人生の裏道しか歩けない運命に在るのだ。

「昨日のお礼にいいものを見せましょう」

二階へ、と崔は私を目で促した。カウンターのの中からマダムの姿が消えているのを、このとき私は気がついた。

崔に伴われていった二階の一間で、私が観たものについては詳述したくない。それはきわめて野卑な映画だった。マダムがそれを写しながら高く笑うのが、いっそう野卑な感じを与えた。

観るに耐えかねて私は途中から出てしまった。真直ぐ船に帰った港の辺りは今夜も白い霧が巻いていた。

翌日予定通りに出帆していれば、私はあの女と思わぬ場所めぐり逢うことにはならなかったはずだ。スタンバイをしたとき、我々の老朽貨物船は機関に故障を起した。港外で立往生したのである。こんなボロエンジンでベルギーくんだりまで、のそうと云うのだから、度胸もすざまじい。——船はドック入りとなり、私はまた陸に上ったのである。

倦怠が私たち船員を襲った。遊ぶにはもう金を費い果していたのである。陸に上ったからつけつの河童だった。

それでも、まだ私には「マドロス」で飲むぐらいの金は残っていた。

一日に一度は顔をだしたが、崔と会うことはなかった。

「あの人はあんな人です。来ないとなるとパツタリ来なくなる」

恨めしそうな口調でマダムが云った。崔が彼女の情人であることは、このあいだの映画の際にわかった。ああいう映画を二人は刺戟剤にするのだろうか。

崔に会って、もうなんの用があるわけではない。なのに、私は崔が現れるのを心待ちしていた。なぜか？　—あの女のこと聴きたいためだ。聴いてどうする、というような先のことは、今の私には酷な質問だろう。ただ一言でも聴きたかったのだ。あれから四日はもう経っている。女は教会で、又、奴隷買いの訪れを待っているのだろうか？

船の修理は手間取り、いらだたしい退屈な日が続いた。「マドロス」のカウンターに肘を突いて、私は空の杯をいつまでも眺めたりした。そんな私にマダムが「雲台閣」という字を書いて示したのである。

彼女はその名前を、指文字で台に描いた。指を水で濡らして、ゆつくりと描いた。

「知っていますわ。…私でいいなら…」

責めてみない？　と、朱唇ははつきり私に向って告げたのだ。

「あと三十分もしたら看板にします。二階で待っていて…」

私が雲台閣で悦唐に耽ったことを彼女が誰から聴いて知ったか、これは云うまでもあるまい。崔より他にない。然し、彼ではない、そんな口の軽い男ではない。とマダムは否定した。情夫に危害が加わるのを怖れたのだろう。そんなことは私にはどうでもよかった。崔を殴る気持もわかなかった。

店で一人後片附をしている彼女を、私は二階から降りて来て半裸にさせた。上半身剥きだして仕事をさせた。その張りのある上体は

「こんな駄目だわ…」と卑下するほど捨てたものではなかった。年増女の熟れた胸元を赤いネオンが彩った。彼女がネオンを消すと、暗闇にぼっと白く浮き上った。

豊満な股体が左右にくねりながら階段を昇った。流石に恥かしそうだった。あの女を私は憶いだした。

マダムの大きな臀部を私が先ず初めに責めたかったのは、その連想のためだった。ベット脇のサイドテーブルからマダムは白皮の細鞭をだした。白牛の皮で崔が作ったものだと言う。

「三十本ばかり作って高く売ったわ」

崔はこの頃少しも責めてくれない、だから鞭の味はひさしぶりのよ。とマダムは黒瞳勝ちの大きな眸を妖しく光らせた。崔もまた加虐の甘美を知る人間だったことに、私は心中に微笑を感じた。そうして彼の棲んでいるあの特殊な世界を羨望した。羨望と云うより嫉妬と云うべきかも知れぬ。

「床に這え！」

「…お尻からはじめるの」

云いつつマダムはベッドを下りて板敷の床に四つ這った。私は鞭を一閃さした。

「ああ…」

甘美な響を含んだ悲鳴が流れたとき、炎のように熱いものが私の身の内をつらぬいて走った。眼前に這いつくばった一筋の紅痕を擦けた女体は、マダムではなかった。あの女だった。私はその幻想に酔うような快美な感覚で落ち込んでいった。たてつづけに私はびしびしと白皮の強靱な鞭を振った。雲台閣のあの女の面影に対して振った。洋酒棚や円柱や赤い絨氈さえ私の眼に映るようだった。

暗い未明の街を私はゆっくり歩いた。宿舎の旅館へ向ってではなく、山の手へ向って森閑と静まった広い坂の舗道を辿った。この坂

をのぼりつめた所にホテル雲台閣があるのだ。私はなんのために其処に行こうとしているのか：その心の模様を語る言葉は私は知らぬ。それは千々たる複雑な模様だ。そして悲しい陰影がある。

マダムはもうあの部屋で意識を回しているだろう。そして全身を焼くような苦痛にのたうっていることだろう。胸から腹、腹から肢、背中臀部と、一面鞭痕に彩られて彼女はついに失神したのだ。私は放ったまま出て来た。満足そうに、眠っているような顔だった。あるいは、このまま死ぬことを、意識を失う寸前希ったかも知れない。かりに死んだとしたら、マゾとして本望だろうか。美々しいものを曳いて魂は昇るだろう。

雲台閣が見えてきた。五層の建物は暗い。眠りに沈んでいるこの城の如き建物の階下、十室ばかりの地下室に数人の女奴隷が花身をさいなまれている情景を、一体誰が想像し得よう。

ああ、あの甘美なる絵図を知る者は、この世の少数の者だ。そうしてここに一人、それを想うて身悶える男がいる：

私は泣いていた。いつのまにか涙が頬に筋をひいていたのである。何故の泪か。：恋しく愛しい被虐体を求め得ぬ故か。愛しきものへ、荒々しく鞭うたねば納まらぬ己が性向を悲しむが故か。

私は逃げるように迅く坂を下った。

※

※

※

我々の船は黒塗りの老朽した船体を、再び港に浮べた。ウインチが唸って新たな積荷を船底に降していた。春の陽が働いている人夫たちの背中に光っていた。その風景を私は宿舎の旅館の手すりに凭れて眺めていた。

「伊東さん、電話だ」

若いコック見習の男が廊下から私を呼んだ。「女の人です」とニヤリと笑った。

「あれからどうしていたの：」

電話のマダムの声は尖っていた。

「いくら電話しても居留守ばかり使って：ひどい人：」

居留守を使った覚えは私にはない。多分宿の者が面倒くさがって取次がなかったのだらう。ここはそんな宿屋だ。女中たちの気性も男のように荒っぽい。浮気な男たちへ掛ってくる浮気女の電話など一々取次ぐことではない。

「明日出るでしょう。今夜来なかったら死んでやる」

マダムの声がガンガン響いた。なるほど、バーの窓からは港が見えるのだ。我々の船を彼女は目敏く見たにちがいない。

「そうだ。当分お別れだ」

と、私は云った。

「来てくれないの？」

本当に死んでやるから、とマダムは泣声をだした。

「責めて：今夜責めて：」

行こう、と私は云った。それから急に力をこめて「きつと行く」と云った。

「ほんとうよ」

電話を切って二階の部屋に戻ってくると、事務長が私を待っていた。

「内緒で一寸頼みたいことがあるのだが」

市内に自分の囲っている女がいる。その女の許へ金を届けてくれないかと云う。出船準備で自分は多忙だから行く暇がない、なあ頼むよ、とお道化て掌を合わせた。

私が承知すると、事務長は手帳を裂いて情婦の家の地図を書いた。太い指で不器用に描いた。

金を届けた帰りに「マドロス」へ行くつもりで私は宿をでた。陽差しがおそろしく明るくてたちまち肌が汗ばんだ。私は上衣を脱いで腕に抱えて歩いた。四つ辻でリントクを拾った。行先は郊外の場合



た。古風な冠木門を構えた家の前で車は停まった。

しどけない寝巻姿で現れた三十恰好の女に、私は玄関に立ったまま金を渡した。事務長不の情婦は不愛想に爪の伸びた手をのばした。事務長のことはなにも訊ねなかった。「ありがとう」と云う言葉さえこの女は惜しんだ。私は手荒に格子戸閉めて踵を返した。

リントク屋は煙草を喫いながら待っていた。静かだった。実に静かな空気だった。新芽のふいた翠緑の樹立を、稍傾いた陽差しが包んでいた。幾許が残っていた有金全部を私はリントク屋の掌に握らせた。もう明日からは海の上だ。これぼっちの金が有ってどうなるものではない。

「帰りは歩いて帰ろう。こんな静かな径を歩くのはひさしぶりだ」

恐縮してペコペコお辞儀をする彼に私は云った。散歩という風流心が私にもないわけではない。

閑静な径を私はぶらぶらと辿った。右手に美しい形をした山脈が見え、両側の樹木の間に小鳥の戯れる影がチラチラと動いた。時折ぶつかる屋敷の中からも物音一つたななかった。

私は一つの小径をえらんだ。街へ出るに近道だと思ったからである。径の脇には小さな流れがせせらぎを立てながら走っていた。左側には長い白壁の土塀がつづいていた。墓地に繞らした塀のようだ

でかなり遠かったのである。

人通りの絶えた淋しい郊外の径で車を停めて、私が紙片の地図を示すと、

「ああ、この家なら知っています」

風邪をひいているのかリントク屋は鼻をすすりながら答えた。舞踊の師匠の家だと云う。再びペタルを踏みだした。

「美しい女か？」

幌の中から私は問うた。「ええ」と答えたがお世辞の響があっ

った。果して向うに蒼古たる色の薨が見えた。寺院の屋根である。私があの人と遇ったのは、その古刹の門前だったのだ。

「あ……」という形で我々は向合った。実を云うとこの一瞬を私は信じ難かった。あり得べからざることに感じた。私の周りから一切の世界が沈んで行くようなものを私は感じた。

「会えた……」

喉の奥で私は云った。声にならなかった。痴呆のように唇だけを動かした。なにか云おうとするように女の唇も微かに動いた。その瞬間、脱兎のように女は顔をそらし、走り出したのである。全力で私は追った。

女は喪服姿だった。黒い着物から顔の白さがぬけてでいた。白足袋も眩しかった。その黒い着物の裾から白い脚をめぐりだして、女はバタバタと駆けた。臀部が弾み揺れていた。みるみる距離はせまった。

私が前に廻って立ち塞がると、女は築土塀を片手で支えてハアハアと息を乱した。隆起した胸が烈しく波打った。

「ゆ……許して……」

見逃してください、と身悶えつつ女は訴えた。

「君のことは忘れられなかった。何もそんなに恥かしがることはないだろう？　恥しいのはお互いさまサ」

「一週間前に夫が亡くなりました。今日はその墓参をしたのです。この喪服を御覧ください。……夫が亡くなって、もう治療費を稼ぐ必要はなくなりました……」

女はしずかに語った。

もしも、この女がこれほど若くて美しい女でなかったら、あるいは私は同情しなかったかも知れない。しかし、私はこの美女を想うて暁闇の中雲台閣の前に佇んで、少年のように頬を涙で濡らしたこ

とさえある。炎のような悦唐の思慕に今日までどれだけ身も心も焼かれてきたことか……

「そうだったのか」私の心に、日頃の荒々しい加害を求める気持とはおおよそうらはらな、憐憫の情がふつと湧くのがわかった。

深い雑木の木立を金色の斜陽がまだらに染めはじめていた。ここには鳥の声も絶えてなかった。林は森閑と静もっていた。奥の方には幽かに夕暮れの暗色が漂っていた。

女はいつまでも動く様子がなかった。花顔を蓋っている白い細い指が妙に印象的であった。

「俺は今夜で又しばらく内地ともお別れサ、尤も居ったところで今後の相談に乗ってやれる柄でもねえが……」

私は笑って煙草を啜えた。女は顔を挙げた。なめらかな豊頬を泪が滑った。「打って、打って下さい」突然、女がいい出した。私は戸迷った。そして寸刻忘れていたものが呼び覚められた。私はバンドをひきぬいて構えた。最初の一撃が肩に飛んで、美しい顔が苦痛を現わし、丸い豊頬にパツと花のような紅を刷いた瞬間、私は今生命を終ってもいいと思うほどの感動に襲われた。

「もっと強く打って……もっと強く……」

夢のようにこの言葉を私は聴いた。

「ああ、ひざしぶりだわ……早く打ってください……力いっぱい打って……」

奇蹟的なものが女の内部に誕生れたことを、私は実感した。飲むに私はわなないた。

「人が変わったみたいだわ、わたし……」

このとき、いち早く落光した遠くの海から白い海霧が昇っているのを私は視た。それは帯のように眼下の市街をとり巻かうとしている。私はこの霧を生涯の記念とするだろうと、深い大いなる感動のうちに想った。

限定版『緊縛フォト・アラベスク』

縛られた女体ばかりの写真集 第一弾!!

限定版『特集号』の第一回刊行として最近撮影の新人モデルの緊縛写真から選集いたしました。

△収載 内容▽

- 一、鏡……………愛川 悦子
- 二、銘花二輪……………花坂 道子
- 三、鉄鎖……………大塚 啓子
- 四、諦観……………大塚 啓子
- 五、庭園にて……………絹川 文代
- 六、謎の微笑……………田中 芳代
- 七、田代悠子表情集(その一)
- 八、誇る脚線美……………田代 悠子
- 九、この足どうかしら……………田代 悠子
- 十、裏と表と……………愛川 悦子
- 十一、落陽の丘……………愛川 悦子
- 十二、ボリウムの花園……………大塚 啓子
- 十三、緊縛感の綾……………大塚 啓子
- 十四、奔放な肢体……………大塚 啓子

- 十五、鏡台と腰巻……………花坂 道子
- 十六、腰巻と鏡台……………花坂 道子
- 十七、奇妙な休憩……………絹川 文代
- 十八、田代悠子表情集(その二)
- 十九、脱がされた高手小手……………愛川 悦子

- 二十、亀甲縛り……………愛川 悦子
 - 二一、吊責折檻……………村井知可子
 - 二二、立木縛り……………村井知可子
 - 二三、豊 醇……………愛川 悦子
 - 二四、乱れ髪三景……………大塚 啓子
 - 二五、椅子と緞緞……………愛川 悦子
 - 二六、姐上の美鯉……………絹川 文代
- △本限定版特集号は一切書店売りは致しませんから直接発行所宛お申込願います。▽

特価五百円(送共)

(各冊、限定番号押捺)

「悦虐小説と緊縛写真特集号」

略号「悦特」

グラビヤ縛りフォト百十四葉

定価三百円(送共)

○妖精(ニンフ)

○三ツ葵の
プロフィール

○誘 拐

○羅 致

○プレイ

○木洩れ陽

○夢 路

構成―杉原虹児、モデル―絹川文代、田代悠子、浜本喜美、三木敬子、大塚啓子、愛川悦子、田中芳代、村井知可子、益田房子、花坂道子

田房子、花坂道子

口絵・(四馬孝画集)

○白魚の悶え

○苦悶の前奏

○鉄鎖のさしみ

○籠の白鳥

(悦虐小説傑作集) 昭和二十八年年度本誌既載作品

雌獣の手記

妻は縛らず

夕の朝顔

続囚衣

私の主題

色 狼

女奴隷の手記

受難記

怪奇曼陀羅教

○競 花

○首 縄

○シユミーズ

○放 心

○間諜成敗

○三処責め

○黒タイツ

○観 念

○宙に踊る

○アクロバット

○濡れる朱唇

○土蔵の花

呪 縛

悦虐の旅役者

長期刑

私の想い出

片耳伝奇

縛られた妻以前

鱗 光

地獄絵行脚

鉄格子の中に

(辻村 隆)

(青山三枝吉)

(古川 裕子)

(岡田 咲子)

(窪村 弘)

(早川新二郎)

(久留木 栄)

(長岡愛一郎)

(小坂多美枝)

魔 教 園

(完 結 篇)

No. 8

ナンバー・エイト

土 路 草 一

(H) Water、Closet

雲上人の如き豪華なイーペラの個室の隅にこれ又、至れり尽せりの清潔なwater closetがある。

真白なタイル壁を囲らし、正面にテレビ、右脇に書棚、左脇に鏡、手前には四季の花が飾られ、思いつきや命令を録音したり伝達したりするマイクロホンが、ボタン一つで上下するようになっている。

天井から噴霧するのだろうか、得も云われぬ香気が漂い、ユーマ女性には腰を下して、足を家畜の唇揉みに委ねる。

併し、この床板の下では、どういうことになっているのであろうか。御主人が扉を開け

床を踏むと、電流板が接触して豆ランプが点き、二匹の勤務家畜の鼻鎖が、キキーと牽かれる。家畜は天井から下がっている潜望鏡のような円筒の下へ引寄せられて、銀の受器を捧げるのである。

銀の受器は底の深い鍋のような器で、把手の部分の家畜双方の歯と唇に留められている二匹は半ば口を開いて支え、しっかり見詰めながら収納するのである。

底深い器であると云っても、飛沫は顔や口へ弾くし、鼻孔には特有の臭いが浸入してくる。だが、白く弾力を秘めた若畜は両膝を折って、さながら芳醇な酒を酌まれたように捧げ受けるのだ。

床が踏まれて扉が閉ると豆ランプが消え、

鎖が緩んだ。

二匹の家畜は濡さぬように固くなって、相互で平均を採りながら横向に覽る。

壁の中程に小窓が仕切られ、カウンターのようないなっている。

二匹は向き合ったまま注意深く台の上に銀器を置く。台に仕掛けがあるのか、外側でベルが鳴り窓の戸が、ぱたんと開いた。

比奈地路子は前屈みになって、窓の奥に燦然と光る銀器を見た。

外側にいた路子には、その内容物が何であるか、判っていないかった。只、窓の内部から僅かに匂ってくる汚臭に、ちよっと鼻を背むけただけだった。下手に表情や動作に出したりすることは、もうポケと呼ばれる家畜には

出来なかったのだ。

美畜の鼻輪は丁度、鬚のように両頬に張りそこから後へ丸みをつけて折れ曲った細い鉄棒に固定されていた。左膝前に、お碗のような小さな朱塗りの容器が置いてある。

「お前は今日の勤務畜ではないのだが、特別の要請に依って使役する。銀の器のものを、この碗に小分けするのだ。」

この勤務を与えられる家畜は比較的、畜歴の永い、変脳効果の良い飼育が選ばれる。

それは、この内容物が白い肌の飼育畜に、人間以下の生物なることを意識させる為、いろいろな用途を持つ品であり、又、主人に対し畜生たる立場を認識させる恰好の材料である為、取扱いに慎重を期するのである。

又、人間の眼から見たら汚物である。併し飼養畜から見れば、尊い物であり、取扱いに誇りを感じる貴重物である。

一九五九年の今日でも、一般人は王妃や王女に対しては屈み、手に接唇させて戴いて誇りを感じている。三百年も遡れば、僧侶の足に接唇させて貰う為に海を渡った伊達家の家臣もある。お互いに人間として認めていながらの結果である。

魔教国に於いて、判然と畜生処遇された結果では、汚物に触れることを以って、身の引緊る感激を味わうとしても、あながち異とするに当らないであろう。

鼻輪に嵌つてゐる鉄棒は、選出された勤務畜には装着されない。器具に依って強制しなくとも、家畜達は喜んで口に含み、碗に吐き移すからだ。

だが、路子のように特別調教の為の牝は、嫌悪して行動が鈍り、余計な手間を掛ける惧れがあるから、動作を規制するのである。

スイッチが入って、鉄棒が非情な力を発揮し始めた。

ボケは鼻を前へ牽かれ、よろよろと一膝、二膝、よろめく。

頭が、するっと小窓を潜って、顔が銀鍋の上で停った。

瞳は当然、器の中の汚液を映す。



「あつ！」

独得の匂いが、ふうんと鼻神経を襲った。
「これを、これを含め！」と云うのか？こ
れを煩張って腕に運べと云うのか？ いや！
いくらなんでも、いや！」

流石に清心を傷つけられて、路子は力を絶
めて身を引こうと焦った。罪になり、罰され
ることを意識しないではなかった。併し、澱
んでいる汚臭が、まだまざと眼と鼻を貫いて
虫酸が全身を走った。

「いやっ！」

言葉には、ならなかった。が、白艶の肩は
大きく揺れ喘いだ。

後退ろうとしていた片膝が、ずるっとこ
り、鉄棒が強引な降下を開始した。

「あ、あっ！」

抵抗する鼻梁は拗れ、振れるように痛んだ。

眼前に拡大してくる濃物、鼻を利す悪臭、
瞬間、路子は息を詰め、固く眼を瞑った。

花散らす輝く美貌が、夢にだに思わなかつ
た汚物に埋もれる。

智額も月眉も黒睫毛も、必死に抗って跳い
た。……鼻孔は呼吸を怯える。唇は金
輪際、開くまいと厭った。

が、生物の器官は機械のそれと同じく、正
常な内臓の営みを要求する。

哀れや、比奈地路子も生物である。
気高く、志操固い令嬢であっても、肺の苦

しみには勝てない生き物であった。

「ぶ、ぶっ、あぶっ！」

皮膚の下の血が理外の抵抗に急湍となって
脈打ち、心臓が急激のドラムを轟かせた。

極限が来た。耐えに耐え、怯えに怯えた呼
吸は、激しく勢いを伴って、吸いこまれる。

屈辱の涙が險の縁を洗う。が、冷酷な機械
は配碗の作業を正確に命じた。

ああ、併し、これが、あの麗しい令嬢の姿
であろうか？ 犬畜生にも劣る浅ましい動作

をしている裸の女が……。何と惨めな凋落で
あるうか？ 乙女の口に依って小分けされた汚

物は、ベルト・コンベアに乗って家畜厨房に
送りこまれる。

そして、所有畜の餌の味付けに使用される
のだ。女主人の權威や体臭や愛護心や其の他

もろもろのことを納得させる為に……。

(二) 展示即売会場

イーペラは秘書や家畜に手伝わせて衣裳を
取替える。

大輪のバラを一輪あしらった縞の開衿シャ
ツに、短かめのスラックス、柄を金糸で刺繍
した愛用の鞭を抱えた白い女は仲々、スポー
ティである。

愛玩畜、二匹を従えた彼女は颯爽と畜車に
乗りこむ。この畜車が又、華麗な飾りをつけ
ているのだ。

大きさも馬車を擬らえて、堅木で車の輪と
車体の骨が組立てられている。だが驚くべき
ことに、その木目が判らない程、家畜が貼り
ついているのである。

椅子の背当、肘掛の部分は申すに及ばず、
足台から駁者台、横木に至る迄、白く若やか
な肉塊が奇妙なアクロバツテングして造形し
ている。激苦のタンプリングは車輪に迄も及
んでいて、轍を十字に交叉して二匹の家畜が
碌られているのである。

走り出したら、車の廻転に伴って、この美
少女達も、くるくると転回することであろう。
めまぐるしい遠心力で、血へどを吐く苦し
みに苛まれねばならないであろう。

それなのに主人は、ゆったりと椅子に腰を
下し、美菓を撮らでいるかもしれないのだ。

駁者の鞭が一閃する。轍畜は一斉に駆け出
した。貴やかな畜車は螺旋状に坂を登る。喘
ぎ出した轍畜の背に輪を描いて、鮮烈な皮鞭
が飛ぶ。

ぴしっ！ ぴしっ！

青春が薫じている畜肌は、汗を、べっとり
浮べ、呼吸を鳴らして狂奔した。

足許に陽の照りが映って、行手に草が見え
た。爽やかな微風が頬を撫でる。

路は地から抜けて黒天使高原へ出たのだ。
灌木をよぎり、小さな丘を越えると、其処
は緑陰に囲まれた平地であった。

テントが二、三カ所に建ち、人影が多く騒めいている。

畜車が近づくにつれて、状景は、はっきりして来た。

今日は、三月に一度開催される家畜展示即売会なのである。会場には、招待された世界の裏街道を歩く各国の男達が、盛に酒杯を挙げていた。

又、売買される家畜達は、広場の杭に括られて幾列かに並び、悄然と坐っていた。

もう始めているらしい。鞭と、どなり声が軌畜の耳にも届いて来た。

「皆さん、遅くなりました。」

イーベラは自分の席に着く前に、来賓席に寄って艶然と愛嬌を撒いた。

「いやあ！これは御入来、待ち兼ねてましたよ。先ず一杯、如何ですか？」

顔見知りのサウジ・アラビアの男が、テーブルのグラスを把って勧める。

「戴くわ。どう？いいのがありました？」

「うん、五匹程、値をつけておいたんだが……この頃は黄色の要求が多くなってね。」

「任せといて下さいな。ちゃんと仕入れてありますから。」

傍から南阿の仲買人が口を挿む。

「大量、入荷したって話じゃないですか？」

小出しにせず、束に纏めて勉強してくれないですか？」

「勉強致しますわ。でも、皆さん方は御眼が高いんで、仕入れや調教に苦労しますのよ。」女商人は、にこやかに折衝しながら、巧みに買気を誘ってゆく。

支那服、サリィ・ターバン、トルコ帽、背広、ジャンパー、と種々雑多な服装の家畜商人達の間を縫いながら、ユーマ女は微笑で話を惹きつけていった。

売買のシステムを簡単に説明しよう。

家畜は額に番号を墨書され、胸に最低価格を記した札をピンで留められている。

購入希望者は、目当ての家畜の番号と買値を紙に書いて入札する。

入札競争者が無い時は、其のまま落札出来るが一人でもあった場合は、入札価格に関係なくセリに持ちこまれる。だから入札価格が低くても、セリで高値をつければ落せる訳である。

家畜は白あり、黄色あり、黒ありで、世界各地の畜種を網羅している。用途は労務用、愛玩用、医学用、細工用と、それぞれ姿体に依って提供されるのである。

併し、此処へ展示されるのは微々たる数で大半は、国内へ供給するのが建前になっているが、資金的な面もあり、政策的に各国の闇ボスをキヤッチして置くことは、いろいろな工作を有利にする意味合いから、家畜放出がなされるのである。

仲買人達は厳密に選出された者ばかりで、常時、魔教園スパイの監視を受けている。問題の生じた時は、逸早く抹殺される運命にあることは、幾多の事例に依って彼等自身が、夙に承知しているところであった。

「これなんか、掘出物ですわよ。」

42とスタンプされている牝の前に立ってイーベラは、チベットの客を振返った。

「こいつの国の言葉で読むと、シニ（死に）ですな。」

顔中、業病の疣に覆われた遠来の客は、嘲弄するよう云った。

「お気に入りませんか？でも、これは歌唄いで人氣があった奴なのですわ。それに仲々、いい肌艶じゃありませんこと？」

イーベラは在日中に知っていたのである。この悲しげに首を垂れ、チベット人の布靴を見ているシャンソン歌手、桜みゆきを……。

観衆を熱狂させた歌声を、畜叫としてしか聞かれない境遇に堕ちて、裸の体を白日の下に曝している乙女は虚脱しているのか能面のように無表情だった。

「わしは歌唄い等、入らん。墓掘り牝が欲しいのじゃ。」

辺境人は、それでも歌手だったと云う女に興味を覚えたのか、艶やかな髪を撫んで顔を起してみる。

「墓掘り？」

「そうじや。わしの国では病で行倒れる奴を嫌う。家で看取られて死ぬ者と違って、路傍では魂が神に召されぬ悪業の輩と云ってな、誰も構わないのだ。だから、その行倒れを扱う者がおらん。併し、我が神は胎若い女がこれを葬むる時は、罪業はその乙女に乗り移って消えると教えられているのじや。だが、その女は生涯、浮ばれぬと云伝えられている。だからわしの国では、なり手がない。この仕事に使う牝を求めていると云う訳でな。」

「成程」売手は感じ入ったように頷いてから「それじや、こいつは、びつたりな品ですわ。この通り、ボリウムがあつて、力仕事も出来るし、声がいいから祈りも聴きよいだろうし、時折は異国の唄も歌わせられるし願ったり叶ったりの牝じやありませんの。」

ステージに立たせれば人気絶頂のシンガーとして、テープが舞い花束が贈られる乙女である。ラジオやテレビを通じて、チャーターミングな声音と素晴らしい肢体は、全国に多数のファンを有しているのである。

それなのに今、類くない美声を生む咽を、蛮人の汚い手で、鳴き鳥のようにいびられ、香り高い乙女の体を牛馬並に調べられる。この才能に恵まれ豊かに自活出来る体は、何等意志を認められず、商品として蛮国へ売渡される。そして、其処の住民の忌み嫌う浮浪人の屍体処理を鞭の下で行わねばならない。

「立たせましょう。」
セールス・ウーマンは見易いようにと、膝を立てることを命ずる。

がちやつと鎖を鳴らして、美声畜は脚の色と形を買手に展示した。ばらばら脛に付いていた土が足の甲に落ちた。

(三) 意外なる小妖精

「イーベラ様！暫くで御座いました。」
自席に戻った魔女は、脇から挨拶されて振り返る。

「あら、珍しい。びっくりさせるわねえ。いつ来たの？」

ユーマ女は意外そうな面持で、それでも懐しように固く相手の手を握りしめた。

「昨日で御座います。伯父様に呼ばれました……。」

日本人と同じ皮膚色を持つ東洋の女は、あどけない顔を卑屈に崩して振仰いだ。

「本部へ行っていたの？」

「はい。伯父様が四、五日遅れて当地へお立寄りになられます。私は、その先触れで御座います」

本部とは、ユーマメイソンの指令機関のことであり、伯父とはイーベラの伯父を謂っているのである。

併し、この東洋女とは誰であろう。……読者は覚えておられるに違いない。比奈地邸に

いた綾と呼ばれる女中を……。

隅田綾子と名乗るこの女は、実は日本人ではない。四つの島国の隣国、日本に依って酷使された国の血を引く女だ。

彼女は、幼時、北海道、某市のスラム街で育った。父は炭坑夫、母は選炭婦であった。

生れおちた時から彼女を圍繞していたのは貧困と蔑視であった。そして、それは父が落盤で死んでから更に強まった。

頑是ない幼女が經うにしては余りにも哀れな麻袋の服を身につけ、欠けた茶碗には米がよそわれる日とて、ほんの数える程しかない暮しが続いた。それでいて、周囲の人々は同情の瞳を注ぐ前に、蔑すみの眼差を向けた。

その頃、国土を襲っていた戦争と云う熱病が、人々に一種の民族的優越を与えていたのかもしれない。

併し、彼女にしてみたら、被征服の弱少数民族の悲哀を、働いても働いても否、働く場所すら与えられぬ人種的階層の惨めさを、いやと云うほど見せつけられ、味わされる結末であった。糧も、衣もなく街を迷い歩く彼女の軀は疲労に喘ぎ、心は困憊に萎みきっていた。

その軀を、その心を開花させてくれたのはイーベラの伯父に当るユーマ人であった。

終戦直後、経済使節の名を借りて、北海道の漁場を巡遊している時に、たまたま出会った五才の童女を拾い上げたのである。ナジャ

リズムに人道的行為を
喧伝させる為に……

だが、綾子にとって
は雲泥の生活向上であ
った。彼女は神にも等
しい尊視をユーマ人に
注いだ。

そしてユーマ人は、
その崇拜に応えて教え
たものは、温かい愛の
心ではなくて、鋼の如
き無情と憎悪心であっ
た。

先ず彼は、童女に人
情を持つてはいけな
いと教えた。情け心を抱
く人間は決して人を追
い抜いて社会の上位へ
進出出来ない。世の中
で頼りになるのは自分
と金だけだと……。

そして又、人を憎む
事を吹きこんだ。人を
憎む、其処に人生に対
する斗争心が生ずる。相手
を叩き潰してしま
うことに依って、完全な勝利を
掴むことが出来るのだと……。

に浸蝕されていった。
私を、こんな目に会わせていたのは日本兵
だ。日本人は敵なのだ。いつか、きっと、奴
等に思い知らせてやるわ

は薬にしたくも無かったし、心に至っては権
威と云うもの、又、金銭に対しては卑屈に折
れ曲る傾向があった。
彼女の日本人に対する憎悪心も、所詮、ユ



助長するようにユーマ人
は己れが人種的優位を誇張
し、島国民族を軽蔑すべき
屑族だとアジった。

童心は、みるみる敵愾の
膨張を遂げる。呪うべき人
種、殺しても飽きたりない
動物……と、報復の沸りを
内臓で渦巻かせる。

そこでユーマ人は今度は
逆に、真綿で包むことを教
えた。決して表面に出して
はいけない。爪を見せず、
飽く迄も穏やかに奴等を裏
から手玉にとるのだと……。

綾子自身にも素質はあつ
たに違いないが、見た眼に
は純真無垢な娘スパイに成
長していった。が、三ツ子
の魂は云々の諺があるが、
綾子もその生い立ちが拭い
きれず、娘々したあどけな
い容貌ではあっても、そこ
には品位や知性と云うもの

「マア人あつてのものなのであり、その盾が取
払われてしまえば、又幼時の如く君臨者には
意々として従うかもしれないのである。」

ユーマ人は幾つかの諜報経験をさせてから
可憐な毒蛾を、越後の百姓娘と云うことにし
て、つてを頼り比奈地邸に配した。

もつとも、綾子の任務は路子の誘拐ではな
かった。比奈地氏の行動、其の他を探る遊軍
的布石に過ぎなかつたのである。偶然が、路
子にスポットを当て、イーベラの家畜にして
しまったのであつた。

即ち、隅田綾子はユーマメーソンの手先で
あつたのである。

「如何ですか？ 御令嬢の馴致状態は？」

綾子は、おどけて路子のことを訊いた。

「そうね。まだ、きりきり舞いしているって
とこね。海のものとも山のものともわからな
い代物よ」

「イーベラ様のことですから、さぞ厳しくな
さるので戸迷っているの御座いますしやう。」
「さあ、どうかしら。でも品質は良いほうね。
貴女、見たいのでしょ」

「はい。是非。私は此処へ参りましたの始め
てで御座いますし、顔見知りの家畜姿は、や
はり物珍しく心が疼きますわ」

イーベラは、にこりと笑つて秘書に云いつ
ける。秘書が電話器へ歩み寄るのを眺めなが
ら、綾子は恩人の姪に云う。

「イーベラ様にお断り致しませんで潜越で御
座いましたが、一匹譲つて戴くよう申請して
参りました。」

綾子は内緒に取運んだことを詫びるように
言葉を恐縮して窺つた。

「そんなこと構わないわよ。」

無造作に云い捨てる。

「家畜の名を申上げても、私にお下り渡し下
さいますか？」

綾子は念を押す。

「思わせぶりね。いいことよ。」

魔女は苦笑を浮べながら東洋娘を見下す。

「じゃ、申上げます。先刻既言に繋がれてい
る城美加子を見掛けましたので、登録願いを
させて戴いたので御座います。」

ユーマ女は、ぱっと瞳を張つた。

「美加が来ていたの？」

路子の親友であるラジオ帝都の美女を、イ
ーベラも女中もよく知っていた。まして、イ
ーベラは、タツマとの経緯の総てを仔細に
報告を受けて知っていた。

外交官の死後、一般家畜に繰入れられて、
船積されたが為、つい見落してしまつたのだ。
「仕方がないわ。私の手落ちよ。でも貴女は
此処に四、五日しかいないのでしょう？」

イーベラは、思い切るように云つてから、
相手の気を、ちよつと誘つてみた。

「はい。それで調教師は、フーガさんに定め

て置きました。」

東洋女は、にっこり微笑する。ユーマ女も
気嫌を取戻して、軽く肩を叩いた。そして、
ふと声を潜めて

「貴女、津田って新聞記者知っている？」

「津田？」

綾子は小首を傾げる。

「お嬢さん、貴めて訊いたら美加の恋人よ。」
「そう云えば、聞いたことがあるようです。」
「その津田慶介がね、日イ油田の探鉱区にい
て、午後に訪ねて来ることになつてゐるの。」

「えっ？」

今度は綾子が驚く番だつた。

「案内人を通じて申入れがあつたのよ。黒天
使の寺院を参観したいって……」

「何か嗅ぎつけたので御座いますしやうか？」
「これから嗅ごうとするのよ。此処は私達の
法律の支配地よ。奴等が少しぐらい蠢動した
からって心配のない処よ。それでね……」

イーベラは綾子の耳に口を寄せて、何やら
いたずらっぽく囁いた。綾子の面上にも笑窪
が浮び、悪ふざけを企む娘の顔になつていた。

(四) 下女と令嬢

路子は洗濯機にかけられ、綿密に汚れを拭
われる。点検を受けてから、イレに縄尻を把
られて地上に出た。

「御主人様がお呼びだ。粗相の無いように御

奉仕申上げる！」

路子は深く頭を下げ、完全服従の意を表わす。家畜として受ける比重から云えば路子にとって、この専任の少年が一番恐れねばならぬ人間と云えるだろう。

眼覚めてより眠りに入る一日の行動の全部を、この少年に見張られているからだ。

刻明に観祭し、記録し、フーガの手を通じ上申書となる。路子が少年の気を損ねるようなことがあれば、直ちに鞭を受けると共にイーペラの刑を覚悟せねばならないのだ。

麗しく知性ある乙女の総ては、この若年の男に掌握されていると云っていい。

何一つ不足ない美女、路子は、ポケとなった躍くばかりの美肌を地へ伏せ、卑しげに少年の気を窺う。

地歴、文学、社会を研鑽した優れた智脳は浅ましい畜行為の是非判断だけで埋まり、同情ややさしみで充たされていた胸は、おどおどと鞭の軽からんことだけに思いを馳せる。この賤しい少年の一言は、大学者や恋人の一言よりも重く強く、路子の頭心を動かす。そして神よりも仏よりも高く崇めねばならぬ存在だ。

路子は、少年の手を拭くの己が髪を提供し、靴の泥かきに己が豊かな乳房を捧げ、或時は己れを打つ鞭を口で啞えて刑を願う。何が故に？

路子は、イレに寵愛を願っているのだ。愛玩畜らしく可愛がって貰うことを……。専任助教士が、自分に任された牝に一般並以上の動物愛護心を持つてくれることは、路子の刑を軽くするからだ。

併し、此頃は刑の軽重を離れて、動物らしく愛されることに心が騒ぎ立つのである。

この黒く頑丈な足指を口に含み、首筋や背を踏みつけられることが、不可思議な悦びとなって胸を駆けるのである。

しかし黒い少年は、素晴らしい美女を人間と思っていない。心底から家畜扱いをする。犬や猫を仕込むように容赦なく肌を叩き、芸をさせるのである。そして褒美として、噛み捨てたガムを食べさせたり、唾を舐めさせたりするのだ。美女は、その才智溢れる頭脳に巨視した少年像を映写し、益々、卑しく家畜らしく仕えてしまうのである。

この天質の美貌を持ち、深い教養を蔵した絶世の乙女が……。

路子は助教士に命ぜられて脚下を離れる。

求める御主人のおみ足を発見して、膝歩行を速めて這い寄り、恐る恐る唇を当てた。

「ポケ！ お客様よ。」

芳わしい畜髪は、間をおかず、隣席のサンダル・シューズに被った。

「云いつけは利くのね。」

真白な背の両脇に、丸く肉づいた上膊がある。

その上膊は肘から折れて、手首で重なっている。邸で見慣れた桜貝のような爪をつけた掌が、緊張でしっかり握られている。

綾子は、見たことのなかったお嬢さんの背の腰の艶やかな肌が、恐れて脈打っていることに、足指から伝わってくる温い感触に、溶けるような気持よい愉悦が全身を流れた。

報復。日本人に対する報復が、最も身近に自分を召使った令嬢を家畜扱い出来ることに依って果されたような気がしていた。

私に、女中だった私とも知らずに足に接唇している路子。美しい文章を書いた形よい手が、束ねられて動かせない。洗練されたデザインと柄布で隠れていた背や腰が、まさまじと天日の下に剥ぎ出されて私の足が載ってもじっとしている。

ふふふ。ああ、いい気持！」

「お前の知っている方よ。声と脚で判断してごらん！」

女主人に云われて、瞠った瞳を路子は、眼前の脚に注いだ。頭の中で知る限りの女人像を描いた。

綾子は面白そうに足先を突き出し、わざとお嬢さんの愛らしい口の中へ押しこんだ。

「この匂いと垢の味。緑深い私を思い出せないのかい？」

朱唇を蹴上げるように脚を振った。固く眼を閉じた美貌は、綾子の視線に晒される。

「この口は、私にくだらなことを云いつけていたのだ。この頬は高級ぶって、私とは違う高価なクリームをつけていやがつたわ。この瞳だって、吸いこまれるように魅力的な癖に、下女め!と私を侮って見ていたわ。」

それが今、こうやって足で突き上げられていても、相手の顔を見てはならないと仕込まれて忠実に瞑り、されるが儘になっている。

いい気味! 私を下女として使っていた積りなんだろうが、少しばかり鞭で教えりや、裸暮して這い摺る阿呆な牝じやないの!

綾子の胸は、快哉を叫ぶ。声も震えるように弾んで

「伏せ!」

と足を抜いて、命じてみる。

美畜は機敏に腹這って、土に臥せた。

息ずいている肩、滑らかに充ち張っている背、交叉して固まっている手、すらっと長い脚。

白く無垢な凝脂を被った華体は、綾子の足の許の地面へ、べったりと伸びる。

繊細な首筋を踏まえ、片足で可愛らしい耳朶をいじりながら

「ふふふ、裏返しよ!」

路子は、はっと、その声で知った。

綾子! 女中の綾子の声ではないか!

綾子が私を? でも、どうして綾子が此処に? が、そんな詮索よりも、主人様の前で疎漏があつてはならないとする意識の方が強烈であつた。敏速に寝返る。

女中の前で、こんな哀れな恰好をしている私! 労わってやった田舎娘の言葉の儘、あらなく、素肌を晒している私!

瞑っている臉の裏が熱くなった。併し、ポケと呼

ばれている女は、羞恥心を遙か琴線の彼方へ追いやっていた。又、追わ

ねば暮してゆけぬ世界であつた。令嬢と呼ばれて

いた時代は、数十年も昔のように、この牝の心は区切っていたのだ。

見知っている女であつたが為に、僅かの辱を感じたのであつて、全頭脳を占めているのは、如何にして御主人イーベラ様の気を損ねないようにしようかとする意識である。

冷酷と聴える言葉も、女中だった綾子の口から吐かれたとする拘わりからであつて、御主人様の代言と探るのが至当である。さすれば、客である綾子を喜ばせることが、引いては御主人様を喜ばせることになる。命ぜられるが儘、否、こちらから家畜の所作をして、まめまめしく仕えて差上げるのだ。綾子様の心に和みが出来れば、私は褒めて戴けるかもしれない。

飼畜であるポケの思考推移としては当然であつたろう。併し比奈地家令嬢、路子対、元女中、綾子の対面としては、余りにも惨めな心配りでは、なかつたろうか……。哀れな敗残の精神では、なかつたろうか……。

「判ったかい?」

又、綾子の足許に正坐させられた路子は、畏まって頭を下げ、頷きを示した。

「そう。じゃ、私の友人として隅田綾子さんに挨拶をしな!」

美しいお嬢さんは、すっかり家畜ポケの姿になつて裸身を折り、鄭重に足先に唇を当てる。そして、ふくよかな頬を擦りつけて敬意





を表した。

「はははは、素直でいいわ」

高く声を発て、綾子は得意そうだった。

「これは、まだ心で仕えているんじゃないのよ。鞭や刑が怖いからよ」

併し、どちらにしても令嬢路子は、既に家畜なのである。畜生の振舞を躊躇なくやって

いる動物なのである。土下座して女中の足を舐め、己れの総肌を觀賞させている牝なのである。

(五) セリ市風

景

セリが始った。

米賓席の前に設けられたコンクリート台に指先で自由

由に電流を断続出来る鞭を持った半裸の男が立ち、声

高らかに叫んだ。「これから入札数の多い家畜のセリ

を始めます。では最初に五番！」

呼ばれた番号の牝は、杭から脱されて二人の男に引立てられる。

雲一つない空に灼熱の太陽が熾っている。緑蔭とは云え、テントの中とは違って衣を取り去られた柔肌の家畜には、じりじりと焦

げるような日射しであった。陽の届かない地下なら、黒く帳りの垂れた

夜なら、白肌の畜生達は、まだしも羞恥の上で人間失格を支えられたかもしれない。

併し、白日の下、限りなく視野の拡がる高原で禽獣の扱いを受ける。衆人環視の中で素肌を晒して売買される。木があり、道があり、花の咲いている其処は、或家畜には恋人と、そぞろ歩いた公園を思い出させたかもしれないし、或る牝には体を躍らせた学校の運動会場を連想させたかもしれない。公園の見物人、運動会の観戦、客と錯覚される人々は、明らかに自分を買取らんが為に集まっている客なのである。守り育てて来た温い血の通うこの体を、勝手気ままに弄び、穴のあく程に凝視めて調べる購買人なのだ。誘拐されて間もない屈辱に燃える家畜達は身を凍めて唇を噛む。だが、アフリカ土人を売る如く、否、奴隷以下の扱いで地上を引摺られ、呵責ない鞭でびしびしと叩かれる。護るべき節操も道義も、熱湯と蛮人の蔑視に刺し尽されて、哀れ売物らしく、おどついて台上に追上げられるのだ。「そらっ、顔を挙げて、お客様によくお見せしな！」コードのついた鞭柄が、生毛の薄い顎の下へ入る。「うわっ！」一六〇糶の健やかな体は、びびっ！と痛撃

して上を向いた。セリ人は指許にあるスイッチを押して電流を停めながら鞭柄を拗った。売品の美貌を適切に客の方へ振り向ける。眸の大きい頬の膨らんだチャーミングな容貌である。

「生後、十九才と二カ月。この通り、めんこいお面してますぜ。この発達した骨格と肉付きはどうですか？ ちょっとやそとの鞭にや参りそうもないですよ。お聴きなすって！」
鞭は、ひゅうと羽鳴りして、弾力のある若肌命中する。

「うっ！」

「ほう、大して怪えたような面じゃねえ。背髄だって真直ぐだし、固そうだ」

鞭柄が脇の下で拗られ、美貌は顔を皺めて腕を後上部へ挙げた。鎖が骨の悶えと共に、がちやつと鳴った。

「さあ、さあ、値をつけたり、つけたり！」

客のセリ値が、声高に飛んだ。

「え？ 幾デナールですって？」

耳に手を当てて、聞き返す仕草をしてから

「へえ！ それっぽっちや安すぎやしませんか？ もう一声、奮発して下さいな」

トルコ帽の客が立上り、近寄って売物の腕

を掴んだ。

「旦那！ 弾みだって、柔かみだって上等でござんしよ」

売人は機を外さず、客に銜った。

「もう少し白いといいのだがね」

「丈夫のほうがよくないですか？ 黒いと云ったって目立つ程じゃなし、こんな胸廓の広い牝はめったにありませんぜ。永持ちする堅牢品でさあ」

肋骨の膨らみを両手で挿みながら、指先で骨間を刮った。客は遲疑を眼に出しながら、それでも肘関節や指関節の具合を丹念に調べる。そして買気を咬られたのか、買値の指を立てる。

「成程、値頃なところを付けましたね」

販売人は買値の妥当を得々と頷きながら、指を高々と挙げて、価格を来賓に表示した。

女の最高学府に学び、明るい青春をのびのびとスポーツや演劇で昇華していた女子大学生は、鍛え整えた均整の体は、よもや、己が家畜としての価値を高める為にスポーツに精進した訳ではなかったらうに……。

地球の人知れない辺地で、日の果のジャングルで、清らかに成育した筋肉を絶苦の労役に投入される為か？ その購入用途は判らないが、兎も角、彼女が十九才二カ月の生涯を絶え間なく学び身につけて来た教養も理性も何等顧みられないことになることだけは明白であった。

(六) 調教参考資料

「イーペラ様、お土産と申しますより、これ

の調教に、何かのお役に立てばと存じ、持参致したものが御座いますの」

綾子は売場から眼を外らして云った。

「何を呉れるの？」

「大したものじゃないんですの。」

と笑ってから、跣っている路子の肩を蹴って

「その箱を持っておいで！」

と、テントの隅に置いてあるダンボールの箱を示した。ポケは迅速に身を翻して覽る。十字に捌らばある荒縄を啜えて、ずずっと曳き摺った。

「持ち上げられないのかい！ ポケ！」

主人の叱声に典雅な飼畜は、あわてて啜え上げた。口で持ち、膝で歩くと云う不自由さでは、大した重さでないにしても、かなり堪える。お嬢さん牝は綾子の荷物を歯で噛み持って、よたよたと腰が、ふらついた。

「お客様の物を取扱うのに、そんな懶^{モウダ}さをしていると思ってるのかい！」

運び終えた艶肌へ、叱責の鞭が厳しく鳴った。ぴしっ！ ぴしっ！

「あ、う、う！」

言語にならない詫びが口角を洩れ、優雅な牝は懸命に足へ頬摺りした。そして鞭の間断を計って、元の女中のシューズに黒髪を被せ不行届さを謝する。

「ふん、誰が取做してなどやるものか！」

綾子は、白々とした瞳で見下していた。が心の底には征服感を越えた妖しい昂ぶりが低迷していた。

「梱包品などは手も触れようとしなかった気取り娘だった奴が、どう？ 私の荷物を曳摺ったからって打たれている。それに、どう？ このおろおろと詫びている賤劣な恰好は……いい態よ！」

鞭が済むと

「箱を開け！」

綾子の命令で、荒縄の結目に皓齒を当てた。細い縫糸すら切ったこともなかった犬歯で顔を左右に振って結び目を緩める。今度は叱られまいと、注意深く解いてゆく。

口内に薬屑が附着しても、主人の前では唾吐くように吐き出せない。食物のように舌に丸めて呑み下すより仕方がないのだ。

日溜りの縁側で自分の焼いたパンを、半分も食べ残していた路子を、綾子は思い出す。

「ふん、こんな浮き目をみなければ食物の旨さなどわからなかった牝め！ 美味そうに薬を食べているわ。お前には相応しい飼葉ね。どうせ、私の焼いたものを食い残していた下等な舌だ。パンなんて高級食と縁切りにされて丁度いいじゃないの。ポケ！」

綾子は心地よさそうに、お嬢さんの作業を眺める。蕾の唇が箱の蓋を咥える。重ね蓋が取払われると、綾子は指図した。

「包装紙を取ると、お前の見覚えの品が入っている。それを全部、御主人様にお渡しするのよ！」

ポケは又、唇で丁寧に包み紙を開いた。「あっ！」路子は声を発しそうになって、慌てて噛み押えた。

一番上に載っていたのは、自分自身の日記帳であつたからだ。

誰にも秘していた人間、比奈地路子の詳細な心の履歴を刻明な心の生い立ちを、隈なく記した数々の日記帳であつた。

これが総てイーベラに読まれる。私の思考方向、私の性格形成の悉くが、イーベラに知られる。

女性として、路子は、やはり秘密にしておきたいことは数多くある。若氣と云っては可笑しいが、青春の衝動から理想の男性像を記したこともあるし、鬱憤や憎悪を紙上に発散したこともある。

それらが如実に読取られてしまうのだ。

路子は、流石に悲しかった。併し、唆巡は許されない。己が総てを知らせてしまう行為を、内心とは拘りなく口は取り行ふ。咥えて畏った家畜から、イーベラは部厚い冊子を取上げる。

「ふうん。面白いものを呉れるのね。調教の参考になるわ」

イーベラにしたら、在日中自分の印象がど

う書かれているかと言う興味もあつたし、責め種を発見出来るかもしれないし、飼畜の性質を推し計れるカルテでもあつたのだ。

数冊の内面記録を捧げ終ると、次に己れの小学校時代からの学業成績書、身体検査書や手紙の束が表われた。

これでポケの智能方向や、指数、それに体の発達過程や欠陥の見当がつき、交友関係を知る事が出来ると云うものだ。

路子は、自宅の個室の鍵した書箱へ、きちと整理して蔵って置いた筈の己が動向を示す書類を、一つ一つ口渡して行く。次はアルバムである。幼時、学校時代、卒業後と三冊に亘って貼ってあり、処々、感想文めいた添書がなされているアルバムである。

可愛らしかった小学生時代、明朗に跳ね廻っていた女学生の時、山や海で屈託ない若さを享樂していた私。

臉に写ったアルバムの赤いバラが彫ってある表紙から、路子の網膜は数々の楽しい想い出を描いた。

頁をめくらなくとも、印画紙の形から添書まで、はつきり浮んでくるのだ。

——追憶よ、お前は何故、私の心を揺さぶるの？ 昔日よ、お前は何故、私を懐しむの？ 私の足音が、ほら、次第にお前を離れてゆく云うのに……

路子は、アルバムの冒頭に書いた文章を、

ありありと思い浮べる。

過ぎて帰らぬ画の集積である写真帳。且つて、これを眺めた時は、仄かに情感が漂ったが、今は、どうなのだ。過ぎて帰えらぬ事実には変りない。併し、併し、この胸に留めどなく流れる熱いものは何なのだ。

昔日よ！ お前は何故、そんな強い力で私を惹くのだ。追憶よ！ お前は何故、溢れん涙で私を誘うのだ。

路子は、十重二十重に張り廻らされた畜類としての茨の柵を挿んで、過去と対決していた。

再び帰らぬ時代。それは郷愁以上に、懐古以上に激しく胸を撃った。

「これは剝がして畜歴写真簿に追加するわ」

畜歴写真簿。これは家畜の体部分の形を、日時を区切って撮影し順次に貼りつけたブックのことである。

例えば、路子の場合、誘拐された時の服装写真から責を受けている苦悶の顔形、一定の日時を追って、眼、鼻、口、肩、胸、脚と前後左右の拡大写真を刻明に映し撮

り、畜体変化を写真記録してゆく、ブックのことである。

畜体の筋変化や肉の増減は、調教の有力な

参考資料となり、畜促進の態容が判然とするのである。

その写真簿に、幼時からの印画を追加されこれで完全に近い家畜ボケの二十一年経歴が揃う訳である。

比奈地路子は、イーベラ・マックコインの前に、いや、フーガやイレ達にも写真や日記類を閲覧されて、己れの精神、体の形成道程全部を曝け出してしまったのである。

啾々と胸底を吹き過ぎる悲しみを堪えて、路子は箱の底に残った品を啜え下げた。

希望に充ちた女学生時代、友人間で乗馬熱が高まった際に作った服である。裾の別れている上衣、窄まっているズボン、拍車のついている長靴、そして白い柄の乗馬鞭である。綾子は云う。

「私は、これを着て、こいつを駈きたいと存じておりましたの。」

路子は、自分が纏い、自分が履き、自分が揮った、自分の所持品で、自分が跨がれ、自分が拍車を受け、自分が鞭打たれて行動しなければならぬ。自分の使用人だった女に依って……。臀部が躍動



する蠟燭、鞭を振り当てる爽快。

己が知っているその感じを女中に与える為に、己が背に女中を乗せ支え、己が身に鞭を受けて苦斗せねばならないのだ。

神の寵愛を一身に集めたような暮しをして来た天賦の美女が……

(七) 気づかざる恋人

蛇の中庭を通り、礼拝堂を経て

地底の黒い魔神の盤踞する部屋へ導かれた津田慶介は叫喚する賛の姿を見た。

祭壇には魔神を背景に、蠟燭を身につけた数人の灯女が踞まり、一心不乱に祈りを捧げる老いた黒衣僧を照らしている。魔像の足下からは、めらめらと妖炎が立ちのぼり、メ縄を張って囲んだ祭壇には、一人の年若い女が弓なりにのけぞって、磔^{ハシラ}けられている。

「五穀豊穡を願う祈りです。人は、それぞれ罪跡を持っております。その罪跡を消さねば黒天使様は豊穡をお与えになりませぬ。あの賛は人々の罪科を一身に引受ける為に選ばれました。娘はその柔肌^{ユヅメ}に黒天使様の怒りを受け、人々に代って苦しむのです」

案内僧は、津田の顔を覗きみるように説明した。津田は阿部を振り返って、顔を曇める。

新聞記者としての凶太い神経にも、蜜郷^{ミヤコ}ならではの強い刺激だったからだ。陰惨な祭典



は、狂ったような老僧の祈りで貫かれる。

賛の素肌は眩^{くら}いばかりに白く艶やかだった。それが、足指を上へ飴^{アメ}のように曲げられて、関節の苦悶を喚きあげているのだ。

鉦鼓^{ケイコ}がかしましく鳴った。と見る間に、祈禱師の枯木のような腕が、憑かれたように空間を叩いた。

控え僧が、同時に黒く鞣^{なめ}された皮鞭を振り下ろす。

びしっ！

すべすべした女肌は、潔^{イサギ}よい音を発して震える。声は肺腑から迸^{はな}しり、豊かな胸は大きく起伏した。

津田は、じっと見ていた。異国の、異教の野蠻な祭祀として……

悶える賛を哀れと思わぬではなかったが、漂い満つる妖しい呪咀^{クツミ}の気配に、観光的好奇

のほうが強かった。

野蠻ではあったにしても、口を差し挿むことは憚^{はげ}からねばならぬ他国人であった。

鞭は真白な体に弾け、顔貌を黒布で覆われた祭壇の女性は跪き、悶え絶叫する。華やかに、そして貴やかに、そして苦しげに……

記者としての興味を唆^そられていた津田は、勧められて匂やかな汗の肌に近づく。

賛は、のけぞった僅かな視線の中で、美しい恋人の姿を捕えた。

「あっ！ 慶介さん！」

黒布に明いている小穴からでは、ちらっとしか津田の顔を見ることは出来なかったが、自分の贈ったネクタイを、はっきり網膜へ写して、城美加子は激しく身を揉んだ。

「慶介さん！ 私なの。美加子なのよ！ 救けて頂戴！」

言語を喋れぬ声帯は鳴り、顔をねじ向けようと拘束の筋肉は揺れた。が、その体に無惨な鞭が炸裂する。

びしっ！ びしっ！

「あわっ！」

一瞬、体の痛みに無理な姿勢は崩れ去る。「慶介さん！ 気付いて頂戴。美加子を分かって頂戴！ お願い！」

美加子の頭脳は火の点いたような苛立たしさで狂った。絶苦の中で力を籠め、ほんの僅かな自由の中で軀を伸張させる。

併し峻烈な鞭は容赦ない。美眸を遮る黒布は滂沱とした涙で、ぐっしより濡れた。この女が命の限り愛し、燃えるように恋し、天に感謝しながら婚を約した城美加子の変わり果てた姿であろうとは津田慶介は露知らない。恋人は華やかにネオン輝く東京の空の下で、若やかな肢体を跳ねて明るく楽しく暮していると思っていたのだ。

「慶介さん！ 気付いてくれないのね、慶介さん！ 私なのよ、貴男と結婚を誓った女なのよ！ わかって！」

美加子の鼻孔に、縋てを踏して愛した男の体臭が浸入して来る。網膜に強い意志を見せる口許が灼きついた。

が、津田慶介は夢想だにしていけないのである。

（六） 結 末

路子は愛犬ピーマに引合わせられている。且つての心やさしい飼主は、コリー犬に対して後輩の礼を採らされて、獣毛の足爪に接唇した。

「犬は仲々飼主の恩を忘れないと申します。でも直接食物を与えてくれる者と時々しか貰えぬ相手を区別致すそうで御座います。です

からピーマは路子より、女中だった私を慕う気が強いと思われます。そこで、路子が旧主人であったとする意識を、コリー犬から取去ってみようと思ひますの、気長になりますけれど、調教師の方に手伝って貰って、路子は犬に追われる羊のような動物だと、ピーマに教えこんでみたいので御座いますわ。」

綾子はイーベラの頷きを待って、計画を話した。

「先ず、ピーマに餌を見せて、それを与えないでおくのです。そして良い加減餓えた頃合を計って、犬の面前で路子にそれを食べさせるのです。ピーマは自分の食物を横取りされて、路子に恨みを抱くでしょう。幾度も幾度も繰返してやるのですわ。次に動作を規制するのです。路子の背を踏みつけさせたり、髪を啜えて引摺ることをさせるのです。そして首尾よく果した時には褒美の餌を与えるのですわ。路子に吠えたら賞め、路子の怠慢を見逃したら叱るように、時と場合に応じて訓練したら、利巧な犬ですから、きっと優秀な牧羊犬ならぬ調教助手犬の役目を果しますと存じます。」

イーベラは我意を得たとばかりに嬉しそうに肯定する。

ああ、絶佳の美女路子は、やがて、元の愛犬に追い立てられ、這いつくばらねばならぬ。己が愛玩犬の意を窺い、哀れな畜生の動

作をせねばならないのだ。

吠えられれば疎まり、嗾かけられれば、恐怖して犬の思う儘、行動を起さねばならぬ。そして最後は犬のお余り物を頂戴し、お犬様の御寝所の下風で臥せ憩まねばならないのだ。

ピーマは先輩家畜として欲しい儘の特権を行使するだろう。この美しく知性ある淑女はそれに意々として従い、心を傾けて見習うことになるに違いない……。

—〇—

路子と美加子の対面はどんなであろうか？ 二人の友情は家畜となった身にどう展開するであろうか？ そして、津田慶介の運命は？

又、名古浦健平と、新しく任務を持った隅田綾子の活躍と暗躍は？

勝田や黒山谷子の今後は？

又、千代小路伊奈子や津田保志江の行手に何が待っているであろうか？

そして、路子の弟、比奈地正哉は如何なる末路を辿るであろうか？……

黒天使高原に、やがて夜の幕が下りる。底気味悪い鳴声が闇を劈きいて暗空へ消える。

地獄の釜の沸りに似た呻声が、地表を這って流れる。それは魔国の調教師達の憤怒の叫びであつたらうか？ それとも清雅な美女達の畜生是認の狂声であつたらうか？……

それらを押し包んで、高原の闇は漆黒を加えていった。

(お詫び)

御愛読有難う御座いました。中途半端な終末になりましたが、貴重なスペースを拙い作品で、永々と占めているのが心苦しく、それ

緊縛写真「G組」

大中判 (13×18センチ) 印画紙焼付

各組
1枚1組

一枚一組	一五〇円
五枚五組	六〇〇円
十枚十組	一〇〇〇円

G 1	鉄鎖と柔肌	(高瀬 忍)
G 2	股間縛り正面	(高瀬 忍)
G 3	海老晒し	(萩 千恵子)
G 4	羞紅の椅子	(菅 登紀子)
G 5	量感の帯	(伊吹真佐子)
G 6	アイデア	(萩 千恵子)
G 7	叫喚の森	(伊吹真佐子)
G 8	全裸の目隠し	(村田那美子)
G 9	優すがた	(花坂 道子)
G 10	開股一番	(萩 千恵子)

○近日分譲中止の予定につき、御希望の方は至急お申込願います。

に、マンネリズムになりかけて来た嫌いもありますので此の辺で筆を折らせて戴きます。息の続かなかったことを、謹んでお詫び申し上げます。只、投げ出したような結末には、重々、責任を感じております。もし、許して戴けるのなら、いつの日、筆

を把れるか解りませんが、締めくくりのある作品に仕上げてみたいと存じております。改めて、読者諸兄姉の批判と叱声を戴き度来信をお待ち致しております。

土路草一

臨時増刊号『青い廃院』

只今発売中 定価 二百円 (送共)

〇〇 内容紹介 〇〇

青い廃院

弓沢俊二郎作、四馬孝画

美貌の踊子に執拗につきまとう無気味な男。婦女誘拐団の魔手に陥ったレビュースター。蒼白き灯影に照り映えて痺れるような甘美な悦虐の妖気が全巻を蔽い、淫虐な責めは頁を追う毎に愈々酸鼻をきわめ、息もつかせず一気に最後まで読了させずにはおかない弓沢俊二郎氏の才筆は、ここにサド文学の金字塔を打ち建てた。

与那国奇談

永山久美雄作、杉原虹児画

南支那海に浮かぶ与那国は世に云う女護ヶ島。女ばかり住むこの孤島に展開される男性共有の風習、漁船が難破して、この孤島に漂着した一日本人漁師の経験した世にも不可思議な体験記。巻頭から結末に至るまで緊縛と処刑シーンの連続。諸君を夢の国女護ヶ島パラダイスへ案内して暫しの粹夢に浮世を忘れさせる一大ドラマ。

巻頭豪華口絵

四馬孝画「青い廃院」画廊

〇美貌の人
〇苦悶する美貌
〇踊り責め
〇モデル責め
〇変ったレッスン
△受
〇救出
〇屈辱の責め
〇廃院の中
〇救出
〇表紙裏
〇目次裏

本文内容主な項目

青い廃院 (弓沢俊二郎)

一、三人の男
二、地の底にあるもの
三、美貌の人
四、劇場に居た二人の男
五、忠告
六、美女誘拐
七、苦悶する美貌
八、屈辱の責め
九、踊り責め
十、探索行
十一、廃院の中
十二、モデル責め
十三、手繰りの綱
十四、救出
十五、勝者の心
与那国奇談 (永山久美雄)
女護ヶ島と与那国
女百人に男一人
股裂きになる女
孤島の殺人
股裂きと火祭り
人肉の炙り焼
筏流しの刑罰

—△告 白▽—

自分をハダカにする

松 井 籟 子

私が虐たげられる女の美しさ……或いは、虐たげる女の、凄絶な姿の中に、きびしい美しさを夢みて小説を書き出してから十年近い歳月が流れてしまった。

たしか昭和二十五、六年頃だったと思う。本誌が、まだ週刊誌ぐらいの大きさで、紙もその頃、はやりのセンカ紙だったように記憶する。

内容もお色気を主としていたが、中に一編か二編、男の作家の時代小説に、女の縛られた挿絵がのっていた。

たま／＼私の友人が当時の寄稿家だったので、「私でも書かせてくれるのかしら」というと、「紹介してあげる」ということで早速

筆をとった。

私は、それまで書きたいと思いながら書けなかった小説の、発表出来る「場」をみつけた喜びに、筆がすすんだ。

「陰火」という小説だった。

読んで下さった方もあると思うけれど、サジストの夫をもった妻が、体を悪くして医者へ行くのだが、自分の体に残った鞭のあとを医者に見せられなくて帰えって来てしまう。

それからあとで、偶然のことから医者を愛し出した妻を、夫は疑って柱に縛りつけて医者者をよびに行くのだ。

暗い縁の柱に、ぐる／＼巻きに縛りつけられている女を見て、医者は自分がその女を愛

していたことに気がつく。

夫のふりおろす鞭の下であえぐ男と女の姿を書いたものだった。

それが私の処女作といってもいい。

それからほとんど毎号書いた。自分ながらよく書きつづけたものだと思心する。

松井籟子という名が本名だといったら、かえって嘘になるだろう。

当時、大阪と神戸の間の、松林の多い住宅街に住んでいたので、松籟を朝夕、耳にする日常だった。

そこから私のペンネームは生れたのだ。

しかし、松の幹のざら／＼した触感、裸で縛りつけられたら、自分のやわらかい肌に

どんな感じがするだろうと考えていたこともある。

松の肌に生身をこすられて、松の鋭い葉を針として刺される場景が、この名前の中にひそかに夢みられているとしたら、松籟も決して、茶室の釜のひびきに通う音ではない。

松井籟子……

この名の中に、すでに虐げることに対するある感情が残っていたのである。

松井の井は井戸の井にも通じる。

井戸のつるべに逆づりにされて、底深くなげこまれ、そして又、水浸しになって引きあげられる場景が「井」という文字にふくまれているのではないだろうか。

今までに、誰も私のペンネームを、こんな風に解剖してくれた人はいない。

しかし、犯人が偽名を使っても、どこかに自分の姓名が顔を出すそうさ。

松井籟子という名は、私の本名からは遠い名だが、むしろ私の本性をあからさまにしてしまった名といえるのかもしれない。

私は、あまり松井籟子という名で人に会ったことはない。ところが、たま／＼東京で、私は私の作を、はじめからとっているという人があるときいて、その蔵書をみせてもらった。

「まあ、こんな古いのが……」

と、驚く程、古い本誌も、F誌も、およそ

松井籟子の名ののっている雑誌は全部揃っていた。

作者として、さぞ嬉しかったろうと人は思うだろう。

ところが私は嬉しいよりさきに、恥しさで一杯になった。

まるで不意に私の着ているものに手をかけはぎとられる感じがした。

「これを覚えていますか」

「この描写はよかったですね」

そういつて一冊、一冊、書架から引き出される度に、私は一枚一枚、着物を脱がされていくように思った。そして、それはその人の前に動けないように、体を何かでおさえられながら、無理やり脱がされていくような、そんな恥しさだった。

私は私が松井籟子であることを、恥しく思っている。恥しく思っているということが、私自身の中に、虐げられることを求める心があるからだと思う。

その人はいった。

「松井さんは本当のマニヤなんです、そうではないという人がいるんですがね」

私は、

「さあ……？」

と答えるより方法がなかった。

向うがマニヤだと名乗って、私の作はもとより、さまざまの絵や写真を見せてくれた以

上、こっちも正直に、

「いいえ、マニヤです」

と、いい切ってしまったばいさだ。曖昧にぼかしているのは卑怯だといえるかもしれない。

しかし私は、そういう不たしかな答を自分の保身術だとは思っていない。

本名で知っている人に、「あなたが松井籟子ですか」といわれると恥しいのは、私が縄や縛りに平気でいられない底の底の欲求があるからだ。

もし、私が、売文の為にこうした小説を書いて来たのなら、むしろ恥しいとは思わない。「商売、商売」と割切れる。又、そう割切って書いている作家もある。

しかし、マニヤという言葉には、病コウモウに入るといふ感じがあって、筆筒のひき出しに、縄や枷が入っていて、日常生活の中に、裁虐や加虐が、いつも座を占めているようなひびきをもっている。

だから、「マニヤか？」ときかれれば「違う」というより仕方がない。

私の所には絵も写真もない。くれるという人があっても私は、もらわない。

しかし、もし別の意味で、現実にも何もなくても、マニヤといえるのなら、多分、私もマニヤなのだろう。

私は夢みている方がたのしいからだ。

縄はなくても、細引にギリ／＼と締められて、二の腕も胸も、肉が段になって、奇妙にとび出している姿を目の前にうかべることが出来る。

その二の腕の縄の間へ、鉛筆をさしこんで、さらに縄をねじり、後手に結んだ背中の縄へ、青竹をさしこんでこじあげること出来る。

ささらに割れた青竹で、指の先をひねったり、つついたりすることも出来る。

何にもない方が、私の想像はゆたかにひろがっていく。だからこそ、私に小説が書けるのだと思う。

そして、ただ売文の為に、お膳立だけととのえて書く作家は、やれ、火責めだ水責めだといっても、それは単に、そうした責め道具を頭にえがいて、まるで昔の刑事が、恐ろしい責め道具を、こけおどかしに並べて見せたように、道具立ての恐さで読者の目をくらませてしまうのだ。

しかし、よくしたもので、読者の想像は、私が何にもなくても想像出来るように、文の中の責め道具を目の前の空気の中にえがいて、自分の身が責められる実感を感じとってしまう。読者の想像の方が、作家の想像よりも上廻って、作家の筆の足りない所をおぎなってくれるのだ。

もし私が、そういう作家なら、別の意味の恥しさを感じるかもしれない。こうもりが、ねずみの顔をして獣の仲間に入っている恥しさだ。

私の恥しさは一寸違う。

それはフロイド学者に分析してもらわなければならぬことかもしれない。

しかし、一たい、自分が縄や縛りに興味を

もつことを、恥しがらない人がいるのだろうか。

私は恥しくて、いいのだと思う。

人は、いかかもしれない。

「人それぞれの好みなのだから、犯罪をおかすわけではなし、普通の夫婦が、普通に夫婦の営みをすると同じように、人をいじめたり、人にいじめられたりしたって、お互いが合意



でたのしむのならいいだろう」と……。

そして又、

「絵や写真で自分ひとりたのしんでいるのに何が悪い」と……。

しかし、それと恥しさとは別である。

普通の夫婦生活にも、女は、はじらいを失わない方がいい。

縄や縛りに対しても、恥しいという心があるってこそ、女なのだと思う。

それは理屈ではどうにもならないはじらいなのだ。

私は貧乏は恥しくない。無学も恥しくない。ありのままの自分をありのままみせてしまふ。

もし田舎の温泉で、男女混浴するより他に方法がなければ、裸体を見せても恥しいとは思わない。

しかし夫婦生活を人前で見せることは、どんな場合が生じても出来ないと思う。出来ないのが当りまえなのだ。その時、人間は本当に無我になれる。いいかえれば、我を無くするのではなく、我だけになれるのだ。天と地の間に自分と相手と二人きりしかいなくなる。

だから人間がこの地上に二人きりなら、見せるも見せないもないのだが、あいにく地球上には人間や動物がうよく／＼している。その中で生きていく為に、無防備の自分を人にさらすことは出来ないのだ。羞恥は人間の宿命

的に身につけた楯なのかもしれない。

その羞恥という感情がある以上、私が私の体の奥底にある欲求にはじらいを感じたていいのだと自分で思っている。

だから私は、私が松井縺子であることを人に知られたくない。

恥しい。素裸の自分を人前にさらすように恥しい。

そして私は私の作品を愛してくれた人達に、その恥しさがあると公にいうことが、ねずみの顔をしていたのではないという言訳になりはしないかと思うのだ。

×

ところが、私がねずみの仲間入りをしようとする自分も裸になるから、あなたも裸になったっていいじゃないかという、ねずみが出てくる。

そこで本ものと嘘ものの見きわめをしようじゃないかと、いきごまされると、私は反対に、私から、ねずみの仲間質問したくなる。

一体、サジストというものは、女なら誰でもいいのだろうか。女なら、どんな女でも、縛っていいじめてみたいものなのだろうか。

もし誰でもいいというなら、多分、男と女の違いだろう。

私は誰でもでは厭だ。

男は普通の場合でも、娼婦をかいにいく。全然、愛情も感じなかった女に、自分の相

手であるというシチュエーションだけで、瞬間的な愛を感じるものらしい。

女に、そのまねは出来ない。

なる程、女は娼婦になれる。一日に何人の男を相手にしても、男ほどには肉体的に疲れないものらしい。しかし、金銭をはなれたら、やっぱり女は、男よりもより好みをするのではないだろうか。

もっとも、ドイツのケッセルという作家の「昼顔」という小説は、何不自由ない医者の奥さんが、自分から娼婦になって、見知らぬ男に体を提供する為に、わざ／＼なりを変えて、売春の斡旋をする所へ出かけて行くことを書いている。

そして、そこでは源氏名でよばれ、娼婦と同じ生活をする。家へ帰えれば、知らん顔して貞淑な妻になる。二人の人間を一人で演じて、両方にそれと知られない生活をしばらくつづけるのだ。

その上、この奥さんは、夫に対して真心から愛情をもっているのだから、女心とは思議なものである。

この小説には被虐や加虐は書かれていない。

しかし私は、この女主人公に、精神的マゾヒズムがあるように思った。

今、手許にこの本がないので「昼顔」の主人公を、くわしく解剖出来ないのは残念だが、

私が大変、刺激をうけたことは覚えている。

高尚でやさしい夫の愛撫に不満を持って、心では夫を愛していながら、粗野な、荒々しい男の手に抱かれてみたいと思って私娼宿をおとづれる主人公に共感出来るものを、その時は感じたものだった。

この小説には縄も縛りも出て来ないが、そうしたものに心の奥底にそこがれている人妻があったとしたら、どうだろうと思った。

勿論、夫は自分を愛してくれるし、自分も夫を愛していて、何不自由ない生活をしている。

しかし、やさしい夫に、とても自分を縛って、打ってくれとはいえない人妻は、自分の身なりを変えて、別の女として、別の恋人を持つ。

そんなことを考えて、私は「みだらび」の筆をとった。

曾って、本誌に一年間、連載した小説である。

しかし書いているうちに、ケッセルの「昼顔」の真似といわれるのは厭だという気持ちもあって、それを離れよう／＼としているうちに、別の形になってしまった。

しかし私は今でも、その時の挿絵の幾こまかを、自分の目の前にうかべることが出来る。

私が髪を短く切らないのも、そのさし絵の

中に、縛られた女の長い髪 of 美しさを感じたからだか、「みだらび」の主人公はパーマネントをかけた短い髪に画かれている時が多かった。

「みだらび」を書いていた一年間には、いろいろ／＼な思い出があつて、筆がその方へ走りそうになるのだが、今は男と女の相手の求め方の違いを書いていたのだから筆を、あとへ戻そうと思う。

「昼顔」の主人公のような女は特殊な例で、実際におこなっている人がないからこそ、小説にもなるといえるのだろう。

普通、男は恋愛と浮気を別のものに出来るが、女はなか／＼別のものには出来ないのだ。これが出来るとなればベテランだ。男にとって浮気でも、女にとっては恋愛だということが多いのである。

それと同じことが虐たげられたい、いじめられたいという欲求にもついて廻る。

自分の愛した人を抱いてみたい、抱かれてみたいという思いは誰にでもあることだ。

それが、もう一つ激しくて、私は自分の愛した男に息がつまる程抱きしめられたいと思うのだ。

ここまでは、まだ／＼普通の考えかもしれない。

しかし、人間の手で抱きしめてみても、その力はしれているし、そう長いこと抱きしめ

てもいられないだろう。もっとも、そこにも私の好みがあつて、一ぺんで息の根がつまる程の大きな、お相撲さんのような男に愛情をもったことがないので、よけいにそう思うのかもしれない。

そこで私は、愛する男の愛情に身動き出来ない程、しっかり縛られる為に、無形のものよりも、縄とか紐とか、いうものを考えてしまふのだ。

そして私は夢想する。

自分の手を後手に縛って、残りの縄をぐるぐると胸へまわされたりと……。縄は二の腕にも一回、二回とまわして、ぎゅうっとしめる。肩のつけ根から、ひじまでの間が、肉屋さんにおらさがっているハムのようになるだろう。

胸にまわされた縄の間から、乳房がひよつたんのようにとび出す。乳首のさきからプツと音を出して、空気がぬけていきはしないかと思う程、かたく上下を縛られると、乳首は空気にふれていることさえくすぐったい程、敏感になるだろう。

縄が余ったら、のどへもかけてもらおう。

そしてその縄と、後手に結んだ縄を結び合わして手を下へさげれば、のどがしめられるので、手は背中の上の方へ、不自然におしあげていなければならなくなる。

それで私の上半身は全然、動けなくなるの



だ。

自分の愛している男の愛情が、自分をしめあげている縄の一本一本にこめられて、縄の中に男の血が流れているように思われるのではないだろうか。

けれど私はまだ、全部を征服されているわけではない。

下半身が自由になる。

今度は下半身も縛られなければならない。

脚はのぼすよりは坐っている方が小さくなれる。坐った腿へ、ぐるぐると縄を

かけてもらう。そして更に、体を半分に折って胸も背も脚も全部、一緒に、ぐるぐるとまかれたら、私は荷物のようになってしまおう。

「目の中へ入れても痛くない」という言葉があるが、目の中へ入れるという動作の中には団子のように丸めるといふ感じがふくまれている。

私はきつと、団子に丸めて、愛する人の目の中へ入れてもらいたいのかもしれない。それで、団子のように丸く縛りあげられたいと思うのだろう。

ところが、これは私の夢想だけで、現実に行われたことはないのである。

だから、皆のいう「マニヤ」には、まだ遠い。

というのが、私の縛られたいという思いは、愛する人に縛られたいと思うのであって、縛ってみたいという男の方には、ぶっつかったことがあるが、私が愛せる人で、しかも、私を縛りたいという男には、幸か不幸か、まだ、ぶっつかったことがないのだ。

もっとも、いつも恋愛感情の方がさきに起って、縛られたいという気持ちがあとになるからかもしれない。

縛られたいぐと思っていたら、そういう好みの人の中に、自分が愛情を傾けられる人がみつかるかもしれない。

だからその点も、やっぱりマニヤではないのかなと尻ごみする。私が人に恋愛感情を抱くのは、外形的なものとか、知性とか、才能とか、いうものに惹かれるのであって、私の

欲求するものを満足してくれる、くれないはあとのことになる。

そして私は、自分の愛する人に愛されたいと思うから、もし、相手が女を縛るなんてことに興味を持っていなと解ったら、自分の欲求はひっこめてしまつて、ただ、普通に愛されて満足している。

或いは満足していないのかもしれない。何故なら、いまだに独身でいるからだ。恋から恋に移ってきた。その過去の恋愛経験を通して考えてみると、究極の所で何かしら不満に感じるものがあつたのかと思う。

自分が本当に愛せる人で、しかもその人にサジズムがひそんでいたら、どんなにかすばらしいだろう。

でも、もしそういう相手におつかつていたら、今頃生きていなかったかもしれない。

近松の「曾根崎心中」の情景どおり、松と棕櫚の相生の木に、自分も相手も腰帶で二重三重にしめつけて、男の刃に咽喉をえぐられて死んでいたかもしれない。

心中という姿の中に、私の望むマゾヒズムの極致があるように思うからだ。

もっとも、当世流行のガスや睡眠剤を用いるのでは、殺風景な気がする。それに、男の手にかかつて死ぬということに、被虐の喜びがあるのだろう。

×

歌舞伎には心中も多いが、殺人の場面が多い。随分凄惨な殺し場というのがあるが、近松ですぐ頭にうかぶのは「女殺油地獄」だ。

与兵衛が金の才覚に困って、お吉に無心しでことわられ、お吉を殺してしまふのだが、一太刀切りつけても死なないので、二太刀、三太刀と切りつける。お吉は油の桶をひっくりかえして逃げようとするので油が床に流れ、殺す方も逃げる方も足がすべって思うように動けない。片方は刃物を持っているのだから、ふれ合う度にお吉の方は体中、どこともいわず浅手にもせよ切られるわけだ。最後のとどめをさされるまでに、お吉の体は傷だらけになってしまふ。そして、血と油によごれて死んでいくのだ。

映画でやった時も、のどから胸へ血を流したらせて死んでいくお吉の顔が大写しになって無残な感じがしたが、リアルな血と油の殺し場が、歌舞伎ほどに凄くなかった。

むしろ与兵衛が引き廻しになる時の縄の荒さが印象に残っている位だが、勘三郎の与兵衛と、歌右衛門のお吉でみせた殺し場は実に美しかった。

そこで私は考えるのだが、肩を切られ、背を切られ、腕を切られ、一寸だめしに休中に刃物をあてられたいという思いが、マゾヒスト一般に通じるとしても、それを愛する人にしてもらいたいと思うのは私の贅沢なのだろうかと――。

愛情というものの激しさが、人を傷つけなければいられない程に高まった時に、その愛情を体ごと、うけてみたいのが私の願ひなのだ。

だから、お吉のように、ただ金を目あてに殺されたらうかばれないが、同じ行為を、愛する男がしてくれるなら、私は体中、切られてもいい。

よく時代物で悪代官などが、若い女を捕えて、「料理して食う」という言葉を使う。その言葉通り、料理して食われてみたいと思う。

大きな俎の上へ、細い紐で縛りつけられて無抵抗な姿で男の前へ出される。この場合、紐は細い方がいい。細い方が裸身の美しさを少しでもよけいにあらわにすることが出来るだろう。

頭の上の方に、何本かの釘を打ちつけて、髪の毛をその釘へ結びつける。私は顔を横に向けることも出来なくなる。

しかし、きっと私は横目を使って、台の上の刃物に目を向けるだろう。そして、その刃物が皮膚にふれないさきから、私の体中が緊張して、毛穴の一つ一つが泡粒のように粒立つかもしれない。

そんな上を、刃物ではなく、鳥の羽でこすられても、私は刃物で切られたようにピクツ

と皮膚を癢癢させるだろう。

男は、それを面白がって、わざと、二度、三度と、羽でこする。

「早く切って」

私は哀願する。

男の冷たい微笑が私の心に突き通ると、私は、

「早く……早く……」

と、うわ言のようになりかえすだろう。

その男の瞳の美しさに、私の心が切なく燃えたと、痛さが快く思われてくるに違いないのだ。

自分が男を抱きしめたいけれど、抱きしめられないということが、よけいに火となって燃えて、私は私の恋心を、火の玉のように燃して、ただ、二つの瞳に思いをこめて、男の顔を、じっとみるのだ。

手も足も、くくりつけられていることが、もどかしくなる。

髪の毛が釘にからまっているのを知りながら、首をあげてみようとする。

けれど、首はあがらない。手も動かない。足も……。

再び私は、私が男の思うように料理される姿になっているのだということを轟々と感じるのだ。

男の独占慾をこんなに満足させる姿はないだろう。

男は思うだろう。

「この女は俺のものだ」

と……。

「俺が自由に出来るのだ」

と……。

そう思っただけで見る男の目を、私はこの上なくいとしく思うのだ。

その時こそ、二人の間に二人だけの愛の黙認がかためられる。

それでも男は、まだ疑う。

（本当に、俺の思うようにしてもいいのだろうか、この女を痛いめにあわせても、それでもこの女は俺を愛すると思うだろうか……）

そして、鋭い刃物で女の皮膚を、さっと切ってみようと思う。

（胸にしようか、腕にしようか、腿にしようか……）

男は、まよう。

美しい乳房はあとまわしにして、こんもりと、もりがあっている腿を切る。

切った瞬間は、まるでただ、冷たいものでなぜたように何事もない。

男は切れなかったのかと思って、又、片方の腿へ刃をあてる。するとその時、前の切口から、血がふき出してくるのだ。

そして、その次の切り口からも血がにじみ出す。

薄く切った皮膚からにじむ血の色は美しい

のではないだろうか。

こうして私の体は腕も、腰も、顔も、めつた切りに切られ、

「痛い、痛い」

と叫びながら、気が遠くなっていくのではないだろうか。

私は女をいためつけなければいけないよな、男の激しい愛情を望むのかもしれない。受するといっても、ただ普通の恋人が、普通に愛のあかしでは不満なのだ。もっと、もっと、愛されたいと思う気持ちが、被虐に通じるのかもしれない。

多分、愛情に慾が深すぎるのだろう。

自分が男を食べてしまいたいと思う程、愛するので、相手の男にもそれを望む。男に食べられたいと思うのだ。

いいかえれば、私は独占慾が強いのかもしれない。そして、男にも自分と同じ強さの独占慾を持ってもらいたいのだろう。

この世の中に、愛し合っている二人の他は何にもいないような気持ちになってしまう。

ところが男にも女にもそれ／＼の生活がある。世の中は決して二人だけではないのだ。

そこで私は苛立つ。

たえず愛の渇きを感じるようになる。

私の愛情は不死鳥のように男を求めて、昼も夜も二人でいても飽きるということを知らない。

もし男も同じ気持なら、心中するより他に道がなくなるのは当り前だと思う。

曾って明治時代の作家で、外出する時に奥さんを長持の中へ入れて鍵をかけていった人があるときいた。

それは嫉妬心でもあり、独占慾でもあるのだろう。

しかし、それ程女を愛せたら見事だと思う。私はまだそういう人に会ったことがない。

囚人のように檻の中へとじこめられても、もし愛する夫にされるなら、私は喜んでされるだろうに……。

ただ、そこで問題になるのは男の愛情だ。

男が愛するあまり、誰にも見せたくない、自分だけのものにしておきたいのだというのなら、私は夫が出かける留守は、どこへも行かないように手枷や足枷をはめられていてもいい。

家の中に座敷牢を造って、その中へ入れられていてもいい。

けれど、男がただ面白半分にするのなら、私は逃げ出すだろう。

そして又、そうしておかなければ、私が浮気をすると思っているなら、手枷をはめられた不自由な姿で、浮気をしてしまうかもしれない。

満腔の信頼があってもなお、男が自分だけのものにしておきたいという愛情で束縛する

なら、私は喜んで男の玩具にも人形にもなるうと思うのだ。

だから私は、少し贅沢すぎるのだろう。

一生かかっても、私の思うような恋人は得られないだろう。そして、私は、だんだん年をとって、ますます恋人を得ることが困難になってくる。

そして、年をとるというのは、おかしなもので、若い時に雑誌のさし絵に、縛られた絵があると、どきっとしたものだ、この頃はあまりよく見るせいか平気になってしまった。

絵や写真に刺戟をうけるよりも、むしろ、厭な感じがするのだ。

自分が美しく夢みていることが、こわされるような感じがする。そのくせ、思いがけない時に、はっと刺戟をうける。

この間も、日本の漫画映画で「ひようたんすずめ」というのを見た。

横山隆一の作で、筋は、たあいのないお伽話だ。

平和な蛙の村へ、ダンベエという他国者の悪蛙がのりこんできて、善良な村の蛙や雀をひどいめにあわせるのだが、その中で、雀をつかまえて、芸をさせる所がある。

目だけ見えるような帽子を、すっぽりとかぶせられて、ヨチヨチと綱渡りする雀が妙に私を刺激した。

その目だけ出ている帽子というものに、猿ぐつわをはめられたような不自由さと、みじめさを感じたのだ。

色彩漫画だから、美しくてきれいで、可愛い感じがする筈なのに、人をいじめる喜びというものが、器用にかくされていると思ったのだ。

又、この悪いダンベエ蛙が、やさしいゼンスケ蛙を木に縛りつけたり、警官と一緒に牢屋へ入れてしまうシーンがある。

この牢屋というのが、まるで土人の小屋のように丸太をくみあわせたもので、三角形の鳥小屋といった形なのだ。

庭の隅へ日曜大工で作ったら、作れそうな牢屋だった。

そこで私は、あんな牢屋を作って、入れられてみたいなあ、ふっと思った。

被虐とか加虐とかいうと、暗いじめくしたものを想像する人が多いのだが、明るい悦虐というものがあってもいいのではないかと思う。

「チャタレイ夫人の恋人」に書かれている明るいラブシーンのような感じで、悦虐というものも、明るく美しくえがくことは出来ないだろうか。

暗い絵や写真に刺激をうけない私が、漫画をみながらひとりで夢をたのしんでいるのは年をとったのだろうか、若返ったのだろうか、我ながら不思議である。



フォト・アラベスク特集号、誠に結構な企画と絶讃を惜しまないものです。その折角の御苦心に対して甚だ恐縮ですが、希望を述べさせて頂きます。前の特集号の「白蝶の舞踊」「黒タイツ」「夢路」等のような特に秀れた作品がなかったことは寂しかった。それと、もう一つの難点は、殆んど同じような構図のものが何枚も連続しているのが多くて非常に興味を殺いだことである。同じような場面は半分を本編式にするとか又、一部は上だけ脱衣させるとか、一部のは足にも縄を掛けるとかして

各場面、皆、変化するように御考慮願いたい。又、背面も割合少なかった。少くとも三枚に一枚か二枚は背面をぜひ入れて頂きたい。ただ中には「華やかな機会」のようない手首の合わせ方は、まるで興覚めだ。もっと深く、びったり手首を合わせて、ざりざり数回、巻くようにして下さい。できれば首の方へ出来るだけ引き上げるようにすれば、猶、よいでしょう。次回には、白蝶の舞踊のような企画をぜひ又、益田、花坂、愛川等のメンバーで実施して下さい。今回は、益田房子の一枚もなく、実に残念、次回へ沢山、入れて下さい。今回は愛川、花坂のなかった。又、「吊り」も少なかった。着衣でなしに上半身は裸で、紐は絹とか縮緬の黒色系統がよい。股間縛りはよかった。今後、あのくらいは是非入れて下さい。ただ、シユミーズは不可。パンティとブラジャー程度にして下さい。それから木馬責めも二、三枚入れるように、お願いします。今回の中で特に良かったのは「鏡」の縄が二の腕へ食い込んだり、二の腕の緊張ぶりは非常に良かった。背面も鏡で見えるが、こういう傑作はぜひ、前斜

め、後斜め、横等、三枚―五枚位ほしい。「銘花二輪」も、二の腕の食い込みや、紐の色がハッキリしている点は、実に良かった。これも、ぜひ背面を入れてほしい。「脱がされた高手小手」は、二の腕の緊張感といい、上へ吊り上った処、股間縛りの点は、申分なく良かった。「豊醇」も首の縄の色が良かったが、背面を欲しい。「鏡」と「腰巻」は縄が細いので緊張感を出しているが、手首を、もっと深く合わせて強く巻きしめないと、何か脱けそうな感じで興ざめだ。「奔放なる肢態」「緊張感の綾」等はよいが、もう少し変化があれば一層よいと思う。庭

◎写真特写引受◎

特別に変った着衣、ポーズ、アイデア等によつて写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下されば費用其の他にについてお返事いたします。

(返信料同封下さい)

「鏡」は紐の色がよく、細いので映りが良かった。余り太い縄は緊張感がでない。「落陽の丘」は同じようなものがあり、半分は木の枝から吊り下げた前と後を入れれば

良かった。着衣はなるべく止めて海水着程度以下にして貰いたい。「鉄鎖」「締観」も似たようなのばかりで興味が無い。半分吊すとか足を縛るとか変化を望む。枚数が、いくら多くても同じようなものばかりだと、すぐ見飽いてしまう。それも傑作、秀作が多いならまだしも、難のあるものばかり多いと、なお更、つまらない。以上甚だ勝手なことのみ申し上げて誠に申し訳ありませんが、なにとぞ今後の特集号において私の希望を叶えて頂きますよう心よりお願いする次第です。(静岡 M生)

小生は貴誌を毎月愛読しているのですが、一言、貴誌に対して意見、希望を述べさせて頂きます。最近、「魔境園NO・8」に対する批評が多く述べられ、中には、もう止めてしまえ等という過激な意見もありますが、小生は「魔境園NO・8」の様な空想的小説は他の読物には見られぬ特色があると思います。今後も続けて掲載される様お願いいたします。又挿画について、二月号は、よく出ていました。四月は粗雑でした。この小説には滝さんの画が、ばん、よいと思います。それから

四月号では、路子に対する色々の責め場面があり、機械で責められますが、美加子も到着したようです。すから、もつと奇抜な方法で責めてほしいと思います。次に小生が考えている事を書きますと（前に路子が到着して長い洞くつを通り体を洗滌されましたが、これが終ると次の部屋では新入の女達を完全に魔教徒の家畜として認めさせるために恐い部屋があり、この部屋は阿片中毒と同じように一度この部屋を通ったものは、この部屋が忘れられず、どんな苦しみにも服従して、この部屋へ行かせて貰うことを願うようになる不思議な部屋です。中央に恐い面相の老婆が座し、老母の周囲や洞くつの部屋のあちこちには、過去の家畜達の剥製が色々の苦しみポーズでおいてある。そして、この部屋に無理に入れられ、この部屋の様子や老婆の異様な姿に驚いて立ちすくんでいると、骨と皮ばかりの老婆の呪文とともに、全身が痺れたようになり、老婆のいうことは何んでも聞くようになる。そして遂に犬や猫と同じような境遇に落ちる。）このように、ただ苦しみばかり与えずに、変ったアイデアによる楽しみを与えて下さい。以

上、小生の考えを述べさせて頂きました。
（神奈川 一読者）

○ 数年前より貴誌愛読中の者ですが昨年十二月号より読通に投稿されていられる立川の大森氏と好みを同じくする小生も、以前より軽業師のタイツ、キヤルマタ姿に非常に関心を持って居ります。軽業師以外でも最近、バレエにより舞台、テレビにもショーの場面に度々、タイツ姿の見られるようになったことも小生の楽しみの一つです。下股をびったり覆った緊縛感には実に素晴らしいと思います。バレエも趣味の一つで、その舞台はクラシック、モダンを問わず度々、見ますが小生も異性には興味はありません。筋肉美のたくましい二十代、三十代の青年の純白タイツ姿、時によっては黒、黄、赤、グレイのタイツ姿を想像するだけでも興奮します。キヤルマタも短い股に、びったりした、しかも光沢ある生地で、ナイロン、絹、又はサテン等で好みに応じて色とりどりに作り、時によつては柄物でつくって着けてみたら素晴らしいのではないかと常々、考えています。大森氏と同様、小生も是非タイツを求めて穿いてみたいと

代理部案内

最新作女体緊縛写真

凌辱 略号（れん）

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号（よく）

3枚1組 二五〇円

悦慮雨ざらし

愛川悦子 略号（あめ）

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号（まき）

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号（きよう）

5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号（ふさこ）

5枚1組 四〇〇円

寢室の苦悶

益田房子 略号（くもん）

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号（もん）

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号（せつ）

3枚1組 二五〇円

行燈（アンドン）

愛川悦子 略号（あん）

3枚1組 二五〇円

いたぶり

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶閨の縛しめ

田中芳代 略号（ねや）

5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号（ふと）

3枚1組 二五〇円

思っていますし、好みの服装でプレーが出来たら、楽しいと思います。同好の諸兄と、その様なプレーが出来たらと思います。勿論、小生もアクロバットも好きでよく見ますが、プレーにそれ等を取上げた同性の責(マゾ、サド的)の雰囲気をもって過せたらと考えています。御交際頂ける諸兄よりの文通をお願い致します。

(八王子 山口)

テレビで観た男性マゾにとっての感激的な場面—NHK、月曜の夜の連続劇「千利休割腹」の中(私は偶々その夜、始めて、しかも途中から観たので劇の筋や、登場人物の名前も判らないが)姫が女中を叱りつけている処。女中が誤って姫の風船を破ってしまったのを「貼り直して……」と手をついて詫びているのに、姫は「イヤじや、貼り直すなどイヤじや、もとのままにして返せ」と無理難題をいう。紙風船などというから、劇の筋ではこの姫は幼ない年頃なのかも知れぬが、画面の姫は背丈も大きく、十八、九に見える。其の場へ一人の男が出て来て、縁側の庭先に跪ぎ、土下座して額を地面に擦りつけ、「どうぞ赦してや

って下さいませ、その代り私めがどんなことで致します。」と懇願する。大の男が、劇中とはいえ、若い女性の前に平蜘蛛のようになつて謝っている様子は、素晴らしかった。更に姫が、「よしッ、こへ来や!」と促すと男は進み出て、縁側のすぐ下の沓脱ぎ石の処で、再び姫の足下に土下座する。姫が稍々荒々しい足取りで足袋のまま、土下座する男の側へ降り立つ。足許にひれ伏す男を冷然と見降しつつ姫は「どんなことでもする」というたな」と念を押すと、男は「ハイ」と恐れ入って答える。画面でも「どんな目に遇わしてくれようか」と暫し考えながら姫がキツとした眼差しで男をみつめる間、これを観る私も、これからどんな場面がみられるかと、期待に心をときめかしている、姫はもう一度、「よいなッ」と凛然といひ放つて、いきなり足を上げて、土下座している男の首筋をグイッと踏みつけたものである。そのまゝ姫は足にグイグイ力を入れて踏みにじり乍ら、何かセリフをいつた訳だが、余りの感激に私にはその言葉が聞えなかった。その間約三分はあっただろうが。これで更に姫が「私の馬になれ」といって

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せつかん)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歓

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円

男を四ツ這いにさせ、背に跨りでもしたら尙よかつたのだが、お仕置きはこれで終ってしまった。それにしても若い女性の足許に土下座させられその上彼女の足で首筋をグイグイ踏みこむにじって貰えるとは……。倅せな男が居るものだ、と私は羨望に耐えなかった。女優は美杉てい子、この連続劇はまだ続いているので、今後更に期待して欠かさず観ることにしています。三月号によると、「男性マゾ特集」の企画はあるが、採算がと

全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

賭 儀 (カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

◎印画紙の大きさは、大手札型(9×13種)です。

お申込は 天星社代理部へ

れない惧れがあるので中止しているとのことですが、紙質を落すなり、或いはガリ版刷りでも良いかは是非発刊して頂きたいものです。それにしても、男性マゾものは最近の誌面では頗る不振、二月号などは皆無に近い有様。以前の「らぶすれいぶ」「ヴィーナスの重石」「祭壇に君臨する脚」「二百字讃歌」等々の素晴らしい作品を盛られた当時が羨われます。世の中には相当の同好者も居られる筈で、映画の宣伝スチールでも最

近の「御免遊ばせ花婿先生」の、ブルマー姿の女高生が男生徒を組み敷いている馬乗りの写真。「大暴れ女俠客陣」の、賭場の喧嘩で女二人が男を後手に捻じ上げて組み伏せている写真。宇治みさ子が斬り倒した男をグイと踏みつけている写真。等々、結局このような写真で、男性マゾ心理に訴えて観客を集めようという訳（実際の画面にはそんなシーンは出てこない）。ということは、マゾ心理をもった男性が案外多いことになるのではないかと思います。編集方針も、もう少し男性マゾを採り上げるように、少くともグラビヤに一頁ぐらいは男性マゾものを是非共願いします。テレビの場面でもう一つ……久保菜穂子という一人の女性とベンチで腰を掛けての会話中「若い男って案外つきあつて面白いものよ、何でもいうことを諾くから。犬みたいに……」という場面があつた。私は彼女の前に跪いて、あの美しい足先に接吻しながら「なんでもいうことをきます。犬にでも馬にでもなります」と哀願したかった。

（横浜 姫馬痴人）

待ちわびた三月号を拝見して、

第一に青木様の絵を見た。線路に裸にされ、後手に縛られた裸一つの男は大変、上出来ですが、私の望んでいる男の責めはなく、がっかりしました。旧号の時は男責が多くて私をなぐさめて呉れましたが、最近では女の縛りが多くて男責がわずかで面白くありません。何故、最近では裸姿の男の責めを画にして呉れないのですか。もう女体緊縛写真や口絵は御免です。昔の本誌のように、ふんどし姿の惨憺な画を描いて下さい。現在の若い人は、殆んどパンツを穿いていますが、今後は晒の腹巻に真白な六尺ふんどしを締めて、元気に働いて呉れ給え、又、本誌も口絵や緊縛写真には、ぜひ、ふんどし一本の男の姿を出して下さい。

（清水 ふんどし男）

御誌の一連の女装ものばかり集めて読み更けつてゐる内、遂に私も強度の女装狂となつてしまいました。「女装への憧れ」「ああ、この恍惚境」「女性願望者の夢」そして又「赤い着物と白い縄」など皆、私を満足させる記事でした。白い白粉の香りが誌面より流れ出るばかりの筆致、そして女装の男が責にあえぐ悦虐の光景が目

◎絹川文代嬢緊縛姿態新作写集！

全裸緊縛集 略号（きぬ）

全裸高手小手 略号（きた）

三枚一組 二五〇円

三枚一組 二五〇円

股間縛三態 略号（きこ）

緊縛全裸立姿 略号（きり）

三枚一組 二五〇円

三枚一組 二五〇円

に映る様な文章、そしてそれを私に強いるような呼びかけるような文章に私も意を決して？ 赤い腰巻をしめる様になりました。昼間は快活な若者ですが、夜が訪れると私は、ある東京の片隅のバーの一角で私と同様な男性と艶を競いあっています。唯、はじめは私もその店の常連でしたが、その中あの赤いネルの腰巻に魅せられて「時ちゃん」と云う歌舞伎女形上りの男に頼んで彼の一室で腰にしたのが病みつきのなつた、そもそのものはじまりです。「時ちゃん」は、あなたの顔なら立派に女形が出来た。歩き方や女のしぐさは、あたしが教えてあげるから、あなたさえ良かったら、やって見ないかと誘われて、渡りに舟とばかりにこの道へ入ってしまった。一週間ばかり学校を休んで、友達の家へ遊びに行くと偽わって下宿を出て、このバーに住込みで入り、「時ちゃん」の妹分として名前を「操」とつけました。そして白粉の塗り方から習いました。純日本調の女として和服で通した方が似合うと云われるままに、タイハクを眉に塗り眉毛をつぶしてドウランをその上に伸ばし、粉白粉をはたいて顔を作りました。その時、我ながら可愛い娘になったと喜んだのを未だに覚えております。身体一杯に白粉を塗られ胸にブラジャーをつけて白い肌襦袢を着、赤い腰巻を巻き締めた長襦袢を着せられました。ある時はムチで打たれ、狭い部屋を駆け廻ったことを記憶しております。こうなつた現在、多く男性が世間の目を恐れながら女装を楽しんでいるのが、何か羨しく感ぜられます。公然と女装が出来るといふと、公何だか昔が懐しくなり、隠れて扮

装される方の手記、小説等が無性に読みたくなります。どうか我々のために女装の体験記、小説を多く載せて下さい。

(川崎 中村操)

本誌は、いつもながら我々を心行くまで楽しませてくれます。小生は女性の下着、特にパンティに非常に、あこがれを持って居ります。「悦特」の中の絹川嬢のビキニ型のようなものをつけて縛られた姿。本当に嬉しく思いました。又、三月号の愛川嬢の豆紋りと黒

の下着の縛られ姿は、まったく嬉しくなります。又、読者通信のドイッ便り、パンティの処など、なんと云えませんが。作品では、奈緒美が幾度か氣を失って風呂場へ運ばれる処など、とても素晴らしいです。女レスリングでマツトに叩きつけられて氣を失ってしまう処などは、非常に満足致しました。小生は妻にナイロンのパンティをつけさせて縛つて見ますが、妻は余り喜びません故、一人、貴誌を見て楽しんで居ります。皆様の中でパンティの変わった物、特にスト

リップバーのバタフライのような物を売っている処を御存知の方は、御知らせ下さるようお願い致します。猶、三十三年十一月号で東京の小野様が、ビキニ型パンティを西銀座みゆき通り、C下着専門店にあるとおっしゃって居られました。たが、その店の名前を、お知らせ下さらないでしょうか。何分、田舎のこととて、思う品がなく、一度とり寄せて見ようかと思つて居ります。

(岐阜 Y・H生)

藤山さん、御返事ありがとうございます

ございました。あの御返事を何度も読み返し、貴女の凄絶な乗馬ズボン姿を思い浮べて、うっとりとしています。乗馬ズボンに長靴をつけて「う、うーっ」と云う呻き、惱ましい負傷の有様等が思い出されて、眠れぬ時があります。僕のアльバムには貴女に似た人の写真が七枚ありますが、一ばん凛々しいのは、やはり貴女だと思ひます。その中の二枚は乗馬ズボンのヒダまで写っていて、貴女が体を浮かして前のめりになって切腹している時そのままです。御望みな

奇譚クラブ旧号の在庫案内

★復刊号の分

復刊第1号(昭和30年10月号) △売切▽
復刊第2号(昭和30年11月号) △売切▽
復刊第3号(昭和31年4月号) △売切▽
復刊第4号(昭和31年5月号) 定価二百円
復刊第5号(昭和31年6月号) 定価二百円
復刊第6号(昭和31年7月号) △売切▽
復刊第7号(昭和31年8月号) △売切▽
復刊第8号(昭和31年9月号) 定価二百円
復刊第9号(昭和31年10月号) 定価二百円
復刊第10号(昭和31年12月号) 定価二百円
復刊第11号(昭和32年1月号) 定価二百円
復刊第12号(昭和32年2月号) 定価二百円

復刊第13号(昭和32年3月号) 定価二百円
復刊第14号(昭和32年4月号) 定価二百円
復刊第15号(昭和32年6月号) 定価二百円
復刊第16号(昭和32年7月号) 定価二百円
復刊第17号(昭和32年8月号) 定価二百円
復刊第18号(昭和32年9月号) 定価二百円
復刊第19号(昭和32年10月号) 定価二百円
復刊第20号(昭和32年11月号) 定価二百円
復刊第21号(昭和32年12月号) 定価二百円
復刊第22号(昭和33年1月号) 定価二百円
復刊第23号(臨時増刊号) △売切▽
復刊第24号(昭和33年2月号) 定価二百円
復刊第25号(昭和33年3月号) 定価二百円
復刊第26号(昭和33年4月号) 定価二百円
復刊第27号(昭和33年5月号) 定価二百円

復刊第28号(昭和33年6月号) 定価二百円
復刊第29号(昭和33年7月号) 定価二百円
復刊第30号(サド特集号) △売切▽
復刊第31号(昭和33年8月号) 定価二百円
復刊第32号(昭和33年9月号) 定価二百円
復刊第33号(昭和33年10月号) 定価二百円
復刊第34号(昭和33年11月号) 定価二百円
復刊第35号(増刊号青い廃院) 定価二百円
復刊第36号(昭和33年12月号) 定価二百円
復刊第37号(昭和34年1月号) 定価二百円
復刊第38号(悦虐小説と緊縛写真) 三百円
復刊第39号(昭和34年2月号) 定価二百円
復刊第40号(昭和34年3月号) 定価二百円
復刊第41号(昭和34年4月号) 定価二百円
復刊第42号(サド特集第二集) 三百五十円

懸賞原稿募集

☆ 規定 ☆ ☆賞 金☆

告白と手記と体験記

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千元	若干篇
佳作	一篇に付	二千元	若干篇

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数に制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。
- 一、原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
- 一、賞金は発表と同時に送りいたします。

らば、お送り致します。貴女は高倉みゆきのファンだそうですが、今度の「女間諜、暁の挑戦」は、乗馬ズボン姿が沢山、出て来るので一見を、おすすめてします。革のジャンパーに白の乗馬ズボンで、馬やオートバイに乗るのです。もし、高倉みゆきが貴女だったら、等と考えると、うっとりとしてしまいます。あの凛々しいが、やさしさを失わぬ処が好きです。

(藤山党)

三月号拝見致しました。目次カットや扉のカットの愉しさは何と

もいえません。杉原氏の筆になるものでしょうか。特写真真の愛川嬢のポリニームや柔らかみは楽しいものでした。蒼野礼氏「奈緒美」は、ヒロインの新鮮さが気に入りました。挿絵も面白いし、文章のテンポも適当な読物だったと思います。田井悦氏の告白は美しい想いさえます。柴崎黎子さんの告白は久々にいろいろの思考を与えて下さった記事でした。近づく春と共に御病気が快癒なさることをお祈りします。私の古川裕子さんに関するイメージに、滝麗子さんの綺麗な挿絵をつけて戴いて有難

とうございました。文章の独りよがりの点については古川さん、那須氏を始め読者の皆様に御寛恕の程をお願い申し上げます。藤山秀緒氏のアイデア集は愉しく拝見致しました。あれで挿絵に悲壮感が出ていけばよいのに残念です。特に火刑や毒殺は新しいテーマではありませう。スランプ気味などとおっしゃるのは不可解です。私などは汗顔の至りに思います。でも本誌を自分達自身のものであるとしてとけ込んで行きたい一心で、私は今後ペンを持つ積りですし、貴女の御活躍をお祈り致します。藤川力行氏「旅情」は小品ながら愉しく拝見しました。もう少しヤマをしばつたらもっと面白いものになったかと思いますが……。久留木栄氏「スリルの報酬」。氏の作品はいつも安心して拝見出来ます。確固たる夫婦愛と倫理のバツクボーンが、私に安緒を与えてくれ、そして暖い文章が容易に共感を引き出すものと思うのです。挿絵も良いと思います。藤木仙治氏の作品は次回が待たれます。読者通信で浜毅氏から、好意に満ちた御高評を頂き感謝しています。あれは毛利、大門両嬢に関するイメージなので、ヒロイン二人を平等

に扱おうとした筋に無理が出てしまったのです。今後共研究を重ねて行くつもりですからよろしく御指導願います。(近藤 一)

映画「かげろう笠」について。

長谷川一夫、香川京子、主演のこの映画には緊縛のシーンは無いが開眼手術を受ける香川京子の両眼を白布で目隠した美しい顔が見られる。猿ぐつわされた女性の顔に美しさを認め得る人なら、白い布によって両眼を覆われた女性の美しさ、又、それによって間接的に身体を自由を奪われる女性の姿に猿ぐつわや縛しめと同様の感動を受けるだろう。緊縛の荒々しい興奮はないが、なまめかしさは、より強く感じられる。かつて「西鶴一代女」で囚衣本纏の姿を堪能させてくれた人であるだけに、私には、なつかしかった。カメラが本巻のグラビヤを飾ることになったら、どんなに素晴らしいことだろうと思う。(Y・M生)

○誌面の都合にて掲載洩れの読者通信が相当量出ましたが、次号に掲載の予定ですから御諒承をお願いします。